

筑後西部第2地区遺跡群 (VI)

筑後市大字常用所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第50集

2003

筑後市教育委員会

筑後西部第2地区遺跡群 (VI)

常用長田遺跡 第2次調査

2003

筑後市教育委員会

序

この報告書は、筑後西部第2地区のは場整備に伴って平成8年度に行った常用長田遺跡第2次調査の成果をまとめたものです。このは場整備地区内では、多くの遺跡が発掘調査されました。今回報告する常用長田遺跡では、この地域での弥生時代の幕開けを感じさせる土器類や、大陸や半島の香りのする遺物が出土しております。こういったことから、この地域の歴史が少しずつひもとかれていくことを期待しております。

なお、現地での発掘作業の進行を優先させた結果、平成8年度に実施した発掘調査の報告書の刊行が今日になってしまったことをお詫びしなければなりません。当時は、筑後市内で4地区のは場整備事業が同時に施行されており、工事前の記録保存のための発掘作業に追われておりました。しかし、今後は累積している他遺跡の調査報告書についても順次刊行していく所存です。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたり、ご助力ご協力いただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

筑後市教育委員会

教育長 牟田口和良

例 言

1. 本書は平成8年度に調査を行った常用長田遺跡第2次調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査および出土遺物の整理等は筑後市教育委員会がおこなった。調査関係者は第1章に記したとおりである。なお、出土遺物・実測図・写真等は筑後市教育委員会において収蔵・保管している。
3. 本書に使用した図面のうち、遺構実測は奥村太郎、高野奈緒美、野田洋子、末吉隆弥（現、川崎町教育委員会）、上村英士、永見秀徳が、遺物実測は佐々木寿代、横井理絵、福井まどか、仲文恵、平塚アケミ、永見が作成した。遺構の全体配置図作成は、アジア航測株式会社へ委託した。また、製図は仲、佐々木、横井、福井、仲、平塚、永見がおこなった。
4. 本書に使用した遺構写真は柴田剛、末吉、永見が、遺物写真は永見が撮影した。
5. 本書での報告にあたり、遺構番号を次のように決定した。調査時につけた遺構仮番号を生かし、頭に調査回数、遺構種別を加えた。今回は第2次調査であるため、S-500が土坑であった場合、2SK0500となる。なお、調査の時点で他の調査区と遺構番号を連番としたため、今回の調査では300～999と2000～の遺構番号を付した。
6. 本書に用いた方位はすべてG.N.を、水準はT.P.を基準としている。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から45°東にあたる場合、N-45°-Eと表記した。
7. 本書の執筆・編集は永見が行なった。

目 次

第I章	はじめに	1
第II章	位置と環境	3
第III章	調査成果	
1.	はじめに	5
2.	検出遺構	5
	土坑一覧	57
3.	出土遺物	61
	出土土器一覧	157
	出土遺物一覧（土器以外）	175
第IV章	考察	187

第I章 はじめに

本書は平成9年度に発掘調査を行った、西部第2地区遺跡群のうち「常用長田遺跡第2次調査」の成果を集録している。今回の調査は、平成8年度県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区に伴い、工事によって消滅する部分について記録保存の措置をとったものである。今回調査対象地となった部分は切土削平による農地造成の予定地となっていた。調査地点は、筑後市大字常用字長田679外であり、ほ場整備実施後の地番は筑後市大字常用661外にあたる。

平成8年度に入ってから、県営担い手育成基盤整備事業筑後西部第2地区の面工事が始動することとなった。事業主体の福岡県筑後川水系農地開発事務所が筑後市教育委員会に対して、埋蔵文化財の有無を照会し、筑後市教育委員会は埋蔵文化財の所在の所在確認のため試掘確認調査を実施することとした。その結果、広範囲に埋蔵文化財の包蔵が確認され、工事の影響により現状保存が困難な箇所について記録保存の措置を講ずることとなった。調査費用は、農林水産省と文化庁の覚え書きに従い、文化財保護部局と事業主体が分担して負担することとした。現地の調査は、約3,500㎡を対象とし、平成9年1月から5月まで実施した。

調査期間中は、福岡県筑後川水系農地開発事務所をはじめ、現地で工事を担当された榎岡明組には、工期の調整等の様々な援助をいただいた。そのお陰をもって調査が完了できた。特に感謝申し上げたい。

なお、整理作業は平成12～14年度に、筑後市教育委員会文化財整理室で行った。現地調査から報告書

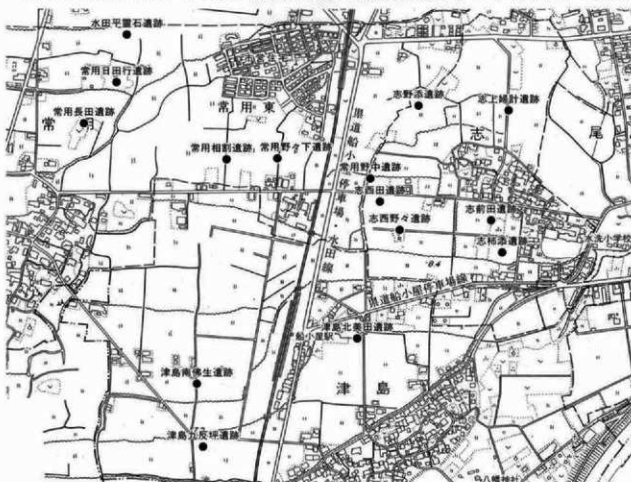


Fig.1 周辺の調査地点位置図 (1/10,000)

刊行に到る調査組織は、以下のとおりである。

(現地調査 平成8～9年度)

総括	筑後市教育委員会	教育長	森田 基之
		教育部長	津留 忠義
庶務		社会教育課長	山口 逸郎
		社会教育係長	本村 正晴 (平成8年度)
			田中 清通 (平成9年度)
		社会教育係	田中 剛 (文化財担当)
			小林 勇作 (文化財専門職)
			上村 英士 (々 平成9年度～)
調査担当			柴田 剛 (文化財学芸員)
	社会教育係		永見 秀徳 (文化財専門職)

(整理作業 平成12～14年度)

総括	筑後市教育委員会	教育長	牟田口 和良
		教育部長	下川 雅晴
庶務		社会教育課長	庄村 國義 (平成12年度)
			松永 盛四郎 (平成13・14年度)
		文化係長	成清 平和
		文化係	小林 勇作 (文化財専門職)
			上村 英士 (々)
			立石 真二 (文化財学芸員)
調査担当			柴田 剛 (々)
	文化係		永見 秀徳 (文化財専門職)

なお、発掘調査前の協議から、現地調査、報告書作成に到るまで、次の方々から貴重な御助言、御指導をいただいた。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)

佐田 茂 (佐賀大学)、水野正好 (奈良大学)、橋口達也・伊崎俊秋・佐々木隆彦・小田和利・小川泰樹
 吉田東明 (以上、福岡県教育庁)、赤崎敏男・大塚恵治 (八女市教育委員会)、山田元樹・坂井義哉 (以上、大牟田市教育委員会)、塚本映子 (三瀬町教育委員会)、東電雄 (山川町教育委員会)、片岡宏二 (小郡市教育委員会)、石井扶美子 (夜須町教育委員会)、櫻井康治・富永直樹・園井正隆・小澤太郎 (以上、久留米市教育委員会)、山村信榮 (太宰府市教育委員会)、末吉隆弥 (川崎町教育委員会)、松岡和利・川本英紀 (以上、豊津町教育委員会)、木嶋真治 (佐賀市教育委員会)、狭川真一・角南聡一郎 (以上、元興寺文化財研究所)

第Ⅱ章 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜め池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中央部に形成されている。

まず旧石器時代であるが、蔵数坂口遺跡や鶴田東大坪遺跡等で遺物が出土している。しかしながら、遺構の発見には到っていないため、当時の様相はほとんど不明である。つづく縄文時代であるが、筑後市内では縄文時代の遺跡は市の南部域に集中することが判っている。ただし、例外的に落し穴は全域に分布する。特に鶴田岸添遺跡や久忠内次郎遺跡では、多数の落し穴を検出している。また、津島九反坪遺跡・志前田遺跡・鶴田岸添遺跡・久忠中野遺跡等では、早期のものと思われる石組炉も発見されている。さらに、尾島集落の北側には縄文時代の集落として著名な裏山遺跡がある。

次の弥生時代であるが、中期初頭までの集落は、縄文時代と同様に市域の南半部に偏って分布する。中期も後半に入ると、北部の丘陵上にも展開するが、同時に低平地へも展開して遺跡数は爆発的に増加する。前期から中期初頭の遺跡では、今回報告する常用長田遺跡等が著名で、前期の溜井も津島九反坪遺跡で確認されている。また、上北島塚ノ本遺跡では、夜臼式土器が出土して注意をひいている。中期後半以降の集落は、蔵数森ノ木遺跡が特に著名である。また、低平地への展開例では津島皿ヶ町遺跡がある。また、鶴田岸添遺跡では火災で消失した竪穴住居も確認されている。

古墳時代は、市北部の石人山古墳、欠塚古墳、瑞王寺古墳が良く知られている。集落遺跡では、弥生時代から継続している蔵数森ノ木遺跡や久富島居遺跡、鶴田西畑遺跡、津島南佛生遺跡等がある。集落の基本的な立地は、弥生時代後半のそれを踏襲する。

筑後市域は、古代には交通の要衝として認知されていたようで、古代官道の西海道が南北に縦断する。発掘調査でも、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡、羽犬塚山ノ前遺跡等で確認された。延喜式にある葛野駅は筑後市附近にあったと考えられていて、最有力候補地は羽犬塚中学校附近である。羽犬塚中道遺跡では墨書土器等も多量に出土している。また、若菜森坊遺跡では竪穴式住居によって構成される大規模な集落が確認されている。

中世には、館跡を中心に調査事例が増加している。この時期には社寺領を中心に荘園が発達し、その支配を基盤にした社会が形成される。これは当地域の特徴のひとつといえよう。

さて、今回報告する常用長田遺跡周辺の状況であるが、弥生時代前期の遺跡が集中する地域と言っても過言ではない。ほぼ連続する遺跡と捉えられる（厳密には隣接する微高地）常用日田行遺跡をはじめ、西側約500mの梅島遺跡等が集中している。さらに北東約1kmには、城ノ越期の円形住居や廃棄土坑を確認した上北島平塚遺跡が所在する。当遺跡から南側には弥生時代前期の集落を認め得ないが、津島九反坪遺跡では前期に遡るとみられる溜井状の水源地遺構が確認されている。弥生時代中期から後期には、梅島遺跡が大きく栄えたとみられる。それ以降の時期は集中して遺構遺物がみられることは少ないが、中世には荘園制に組み込まれ、大宰府の安楽寺領として栄えている。

参考文献

【筑後市史】 筑後市史編纂委員会 1998



- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| 1 瑞王寺古墳 | 2 石人山古墳 | 3 藏数坂口遺跡 |
| 4 藏数森ノ木遺跡 | 5 欠塚古墳 | 6 久富鳥居遺跡 |
| 7 羽犬塚中道遺跡 | 8 羽犬塚山ノ前遺跡 | 9 山ノ井川口遺跡 |
| 10 上北島平塚遺跡 | 11 鶴田木屋ノ角遺跡 | 12 鶴田西畑遺跡 |
| 13 裏山遺跡 | 14 鶴田岸添遺跡 | 15 鶴田中市ノ塚遺跡 |
| 16 常用日田行遺跡 | 17 常用長田遺跡 | 18 梅島遺跡 |
| 19 津島南佛生遺跡 | 20 津島皿ヶ町遺跡 | 21 津島九反坪遺跡 |

Fig.2 周辺遺跡分布図

第三章 調査成果

1.はじめに

今回報告する常用長田遺跡は筑後市大字常用字長田に所在する。調査は永見秀徳が担当した。調査面積は約3,500㎡で、調査期間は平成9年1月5日から5月12日であった。本書では、先に遺構をその種類別に報告し、その後に、遺構の報告順に従って出土遺物を報告した。同一遺構種別内では、遺構番号順に報告することを基本とした。従って、遺構の年代順等の考古学的基準で並べていないので注意されたい。

また、調査当時は常用日田行遺跡を合わせて「常用遺跡群」として扱い、遺構仮番号を通し番号で付していた。そのため、当時「E区」としていた常用長田遺跡第2次調査では、S-300～S-999とS-2000～の遺構仮番号を使用している。報告にあたっては、例言にも記したとおり、調査時点での遺構仮番号をそのまま使用し、調査回数と遺構種別を頭につけて遺構番号を決定している。つまり、常用長田遺跡第2次調査での遺構仮番号S-500が土坑であった場合、本書での遺構番号は2SK0500となっている。

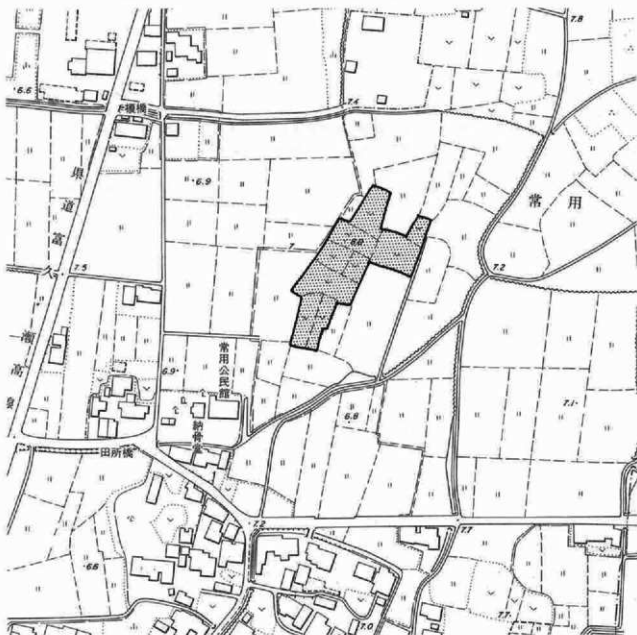


Fig.3 調査地点位置図 (1/2,500)

2. 検出遺構

検出遺構は、遺構仮番号を付したもののだけでも、820個程のものがある。出土遺物がないなどの理由で遺構仮番号を付さなかった小規模なものまで入れると、1,000個程度の遺構が検出されたことになる。今回遺構種別が判明したものの中では、土坑の数が抜き出ている。大半は、調査時点では廃棄土坑として認識されたが、その多くは貯蔵穴等の転用であることは容易に推測される。したがって、廃棄土坑と貯蔵穴等の区別は報告の中では区別しておらず、単に土坑として取り扱った。

また、堅穴遺構の中には住居跡の可能性を否定できないものも含まれているが、弥生時代・古墳時代のもので主柱穴が確認できなかったものは、堅穴として報告した。なお、各表題で遺構番号の最後尾につけた「]」書きの英数字は、調査区内での位置を示す地区番号である。(Fig.238参照)

土坑

前述したように、多数の土坑を確認した。本来は出土遺物から推定される時期の新旧や、調査区内での位置をもって報告順を決定すべきだが、今回は単に遺構番号順とした。以下、本文では特に特徴があるものや、文章で補う必要があるもののみ記述した。各遺構については土坑一覧表を参照されたい。

2SK0306 (Fig.6・Pla.3) [R3]

調査区の南端近くにあり、遺構の切り合いはない。主軸の方位はN-49°-Wである。長軸1.9m短軸0.9m深さ0.9mを測るが、長軸上の対辺は遺構下端が遺構上端よりも外側に広がるため、長軸上の断面では袋状土坑の様相を呈する。広がる幅は、東辺で0.2m西辺で0.1mである。さらに、東側1/3は底面が一段低く掘り込まれており、その比高差は0.2m程である。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・鉢)・サヌカイト(スクレイパー・剥片)・黒曜石(鎌・ポイント?・剥片)がある。

2SK0361 (Fig.9・Pla.31・32) [P12]

調査区の南端近くにあり、遺構の切り合いはない。主軸の方位はN-31°-Eである。長軸1.2m短軸1.0m深さ0.6mを測る。一見井戸のようにも見えるが底面は透水層まで達しておらず、ここでは土坑で報告した。2SI2340の中央土坑となる可能性もある。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺)・黒色磨研土器壺・黒曜石剥片がある。

2SK00363 (Fig.10・Pla.31・33) [O11]

調査区の南寄りにあり、2SK2021を切っている。主軸の方位はN-15°-Eである。長軸1.7m短軸1.1m深さ0.9mを測るが、南端には幅0.3m奥行き0.2m底面からの高さ0.2mの棚を地山削りだしでつくる。棚の上面は南から東へ向かって傾斜しており、両端での比高差は0.1mである。

この棚には弥生土器(亀ノ甲式)の甕を倒立させて据えている。この甕は底部が欠損しているが、偶然による欠損とは考えにくく、人為的な打ち欠きと考えられる。

出土遺物には、弥生土器(甕・壺)・サヌカイト剥片・黒曜石剥片がある。

2SK0402 (Fig.13・Pla.49) [U13]

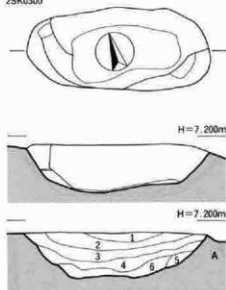
調査区の南寄りにあり、遺構の切り合いはない。長軸2.2m短軸1.0m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN-19°-Eである。完掘状態での遺構実測図をみると2つの土坑が切り合っているようにも見えるが、調査時点の見解では検出時に遺構の切り合いは認められず、1つの土坑として認識した。長軸側両端は棚状となり、深さ0.2mであるが、中央部は0.5mと一段深くなっている。この一段深い部分の平面形態は整った方形であり、意図的に掘削したことが見てとれる。さらにこの部分の底面は南から東へと傾斜しており、特別な用途を与えることも検討しなければならない。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・甕)・サヌカイト剥片・黒曜石剥片・片岩剥片・河原石片がある。

2SK0405 (Fig.13) [Q20]

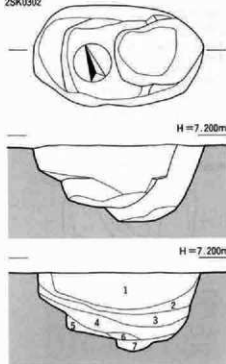
調査区の中央付近にあり、2SI0608に切られており、かつ2SK2044を切っている。主軸の方位はN-56°-Wである。長軸4.5m短軸1.5m深さ0.8mと、大型で細長い印象を受ける土坑である。底面は概ね

2SK0300



- I-1 淡黒茶色粘質土(粘性かなり弱い、2との境に黄茶色粒子を多く含む)
 II-2 暗黒茶色粘質土(1より粘性あり、黄茶色、灰茶色及び黒色粒子を含む)
 III-3 黒茶色粘質土(粘性2と同じ、茶色粒子含む)
 IV-4 // (3より茶色が強い、暗茶色ブロック含む、粘性2と同じ)
 V-5 暗黄茶色粘質土(地山に黒色土混入)
 -6 黒茶色粘質土(粘性最も強い、地山混入)
 A: 暗黄茶色粘質土

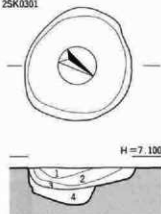
2SK0302



- 1 淡黒茶色粘質土(赤茶色粒子及び黄茶色粒子含む)
 2 暗黒茶色粘質土(//)
 3 暗黒茶色粘質土(暗黄茶色粒子を含む)
 4 暗黄茶色粘質土(暗黄茶色ブロックを多く含む)
 5 暗黒茶色粘質土(2より黒の強い)
 6 灰茶色粘質土
 7 暗黒茶色粘質土(暗黄茶色ブロック及び赤茶色粒子含む)

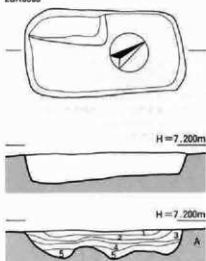


2SK0301



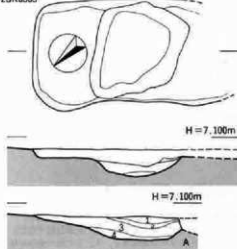
- 1 淡黒茶色砂質土(赤茶色粒子含む)
 2 暗黒茶色砂質土(黄茶色粒子及び灰茶色粒子含む)
 3 黒茶色砂質土(赤茶色粒子及び灰茶色粒子含む)
 4 掘りすぎ(SK334埋土)

2SK0303



- 1 暗黒茶色粘質土(粘性弱く、灰色粒子を含む)
 2 // (粘性1と同じ、1より灰色粒子を多く含む)
 3 // (1、2より色が暗い、灰色粒子を含む粘性1と同じ)
 4 暗黒茶色粘質土(1、2、3より黒が強い、灰色及び赤茶色粒子を含む粘性1より強い)
 5 暗黄茶色粘質土(地山に黒色土混入、粘性4と同じ)
 A: 暗黄茶色粘質土

2SK0305



- 1 暗黒茶色粘質土(粘性やや強い(灰茶色粒子含む))
 2 // (粘性弱く、土がしまつてかたい、暗茶色粒子含む)
 3 暗黒茶色粘質土(2と粘性同じ、茶色粒子含む)
 4 暗灰茶色粘質土(2と粘性同じ、茶色、暗茶色、黒色粒子含む)

Fig.4 2SK0300・2SK0301・2SK0302・2SK0303・2SK0305実測図(1/40)

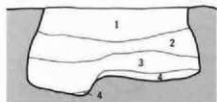
2SK0306



H=7.000m



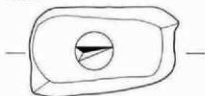
H=7.000m



- 1 淡黒茶色砂質土(黄茶色粒子含む)
- 2 暗黒茶色粘質土(黄茶色粒子及び赤茶色粒子含む)
- 3 // (灰茶色粒子含む)
- 4 暗黄茶色粘質土(黒茶色混入)

A: 暗茶色粘質土

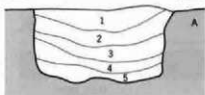
2SK0307



H=7.100m



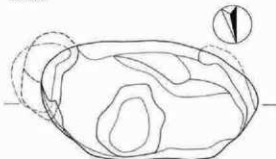
H=7.100m



- 1 暗黒茶色粘質土(粘性弱い, 黒色, 茶色, 赤茶色粒子含む)
- 2 // (粘性1と同じ黒色赤茶色, 灰茶色粒子含む)
- 3 // (1よりやや粘性有り, 1, 2に比べ全体が暗い, 黒色, 赤茶色, 灰茶色粒子を含む)
- 4 暗黒茶色粘質土(粘性3より強い, 灰茶色, 黒色粒子含む, 黄茶色土混入)
- 5 // (粘性4と同じ, 灰茶色土混入)

A: 暗黄茶色粘質土

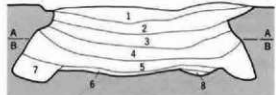
2SK0309



H=7.100m



H=7.100m



- 1 黒茶色粘質土(粘性弱く, 赤茶, 灰茶, 白色粒子含む)
- 2 // (粘性1と同じで, 1に比べ黒が強い黒色, 茶色粒子含む)
- 3 // (1よりやや粘性あり, 1に比べやや茶色, 黒茶色粒子含む)
- 4 暗黒茶色粘質土(粘性1と同じ, 黒色, 暗茶色粒子含む)
- 5 // (3より粘性強い, 黒色粒子, 灰色粒子含む)
- 6 暗黄茶色粘質土(粘性かなり強い, 灰茶色混入)
- 7 暗黒茶色粘質土(6と粘性同じ, 暗茶色粒子含む)
- 8 暗灰色粘質土(1と粘性同じ)

A: 暗茶色粘質土 B: 暗黄茶色粘質土

2SK0311



H=7.100m



H=7.100m



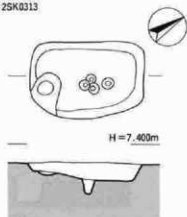
- 1 暗黒茶色粘質土(粘性強い, 灰茶色土混入, 黒色, 茶色及び赤茶色粒子含む)
- 2 // (粘性1と同じ, 1より色が暗い, 茶色粒子含む)
- 3 // (1, 2より黒色が強い, 灰茶色土含む, 1と粘性同じ)
- 4 暗黄茶色粘質土(堆山に黒色土混入, 粘性最も強い)

A: 暗黄茶色粘質土

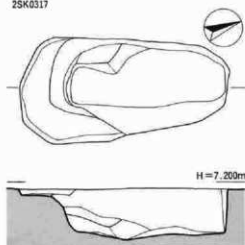


Fig.5 2SK0306・2SK0307・2SK0309・2SK0311実測図(1/40)

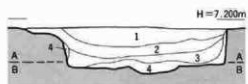
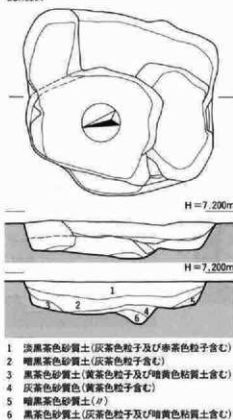
2SK0313



2SK0317

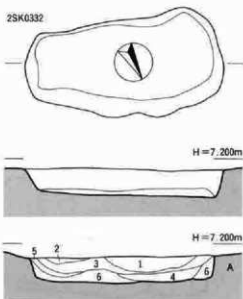


2SK0314

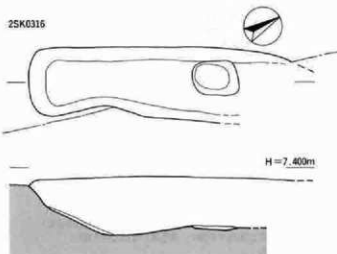


- 1 暗黒茶色粘質土 (粘性弱く、土がしまつてかたい。暗茶色、赤色及び黒色粒子含む)
 2 // (1に比べやや暗い、粘性1と同じ) 暗茶色、赤色及び黒色粒子含む
 3 暗黒茶色粘質土 (1、2に比べ黒が強い、粘性1より強い) 暗茶色及び黒色粒子含む
 4 暗茶色粘土
 A: 暗茶色粘質土
 B: 暗黄茶色粘質土

2SK0332



2SK0316

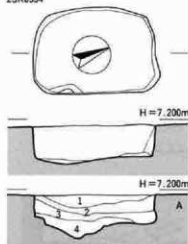


- 1 黒茶色粘質土 (粘性弱い、暗茶色粒子を多く含む)
 2 暗黒茶色粘質土 (1よりやや粘性あり、黄茶色粒子含む)
 3 // (2と粘性同じ。茶色土混入。茶色、暗茶色、黒色粒子を多く含む)
 4 淡黒茶色粘質土 (1より粘性弱い、暗茶色及び黒色粒子含む)
 5 // (暗茶色土混入、茶色粒子含む)
 6 淡暗茶色粘質土 (地山)
 A: 淡暗茶色粘質土



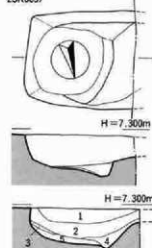
Fig.6 2SK0313・2SK0314・2SK0316・2SK0317・2SK0332実測図 (1/40)

2SK0334



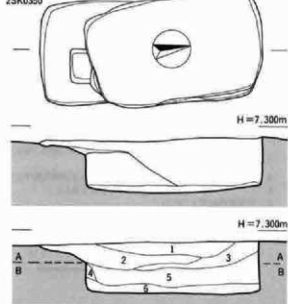
- 1 暗黒茶色粘質土 (粘性弱く、土がしまっている。暗茶色、暗茶色、黒色粒子含む)
- 2 // (1よりやや茶色がかったり、茶色、暗茶色、黒色粒子含む)
- 3 暗黒茶色粘質土 (粘性と同じ茶色、暗茶色粒子含む)
- 4 暗黒茶色粘土(埋山) A: 暗黒茶色粘土

2SK0037

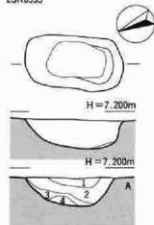


- 1 暗黒茶色粘質土 (粘性弱く、土がしまっている。暗茶、灰茶、及び黒色粒子含む)
- 2 // (1より粘性が強い。やや粘性あり。灰茶及び黒色粒子含む)
- 3 // (1より色が暗い。灰茶色) 粒子含む、粘性2と同じ
- 4 // (粘性かなり強い。暗茶色) 及び黒色粒子含む
- 5 暗黒茶色粘質土(埋山)
- 6 (カクラン) A: 暗黒茶色粘質土

2SK0350

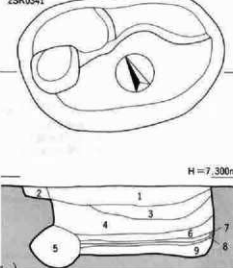


2SK0335



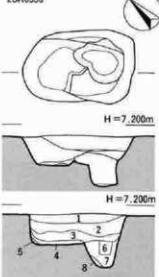
- 1 暗黒茶色粘質土 (粘性弱く、高色。灰茶色粒子含む。暗茶色土混入)
- 2 // (1より色が暗い。暗茶色、茶色及び赤茶色粒子含む。粘性1と同じ)
- 3 暗黒茶色粘質土 (1よりやや粘性あり。黒色、暗茶色)
- 4 淡暗黒茶色粘質土(埋山) A: 淡暗黒茶色粘質土

2SK0341



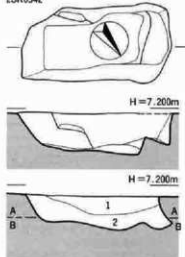
- 1 淡暗黒茶粘質土(灰茶色粒子含む)
- 2 淡暗黒茶粘質土(灰茶色粒子含む)
- 3 淡暗黒茶粘質土(灰茶色粒子含む)
- 4 黒茶色粘質土
- 5 // (灰茶色粒子及び赤茶色粒子含む)
- 6 暗黒茶色粘質土
- 7 // (暗黒茶色土を少量に含む)
- 8 // (暗黒茶色土を少量に含む)
- 9 // (暗黒茶色土混入)

2SK0336



- 1 黒茶色砂質土(黄茶色粒子含む)
- 2 暗黒茶色砂質土(灰茶色粒子混入及び黄茶色粒子含む)
- 3 淡黒茶色砂質土(灰茶色粒子混入)
- 4 暗黒茶色粘質土
- 5 淡暗黒茶粘質土
- 6 淡暗黒茶粘質土(灰茶色粒子含む)
- 7 淡暗黒茶粘質土(//)
- 8 暗黒茶色粘質土

2SK0342



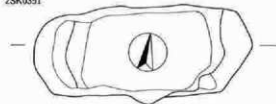
- 1 黒茶色粘質土(粘性弱く、土がしまっている。暗茶色粒子含む)
- 2 暗黒茶色粘質土(1よりやや粘性あり。暗茶色粒子含む)
- A: 暗茶色粘質土
- B: 暗黒茶色粘質土



- 1 淡暗黒茶粘質土(粘性弱い。茶色、暗茶色、赤色、黒色及び赤色粒子含む)
- 2 // (粘性1と同じでやや色が明るい。黒色、赤色粒子含む)
- 3 暗黒茶色粘質土(粘性1と同じ。黒色及び暗茶色粒子含む)
- 4 暗黒茶粘質土(Aに黒土混入)
- 5 暗黒茶粘質土(1よりやや粘性あり。黒色及び暗茶色粒子含む)
- 6 暗黒茶粘質土(粘性やや強い。黒色及び暗茶色粒子含む)
- A: 暗茶色粘質土
- B: 暗黒茶粘質土(砂粒子含む)

Fig.7 2SK0334・2SK0335・2SK0336・2SK0337

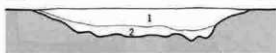
2SK0351



H=7.300m



H=7.300m



- 1 暗黒茶色砂質土(赤茶色粒子及び灰茶色粒子含む)
- 2 暗黄茶色粘質土

2SK0352



H=7.200m



H=7.200m

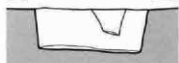


- 1 淡暗黒茶色砂質土(灰茶色粒子含む)
- 2 灰茶色粘質土(粘性が弱い)
- 3 淡黒茶色粘質土(黒茶色粒子含む)

2SK0353



H=7.300m



H=7.300m



- 1 淡黒茶色粘質土(灰茶色粒子含む)
- 2 淡黒茶色砂質土(赤茶色粒子及び灰茶色粒子含む)
- 3 暗黒茶色粘質土(灰茶色粒子含む)
- 4 // (//)
- 5 // (灰茶色粒子及び暗黄茶色粒子含む)
- 6 // (暗黄茶色粒子含む)

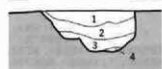
2SK0354



H=7.300m

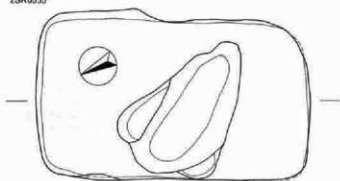


H=7.300m



- 1 淡黒茶色砂質土(黄茶色ブロック含む)
- 2 暗黒茶色粘質土(灰茶色粒子含む)
- 3 (//)
- 4 暗黄茶色粘質土

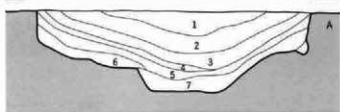
2SK0355



H=7.300m



H=7.300m



- 1 黒茶色粘質土(粘性弱い、黒色及び暗茶色粒子含む)
 - 2 // (1に比べ色が黒い、黒色赤茶色及び暗茶色粒子含む)
 - 3 // (1よりやや粘性あり、灰茶及び黒色粒子を含む)
 - 4 暗黒茶色粘質土(粘性1と同じ、暗茶、灰茶及び黒色粒子を含む)
 - 5 黒茶色粘質土(粘性1と同じ、暗茶及び黒色粒子含む)
 - 6 暗黒茶色粘質土(1よりやや粘性あり、赤茶、黒色及び暗茶色粒子含む)
 - 7 // (粘性5と同じで色が6より黒い、赤茶、黒色、暗茶色粒子含む)
- A: 暗茶色粘質土

0 1 2 m

Fig.8 2SK0351・2SK0352・2SK0353・2SK0354・2SK0355実測図(1/40)

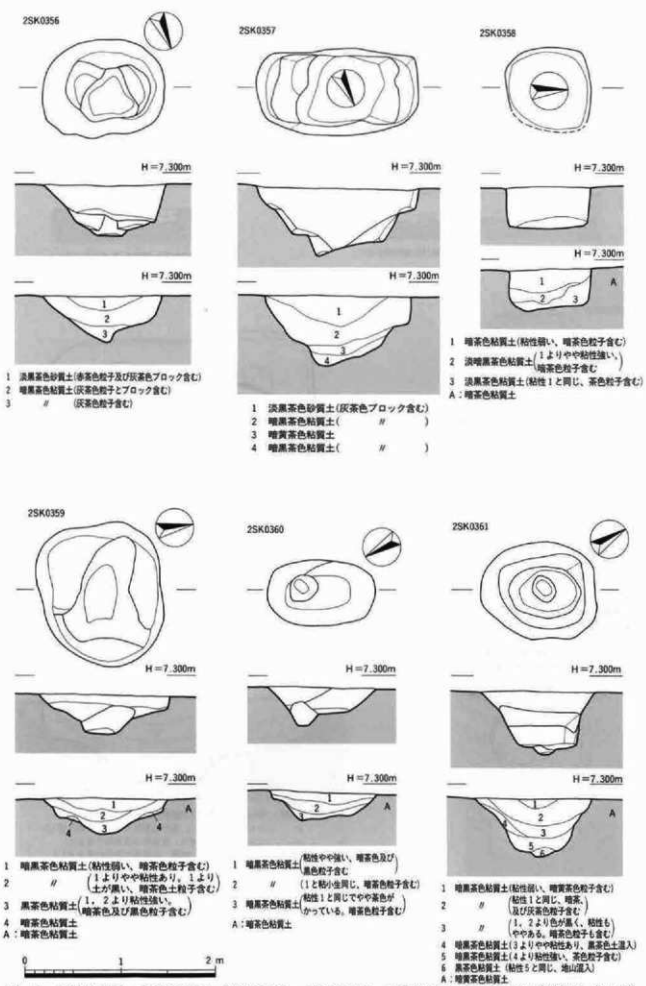


Fig.9 2SK0356・2SK0357・2SK0358・2SK0359・2SK0360・2SK0361実測図(1/40)

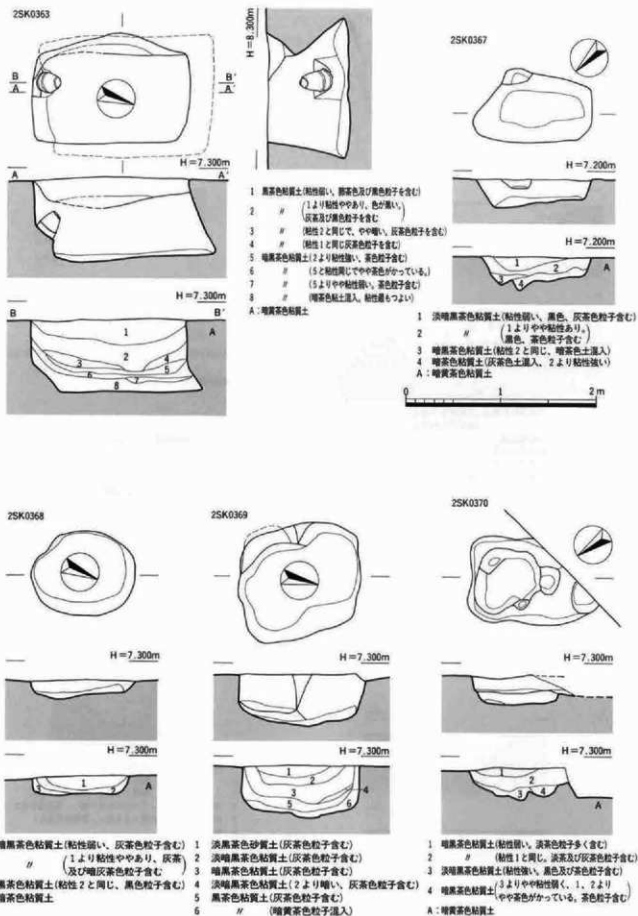
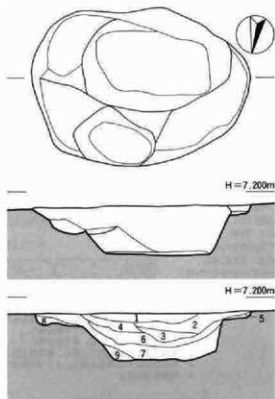


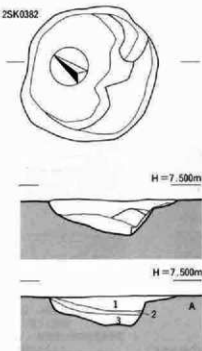
Fig.10 2SK0363・2SK0367・2SK0368・2SK0369・2SK0370実測図(1/40)

2SK0374



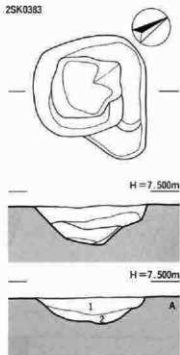
- 1 淡黒茶色砂質土(灰茶色粒子含む)
- 2 // (暗黄茶色粒子多く含む)
- 3 淡暗黒粘質土
- 4 淡黒茶色粘質土
- 5 暗黒茶色砂質土
- 6 淡黒茶色粘質土(暗黄茶色粒子含む)
- 7 暗黒茶色粘質土(//)
- 8 暗黄茶色砂質土
- 9 暗黒茶色粘質土(暗黄茶色粒子含む)

2SK0382



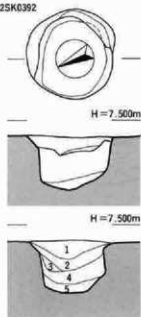
- 1 黒茶色粘質土(粘性弱く、暗茶及び白色粒子含む)
 - 2 // (1より色が黒く、暗茶及び非茶色粒子含む)
 - 3 淡黒茶色粘質土(1と粘性同じ、地山混入)
- A: 暗黄茶色粘質土

2SK0383



- 1 淡暗黒茶色粘質土(粘性弱い、黒色、白色、暗茶色粒子含む)
 - 2 // (粘性1と同じ、暗茶色粒子を含む)
- A: 暗茶色粘質土

2SK0392

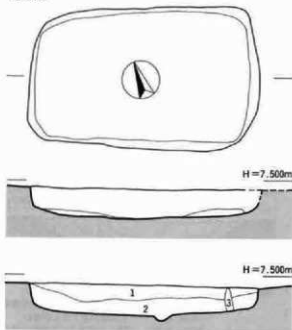


- 1 淡暗黒茶色粘質土(粘性弱く、黒色及び茶色粒子含む)
 - 2 // (粘性1と同じ、茶色粒子含む)
 - 3 // (粘性1と同じ、灰茶色粒子含む)
 - 4 黒茶色粘質土(1よりやややわらかい、茶色粒子含む)
 - 5 暗黒茶色粘質土(粘性4より強い、茶色粒子含む)
- A: 暗茶色粘質土



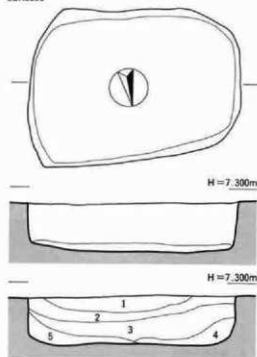
Fig.11 2SK0374・2SK0382・2SK0383・2SK0392実測図(1/40)

2SK0393



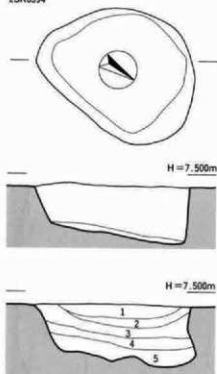
- 1 暗黒茶色粘質土(粘性やや弱い、茶位粒子含む)
 - 2 # (1より粘性やや強い、1より多く茶色粒子を含む)
 - 3 暗茶色粘質土(2より粘性強い、黒色土混入)
- A: 暗茶色粘質土

2SK0396



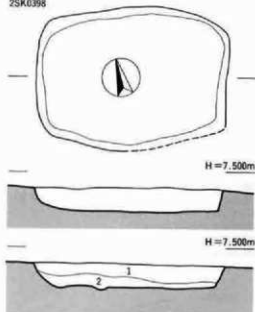
- 1 淡黒茶色砂質土(灰茶色粒子含む)
- 2 # (5mm大の小石を多量に含む)
- 3 淡黒茶色粘質土(灰茶色粒子含む)
- 4 黒茶色粘質土(#)
- 5 暗黄茶色粘質土(黒色土混入)

2SK0394



- 1 黒茶色粘質土(粘性弱い、暗茶、色、茶色、及び黒色粒子を含む)
 - 2 # (粘性1と同じ、1~2cm大の茶色ブロック含む)
 - 3 暗黒茶色粘土(粘性1と同じ、灰茶色粒子多く含む)
 - 4 暗黒茶色粘質土(粘性1と同じ、暗茶色及び黒色粒子含む、3より色が黒い)
 - 5 # (1よりやや粘性有り、灰色粒子含む)
- A: 暗黄茶色粘質土

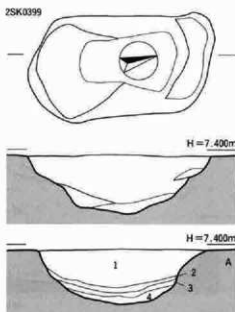
2SK0398



- 1 暗黒茶色粘質土(粘性がやや強い、茶色粒子及び黒色粒子含む)
 - 2 暗茶色粘質土(粘性1と同じ、堆山に暗黒茶色土混入)
- A: 暗茶色粘質土

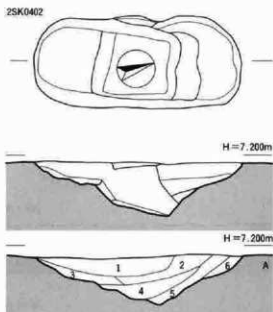


Fig.12 2SK0393・2SK0394・2SK0396・2SK0398実測図 (1/40)



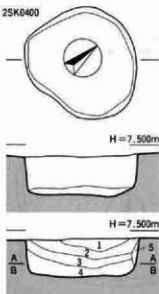
- 1 暗黒茶色粘質土(粘性とても弱い、黒色及び灰茶色粒子含む)
 2 // (1よりやや粘性有り、灰茶色粒子含む)
 3 暗黒茶色粘質土(2と粘性同じ、灰色粒子含む)
 4 暗茶色粘質土(地山に黒色土混入)

A: 暗茶色粘質土



- 1 暗黒茶色粘質土(粘性弱い、茶色、暗茶色粒子含む)
 2 // (粘性1と同じ、茶色、暗茶色及び灰色粒子含む、中央に直径7cm大の暗黄茶ブロック含む)
 3 // (粘性1と同じ、茶色、灰茶色及び黒色粒子含む)
 4 暗黒茶色粘質土(粘性1よりややあり、灰色及び黒色粒子含む)
 5 // (粘性4と同じ、灰茶色粒子含む)
 6 // (粘性4と同じ、暗茶、灰茶色粒子含む)

A: 暗黄茶色粘質土



- 1 黒茶色粘質土(粘性やや弱い、茶色及び黒色粒子含む)
 2 淡暗黒茶色粘質土(粘性1と同じ、茶色粒子含む)
 3 黒茶色粘質土(粘性1と同じ、灰茶色、茶色及び黒色粒子含む)
 4 暗黒茶色粘質土(粘性1と同じ茶色粒子含む)
 5 暗茶色粘質土(地山Aと同一か?)

A: 暗茶色粘質土

B: 暗黄茶色粘質土

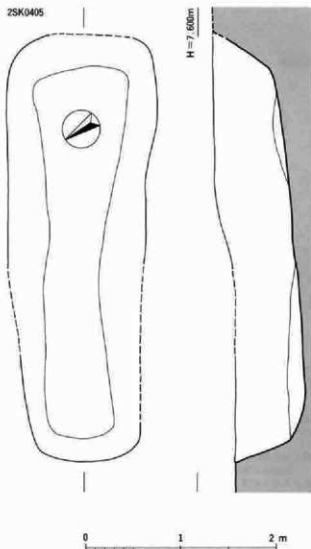
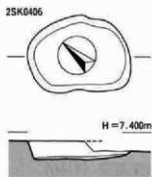
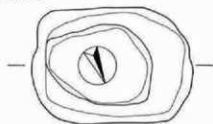


Fig.13 2SK0399・2SK0400・2SK0402・2SK0405・2SK0406実測図(1/40)

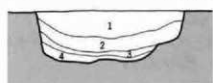
2SK0416



H=7,400m

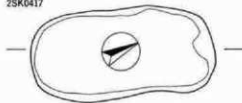


H=7,400m



- 1 淡黒茶色砂質土(灰茶色粒子含む)
- 2 黒茶色粘質土(暗黄茶色粒子及び10cm 大の暗黄茶色ブロック含む)
- 3 # (暗黄茶色粒子含む)
- 4 暗黒茶色粘質土(暗黄茶色土混入)

2SK0417



H=7,500m

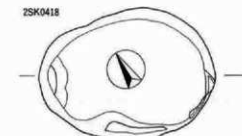


H=7,500m



- 1 淡黒茶色粘質土(1mm 位の淡茶色の粒子を少し含む)
- 2 淡黒茶色粘質土(1よりやや淡い、1mm 位の淡茶色の粒子を少し含む)
- 3 淡茶色粘質土(地山Aと似ている、粘性が強い)
- A: 淡茶色粘土
- B: 暗黄茶色粘土(1mm 大の酸化鉄を多く含む)

2SK0418



H=7,500m

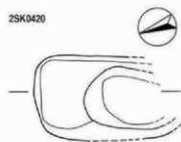


H=7,500m



- 1 黒茶色粘質土(粘性弱い、暗茶色粒子含む)
- 2 # (粘性1と同じ、暗茶色及び灰茶色粒子含む)
- 3 暗黒茶色粘質土(1よりやや粘性あり、灰茶色粒子含む)
- A: 暗黄茶色粘質土

2SK0420



H=7,200m



H=7,200m



- 1 淡黒茶色砂質土(灰茶色粒子含む)
- 2 黒茶色粘質土 (#)
- 3 暗黄茶色粘質土
- 4 #

2SK0419



H=7,600m



Fig.14 2SK0416・2SK0418・2SK0419・2SK0420実測図(1/40)

平坦で、特徴的な構造は持たない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋）・粘土塊・サヌカイト（鉄・？・剥片）・黒曜石剥片・片岩剥片がある。

2SK0419 (Fig14・Pla.54) [N26]

調査区の中央附近にあり、2SK0948を切り2SK0573に切られている。主軸の方位はN-75°-Wである。2SK0402と同じく、完掘時の実測図を見ると2つの土坑が切り合っているようにも見える。こちらは、検出時に切り合いを見落とした可能性がある。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺）・サヌカイト剥片がある。出土遺物を見る限り大きな時期幅は認められない。

2SK0423 (Fig15・Pla.56・57) [T10]

調査区の南寄りにあり、2SK0577と2SK0371に切られている。長軸4.6m短軸1.7m深さ0.5mの大型で、主軸の方位はN-50°-Wである。底面は概ね平坦であるが、中央やや西寄りに底面からの深さ0.2m程の平面形がだ円形の小穴がある。それ以外に特別な構造は持たない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋）・面子・投弾・粘土塊・サヌカイト（鉄・ドリル・ポイント・スクレイパー・剥片）・黒曜石剥片・石英剥片・偏平打製石斧・砥石がある。

2SK0429 (Fig16・Pla.59・61) [O9]

調査区の南寄りにあり、他の遺構との切り合いはない。主軸の方位はN-13°-Eであるが、平面形態は円形に近い。所謂、典型的な袋状土坑で、遺構検出面が長軸1.2m短軸1.1mに対して、遺構の下端は長軸1.7m短軸1.3mを測る。西壁下部には小さな棚状の施設が認められ、設置方法は地山削り出しである。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺）がある。

2SK0434 (Fig17・Pla.65) [N28]

調査区の中央附近にあり、2SK0800を切っている。長軸2.9m短軸1.8m深さ0.9mとやや大型で、主軸の方位はN-73°-Wである。この遺構は底面形状に特徴がある。東側・中央・西側の3つにわけて底面をさらに0.15mほど掘り下げている。それぞれの平面形状は崩れた方形または長方形で、東側0.8×0.8m、中央0.9×1.0m、西側0.5×1.0mを測る。それぞれの間に掘りくぼみせずに残した構が認められる。これらを利用して木材等で床貼りをしていた可能性が高い。また、中央と西側の間には東西0.4m南北0.2m深さ0.2m程の小穴が認められる。恐らくは一本削り出しの梯子を固定した痕跡とみて大過なからう。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋・高坏）・粘土塊・サヌカイト（スクレイパー・コア・剥片）・黒曜石（鉄・剥片）・チャート剥片・片岩剥片・石がある。

2SK0435 (Fig17・Pla.66・67) [N28]

調査区の中央附近にあり、2SK0454を切っている。長軸3.2m短軸1.8m深さ1.0mとやや大型で、主軸の方位はN-56°-Wである。中央部に径1.0m深さ0.5m程のくぼみがある。土層断面実測図を見ても、下層遺構等の可能性はなく、この土坑に附随する設備であろう。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋・鉢）・凸帯文土器甕・土製紡錘車・面子・粘土塊・石製紡錘車未製品・石錘・磨製石剣（製品・未製品）・サヌカイト剥片・黒曜石剥片・片岩剥片・石がある。

2SK0438 (Fig18・Pla.71) [M16]

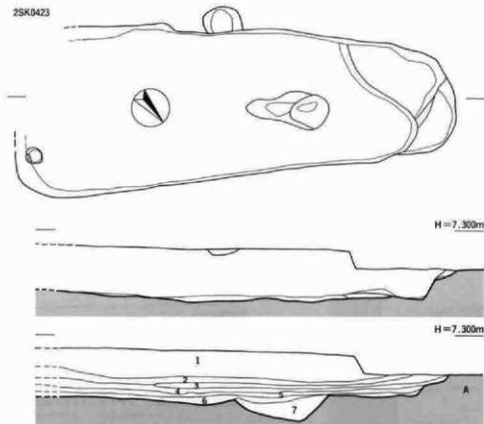
調査区の南寄りにあり、2SD0532と2SD0533に切られている。長軸3.1m短軸2.0m深さ0.5mとやや大型で、主軸の方位はN-11°-Eである。底面形状は平坦で、特別な設備や構造は持たない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋）・粘土塊・サヌカイト（鉄・スクレイパー・剥片）黒曜石剥片がある。

2SK0451 (Fig19・Pla.75) [L19]

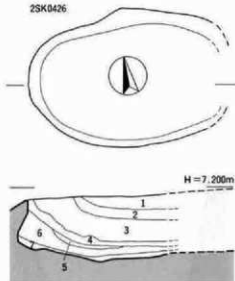
調査区の中央部東端にあり、2SK0530を切っている。長軸3.6m短軸1.4m深さ0.5mとやや大型で、主軸の方位はN-26°-Eである。完掘後の実測図を見ると2つの土坑が切り合っているようにみえる。検出時点で切り合いは認められず1つの土坑として報告するが、遺物に若干の時期幅が認められる。

2SK0423



- 1 淡黒茶色粘質土 (1mm~2mm 大の淡黄茶色の粒子を多く含む 1mm 大の白色粒子と 1mm から 3mm 大の黒色粒子 (炭化物) を少し含む)
 - 2 淡黒茶色粘質土 (1mm~2mm 大の淡黄茶色の粒子を多く含む 1mm 大の黒色粒子 (炭化物) を少し含む、淡茶色土混入、1より深い)
 - 3 淡茶黒色粘質土 (3mm 大の淡黄茶色の粒子を多く含む、4cm 大の黄褐色ブロックを少し含む)
 - 4 暗茶黒色粘質土 (1mm~1cm 大の淡黄茶色の粒子を多く含む、1mm~2cm 大の黒色粒子 (炭化物) を少し含む)
 - 5 暗茶黒色粘質土 (粘性が強い、灰色味をおびている 淡黄茶色 (A: 地山) を含む)
 - 6 7 淡黄茶色粘質土 ((A: 地山) より暗め)
- A: 淡茶色粘土

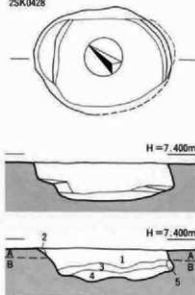
2SK0426



- 1 暗灰茶色砂質土 (やや粘性あり)
- 2 灰茶色粘砂土 (暗黄茶色粒子含む)
- 3 暗黒茶色粘質土 (炭屑、淡黒茶色砂質土)
- 4 黒茶色粘質土 (黄茶色粒子多含む)
- 5 暗黒茶色粘質土 (灰茶色粒子含む)
- 6 黒色粘質土 (20cm 大の黄茶色ブロック含む、粘性強い、地山ブロック)
- 7 黒茶色粘質土 (黄茶色土混入、粘性強い)



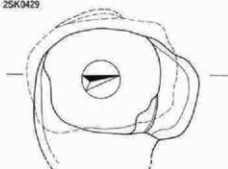
2SK0428



- 1 淡黒色粘質土
 - 2 暗茶色粘質土
 - 3 淡黒色粘質土 (粘性が強い 1mm 大の淡黄茶色の粒子を少し含む)
 - 4 淡黒色粘質土 (3よりやや粘性が弱い、1~2mm 大の淡黄茶色の粒子を3より多く含む)
 - 5 淡茶黒色粘質土
- A: 淡茶色粘土
B: 淡黄茶色粘土

Fig.15 2SK0423・2SK0426・2SK0428実測図 (1/40)

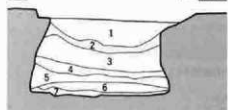
2SK0429



H = 7.300m

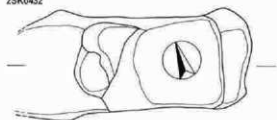


H = 7.300m



- 1 淡黒茶色砂質土(2~3cm 大の灰茶色粒子含む)
- 2 // (灰茶色粒子多含む)
- 3 黒茶色粘質土(黄茶色粒子含む)
- 4 暗黒茶色粘質土(//)
- 5 // (//)
- 6 黒茶色粘質土(灰茶色粒子含む、粘性強い)
- 7 黒色粘質土(地山ブロック、粘性強い)

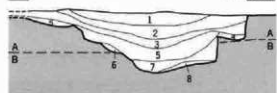
2SK0432



H = 7.300m

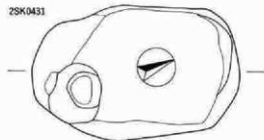


H = 7.300m



- 1 黒茶色粘質土(粘性弱く、土がしまつてかたい黒色赤茶色粒子を含む)
 - 2 // (1よりやや粘性あり、1よりやや色が暗い)
 - 3 // (2より粘性あり、灰茶色粒子含む)
 - 4 // (粘性3と同じ、地山A混入)
 - 5 黒茶色粘質土(粘性3と同じ、灰茶色粒子含む)
 - 6 黒茶色粘質土(3より粘性強い、黒色土混入)
 - 7 暗黒茶色粘質土(粘性6と同じ暗茶色粒子含む)
 - 8 // (粘性6と同じ、灰茶色粒子含む)
- A: 暗茶色粘質土
B: 暗黄茶色粘質土

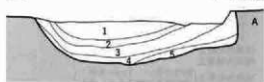
2SK0431



H = 7.100m

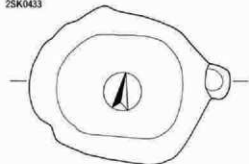


H = 7.100m



- 1 暗黒茶色粘質土(粘性やや弱い、茶色粒子多く含む)
- 2 // (1より粘性弱い、灰茶色粒子含む)
- 3 // (粘性2と同じ、暗茶、灰茶及び黒色粒子を多く含む)
- 4 暗黒茶色粘質土(1よりやや粘性あり、茶色粒子を含む)
- 5 // (1~4より暗く、4より粘性ややあり、灰茶色粒子含む)

2SK0433



H = 7.400m

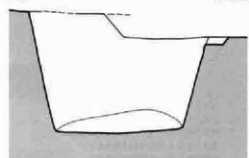
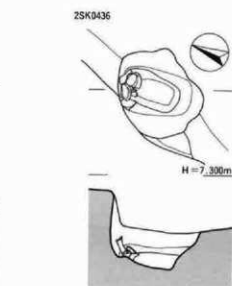
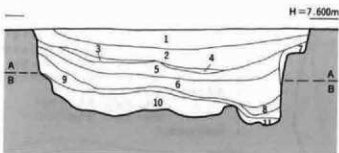
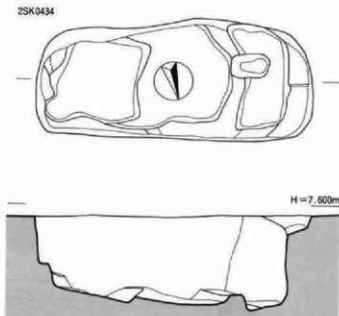
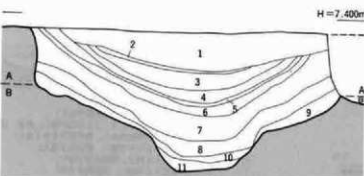
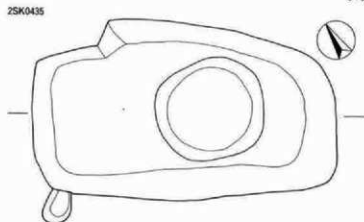


Fig.16 2SK0429・2SK0431・2SK0432・2SK0433実測図(1/40)



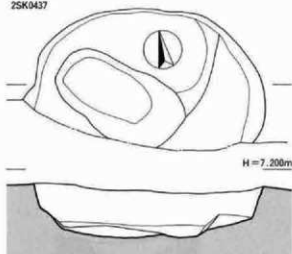
- 1 淡黒茶色粘質土 (1mm~1mm大の黒色粒子【炭化物】を少し含む、1mm大の白色粒子を多く含む)
 - 2 淡黒茶色粘質土 (1よりやや暗い、1mm~1mm大の黒色粒子【炭化物】を少し含む、1mm大の白色粒子を少し含む)
 - 3 暗黒茶色粘質土 (1mm大の黒色粒子【炭化物】を少し含む、また1mm大の黒色粒子を多く含む、3cm大の茶黄色土を含む)
 - 4 暗黒茶色粘質土 (2と同じ)
 - 5 淡黒茶色粘質土 (3mm~2mm大の黒色粒子【炭化物】を少し含む)
 - 6 淡黒茶色粘質土 (5よりやや暗いが強い、粘土に近い)
 - 7 淡茶色粘質土 (粘土よりやや中茶色が強い、粘土に近い)
 - 8 淡黒茶色粘質土 (暗茶色土を含む)
 - 9 暗黒茶色粘質土 (暗色により黒色粒子を等分に含む、1mm大の黒色粒子【炭化物】を多く含む)
 - 10 暗黒茶色粘質土 (1mm~2mm大の淡黒色粒子と1mm~1mm大の黒色粒子【炭化物】を多く含む)
 - 11 暗黒茶色粘質土 (黄色粒子を少し含む)
- A: 暗黒色粘土
B: 暗茶色粘土(砂質を含む)



- 1 淡黒茶色粘質土(粘性強い、黄色、暗茶色、赤茶色粒子を含む)
 - 2 # (粘性1と同じ、黄茶色土混入)
 - 3 # (粘性1と同じ、1、2に比べ色が暗い)
 - 4 # (1よりやや粘性あり、黒色粒子を含む)
 - 5 # (粘性1より、黄茶色粒子を多く含む)
 - 6 暗黒茶色粘質土(粘性よりややあり、茶色粒子を含む)
 - 7 暗茶色粘質土(より粘性強い、黄色、黄茶色粒子を含む)
 - 8 # (7と粘性同じ、茶色粒子を含む)
 - 9 # (6と粘性同じ、黒色粒子を含む)
 - 10 # (7と粘性同じ、灰白色粒子を含む)
 - 11 暗黒茶色粘質土(よりやや粘性あり、茶色粒子を含む)
- A: 暗黒色粘土
B: 暗茶色粘土(砂質を含む)

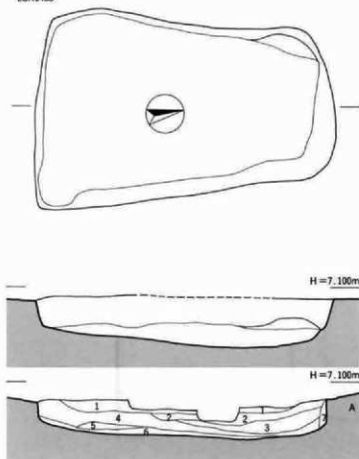
Fig.17 2SK0434・2SK0435・2SK0436実測図 (1/40)

2SK0437



H=7.200m

2SK0438



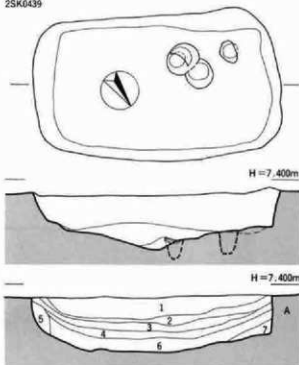
H=7.100m

H=7.100m

- 1 暗黒茶色粘質土(粘性弱い、暗茶色粒子を含む)
 - 2 // (1と粘性同じ、黄茶色粒子を含む)
 - 3 // (1と粘性同じ、暗茶、黒茶、及び黒色粒子を含む)
 - 4 // (1よりやや粘性あり、暗茶色粒子を多く含む)
 - 5 暗茶色粘質土(粘性4と同じ、黒色粒子を含む)
 - 6 // (粘性4と同じ、暗茶色粒子を含む)
 - 7 暗黒茶色粘質土(粘性1と同じ、黒色、暗茶色粒子を含む)
- A: 暗黄茶色粘質土



2SK0439

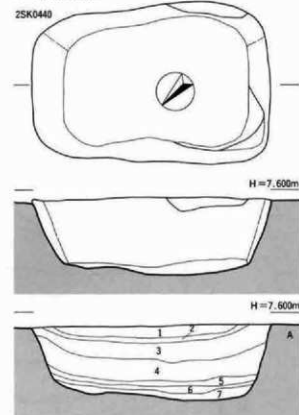


H=7.400m

H=7.400m

- 1 黒茶色粘質土(粘性弱い、黒色粒子及び灰色粒子を含む)
 - 2 // (1よりやや粘性あり、暗茶色粒子多く含む)
 - 3 // (粘性2と同じ、茶色粒子を少し含む)
 - 4 // (粘性2よりやや強い、暗茶色粒子を多く含む)
 - 5 黒茶色粘質土(粘性2と同じ、地山混入)
 - 6 // (粘性4と同じ、黒色粒子を含む)
 - 7 // (粘性4と同じ、茶色粒子を含む)
- A: 暗黄茶色粘質土

2SK0440



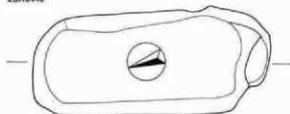
H=7.600m

H=7.600m

- 1 黒茶色粘質土(粘性弱く、黒色粒子を含む)
 - 2 // (粘性1と同じ、暗茶色粒子を含む)
 - 3 // (粘性1と同じ、1、2より色が暗い、黒色、灰茶色粒子を含む)
 - 4 // (1よりやや粘性あり、黒色粒子を多く含む)
 - 5 黒茶色粘質土(粘性4よりやや強い、灰白色土混入)
 - 6 // (粘性5と同じ、暗茶色粒子を含む)
 - 7 // (粘性5より強い、茶色粒子を含む)
- A: 暗黄茶色粘質土

Fig.17 2SK0437・2SK0438・2SK0439・2SK0440実測図 (1/40)

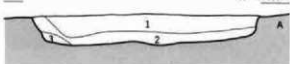
2SK0446



H=7.600m



H=7.600m



- 1 黒茶色粘質土(粘性弱い、黒茶色、灰茶色粒子を含む)
 2 # (1よりやや粘性あり、灰茶色粒子含む)
 3 暗茶色粘質土(粘性2と同じ、黒色・赤茶色粒子含む)
 A: 暗黄茶色粘質土

2SK0450



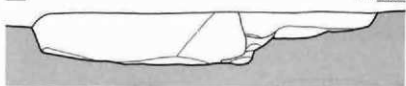
H=7.500m



2SK0451



H=7.400m



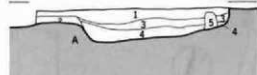
2SK0452



H=7.500m

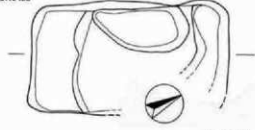


H=7.500m



- 1 黒茶色粘質土(粘性弱い、茶色及び黒色粒子含む)
 2 淡黒茶色粘質土(1より粘性強い)
 3 黒茶色粘質土(1と粘性同じ、茶色粒子多く含む)
 4 淡黒茶色粘質土(粘性2と同じ、茶色粒子含む)
 5 暗茶色粘質土(2よりやや粘性あり)
 A: 暗黄茶色粘質土

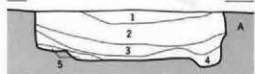
2SK0453



H=7.200m



H=7.200m



- 1 暗黒茶色粘質土(粘性強く暗茶色粒子含む)
 2 # (粘性1と同じでは1より強い、灰茶色粒子多く含む)
 3 # (1よりやや粘性あり、暗茶色粒子含む)
 4 # (1~2より色が黒く、粘性強い、暗茶色粒子含む)
 5 暗茶色粘質土(粘性1と同じ、黒色粒子含む)
 A: 暗黄茶色粘質土

Fig.19 2SK0446・2SK0449・2SK0451・2SK0452・2SK0453実測図(1/40)

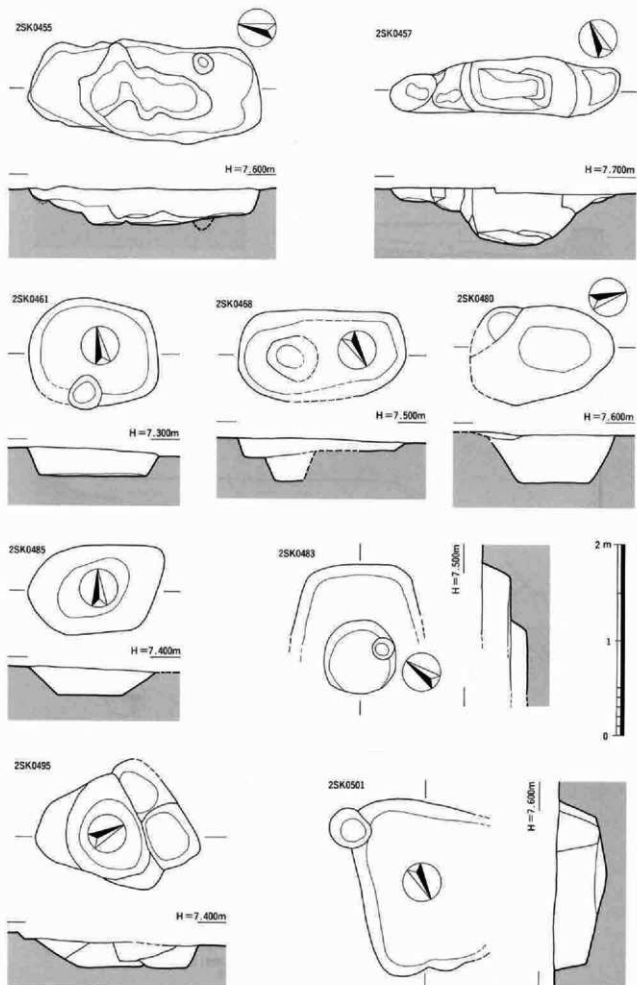
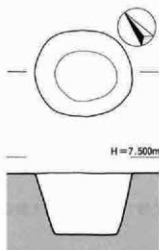


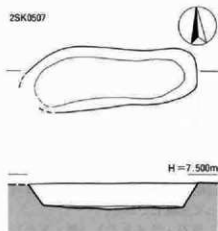
Fig.20 2SK0455・2SK0457・2SK0461・2SK0468・2SK0480・2SK0483
2SK0485・2SK0495・2SK0501実測図(1/40)

2SK0506



H = 7.500m

2SK0507

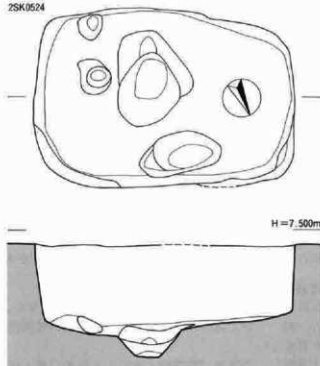


H = 7.500m

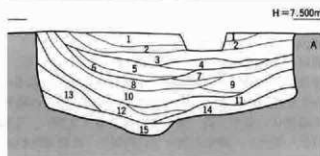


- 1 黒茶色粘質土(粘性やや弱い、増茶色及び黒色粒子を含む)
 2 # (1よりやや粘性あり、黒色及び灰色粒子を含む)
 3 増茶色粘質土(1・2より粘性強い)
 4 黒茶色粘質土(粘性3と同じで、2より色が暗い、黒色及び灰色粒子を含む)
 5 黒茶色粘質土(3よりやや粘性弱い、黒色及び増茶色粒子を含む)
 6 # (粘性5と同じ、茶色粒子を含む)
 7 増茶色粘質土(粘性5と同じ、黒色粒子を含む)
 A: 増茶色粘質土

2SK0524



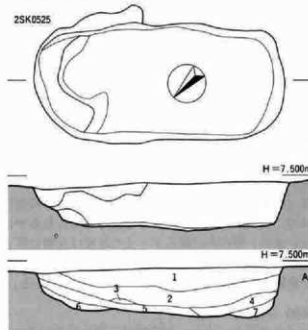
H = 7.500m



H = 7.500m

- I-1 黒茶色粘質土(粘性弱い、淡茶色粒子を含む)
 2 # (粘性1と同じで、色がやや暗い)
 3 # (粘性1と同じ、灰茶色粒子を含む)
 II-4 # (1と粘性同じ、茶色粒子を含む)
 5 # (1より粘性あり、茶色粒子多く含む)
 6 暗黒茶色粘質土(粘性5と同じ、赤茶色及び灰茶色粒子を含む)
 III-7 黒茶色粘質土(粘性5と同じ、増茶色粒子を含む)
 8 # (粘性5と同じ、増茶色粒子多く含む)
 9 黒茶色粘質土(5より粘性あり、増茶色粒子を含む)
 10 暗黒茶色粘質土(9と粘性同じ、増茶色粒子を含む)
 IV-11 # (9よりやや粘性あり、黒色粒子を含む)
 12 # (11より粘性強い、黒色粒子を含む)
 V-13 # (粘性11と同じで色が暗い)
 14 # (11と粘性同じ、灰白色土混入)
 VI-15 # (粘性12より強い、灰白色土混入)
 A: 増茶色粘質土

2SK0525



H = 7.500m

H = 7.500m

Fig.21 2SK0506・2SK0507・2SK0524・2SK0525実測図(1/40)

そのため、検出時に誤認した可能性は排除できない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・器台・高坏）・黒色磨研土器壺・石製有孔円盤未製品？・石包丁（1つは立岩産？）・サヌカイト（鉄・ドリル・スクレイパー・コア・剥片）・黒曜石（鉄・剥片）・石英剥片・軽石・石がある。

2SK0453 (Fig19) [T13]

調査区の南寄りにあり、2SK0396に切られている。長軸2.1m短軸1.2m深さ0.5mを測り、主軸の方位はN-27°-Eである。底面の中央に南北1.3m東西1.1m深さ0.1mの掘り窪めが認められる。この部分に木材等で床貼りをしてきた可能性が高い。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・鉢・蓋・不明品）・擬朝鮮系無文土器？甕・黒色磨研土器壺・紡錘車・砥石・サヌカイト（スクレイパー・コア・剥片）がある。

2SK0506 (Fig21) [O18]

調査区の南寄りにあり、他の遺構との切り合いはない。長軸1.0m短軸0.9m深さ0.7mを測り、主軸の方位はN-52°-Wである。検出時は小型の井戸の可能性も考えたが、底面は透水層まで達しておらず、土坑と判断した。

出土遺物は、須恵器（長頸壺・片）・土師器（皿・坏）・黒色土器（B碗・A碗）・弥生土器（甕・片）・サヌカイト（鉄・剥片）・黒曜石剥片がある。

2SK0524 (Fig21・Pla.78・79) [O22]

調査区の中央附近にあり、2SD0702に切られている。長軸2.7m短軸1.9m深さ0.9mとやや大型で、主軸の方位はN-65°-Wである。中央部には径0.7m深さ0.3mの凹みがあるほか、北辺中央附近と南辺東側に小穴が認められる。この小穴は、一木削り出しの梯子の痕跡かも知れない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・鉢・蓋・支脚）・土製紡錘車・面子・サヌカイト（鉄・スクレイパー・コア・剥片）・黒曜石剥片・石英剥片・片岩剥片がある。

2SK0525 (Fig21・Pla.78) [L29]

調査区の中央附近にあり、2SK2094を切っている。長軸2.6m短軸1.2m深さ0.5mを測り、主軸の方位はN-45°-Eである。東辺には棚状の設備を地山削り出しによって形成している。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・鉢）・投弾・面子・粘土塊・砥石・サヌカイト（鉄・スクレイパー・剥片）・黒曜石剥片・石英剥片・片岩剥片・すり石・石がある。

2SK0541 (Fig19・Pla.50) [N20]

調査区の中央附近にあり、2SK0502を切り、2SD0702に切られている。長軸3.1m短軸1.6m深さ0.7mとやや大型で、主軸の方位はN-65°-Wである。北辺の一部は、下端の方が上端よりも拡がっていて袋状土坑の痕跡かと思われるが、他の部分を見る限り全体的には通常の長方形の土坑のようである。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・？）・投弾・面子・石包丁・サヌカイト（鉄・スクレイパー・コア・剥片）・黒曜石釣針がある。

2SK0552 (Fig23) [P26]

調査区やや北寄りにあり、2SK2016を切り、2SK0422に切られている。長軸4.7m短軸1.4m深さ1.4mと大型で、主軸の方位はN-32°-Eである。底面は北から南へ緩やかに傾斜しており、北端部は幅0.9mで一段下がっている。

土層断面図を観察すると、いくつかの大きなまとまりに括ることができる。大分類のⅦ層は地山の土で土坑（貯蔵穴）使用時人為的に埋められていた可能性がある。それ以外は、廃棄土坑として使用していた時の、廃棄や自然埋没による堆積と考えられるが、Ⅲ層は北側からの集中した廃棄した際の堆積であろう。またⅢ層のみに限らず、土の堆積は北側に厚く偏っている。このことから、廃棄は主に北側から行われたとみることができる。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋）・投弾がある。

2SK0599 (Fig26) [M25]

調査区の北寄りにあり、2SD0528に切られている。長軸2.3m短軸2.2m深さ0.6mを測り、主軸の方位

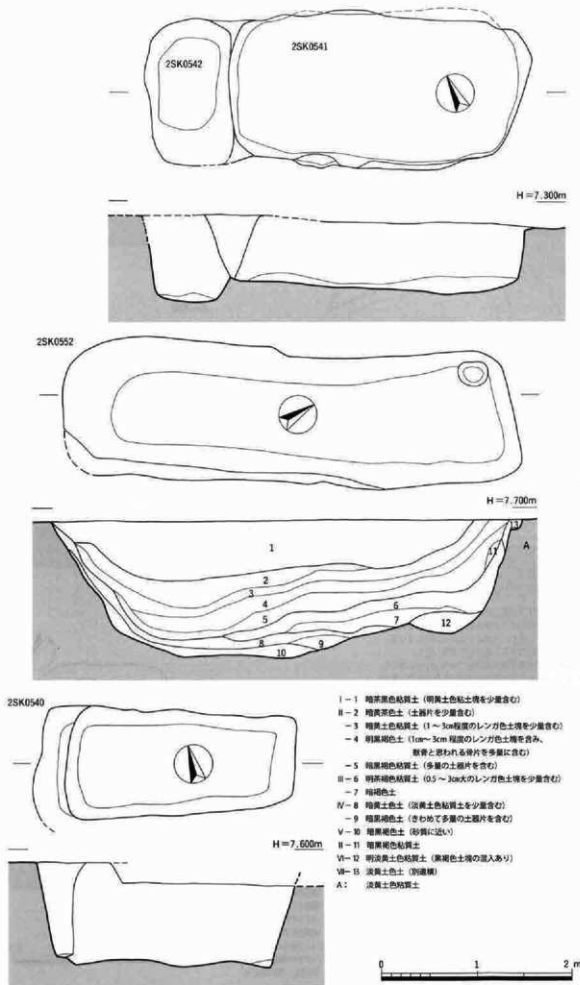
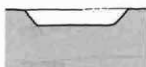


Fig.22 2SK0541・2SK0542・2SK0552・2SK0540実測図 (1/40)

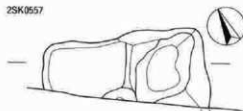
2SK0553



H = 7.600m



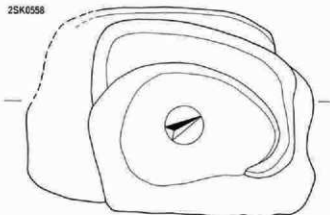
2SK0557



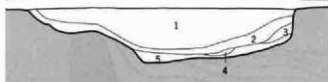
H = 7.300m



2SK0558

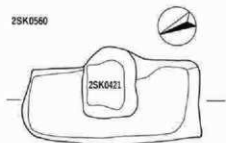


H = 7.500m

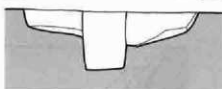


- 1 濃黒茶色土(黄色粒子及び黒色粒子及び白色粒子及び黄茶色ブロック及び土粉片を少し含む)
- 2 濃黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び白色粒子及び黄茶色ブロックを少し含む。土器片が中央に集中している)
- 3 濃黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子を少し含む)
- 4 暗黒茶色粘質土(黄色粒子及び黄茶色ブロックを少し含む)
- 5 黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び土器片を少し含む)

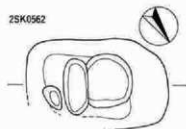
2SK0560



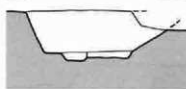
H = 7.600m



2SK0562



H = 7.700m



2SK0570



H = 7.500m



H = 7.500m

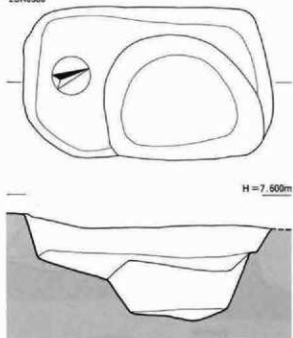


- 1 暗黒茶色粘質土(粘性弱い。黄色及び暗茶色粒子含む)
 - 2 // (1と粘性同じで暗い。黒色及び暗茶色粒子含む)
 - 3 // (粘性1と同じ。暗茶色粒子を含む)
 - 4 // (1よりやや粘性あり。暗茶色粒子を含む)
 - 5 暗黒茶色粘質土(4より粘性あり。茶色粒子含む)
 - 6 // (5よりやや粘性があり。色が暗い。茶色粒子含む)
- A: 暗茶色粘質土



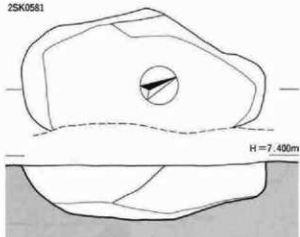
Fig.23 2SK0553・2SK0557・2SK0558・2SK0560・2SK0562・2SK0570実測図(1/40)

2SK0580



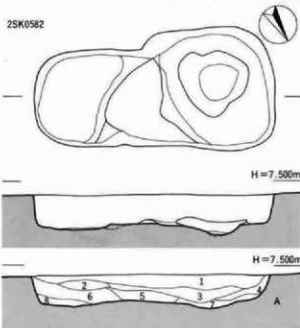
H=7.600m

2SK0581



H=7.400m

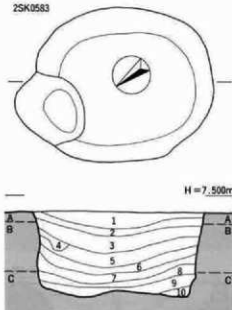
2SK0582



H=7.500m

H=7.500m

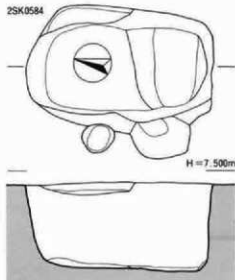
2SK0583



H=7.500m

- 1 黒茶色粘質土(粘性強い黒色粒子及び暗茶色粒子含む)
 - 2 // (1よりやや粘性弱い、黒色及び暗茶色粒子を含む)
 - 3 // (1と粘性同じ、黒色及び茶色粒子を少し含む)
 - 4 // (1よりやや粘性あり、茶色粒子含む)
 - 5 黒茶色粘質土(粘性2と同じ、茶色粒子を含む)
 - 6 暗黒茶色粘質土(4より粘性強い、暗茶色粒子を含む)
 - 7 黒茶色粘質土(4と粘性同じ、暗茶色粒子多く含む)
 - 8 // (6より粘性強い、黒色粒子含む)
- A: 暗茶色粘質土

2SK0584

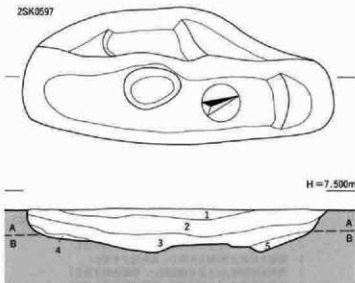
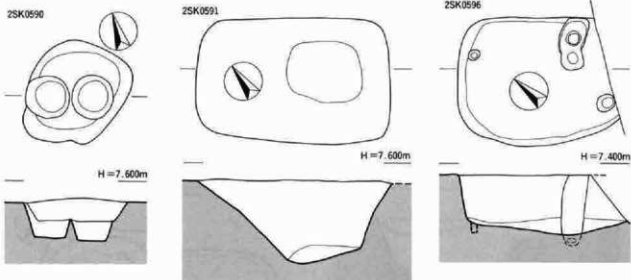


H=7.500m

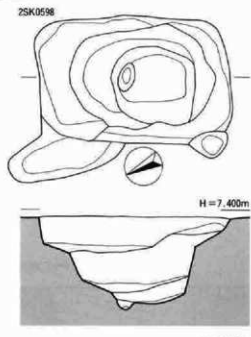
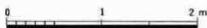
- 1 暗黒茶色土(白色粒子を多く含んでいる、灰茶色ブロック及び土器片及び黄色粒子を含む)
 - 2 淡黒茶色土(白色粒子を多く含む、黄色粒子及び黒色粒子)及び灰茶色ブロックを少し含む
 - 3 灰黒茶色土(黄色粒子及び白色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロックを少し含む)
 - 4 灰黒茶色粘質土(黄色粒子及び白色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロックを少し含む)
 - 5 濃黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロック及び土器片を少し含む)
 - 6 暗黒茶色粘質土(黒色粒子及び黄色粒子及び灰茶色ブロック及び土器片を少し含む、粘質が強い)
 - 7 暗黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロック)及び土器片を少し含む、粘質が強い)
 - 8 暗黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロックを少し含む)
 - 9 暗黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロックを少し含む)
 - 10 暗黒茶色粘質土(黒茶色ブロックを多く含む)
- A: 淡黒茶色土
B: 黄茶色粘質土
C: 暗黒茶色砂質土

0 1 2 m

Fig.24 2SK0580・2SK0581・2SK0582・2SK0583・2SK0584実測図(1/40)



- 1 暗黒茶色土(黄色粒子を多く含む、白色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロックを少し含む、粘質が少しある)
 - 2 暗黒色粘質土(黄色粒子を多く含む、白色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロック及び土器片を少し含む)
 - 3 暗黒色粘質土(黄色粒子を多く含む、白色粒子及び黄茶色ブロック及び灰茶色ブロック)及び地山粒子及び6cm大の壺形を少し含む、粘質が強い)
 - 4 暗黒茶色粘質土(黒色粒子を少し含む)
 - 5 暗黒茶色粘質土(黄色粒子を少し含む、地山粒子を多く含む)
- A : 淡茶色粘質土
B : 黄茶色粘質土



- 1 濃黒茶色土(黄色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロック)を少し含む、粘性が少しある)
 - 2 濃黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロックを少し含む)
 - 3 濃黒茶色粘質土(黄色粒子を少し含む、黄色ブロックを多く含む)
 - 4 暗黒茶色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び灰茶色ブロック)及び土器片を少し含む)
 - 5 暗黒色粘質土(黒色粒子及び灰茶色ブロックを少し含む、粘質が強い)
 - 6 暗褐色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び黄色ブロック及び暗灰茶色ブロックを少し含む、土器片を多く含む)
 - 7 暗黒色粘質土(黄色粒子及び黒色粒子及び黄色ブロック及び暗灰茶色ブロックを少し含む、土器片を多く含む)
 - 8 暗黒色粘質土(黄色粒子を少し含む、粘質が強い)
- A : 淡茶色土
B : 黄茶色砂質土

Fig.24 2SK0590・2SK0591・2SK0596・2SK0597・2SK0598実測図 (1/40)

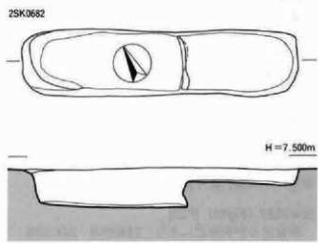
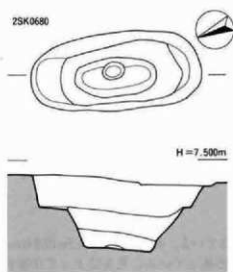
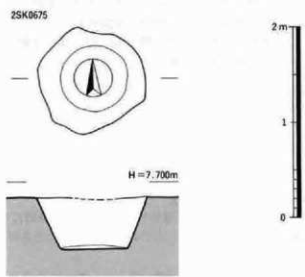
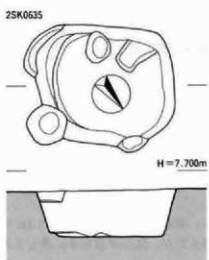
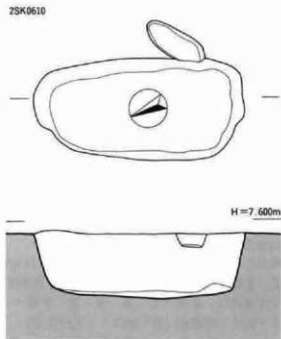
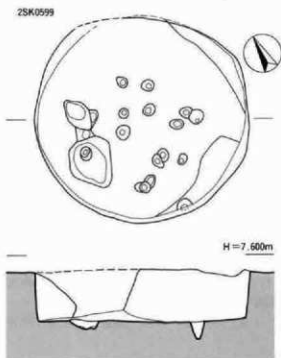


Fig.26 2SK0599・2SK0610・2SK0635・2SK0675・2SK0680・2SK0682実測図 (1/40)

はN-64°-Wである。平面形状はほぼ円形で、壁は垂直に近い角度で立っている。おそらくは袋状土坑の上部が削平されたものであろう。底面には小穴が点在するが、その配置に規則性は見いだせない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・器台・鉢）・凸帯文土器甕・サヌカイト（未製品・剥片）・黒曜石剥片・偏平打製石斧がある。

2SK0682 (Fig26) [L32]

調査区の北寄りにあり、2SK2095と2SK2096を切っている。長軸2.9m短軸0.7m深さ0.4mを測り、主軸の方位はN-61°-Wである。東西に細長い平面形状で、東側約半分は浅い棚状の施設となっている。棚との境目の下部は、下端が拡がり、棚の下に潜り込むような形状となっている。それ以外は底面と棚の双方とも平坦で、特段の設備はみられない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺）がある。

2SK0800 (Fig27) [O29]

調査区の北寄りにあり、2SK2020を切り2SK0434に切られている。長軸4.1m短軸2.2m深さ0.9mの大型で、主軸の方位はN-66°-Wである。底面形状はほぼ平坦で、特段に設備も見受けられない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋・支脚・ミニチュア）・黒色磨研壺・彩文土器壺・粘土塊・サヌカイト剥片・黒曜石（壺・剥片）・石がある。

2SK0878 (Fig29・Pla87) [D31]

調査区の東端附近にあり、2SK2015を切り2SK2011に切られている。長軸2.3m短軸1.7m深さ0.6mを測り、主軸の方位はN-47°-Wである。底面には径1.1m深さ0.3mの凹みがある。底面形状は、凹みの内外ともに概ね平坦で、特段の設備はない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・鉢・蓋・支脚）・擬朝鮮系無文土器？甕・石包丁・砥石・サヌカイト剥片・黒曜石剥片がある。

2SK0909 (Fig29) [P22]

調査区の中央附近にあり、2SK2027を切っている。長軸1.4m短軸1.3m深さ0.7mを測り、主軸の方位はN-64°-Wである。円形の土坑だが、底面には0.7m四方の方形の深い掘り込みがある。掘削時に綿密な土層観察を行っていないため、この掘り込みが別の下層遺構となる可能性を否定できない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺）・彩文土器壺がある。

2SK0956 (Fig30) [T29]

調査区の北寄りの西端附近にあり、2SK0954に切られている。長軸1.5m短軸1.4m深さ1.5mを測り、主軸の方位はN-65°-Wである。検出時には井戸の可能性を考えたが、底面が透水層に達しておらず、土坑と判断した。

出土遺物は、土師器（甕・蓋・坏・鉢・ミニチュア）・弥生土器（甕・片）がある。

2SK2009 (Fig31) [U11]

調査区の南寄りの西端にあり、2SK2010を切っている。長軸2.1m短軸2.1m深さ1.4mを測り、主軸の方位はN-69°-Wである。検出時には井戸の可能性を考えたが、底面が透水層に達しておらず、土坑と判断した。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋・脚付鉢）・サヌカイト剥片・石がある。

2SK2013 (Fig31) [E30]

調査区の北寄り東端にある。長軸3.2m短軸1.9m深さ0.9mのやや大型。主軸の方位はN-39°-Eである。底面は北から南へと緩やかに傾斜するが、特に施設等は認められない。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・蓋・甕棺）・石包丁・サヌカイト（ドリル・スクレイパー・コア・剥片）・黒曜石剥片がある。

2SK2027 (Fig32) [P23]

調査区の中央附近にあり、2SK0909・2SK2028・2SK2029に切られている。長軸9.9m短軸2.5m深さ0.4mを測り、主軸の方位はN-04°-Eである。大きな落ち込みと認識している。見方によっては溝状遺構とも理解されるが、ここでは土坑とした。

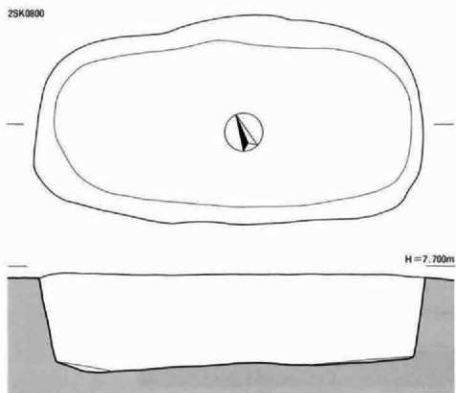
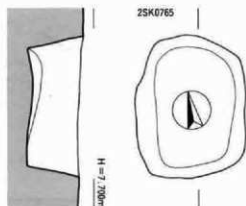
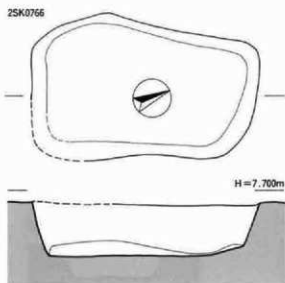
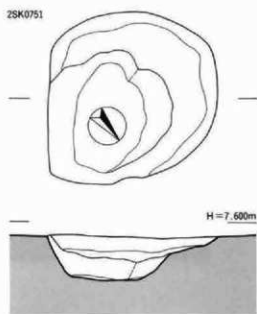
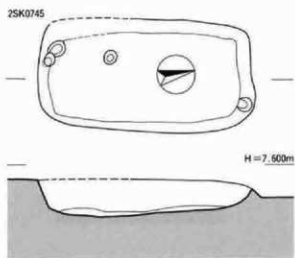


Fig.27 2SK0745・2SK0751・2SK0765・2SK0766・2SK0800実測図 (1/40)

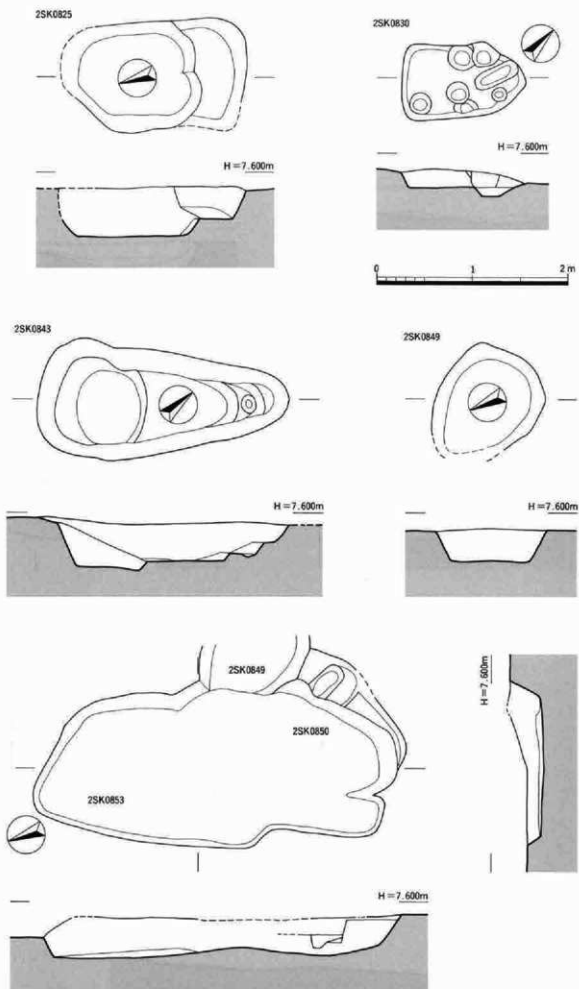
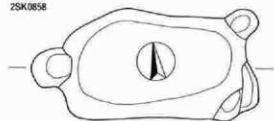


Fig.28 2SK0825・2SK0830・2SK0843・2SK0849・2SK0850・2SK0853実測図 (1/40)

2SK0858



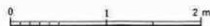
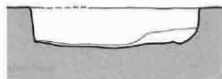
H=7.700m



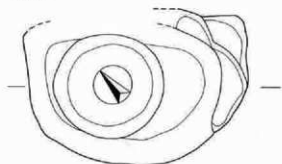
2SK0872



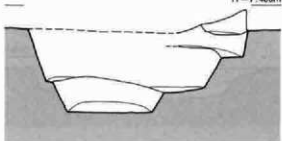
H=8.000m



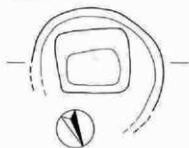
2SK0878



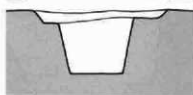
H=7.400m



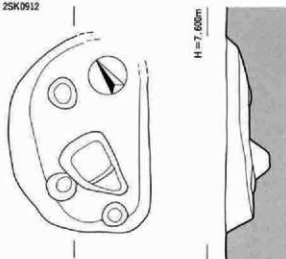
2SK0909



H=7.600m



2SK0912



H=7.600m

2SK0951



H=7.500m



Fig.29 2SK0858・2SK0872・2SK0878・2SK0909・2SK0912・2SK0951実測図 (1/40)

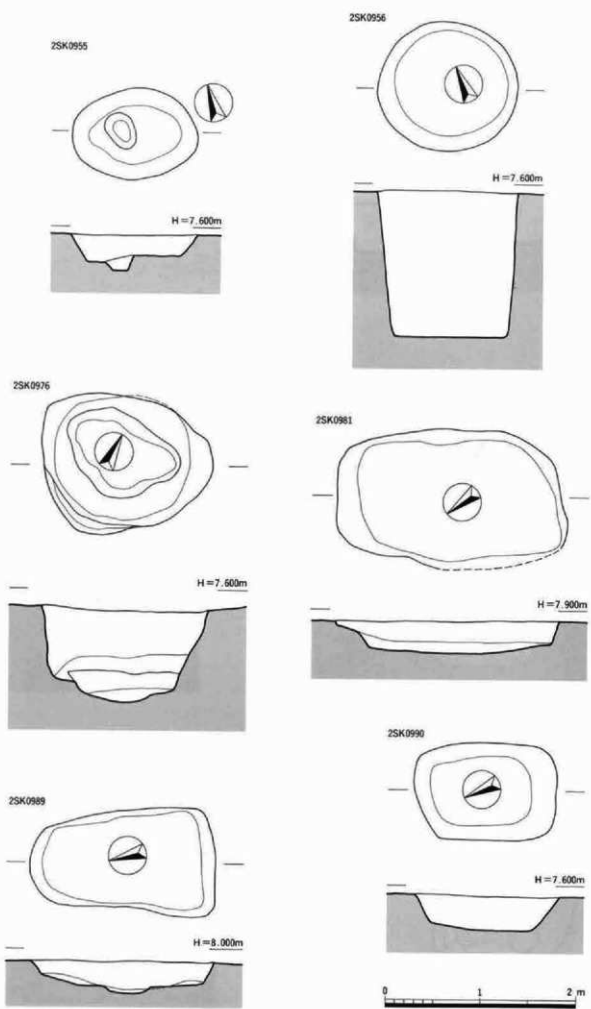
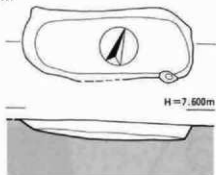
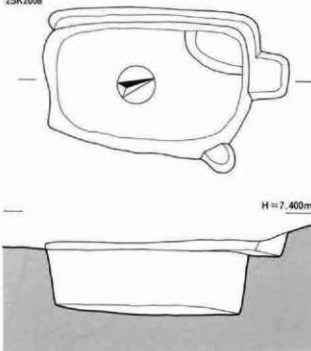


Fig.30 ZSK0955 · ZSK0956 · ZSK0976 · ZSK0981 · ZSK0989 · ZSK0990 实测图 (1/40)

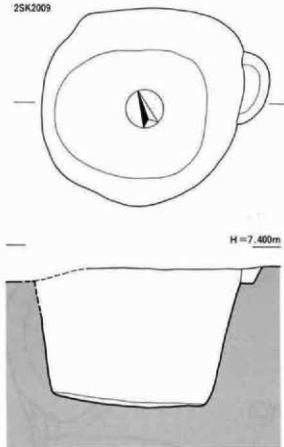
2SK0999



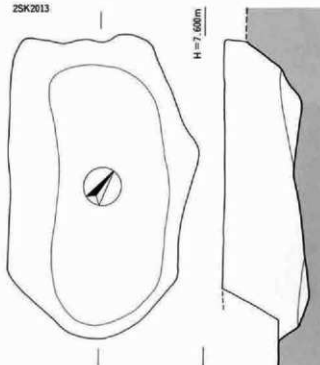
2SK2006



2SK2009



2SK2013



2SK2017

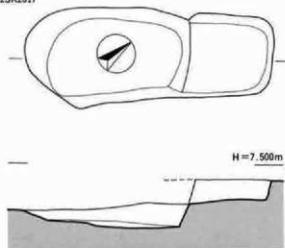


Fig.31 2SK0999・2SK2008・2SK2009・2SK2013・2SK2017実測図 (1/40)

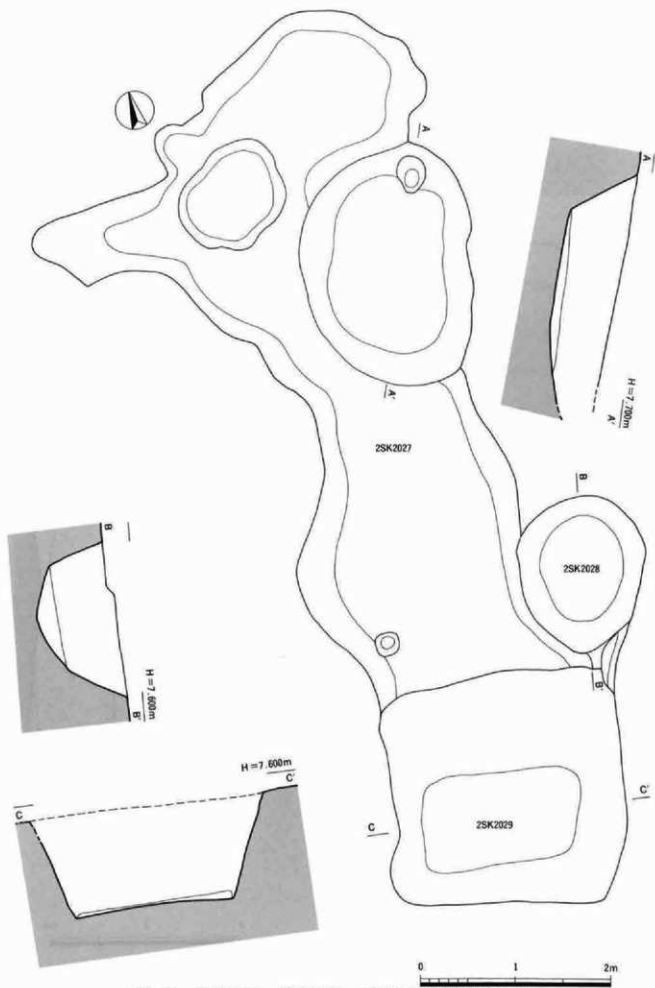


Fig.32 2SK2027・2SK2028・2SK2029実測図 (1/40)

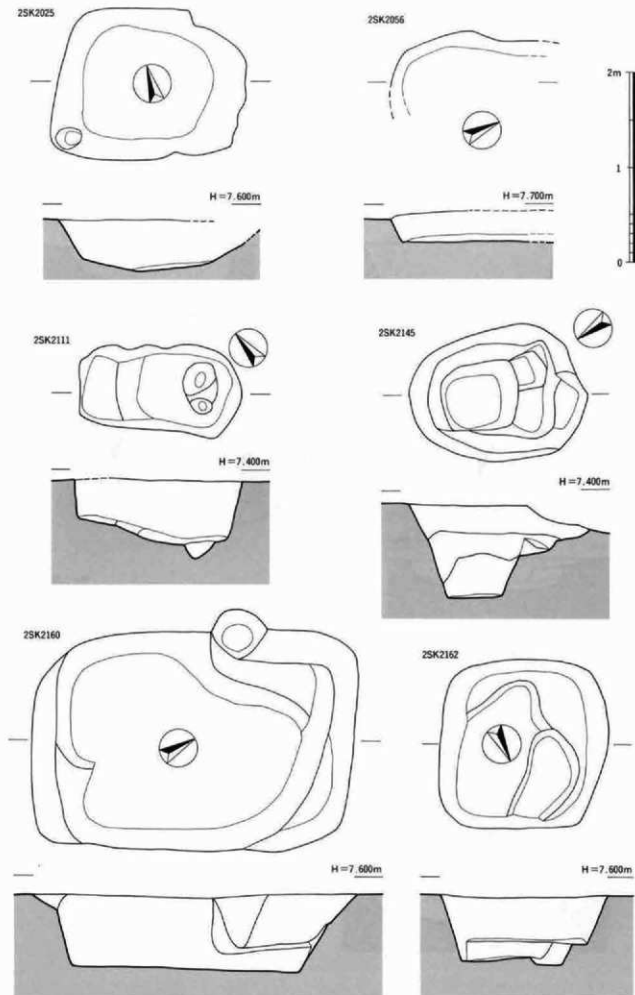


Fig.33 2SK2025・2SK2056・2SK2111・2SK2145・2SK2160・2SK2162実測図 (1/40)

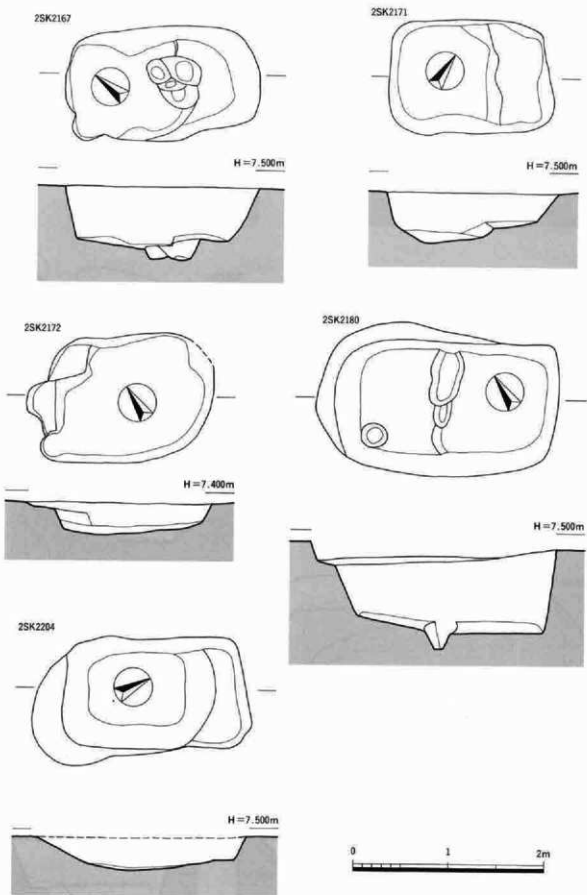


Fig.34 2SK2167・2SK2171・2SK2172・2SK2180・2SK2204実測図 (1/40)

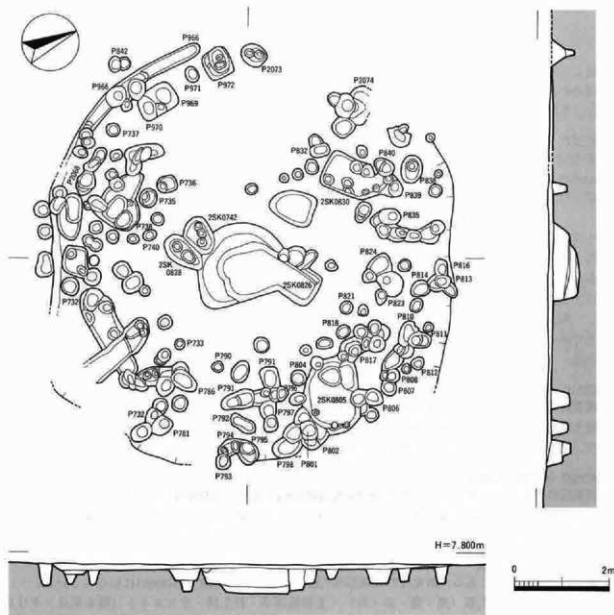


Fig.35 2SI2300実測図 (1/80)

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・甕棺）・凸帯文土器甕・サヌカイト剥片・石がある。

2SK2160 (Fig33) [E29]

調査区の北寄り東端附近にあり、他の遺構との切り合いはない。長軸3.4m短軸2.3m深さ0.7mとやや大型で、主軸の方位はN-30°-Eである。北側には高さの異なる棚状の施設が2つ認められる。それ以外の底面は概ね平坦である。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・鉢）・砥石がある。

2SK2180 (Fig34) [E34]

調査区の北寄りの東端にあり、2SK2181を切っている。長軸2.6m短軸1.6m深さ0.9mを測り、主軸の方位はN-57°-Wである。底面は西から東へと僅かに傾斜し、中央部には底面を横断するように3つの楕円形の小穴を連結して掘っている。小穴の深さは0.2m程である。

出土遺物は、弥生土器（甕・蓋）がある。

竪穴式住居

ここでは、方形の竪穴のほか、円形の柱穴跡から住居の存在が理解されるものと、壘小溝が確認できるものを住居跡として報告した。方形の竪穴は主柱穴が確認できないことから、竪穴式住居ではなく竪穴とすべきかも知れない。調査時の所見として、後者の2例は竪穴式住居が削平されていると基本的に

理解している。以下、円形・方形の順に報告する。なお、円形住居の主軸の方位は、中央土坑があるものはその長軸に直交する方位を主軸の方位とし、それ以外のものは径が最大値となる軸を主軸の方位とした。また、方形住居の方位は長軸の方位を記載した。

2SI2300 (Fig35・Pla.90) [N31]

調査区の北寄りの西端近くにあり、2SD0702・2SD0752・2SI0750・2SK0777・2SK805・2SK0825に切られていて、2SK0830・2SX2500を切っている。南北径8.4m東西径9.0mを測るが、堅穴の堀方は削平されて全く残っていない。したがって、生活時の床面も完全に失われていると判断している。

柱穴とおぼしき穴は無数に存在し、立て替えが何度も行われたことを示すが、現状では3回以上の立て替えを把握することができる。また、中央付近には崩れた楕円形の土坑と2対の小穴を認めることができる。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・鉢・大甕・片)・サヌカイト(ドリル・スクレイパー・鏝・剥片)・黒曜石(鏝・ドリル・剥片)・石英(スクレイパー)・片岩(剥片)があり、すべて柱穴からの出土である。弥生土器は図示できないものの、亀ノ甲式を中心に、一部城ノ越式と思われるものを含んでいる。

2SI2310 (Fig36・Pla.90) [M30]

調査区の中央附近にある。南北径5.0m東西径5.8mを測り、2SD0528に切られている。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・片)・サヌカイト(鏝・剥片)がある。弥生土器は図示できないものの、城ノ越式かと思しきものを含んでいる。

2SI2320 (Fig36) [Q28]

調査区の北寄りの西側にある。南北径6.0m東西径6.3mを測り、2SD0694に切られている。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・鉢・片)・サヌカイト(鏝・ドリル・剥片)・黒曜石(剥片)・片岩(剥片)がある。弥生土器は図示できないものの、城ノ越式かと思しきものが含まれている。

2SI2330 (Fig37) [I29]

調査区の中央附近にある。南北径7.0m東西径7.5mを測り、2SD0662・2SD0663に切られている。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・鉢・片)・土製紡錘車・粘土塊・サヌカイト(鏝未製品・ドリル・コア・剥片)・黒曜石(鏝・剥片)がある。弥生土器には亀ノ甲式や城ノ越式をはじめ、板付Ⅱ式や須久Ⅱ式と思しきものまで含まれている。

2SI2340 (Fig37) [P12]

調査区の南寄りにある。南北径6.0m東西径5.9mを測る。壁小溝の痕跡が僅かに残る。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・片)・黒色磨研土器(壺)・サヌカイト(剥片)・黒曜石(剥片)がある。弥生式土器には、体部に重弧文をもつ、板付Ⅱ式土器かと思われるものが含まれている。

2SI0606 (Fig38・Pla.89・90) [Q17]

調査区の中央附近にあり、2SI0608を切っている。長軸6.2m短軸4.1m深さ0.1mを測り、主軸の方位はN-35°-Wである

出土遺物は、全体掘削時、I層、II層に分かれている。全体掘削時およびI層からは、弥生土器(甕・壺・器台・片)・土師器(坏)・サヌカイト(鏝・剥片)・黒曜石(鏝・剥片)・チャート(剥片)がある。II層からは、弥生土器(甕・壺・鉢・片)・土製投擲・片岩(剥片)がある。

2SI0608 (Fig38・Pla.89・90) [Q19]

調査区の中央附近にあり、2SI0606に切られ、2SK0405・2SK0408・2SK0683を切っている。長軸6.0m短軸5.1m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN-64°-Eである

出土遺物は、全体掘削時、I層、II層に分かれている。全体掘削時からは、弥生土器(甕・壺・高坏・器台・蓋・ミニチュア・片)・土製紡錘車・石製紡錘車・石包丁・サヌカイト(剥片)・黒曜石(鏝・剥片)・石英(剥片)・片岩(剥片)があり、弥生土器の甕には丹塗りのものがみられる。I層からは、弥生土器(甕・壺・蓋・高坏・器台・鉢・片)・粘土塊・サヌカイト(ドリル・石刃)・石英

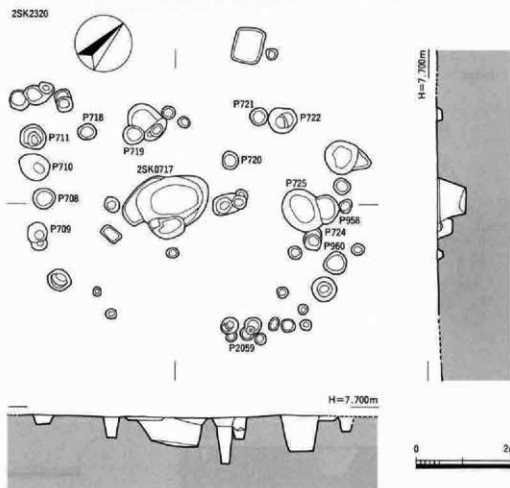
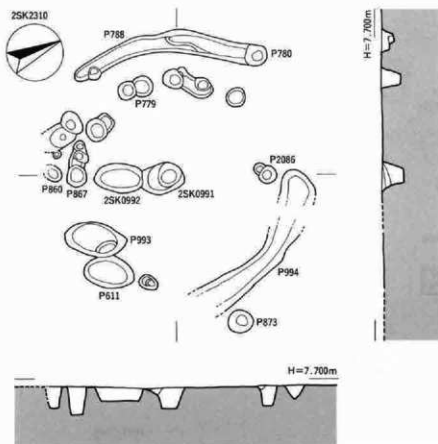


Fig.36 2S12310・2S12320実測図 (1/80)

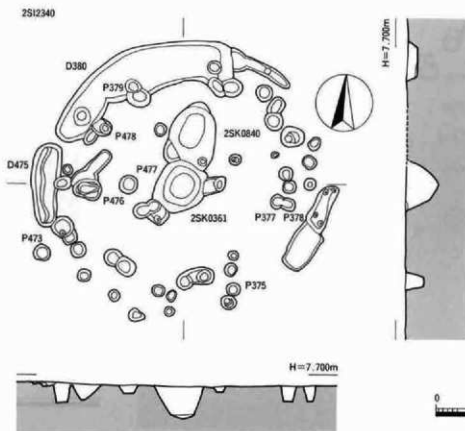
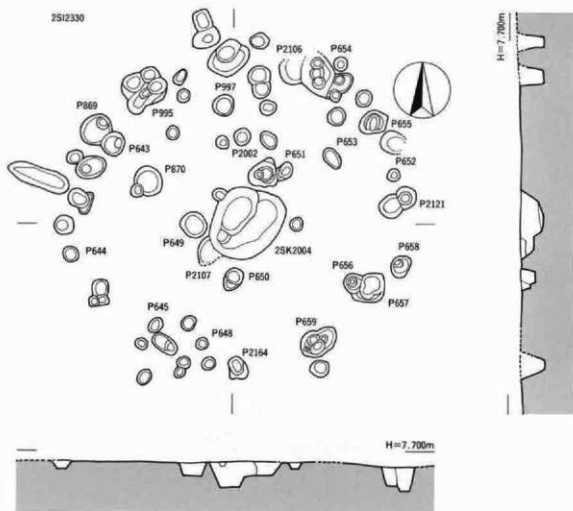
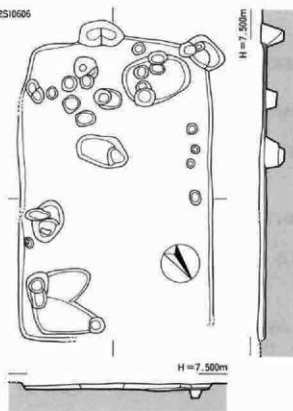
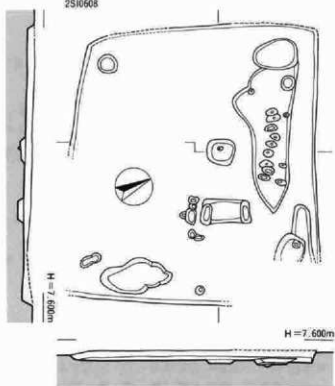


Fig.37 2SI2330・2SI2340実測図 (1/80)

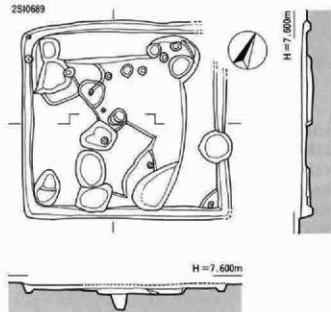
2S10606



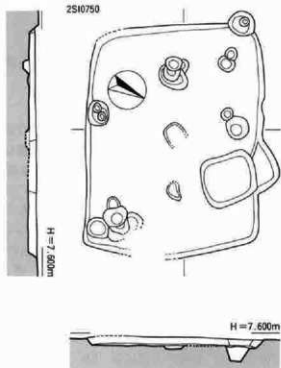
2S10608



2S10689



2S10750



2S12350

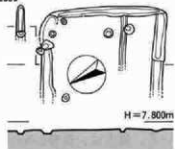


Fig.38 2S10606・2S10608・2S10689・2S10750・2S12350実測図 (1/80)

(剥片)がある。Ⅱ層からは、弥生土器(甕・蓋・片)・軽石がある。

2SI0609 (Fig38・Pla.90) [L22]

調査区の中央附近にあり、2SK0394・2SK0580・2SK0581・2SD0528に切られている。長軸6.2m短軸5.7m深さ0.1mを測り、主軸の方位はN-64°-Eである。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・片)・土師器(甕・壺・鉢・片)・磨製石剣・サヌカイト(鏃・剥片)黒曜石(剥片)がある。

2SI0689 (Fig38・Pla.90) [S24]

調査区の北寄りにあり、2SK2037に切られている。長軸4.3m短軸4.2m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN-24°-Eである。

出土遺物は、土師器(甕・壺・高坏・坏・片)・弥生土器(甕・壺)・サヌカイト(尖頭器・スクレイパー・剥片)・黒曜石(剥片)・砥石がある。

2SI0750 (Fig38・Pla.90) [Q32]

調査区の北西にあり、2SK0728・2SK0729に切られ、2SK2085を切っている。また下層遺構には、2SK2072・2SK2073・2SK2074・2SK2075・2SK2076・2SK2077がある。長軸4.9m短軸3.7m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN-27°-Eである。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・蓋・器台・ミニチュア碗・片)・サヌカイト(剥片)・黒曜石(剥片)がある。

2SI2350 (Fig38) [L26]

調査区の中央附近にあり、2SD0528・2SK0667に切られ、2SK0857・2SK0618を切っている。深さ0.1m残存する辺は2.6mを測り、主軸の方位はN-26°-Wである。出土遺物は認められなかった。

墓塚

木棺墓と甕棺墓を確認している。いずれも調査区の北東よりで検出した。以下、木棺墓・甕棺墓の順に報告する。

2ST0612 (Fig39・Pla.91) [I30]

調査区の北寄り東側にあり、他の遺構との切り合いはない。長軸2.1m短軸0.5m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN-72°-Eである。長軸側の西端は、小口板の外側まで堀方が拉がり、この部分の平面形態は楕円形に近い隅丸形状となる。対する東端は、やはり小口板の外側に広がるが一段浅い棚状となり、西側とは様相を異にしている。底面の壁際には幅約8cm深さ約5cmの小溝がめぐり、この小溝は堅穴住居にみられる壁小溝と同様の形態である。側板を立てた痕跡、あるいは、側板を固定するための設備であろう。底面はほぼ平坦であるが、中央部よりも長軸側両端の方が若干下がっており、断面形状は弓なりにかかる反ったように見える。短軸側は北側が南側よりも若干低く、僅かに傾斜している。

出土遺物は、土師器(皿)・弥生土器(甕・壺)・サヌカイト(剥片)・黒曜石(剥片)があるが、いずれも小片のため図示し得ない。

2ST2117 (Fig39) [I32]

調査区の北寄り東側にあり、2SD0662に切られ、2SK2118を切っている。長軸1.8m短軸0.6m深さ0.2mを測り、主軸の方位はN-19°-Wである。2ST0612と異なり、平面形態はほぼ完全な長方形を呈する。底面の壁際には2ST0612と同様に、堅穴住居の壁小溝状の幅約5cm深さ約8cmの小溝がめぐり、やはり、側板を立てた痕跡、あるいは側板を固定するための設備であろう。底面は2ST0612に比べ、やや凹凸が見られるものの概ね平坦である。短軸側では底面の傾斜は殆ど認められないが、長軸側では北が若干低くなっており、南から北へ緩やかに傾斜している。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺)・サヌカイト(剥片)がある。

2ST0879 (Fig40・Pla.92・93) [E35]

甕棺墓である。調査区の北東にあり、2SK2193・2SK2191を切っている。堀方は、長軸2.0m短軸1.7m深さ0.2mを測り、棺体の主軸方位はN-48°-Wである。棺体の埋葬角度は、残存状態が悪く明確

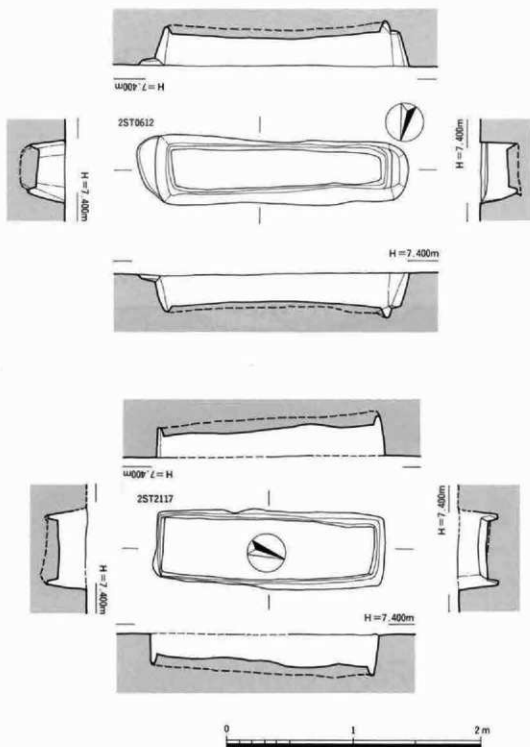


Fig.39 2ST0612・2SI2117実測図 (1/30)

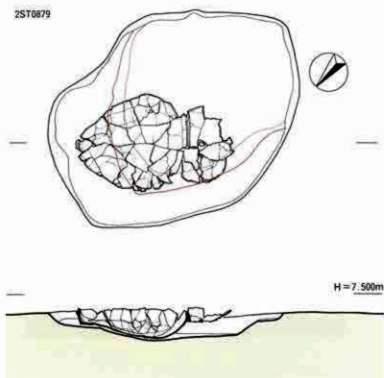
でないが、約 10° の傾斜で下裳側が下がるようである。

出土遺物は、甕棺の棺体のほかに弥生土器（甕・蓋）・サヌカイト（剥片）・黒曜石（剥片）・砥石がある。

2ST0880 (Fig40) [D35]

甕棺墓である。調査区の北東にあり、2SK2191を切っている。堀方は、長軸2.3m短軸1.3m深さ0.4mを測り、棺体の主軸方位は $N-83^\circ-E$ である。棺体の埋葬角度は、残存状態が悪く明確でないが、やや甕底部側が下がるようであるが、ほぼ水平であると思われる。

2ST0879



2ST0880

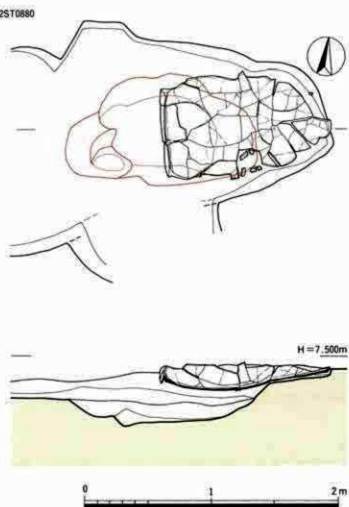


Fig.40 2ST0879・2ST0880実測図 (1/30)

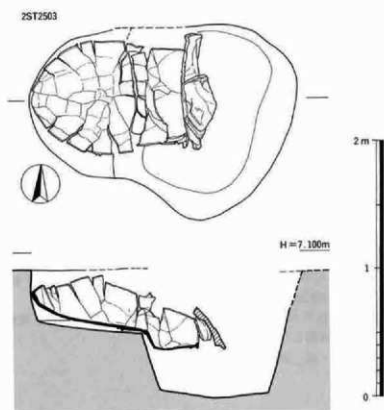
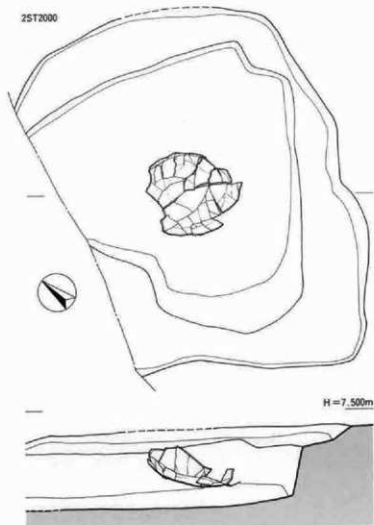


Fig.41 2ST2000・2ST2503実測図 (1/30)

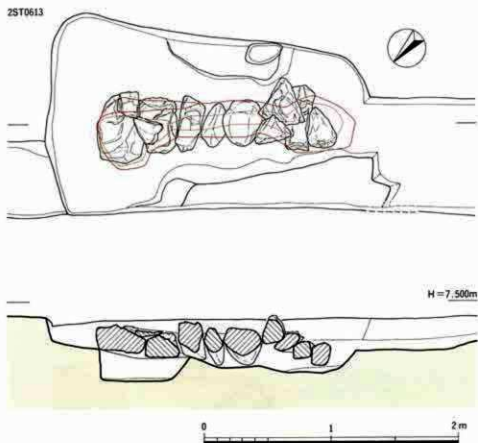


Fig.42 2ST0613実測図 (1/30)

出土遺物は、甕棺の棺体のほかに弥生土器（甕・壺）・サヌカイト（鎌）がある。

2ST2000 (Fig41) [G37]

甕棺墓である。調査区の北東にあり、2SD2225を切っている。堀方は、長軸2.7m短軸2.6m深さ0.6mを測り、棺体の主軸方位はN-51°-Wである。棺体の埋葬角度は、残存状態が悪く判然としない。

出土遺物は、甕棺の棺体のほかに弥生土器（甕）・砥石がある。

2ST2503 (Fig41・Pla.93) [G36]

甕棺墓である。調査区の北東にあり、2SK2095に切られている。堀方は、長軸2.1m短軸1.2m深さ0.5mを測り、棺体の主軸方位はN-87°-Eである。ただし、東側は深さが1.0mある。棺体の埋葬角度は、残存状態が悪く明確でないが、ほぼ水平であろう。

出土遺物は、甕棺の棺体のほかに弥生土器（甕・壺）・サヌカイト（剥片）がある。

2ST0613 (Fig42・Pla.94) [I31]

石蓋状遺構である。調査区の北より中央附近にあり、2SD0663に切られている。長軸2.5m短軸1.2m深さ0.4mを測り、主軸の方位はN-46°-Wである。石蓋検出時には石蓋土壌墓ではないかと考え調査を進めたが、石蓋の下部には墓塚と認め得るほどの施設は確認できなかった。わずかに幅0.4m長さ2.0m深さ0.1mの掘り込みを確認したのみである。その平面形状は、2つの土坑を溝で接続したようであるが、両端の土坑様の部分でも深さは0.2mしかない。

この遺構は不明遺構として扱うべきかとも考えたが、墓を意識した構造物と判断し、この項で報告する。これについては、小結で再論したい。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・鉢）がある。

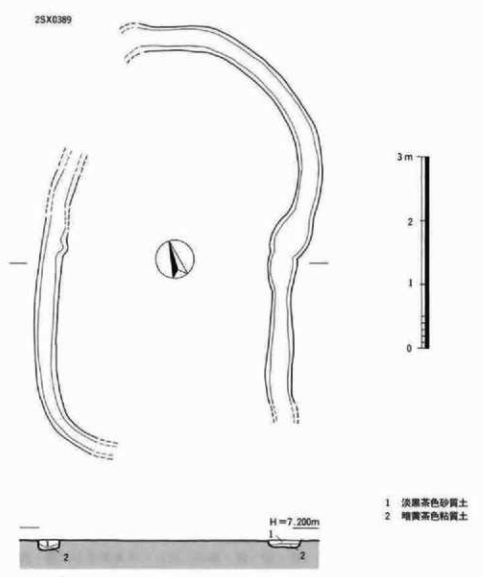
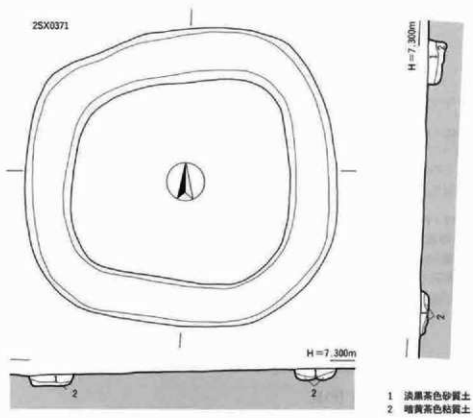


Fig.43 25X0371・25X0389実測図 (1/60)

周溝状遺構

調査区の南よりで、2基確認している。くずれた長方形のものと隅丸方形のものがある。

2SX0371 (Fig.43・Pla.95・96・97) [R9]

調査区の南寄りにあり、2SK0420・2SK0423・2SK0467を切っている。長軸4.8m短軸4.6m深さ0.2mを測る略方形のもので、長軸軸の方位はN-01°-Eである。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺)・サヌカイト(鐵・剥片)・黒曜石(鐵・剥片)・石包丁がある。

2SX0389 (Fig.43・Pla.98) [R4]

調査区の南端附近にあり、2SK0301・2SK0309・2SK0331に切られていて、2SK0461・2SD0932を切っている。長軸7.0m短軸4.0m深さ0.1mを測る略長方形のものであるが、長辺の中段で鉤型にずれている。その傾向は東辺で顕著である。また、長軸軸の方位はN-24°-Eである。

出土遺物は、弥生土器(甕)がある。

溝状遺構

周溝状遺構以外の溝状遺構を報告する。調査区中程の大溝とそれ以外の中小規模のものがある。

2SD0362 (Fig.44・Pla.99・100) [P15]

調査区のやや南寄りにある大溝である。当初、中世の館跡を囲む区画溝かとも考えたが、東側で遺構が途切れて連続性が見られない点や、西側の屈曲部が企画性に乏しいことから別の用途を考えたい。屈曲部から東側は23mの長さを測るが、南側は7mが調査区内であるものの大半は調査区外であると考えられる。断面形状は逆台形で、深さは0.7mを測る。南北部分の略方位はN-75°-Wである。

出土遺物は、須恵器(甕・壺・鉢)・土師器(皿・椀・片)・瓦器(椀)・青磁(竜泉窯系統)・弥生土器(甕・壺・鉢・片)・土製品(粘土塊)・磨製石剣・サヌカイト(鐵・尖頭器・錐・スクレイパー・剥片)・黒曜石(鐵・ドリル・剥片)・石英(剥片)・片岩(剥片)・石錘・石台・チャート(不明品・剥片)・炭がある。

2SD0528 (Fig.44) [L15]

調査区の中央を南北に走る溝で、略方位はN-27°-Eである。幅7.5m深さ0.3mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。

出土遺物は、土師器(甕・壺・鉢)・弥生土器(甕・壺・鉢・高坏・器台・椀・支脚・ミニチュア・片)・投弾・石包丁・磨製石剣・サヌカイト(石核・スクレイパー・ドリル・剥片)・黒曜石(鐵・剥片)・砥石・石製紡錘車・砥石・石英(剥片)・片岩(剥片)・叩き石・凹み石・石錘がある。

2SD0661 (Fig.238) [K26]

調査区の中央附近を南北に走る溝で、略方位はN-42°-Eである。攪乱をはきんで北側の2SD0662あるいは2SD0663の延長部分かと思われるが決め手を欠く。幅0.7m深さ0.3mを測り、断面形状はU字形を呈する。

出土遺物は、弥生土器(甕・片)・サヌカイト(剥片)があるが、いずれも小片のため図化できない。

2SD0662 (Fig.238) [J27]

調査区の中央附近を南北に走る溝で、略方位はN-43°-Eである。ほぼ平行して走る2SD0663を切っている。幅0.7m深さ0.3mを測り、断面形状はU字形を呈する。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・片)・サヌカイト(剥片)・黒曜石(石核)がある。黒曜石の石核を写真で報告する以外は、いずれも小片のため図化できない。

2SD0663 (Fig.44) [J28]

調査区の中央附近を南北に走る溝で、略方位はN-36°-Eである。ほぼ平行して走る2SD0662に切られている。幅7.0m深さ0.2mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。

出土遺物は、土師器(甕)・弥生土器(甕・壺・蓋・高坏・片)・サヌカイト(鐵・剥片)・黒曜石(剥片)・チャート(剥片)・片岩(剥片)がある。

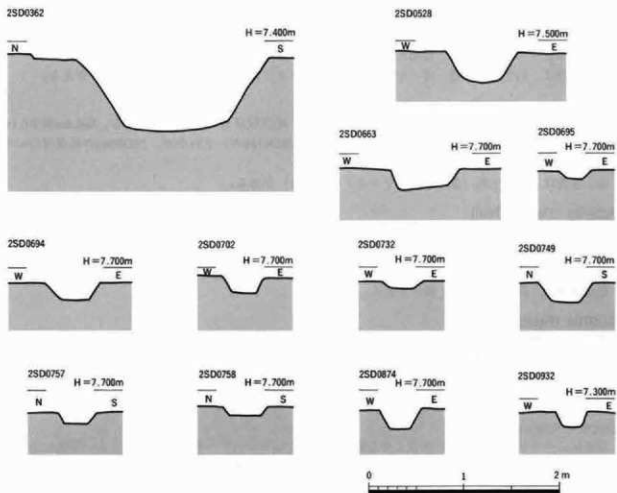


Fig.44 溝状遺構断面実測図 (1/40)

2SD0694 (Fig44) [S25]

調査区の調査区の西端を南北に走る溝で、略方位は $N-38^{\circ}-E$ である。幅0.5m深さ0.3mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。

出土遺物は、弥生土器（甕・片）・ササカイト（鉄・剥片）がある。

2SD0695 (Fig44) [S25]

調査区のほぼ中央付近の西端近くで北西から南東に走る溝で、ほぼ中央で屈曲する。略方位は北半部で $N-09^{\circ}-W$ 、南半部で $N-35^{\circ}-W$ である。他の遺構との切り合い関係は、2SI0688に切られ2SK2038を切っている。幅0.3m深さ0.1mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。

出土遺物は、土師器（甕・壺・高坏・片）・弥生土器（片）・ササカイト（剥片）・黒曜石（剥片）砥石がある。

2SD0702 (Fig.44) [O25]

調査区の中央部を南北に走る溝で、略方位は $N-19^{\circ}-E$ である。切り合い関係にある遺構のいずれよりも新しい遺構である。幅0.5m深さ0.2mを測り、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は、土師器（坏or鉢・片）・弥生土器（甕・壺・片）・ササカイト（鉄・剥片）・黒曜石（剥片）がある。

2SD0752 (Fig.44) [P13]

調査区の北から南へ走る溝で、略方位は $N-19^{\circ}-E$ である。幅0.4m深さ0.1mを測り、断面形状は逆台形を呈する。2SD0702の延長部分と考えられる。

出土遺物は、黒曜石（剥片）がある。

2SD0749 (Fig.44) [R35]

調査区の北西隅を斜め方向に走る溝で、略方位は $N-57^{\circ}-E$ である。2SK0744・2SK0746を切っている。幅0.6m深さ0.2mを測り、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺・片）・サヌカイト（ドリル・剥片）・黒曜石（剥片）がある。

2SD0757 (Fig.44) [R33]

調査区の北西隅を南北にSD0749と平行して走る溝で、略方位は $N-56^{\circ}-E$ である。幅0.4m深さ0.1mを測り、断面形状は崩れた逆台形を呈する。この溝と2SD0758のいずれかが、2SD0694の延長部分にあたると思われるが、決め手を欠く。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺）・サヌカイト（剥片）がある。

2SD0758 (Fig.44) [R34]

調査区の北西隅を南北に走る溝で、略方位は $N-40^{\circ}-E$ である。2SD0757に切られている。幅0.4m深さ0.1mを測り、断面形状は崩れた逆台形を呈する。この溝と2SD0757のいずれかが、2SD0694の延長部分にあたると思われる。決め手を欠くものの、こちらの溝の方が可能性が高いか。

出土遺物は、弥生土器（甕・壺）がある。

2SD0764 (Fig.237) [N35]

調査区の北端から南に走る溝で、略方位は $N-04^{\circ}-W$ である。幅0.4m深さ0.2mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。2SD0874の延長部分と考えてよい。

出土遺物は、弥生式土器（甕・壺）・磨製石斧・サヌカイト（剥片）・黒曜石（剥片）がある。弥生土器は亀ノ甲式とみられる。

2SD0874 (Fig.44) [J30]

調査区の中央北側を北西から南東に走る溝で、略方位は $N-11^{\circ}-W$ である。切り合い関係にあるすべての遺構を切っている。幅0.4m深さ0.2mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。2SD2007はこの溝の延長部分か。

出土遺物は、サヌカイト（鉄・剥片）・黒曜石（鉄・剥片）があるが、土器は認められなかった。

2SD0932 (Fig.44) [S5]

調査区の南西隅に位置する北西から南西に走る溝で、略方位は $N-23^{\circ}-W$ である。幅0.3m深さ0.2mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。

出土遺物は、弥生土器（甕）がある。

2SX2500

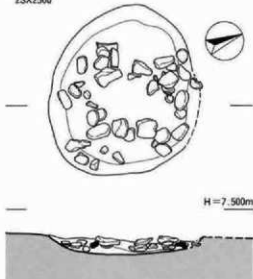


Fig.45 2SX2500実測図 (1/20)

2SD2007 (Fig.238) [S5]

調査区の北東に位置する南北に走る溝で、略方位は $N-10^{\circ}-E$ である。幅0.4m深さ0.2mを測り、断面形状は略逆台形を呈する。2SD0874の延長か。

出土遺物は、黒色土器A・弥生土器がある。

石組み炉

1基のみ確認した。検出時には地山に火を受けた小石がめり込んでいるかのような状況であった。念入りに精査したところ、掘り方を確認した。周辺でも石組み炉がないか、一定注意をしていたが、残念ながら検出できなかった。

2SX2500 (Fig.45・Plat100) [N31]

調査区の北側西寄りにあり、平面形態は崩れた長方形を呈する。規模は、長軸0.7m短軸0.5m深さ0.1mを測り、長軸の方は $N-23^{\circ}-E$ である。出土遺物は認められなかった。

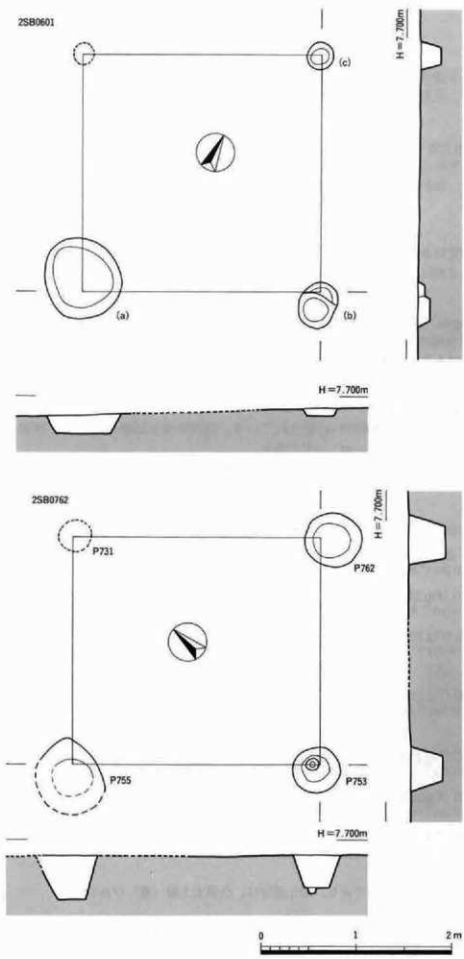


Fig.46 2SB0601・2SB0762実測図 (1/40)

井戸

井戸と思しき遺構は数基検出したが、ほとんどは掘り込みが透水層まで達しておらず井戸とは認め難い。その中で、透水層まで達している1基のみを井戸として報告する。これ以外のものは、土坑の項で報告した。

2SE0668 (Fig.238) [J26]

調査区の中央附近にあり、2SK0699を切っている。径0.9m深さ1.0mを測る。底面は砂地である。

出土遺物は、須恵器(甕・坏)・土師器(坏)・弥生土器(甕・高坏)がある。

掘立柱建物

今回の調査では多数の小穴を確認したが、調査現地で建物と認識できたものはない。したがって、ここで報告する2例は、整理作業および本書の刊行準備作業中に図上で復元を行ったのみであることを了解されたい。

2SB0601 (Fig.46) [R23]

調査区の中央部西端にあるが、切り合い関係は明確でない。柱穴の深さは概ね0.2mで、柱間は南北2.5m東西2.5mである。主軸の方位はN-25°-Eである。

出土遺物は、弥生土器(甕・壺・片)・サヌカイト(鐵・剥片)がある。

2SB0762 (Fig.46) [P35]

調査区の北部にあり、2SK0754に切られている。柱穴の深さは概ね0.4mで、柱間は南北2.6m東西2.4mである。主軸の方位はN-43°-Eである。

出土遺物は、弥生土器(壺・片)・サヌカイト(鐵・剥片)がある。

その他の遺構

建物として認知できなかった柱穴・不明遺構のうち、出土遺物を図示できたものを報告する。

2SP0308[R3] (Fig.238)

径0.5m深さ0.2mである。出土遺物は、弥生土器(甕・壺)・サヌカイト(スクレイパー)がある。

2SP0373[O11] (Fig.238)

径0.3m深さ0.3mである。出土遺物は、弥生土器(甕・壺)・サヌカイト(鐵・剥片)がある。

2SP0698[L16] (Fig.238)

径0.5m深さ0.5mである。出土遺物は、凸帯文土器(甕)・弥生土器(甕・片)・サヌカイト(剥片)・黒曜石(剥片)・片岩(剥片)がある。

2SP0705[P28] (Fig.238)

径0.6m深さ0.4mである。出土遺物は、弥生土器(甕・壺・蓋)・サヌカイト(スクレイパー・剥片)がある。

2SP0708[R27] (Fig.238)

径0.3m深さ0.2mである。出土遺物は、凸帯文土器(甕)・サヌカイト(鐵・剥片)がある。

2SP0846[R31] (Fig.238)

径0.5m深さ0.2mである。出土遺物は、弥生土器(甕・片)・黒曜石(鐵・剥片)がある。

2SP2219[E38] (Fig.238)

径0.3m深さ0.2mである。出土遺物は、弥生土器(片)・石包丁転用の砥石・黒曜石(剥片)がある。

2SX2220[E38] (Fig.238)

東西2.2m南北0.6m深さ0.6mである。出土遺物は、凸帯文土器(甕)がある。

調査番号	地区	土層または長軸長(m)	対軸または短軸長(m)	残存率(%)	土層または長軸の方位	出土遺物	備考	Fla	Flb
250001	83	1.9	0.9	0.5	N-70°-E	赤土層(黄・赤)、土製品類、土器土器土器、ササキ土器(銅)、土器類(銅、ブロンズ)		4	3
250002	54	1.1	1.1	0.4	N-64°-W	赤土層(黄・赤、赤)、土器類、土器土器土器、ササキ土器(銅)、土器類(銅、ブロンズ)		4	4
250003	N2	1.8	1.1	0.8	N-68°-W	赤土層(黄・赤、赤)、土器類、土器土器土器、ササキ土器(銅)、土器類(銅、ブロンズ)		4	4-5
250003	N3	1.7	0.9	0.3	N-24°-E	赤土層(黄・赤)	赤土層は種類別、土器類(銅)のみで、さらには土器類も乏しい。	4	-
250005	F3	2.0(+)	1.1	0.3	N-43°-E	赤土層(黄・赤)		4	5
250006	E3	1.9	0.9	0.9	N-40°-W	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅、ブロンズ)、土器類(銅、ブロンズ)	赤土層は種類別、土器類(銅)のみで、さらには土器類も乏しい。	5	6-7
250007	E3	1.5	0.9	0.8	N-11°-E	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅、ブロンズ)、土器類(銅、ブロンズ)		5	8-9
250009	E4	2.3	1.2	0.8	N-70°-W	赤土層(黄・赤、赤、赤、赤)、ササキ土器(銅、ブロンズ)、土器類(銅、ブロンズ)		6	8-10
250011	G5	1.4	0.9	0.6	N-74°-W	赤土層(黄・赤、赤)		6	11
250013	F1	1.2	0.8	0.2	N-31°-E	赤土層(黄・赤)		6	11-12
250014	F5	1.9	1.7	0.4	N-15°-E	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅、赤銅)、土器類(銅、赤銅)		6	13
250016	H4	2.3(+)	0.8	0.6	N-30°-E	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)		6	14
250017	E5	2.2	1.1	0.5	N-22°-E	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅、ブロンズ)、土器類(銅、ブロンズ)		6	15-16
250032	S8	2.1	1.0	0.3	N-65°-W	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		6	-
250034	Q6	1.3	0.9	0.4	N-21°-E	赤土層(黄・赤)、土器類(銅、赤銅)		7	18
250035	Q6	1.0	0.5	0.3	N-23°-E	赤土層(黄・赤)		7	18-17
250036	Q7	1.2	0.7	0.5	N-40°-W	赤土層(黄・赤)		7	18-19
250037	Q7	1.1(+)	1.0	0.3	N-77°-W	赤土層(黄・赤)、土器類(銅)		7	20
250041	S8	2.2	1.4	0.7	N-62°-W	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅、赤銅)		7	20
250042	S9	1.6	0.8	0.4	N-53°-W	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		7	-
250043	Q7	2.3	1.1	0.6	N-10°-E	赤土層(黄・赤)		7	-
250050	F9	1.9	1.2	0.6	N-70°-E	赤土層(黄・赤)、土器類(銅)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		-	-
250051	O0	2.3	1.0	0.4	N-82°-E	赤土層(黄・赤、赤)、土器類(銅)		8	21
250052	F11	0.9	1.1	0.1	N-22°-E	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)		8	22
250053	Q10	1.2	1.0	0.4	N-70°-W	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		8	22-23
250054	T11	1.1	0.8	0.4	N-38°-E	赤土層(黄・赤、赤、赤)、ササキ土器(銅)		8	25
250055	Q11	2.9	1.7	0.6	N-21°-E	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅、赤銅)、土器類(銅、赤銅)	中央部は付着した土器類のみ、その量は1.5mの層に及ぶ。	8	24
250056	T12	1.3	1.0	0.5	N-66°-W	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		9	25
250057	T12	1.7	0.9	0.6	N-60°-W	赤土層(黄・赤)		9	26-27
250058	H11	0.9	0.8	0.4	N-04°-E	なし		9	26
250059	E14	1.3	1.5	1.4	N-11°-E	赤土層(黄・赤)、内装土器類		9	29-30
250060	H11	1.1	0.7	0.3	N-33°-E	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅、赤銅)		9	29
250061	F12	1.2	1.0	0.6	N-31°-E	赤土層(黄・赤)、土器類(銅)、土器類(銅)		9	31-32
250063	O11	1.7	1.1	0.9	N-15°-E	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)	赤土層は種類別、土器類(銅)のみで、さらには土器類も乏しい。	10	31-33
250067	N12	1.2	0.7	0.3	N-40°-E	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)		10	34
250066	N12	1.1	0.9	0.2	N-25°-W	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		10	34
250069	F11	1.3	1.2	0.5	N-11°-W	赤土層(黄・赤、赤、赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		10	35
250070	O10	1.4(+)	0.9	0.3	N-34°-E	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		10	35
250074	O12	2.3	1.6	0.5	N-81°-E	赤土層(黄・赤、赤)、土器類(銅)、ササキ土器(銅)		11	-
250082	Q12	1.4	1.4	0.4	N-38°-W	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		11	36-37
250083	Q22	1.2	1.1	0.4	N-31°-E	なし		11	36-38
250092	F21	0.9	0.9	0.5	N-24°-E	赤土層(黄・赤、赤)、土器類(銅)、ササキ土器(銅)		11	41
250093	M4	2.4	1.6	0.3	N-60°-W	赤土層(黄・赤)		12	41
250094	N12	2.2	1.6	0.5	N-79°-W	赤土層(黄・赤、赤)、土器類(銅)、土器類(銅)		12	42-43
250096	S13	1.6	1.3	0.6	N-00°-E	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅、赤銅)		12	42-44
250098	O11	2.0	1.5	0.3	N-74°-W	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		12	45-46
250099	O11	1.9	1.1	0.6	N-17°-E	赤土層(黄・赤、赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)		13	45-47
250400	Q14	1.2	1.1	0.4	N-39°-E	赤土層(黄・赤)		13	48-49
250402	U3	2.2	1.0	0.2	N-10°-E	赤土層(黄・赤)、ササキ土器(銅)、土器類(銅)	中央部の層は1.5m	13	-

Tab.1 土坑一覧①

遺構番号	地区	主軸または 長軸長 (a)	副軸または 短軸長 (a)	埋存率 (%)	主軸または長 軸の方位	出土遺物	備考	F1a	F1a
23K0405	Q09	4.5	1.5	0.8	N-56°-W	赤土土器 (器・釜・甕)・粘土瓦・サモカイト (織・ア・ 鏡片)・黒曜石鏡片・片岩鏡片		13	-
23K0406	S13	1.2	0.8	0.2	N-43°-W	赤土土器 (器・釜)		13	-
23K0416	018	1.7	1.2	0.5	N-67°-W	赤土土器 (器・釜・甕)・土製紡錘車・サモカイト鏡片	堀ノ原式土器	14	31・32
23K0417	025	1.9	0.9	0.2	N-27°-E	赤土土器 (器・釜)		14	31
23K0418	N28	1.9	1.4	0.5	N-69°-W	漆器類 (土製器 (器・釜・甕・灰舟)・赤土土器 (器・ 釜・甕))		14	33
23K0419	S25	2.0	1.2	0.4	N-75°-W	赤土土器 (器・釜)・サモカイト鏡片		14	34
23K0420	101	1.2(+)	0.9	0.5	N-20°-E	赤土土器 (器・釜・甕・灰舟)・サモカイト (織・ステインペー ル)・黒曜石鏡片	堀ノ原平片	14	35
23K0423	T10	4.6	1.7	0.5	N-50°-W	赤土土器 (器・釜・甕)・灰舟・鉄押・粘土瓦・サモカイト (織・ドラム・ステインペーパー・鏡片)・黒曜石鏡片・石製鏡片・石製 土鏡片・石製鏡片・銅平打製石器・磁石		15	36・37
23K0425	S9	2.1	1.4	0.7	N-79°-W	赤土土器 (器・釜・甕)・鉄押・サモカイト (織・ステ インペーパー・鏡片)・黒曜石鏡片		15	36・38
23K0428	Q03	1.4	1.1	0.4	N-39°-W	赤土土器 (器・釜)・サモカイト鏡片・黒曜石鏡片		15	39・40
23K0429	09	1.7	1.3	1.0	N-13°-E	赤土土器 (器・釜)	副坑上層	15	39・41
23K0431	L16	2.2	1.4	0.5	N-22°-E	赤土土器 (器・釜・甕)・灰舟・凸棒文土器類・黒曜石鏡片・サ モカイト鏡片		16	42・43
23K0432	L15	2.4(+)	1.0	0.5	N-69°-W	赤土土器 (器・釜)・灰舟・粘土瓦・サモカイト (ス タインペーパー・鏡片)・黒曜石鏡片		16	42・44
23K0433	06	1.9	1.5	1.2	N-80°-E	赤土土器 (器・釜・甕)・サモカイト (織・コア・鏡 片)・黒曜石 (織・鏡片)		16	46
23K0434	N28	2.9	1.8	0.9	N-73°-W	赤土土器 (器・釜・甕・灰舟)・粘土瓦・サモカイト (ス タインペーパー・鏡片)・黒曜石 (織・鏡片)・サ モカイト鏡片・片岩鏡片・石	副坑上層との連続?	17	45
23K0435	N28	3.2	1.8	1.0	N-56°-W	赤土土器 (器・釜・甕・灰舟)・凸棒文土器類・土製紡錘車・灰舟・ 粘土瓦・石製鏡片・黒曜石・石製土鏡片・黒曜石鏡片・サ モカイト鏡片・黒曜石鏡片・片岩鏡片・石	中央部の内側の部分 (図1.3a) の部分は 図1.3a	17	46・47
23K0436	S9	0.9	0.9	0.0	N-65°-W	赤土土器 (器・釜)・黒曜石片・サモカイト (織・コア・ 鏡片)・黒曜石鏡片	断面図は連続からずれている	17	48・49
23K0437	M15	2.9	1.5(+)	0.5	N-79°-W	赤土土器 (器・釜・甕・灰舟)・灰舟・土製紡錘車・ 石製土鏡片・サモカイト鏡片・黒曜石 (織・鏡片)・石 製鏡片?		18	70
23K0438	M16	3.1	2.0	0.5	N-11°-E	赤土土器 (器・釜・甕)・粘土瓦・サモカイト (織・ス タインペーパー・鏡片)・黒曜石鏡片		18	71
23K0439	K28	2.6	1.5	0.5	N-68°-W	赤土土器 (器・釜)・粘土瓦・サモカイト (織・鏡片)・ 黒曜石 (ドラム・鏡片)		18	71
23K0440	F27	2.5	1.6	0.8	N-65°-E	赤土土器 (器・釜・甕)・粘土瓦・土製紡錘車・石製紡 錘車・黒曜石片・サモカイト (織・ドラム・ステインペー ル・鏡片)・黒曜石 (ドラム・鏡片)		18	72
23K0446	Q26	2.5	1.1	0.3	N-18°-E	赤土土器類		19	73
23K0449	827	1.3	0.9	0.2	N-61°-E	なし		19	74
23K0450	827	1.4(+)	0.7	0.2	N-39°-W	なし		19	74
23K0451	L19	3.6	1.4	0.5	N-26°-E	赤土土器 (器・釜・甕)・灰舟)・凸棒文土器類・石製 有孔土鏡片・石製土鏡片・石製土鏡片・サモカイト (織・ドラム・ステインペーパー・鏡片)・黒曜石 (織・鏡片)・石製鏡片・鏡片・石	中層?	19	75
23K0452	N24	2.1	1.5	0.3	N-18°-W	なし		19	77
23K0453	T13	2.1	1.2	0.5	N-27°-E	赤土土器 (器・釜・甕・灰舟・不明品)・黒曜石製灰舟土 器・黒曜石製土器類・黒曜石・磁石・サモカイト (ス タインペーパー・コア・鏡片)	副坑下の連続?	19	-
23K0455	P9	2.4	1.0	0.4	N-11°-W	赤土土器 (器・釜・不明品)・粘土瓦・サモカイト鏡片	堀ノ原平片層か?	20	-
23K0457	F6	2.4	0.6	0.5	N-64°-W	赤土土器 (器・釜)・土製紡錘車		20	-
23K0461	S5	1.4	1.1	0.3	N-80°-W	赤土土器 (器・釜)・サモカイト鏡片		20	-
23K0468	T11	1.9	0.9	0.2	N-59°-W	赤土土器 (器・釜・甕)	中央部より内側の部分 (図1.6a) の 部分は図1.6a	20	-
23K0480	Q12	1.5	1.0	0.5	N-16°-E	赤土土器 (器・釜・支脚)・サモカイト鏡片・黒曜石鏡片		20	-
23K0483	N11	1.4(+)	1.2	0.3	N-54°-E	赤土土器 (器・釜)・黒曜石鏡片	中央部の内側の部分 (図1.8a) の部分は 図1.8a	20	-
23K0485	M11	1.4	0.9	0.3	N-66°-W	赤土土器 (器・釜)		20	-
23K0495	Q14	1.7	1.3	0.3	N-25°-E	赤土土器類		20	-
23K0501	Q20	1.8	1.3(+)	0.5	N-64°-W	赤土土器 (器・釜)・サモカイト鏡片・黒曜石鏡片・片 岩鏡片		20	76
23K0506	018	1.0	0.9	0.7	N-52°-W	漆器類 (灰舟・灰舟)・土製器 (釜・甕)・灰土土器 (器 ・釜・甕)・赤土土器 (器・釜)・サモカイト (織・ア・ 鏡片)・黒曜石鏡片		21	77
23K0507	019	1.9	0.6	0.2	N-80°-W	赤土土器 (器・釜)・黒曜石製灰舟土器類・サモカイト鏡 片・黒曜石鏡片・石製品		21	-
23K0524	022	2.7	1.9	0.9	N-65°-W	赤土土器 (器・釜・甕・支脚)・土製紡錘車・灰舟・ サモカイト (織・ステインペーパー・コア・鏡片)・黒曜石鏡 片・石製鏡片・片岩鏡片	中央部の内側の部分 (図1.7a) の部分は 図1.7a	21	78・79
23K0525	L29	2.6	1.2	0.5	N-45°-E	赤土土器 (器・釜・鏡片)・鉄押・灰舟・粘土瓦・磁石・サ モカイト (織・ステインペーパー・鏡片)・黒曜石鏡片・石製 鏡片・片岩鏡片・片岩片		21	78
23K0540	050	2.7	1.1	1.1	N-75°-W	赤土土器 (器・釜・甕)・灰舟)・凸棒文土器類 (織・ア・ 鏡片)・黒曜石鏡片		22	-
23K0541	N29	3.1	1.6	0.7	N-65°-W	赤土土器 (器・釜・ア)・鉄押・灰舟・石製土鏡片・サモカイト (織・ステインペーパー・コア・鏡片)・黒曜石鏡片		22	80

Tab.2 土坑一覧②

調査番号	地区	主軸または長軸長 (m)	短軸または短軸長 (m)	残存状況 (m)	主軸または長軸の方位	出土遺物	備考	Fig.	Pla.
200042	X00	1.5	0.9	0.9	N-25°-E	弥生土器(甕・壺)・鉄器・金貨(ヤマトヤマト)・銅・ブロンズ・スチール・ブロンズ・鉄釘・銅板瓦片		22	-
200052	P26	4.7	1.4	1.4	N-32°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・鉄器		22	-
200053	P26	1.1	1.0	0.1	N-60°-E	土器(甕・壺・鉄)		23	-
200057	T10	1.7	0.6(+)	0.6	N-64°-W	弥生土器(ヤマトヤマト)・銅釘・銅板瓦片・片岩・鉄釘		23	-
200058	P24	3.0	2.2	0.5	N-28°-E	弥生土器(甕・壺・鉄・銅・金貨(ヒュウチウブ))・銅板瓦片・銅釘・金貨(ヒュウチウブ)・スチール・ブロンズ・鉄釘・銅板瓦片・ブロンズ・鉄釘・片岩・鉄釘		23	81
200060	O04	1.8	0.8	0.3	N-26°-E	弥生土器(ヤマトヤマト)		23	-
200062	K25	1.5	0.9	0.5	N-55°-W	弥生土器(甕・壺・鉄)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片		23	-
200070	K23	1.8	1.2	0.3	N-18°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片		23	-
200080	L21	2.6	1.6	1.0	N-21°-E	土器(甕・壺・鉄)・弥生土器(甕・壺・鉄)・鉄釘・ササキイロ瓦片・銅板瓦片・片岩・鉄釘		24	-
200081	L22	2.6	1.8(+)	0.6	N-25°-E	土器(甕・壺・鉄)・弥生土器(甕・壺・鉄)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片		24	-
200082	L31	2.5	1.2	0.3	N-63°-W	弥生土器(甕・壺)・鉄器・銅板瓦片・銅釘・ササキイロ瓦片・銅板瓦片・片岩・鉄釘・ブロンズ・鉄釘		24	-
200083	K22	1.9	1.6	0.9	N-36°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・銅板瓦片・銅釘・片岩・銅板瓦片・ササキイロ瓦片・銅板瓦片	土器は200082の遺物で同じものか?	24	81・82・83
200084	K26	2.0	1.2	0.9	N-12°-W	弥生土器	亀ノ甲土器(甕)・平石(片)	24	84
200090	T17	1.1	1.1	0.4	N-74°-W	土器(甕・壺・片岩・鉄)・ヒュウチウブ		25	-
200091	S19	2.0	1.3	0.9	N-54°-W	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(甕・甕)	銅板瓦片は入るか?	25	-
200096	K26	1.7(+)	1.4	0.6	N-40°-W	弥生土器(甕)・凸型土器(甕)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片・銅釘		25	85
200097	H29	3.3	1.4	0.4	N-23°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・凸型土器(甕)・銅板瓦片・銅釘・ササキイロ瓦片・銅板瓦片・片岩・鉄釘		25	84
200098	K28	2.0	1.3	0.9	N-38°-E	石釘・明石石・ササキイロ(スチール・鉄釘)・銅板瓦片(甕・甕)	土器は200097の遺物で同じものか?	25	86
200099	K25	2.3	2.2	0.6	N-64°-W	弥生土器(甕・壺・鉄)・銅板瓦片・銅釘・凸型土器(甕)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片		26	-
200100	K28	2.2	1.1	0.6	N-23°-E	弥生土器(甕・壺)・ササキイロ(スチール・鉄釘)・銅板瓦片		26	-
200103	K29	1.4	1.2	0.5	N-52°-W	弥生土器(甕・壺・鉄)・銅板瓦片・銅釘(ヒュウチウブ)・凸型土器(甕)・銅板瓦片・銅釘・ササキイロ(スチール・鉄釘)・銅板瓦片		26	-
200107	K31	1.2	1.1	0.5	N-90°-E	土器(甕・壺・鉄)・ヒュウチウブ(銅釘)・弥生土器(甕・壺)・ササキイロ(銅釘)・銅板瓦片・片岩・鉄釘		26	-
200108	O17	1.8	0.8	0.8	N-24°-E	弥生土器(甕・壺)・銅釘・銅板瓦片(甕)・スチール・鉄釘		26	-
200162	L32	2.9	0.7	0.4	N-61°-E	弥生土器(甕・壺)	東洋アラスカ産の土	26	-
200145	Q04	2.3	1.2	0.4	N-13°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・石釘		27	-
200174	P23	1.8	1.8	0.5	N-50°-W	弥生土器(甕・壺・鉄)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片		27	-
200181	N35	1.5	1.1	0.5	N-11°-E	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(片)・ササキイロ(スチール・鉄釘)		27	-
200196	N35	2.4	1.5	0.5	N-23°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片		27	-
200200	O19	4.1	2.2	0.9	N-60°-W	弥生土器(甕・壺・鉄)・銅板瓦片・銅釘(ヒュウチウブ)・凸型土器(甕)・銅板瓦片・銅釘・ササキイロ瓦片・銅板瓦片		27	-
200205	O12	1.9	1.1	0.5	N-10°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・ササキイロ瓦片・銅板瓦片(ブロンズ・鉄釘)・石		28	-
200230	P32	1.3	0.8	0.2	N-40°-E	弥生土器(甕・壺)・ササキイロ(銅・スチール・鉄釘)・銅板瓦片	亀ノ甲土器は入るか?	28	-
200243	Q00	2.7	1.3	0.5	N-44°-E	弥生土器(甕・壺・鉄)・ササキイロ(銅・スチール・鉄釘)・銅板瓦片		28	-
200249	S33	1.2	1.2	0.3	N-15°-E	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)		28	-
200260	S33	2.5	1.6	0.4	N-20°-E	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)		28	-
200263	S33	2.5	1.6	0.4	N-20°-E	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)	銅板瓦片は主軸からずれている	28	-
200268	K29	2.3	1.1	0.7	N-83°-W	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片	銅板瓦片は主軸からずれている	28	-
200272	L32	1.8	0.9	0.4	N-72°-W	弥生土器(甕・壺)・ササキイロ(スチール・鉄釘)・銅板瓦片		29	-
200278	D01	2.3	1.7	0.6	N-47°-W	弥生土器(甕・壺・鉄)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)・銅板瓦片	遺物に付、1m2x4.3mの内部の跡のみあり	29	87
200299	S22	1.4	1.3(+)	0.7	N-64°-W	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片		29	-
200312	S22	2.1	1.5	0.3	N-65°-W	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)		29	-
200311	S27	1.6	1.0	0.2	N-63°-W	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片	中央部の部分部分のみは2.5m	29	-
200355	T26	1.3	1.0	0.3	N-77°-W	弥生土器(甕・壺)・凸型土器		30	-
200366	T29	1.5	1.4	1.5	N-60°-W	土器(甕・壺)・銅板瓦片(ヒュウチウブ)・弥生土器(甕・壺)		30	-
200376	O11	1.8	1.4	1.0	N-60°-E	土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)		30	-
200381	L31	2.4	1.5	0.3	N-30°-E	弥生土器(甕・壺)・ササキイロ(銅・鉄釘)		30	-
200389	N33	1.9	1.1	0.3	N-18°-E	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)	銅板瓦片は入るか?	30	-
200390	K32	1.5	1.0	0.4	N-20°-E	弥生土器(甕・壺)・銅板瓦片・銅釘(ササキイロ)		30	-

Tab.3 土坑一覧③

遺跡番号	地区	主軸または 長軸長 (m)	副軸または短 軸長 (m)	残存深さ (m)	主軸または長 軸の方位	出土遺物	備考	Fla	Flb
2580999	J31	1.8	0.7	0.2	N-70°-E	灰瓦片、粘土土器(壺・甕・高脚・ヒコツェア)、凸縁土土器、サスカイト製片、漆器片断		31	-
2582008	T10	2.6	1.6	0.8	N-10°-E	粘土土器(壺・甕・高脚・ヒコツェア)、石製紡錘車、サスカイト(壺・スクリュー・製片)、漆器片断、銅、鉄片、片砂器片、ガラス製片、銅製		31	-
2582009	E11	2.1	2.1	1.4	N-60°-W	粘土土器(壺・甕・高脚・ヒコツェア)、サスカイト製片、石		31	-
2582013	E30	3.2	1.9	0.9	N-20°-E	粘土土器(壺・甕・高脚・ヒコツェア)、サスカイト(ヒコツェア・スクリュー・ヒコツェア・製片)、漆器片断		31	-
2582017	E32	2.6	1.8	0.5	N-30°-E	粘土土器(壺・甕・高脚・ヒコツェア)、石製紡錘車、サスカイト製片		31	-
2582020	G00	2.4	1.6	0.8	N-70°-W	土器類(壺・ヒコツェア類)、粘土土器(壺・甕)、サスカイト(壺・製片)、漆器片断		33	-
2582027	F23	9.9	2.5	0.4	N-04°-E	粘土土器(壺・甕・高脚・ヒコツェア)、凸縁土土器、サスカイト製片、石		32	-
2582028	O2	1.7	1.3	0.8	N-13°-W	粘土土器(壺・甕・高脚)		32	-
2582029	F22	2.4	2.4	1.0	N-81°-W	粘土土器(壺・甕・高脚・ヒコツェア)、サスカイト(ヒコツェア・製片)		32	-
2582056	F05	1.4(+)	1.7(+)	0.3	N-20°-E	粘土土器(壺・甕・高脚)、サスカイト製品・片		33	-
2582111	B05	1.7	0.9	0.7	N-40°-E	粘土土器(壺・甕)		33	-
2582145	E26	1.9	1.4	1.0	N-20°-E	粘土土器(壺・甕・高脚)、サスカイト製片	鳥ノ字式土器	33	-
2582160	E29	3.1	2.3	0.7	N-20°-E	粘土土器(壺・甕・高脚)、漆器		33	-
2582162	G30	1.8	1.8	0.7	N-63°-W	粘土土器(壺・甕・高脚)、サスカイト製片		33	-
2582167	F32	2.0	1.2	0.6	N-21°-W	粘土土器(壺・甕・高脚)、サスカイト(壺・スクリュー・製片)、漆器片断	鳥ノ字式土器	34	-
2582171	F33	1.7	1.2	0.5	N-30°-E	粘土土器(壺・甕)	鳥ノ字式土器	34	-
2582172	G33	1.9	1.4	0.3	N-57°-W	粘土土器(壺・甕)、サスカイト製片		34	96
2582180	E34	2.5	1.6	0.9	N-57°-W	粘土土器(壺・甕)	底面を構築する3つの構造物の小片を露出させる	34	-
2582204	B06	2.2	1.2	0.3	N-27°-E	粘土土器(壺・甕)、サスカイト製片		34	-

Tab.4 土坑一覧④



発掘調査風景

3. 出土遺物

今回の調査では、現地での発掘調査終了時でバンコンテナー219箱分の遺物が出土した。しかも廃棄土坑を中心に、出土した土器が比較的高い割合で復元あるいは因上復元が可能なものであり、破片資料は大半の報告を断念せざるを得なかった。石器も膨大な数にのぼり、未製品及び剥片を中心に図示を見送ったものが多数存在する。このことを前提に、本書を理解されるようお願いしたい。

なお、本書での個々の遺物の報告は、原則として本項末尾の一覧表によって行っている。その上で、特徴のある遺物や、まとまりが見られる遺物などについて本文で解説を行っている。したがって、本文に記載がなく一覧表にのみ掲載された遺物が大半であることを注意されたい。

土器の中に擬朝鮮系無文土器としたものがあるが、現実には弥生土器とほとんど区別がつかないものも含んでいる。本書では、口縁部の粘土帯の貼付け痕が明瞭に残り体部が丸みを帯びて膨らむ等の特徴をもって擬朝鮮系無文土器とした。朝鮮半島の無文土器との比較、当地での弥生土器化の過程と属性の検討を詳細に行った上で判定している訳ではない。

石器は、可能な限り推定される石材の産地を一覧表に記載した。石材産地は、サヌカイトが多久(佐賀県多久市)・多久以外(産地不明)を、黒曜石が腰岳(佐賀県伊万里市)・阿蘇(熊本県一の宮町)・姫島観音崎(大分県姫島村)・椎葉川(佐賀県埴野町)を、玄武岩が今山(福岡県福岡市)を想定して肉眼での観察で区分した。なお、姫島観音崎産の黒曜石は確認できなかった。また、柱状片刃石斧等に使用されている粘板岩は産地が全く特定できない。筑後市およびその近郊で見かけないものであることだけは確実なようである。(註1)

以下、出土した遺物毎に報告する。

2SK0300出土遺物 (Fig.47・Pla.101)

壺の資料のうち、3の外底面には刷瓦痕が2ヶ所認められる。10には外底面に爪によるものではないかと思われる瓦痕が2ヶ所認められる。16は壺であるが、口縁部外面を肥厚させている。壺・壺のいずれも、粘土の接合状況が観察できるものは内傾接合である。

2SK0302出土遺物 (Fig.49・Pla.101)

4は壺の口縁部であるが、口縁部の形状に特徴がある。口縁部の貼付け凸帯を薄く外方に引き延ばし、内面側も内側につまみ出している。その結果、口縁部の断面形状は鋸先状ともいえるものとなっている。もちろん、須久式に代表される鋸先状口縁とは趣が異なる。8と9は壺であるが、同一個体の可能性がある。11はI層出土の壺であるが、非常に器壁が薄いのが目をひく。16はII層出土の壺であるが、外面だけを見ると恰も如意形口縁かと思いがうものである。断面を観察すると、貼付け凸帯の下端を非常に滑らかに整形しているものであることが理解できる。17も同じくII層からの出土である。壺の口縁部に細かい刻目を施している。壺・壺のいずれも、粘土の接合状況が観察できるものは内傾接合である。

2SK0303出土遺物 (Fig.50・Pla.101)

11は壺であるが、2SK0302のもの4に近い断面形状を持つ。ただし、内側のつまみ出しは明瞭でない。5はII層出土の壺であるが、1と同様の器形である。粘土の接合状況が観察できるいずれの壺も、内傾接合である。

2SK0304出土遺物 (Fig.51・Pla.101)

7は壺の口縁部である。一見貼付け凸帯状に見えるが、口縁部できつく屈曲させて口縁端部に刻目を施している。

2SK0306出土遺物 (Fig.51・Pla.101・102・141)

8は半裁時に出土した壺であるが、大きくひらく口縁部が目をはく。外反した口縁部の端部を僅かに内湾させている。9は同じく半裁時に出土した壺の底部である。底部が張り出し、凸帯文土器の面影を残す。14はI層出土の壺であるが、口縁部が特徴的である。口縁部は一度外反させた上部を内側に折り返して肥厚させている。口縁部と胴部凸帯に浅い刻目を施す。15も半裁時に出土した壺であるが、如

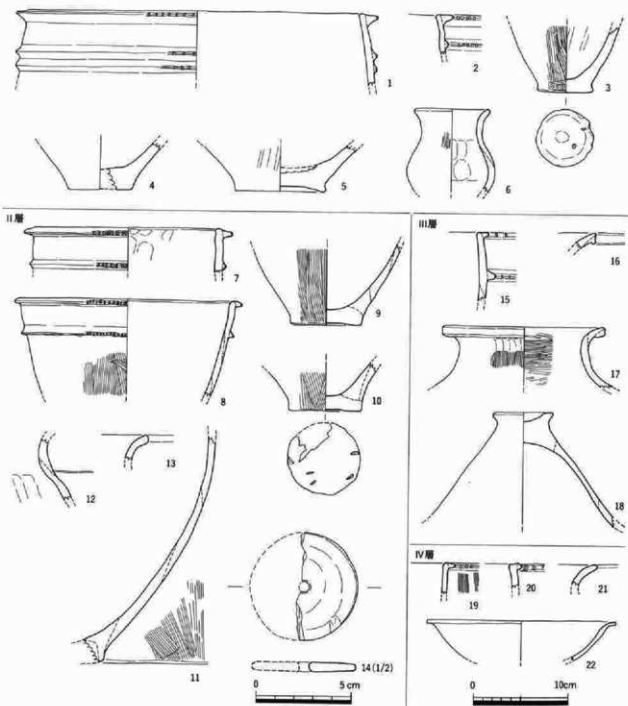


Fig.47 2SK0300出土遺物実測図 (1/4・1/2)

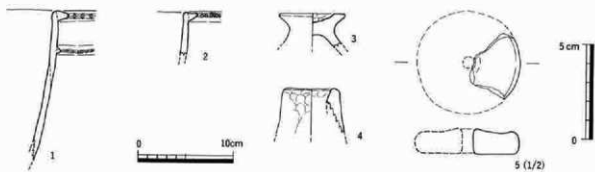


Fig.48 2SK0301出土遺物実測図 (1/4・1/2)

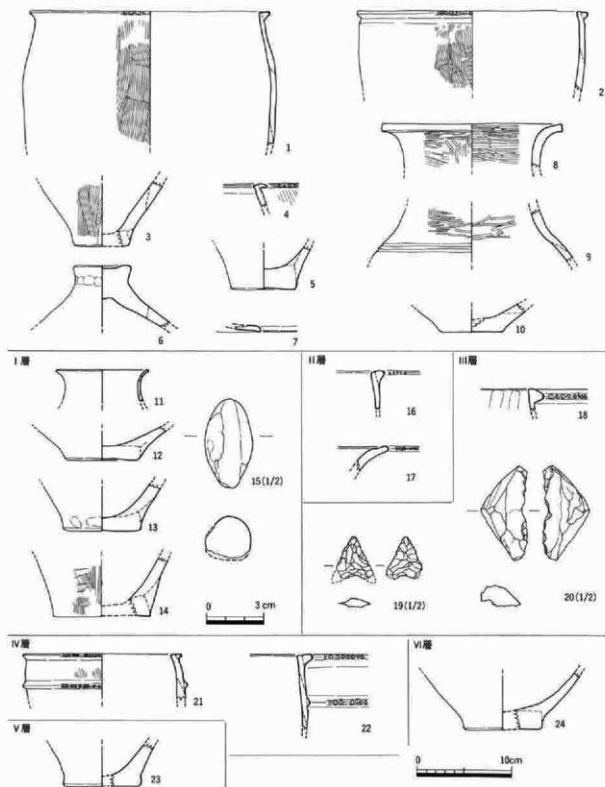


Fig.49 2SK0302出土遺物実測図 (1/4 · 1/2)

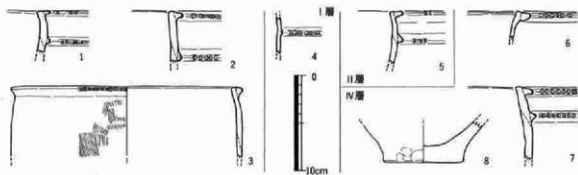
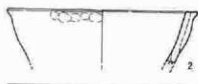
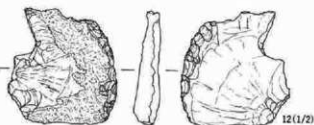
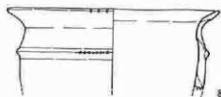


Fig.50 2SK0303出土遺物実測図 (1/4)

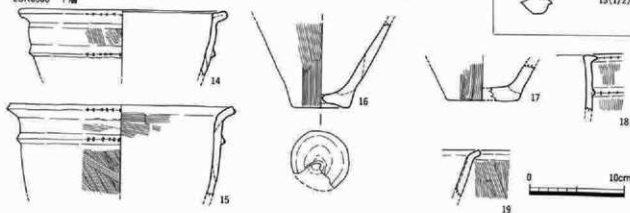
2SK0304



2SK0306



2SK0306 I層



2SK0306 II層

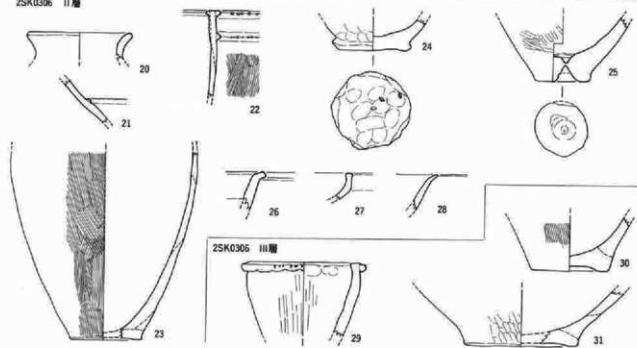


Fig.51 2SK0304・2SK0306出土遺物実測図 (1/4・1/2)

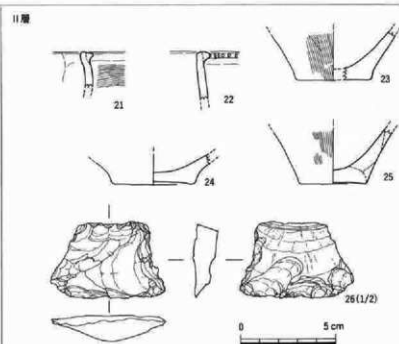
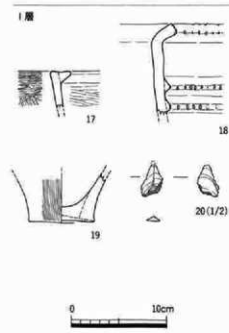
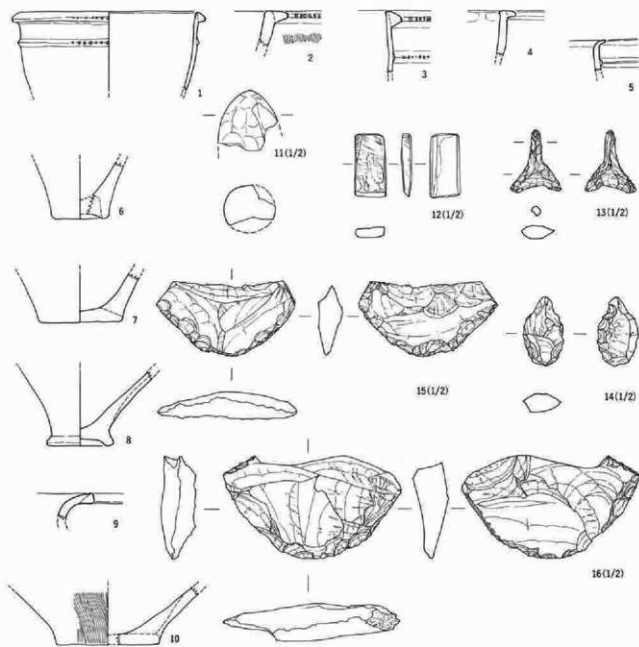


Fig.52 2SK0307出土遺物実測図① (1/4・1/2)

意形に外反した口縁端部の面下端に刻目を施す。板付Ⅱ式土器と同様の構造である。24はⅡ層出土の甕底部であるが、外底面に糊痕が2ないし3ヶ所認められる。中央に近い1ヶ所は判然とない。また、胴部への立ち上がり丸みが帯びており、擬朝鮮系無文土器かとも思われるが確証に欠く。29はⅡ層出土の擬朝鮮系無文土器と思われる資料である。土器の法量に比して器壁が厚い。口縁部は粘土紐を貼付けて凸帯とし、刻目を施すが、凸帯は粘土紐の形状をよく留めている。体部は口縁部直下で僅かに膨らみ、丸みを帯びる。甕・壺のいずれも、粘土の接合状況が観察できるものは内傾接合である。

2SK0307出土遺物 (Fig.52・53・Pla.102・141)

2は粘板岩を加工した偏平片刃石斧である。加工は丁寧で、刃部も体裁よくつくられている。27はⅢ層出土の甕である。口縁部は一見貼付け凸帯かと見まがうが、強く屈曲させて整形されている。胴部凸帯から上位が肥厚するが、粘土の貼り足しは見られず段甕とは成形技法が異なる。28はⅢ層出土の甕底部であるが、中実台をもつものである。甕・壺のいずれも、粘土の接合状況が観察できるものは内傾接合である。

2SK0309出土遺物 (Fig.54・55・Pla.102・141)

11はⅠ層出土の甕である。胴部に2条の凸帯が巡る。胴部凸帯から上位は粘土を貼り足して肥厚させるが、胴部凸帯から下位と器壁に大きな違いはみられない。構造上は段甕と同じであるが、形態的な面から通常の甕としたい。12はⅡ層出土の甕であるが、擬朝鮮系無文土器の可能性がある。口縁部凸帯は粘土紐の形状をよく留めている。16・17・20もⅣ層出土の甕であるが、擬朝鮮系無文土器と思われる。いずれも口縁部凸帯が粘土紐の形状をよく留めており、体部は口縁部直下で僅かに膨らんで丸みを帯びる。甕・壺のいずれも、粘土の接合状況が観察できるものは内傾接合である。32はⅤ層からの出土で、携帯用の砥石と思われる。

2SK0314出土遺物 (Fig.58・Pla.103)

26はⅠ層出土の壺である。短頸壺であるが、頸部から上位が非常に短く器形は無頸壺に近い。

2SK0316出土遺物 (Fig.60・Pla.103)

2は甕である。口縁部と胴部に各1条の凸帯を持つが、口縁部のものは貼付けであるか折曲げによるものか判然としない。体部上位の内面に工具痕が顕著である。甕・壺のいずれも、粘土の接合状況が観察できるものは内傾接合である。

2SK0317出土遺物 (Fig.61・Pla.103)

4は鉢体部の小片ではないかと思われるが、断面三角形の凸帯を円形に貼付けている。器面も丁寧にナデであり、縄文土器の精製品あるいは半精製品を思わせる仕上げである。

2SK0330出土遺物 (Fig.62・Pla.103・141)

4は甕であるが、底部に中実の台がつくものである。台と体部の接点は絞り込んであり、もっとも穿まった部分に三角凸帯が1条巡る。凸帯に刻目は認められない。粘土の接合は内傾接合である。7も4と同様の形状の甕底部の資料である。

2SK0331出土遺物 (Fig.63・Pla.104・141)

4は甕の口縁部であるが、胴部の凸帯が3条巡るものである。ただし、胴部凸帯の最上位のものは口縁部凸帯の下位のものとすべきかもしれない。12は壺である。法量からして、小型壺と組み合わせたものと推察される。口縁部近くに2つの穴が1組にして穿たれ、紐等を通してあったことが知れる。対辺を欠損しているため、穴が2組あったかどうかは判然としない。なお、穿孔は焼成前である。

2SK0332出土遺物 (Fig.64・Pla.104)

4は甕であるが、口縁部に特徴がある。ごく小さな鋸先状とでも表現すべき形状である。この類型は他の遺構では見当たらない。

2SK0334出土遺物 (Fig.65・Pla.104)

4は甕底部である。外底面に糊痕が1つ残る。5は擬朝鮮系無文土器である。口縁部に粘土紐の形状をよく留めた凸帯を有し、体部は膨らんで丸みを帯びる。口縁部直下の体部は粘土を貼付けて肥厚させ、段甕の成形技法に似る。

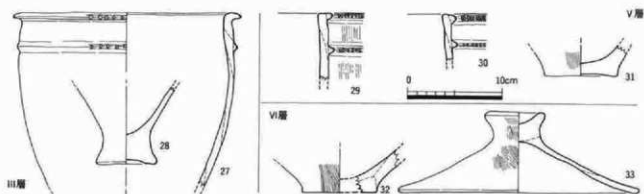


Fig.53 2SK0307出土遺物実測図② (1/4・1/2)

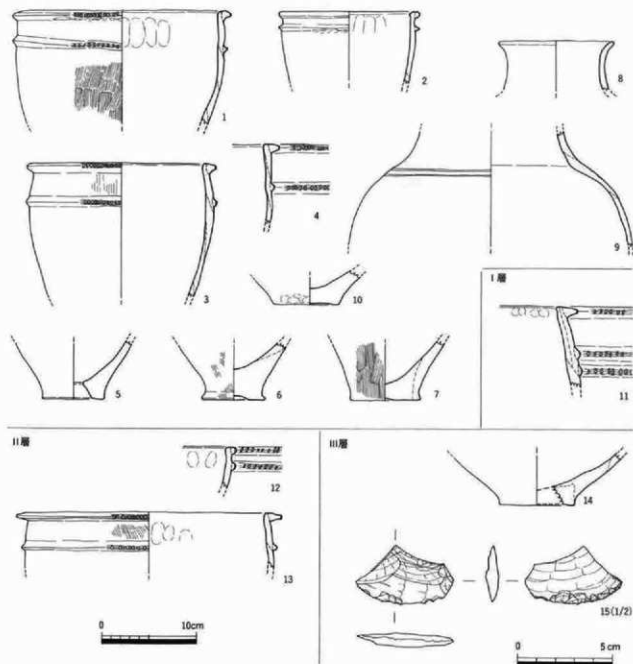
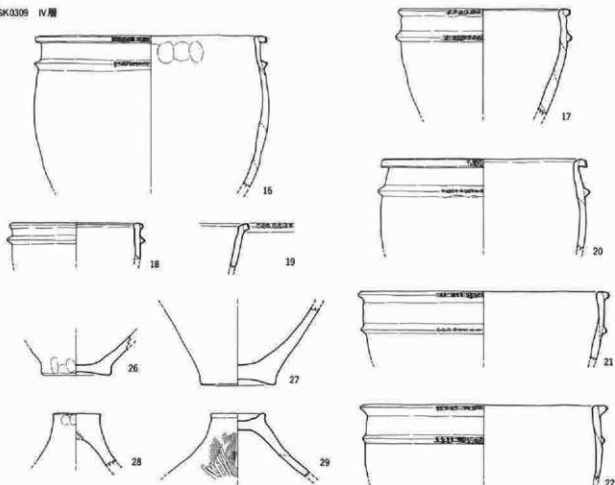


Fig.54 2SK0309出土遺物実測図① (1/4・1/2)

2SK0309 IV層



2SK0309 V層

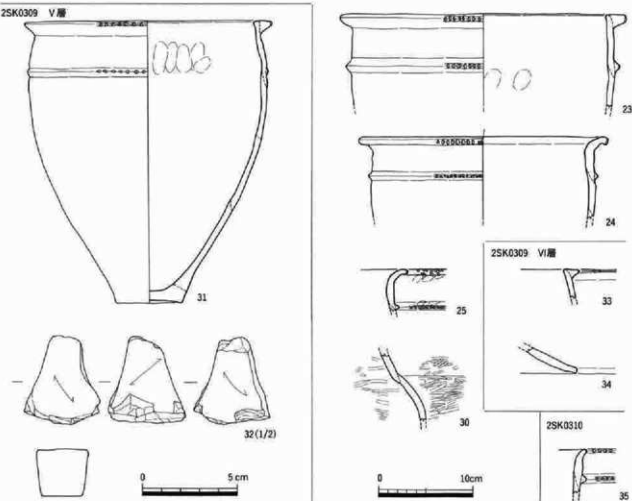
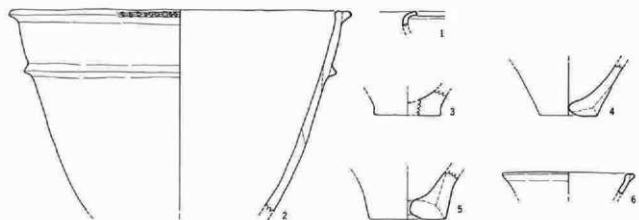


Fig.55 2SK0309出土遺物実測図②・2SK0310出土遺物実測図(1/4・1/2)



口層

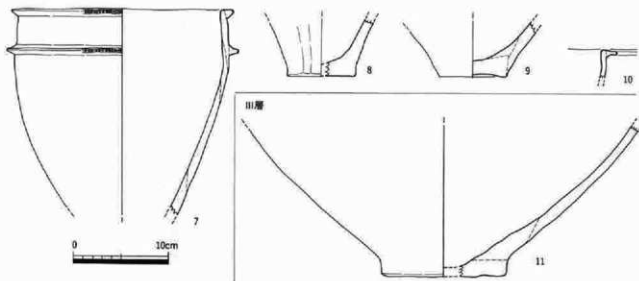


Fig.56 2SK0311出土遺物実測図 (1/4)

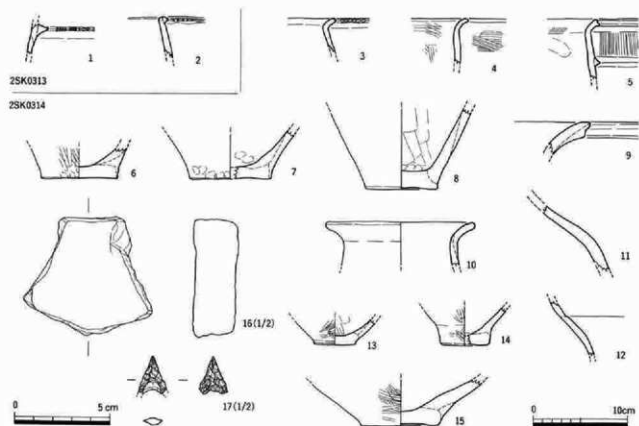


Fig.57 2SK0313出土遺物実測図 (1/4) ・2SK0314出土遺物実測図① (1/4・1/2)

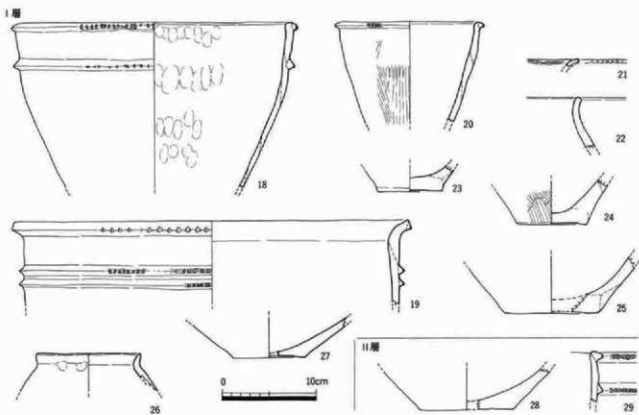


Fig.58 2SK0314出土遺物実測図② (1/4)

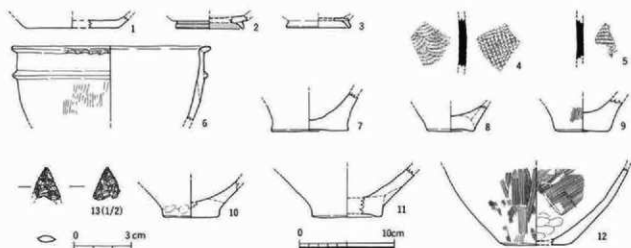


Fig.59 2SK0315出土遺物実測図 (1/4・1/2)

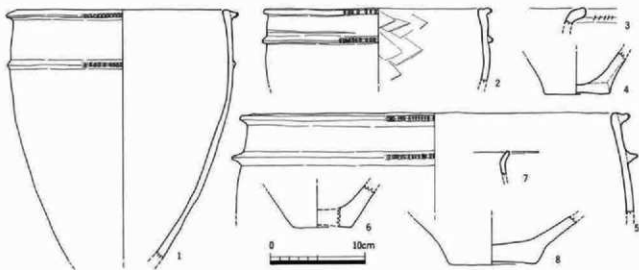


Fig.60 2SK0316出土遺物実測図 (1/4)

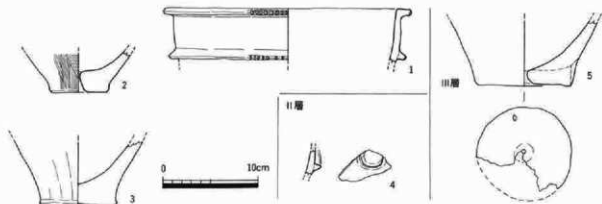


Fig.61 2SK0317出土遺物実測図 (1/4)

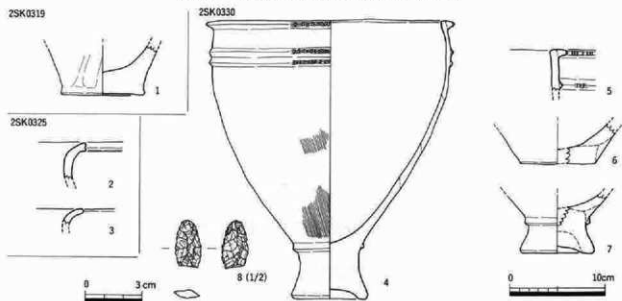


Fig.62 2SK0319・2SK0325・2SK0330出土遺物実測図 (1/4・1/2)

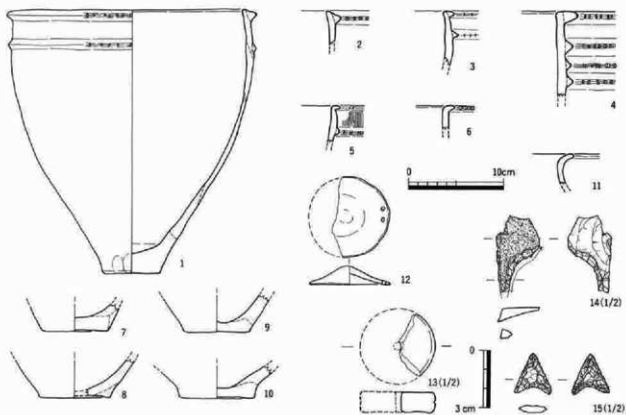


Fig.63 2SK0331出土遺物実測図 (1/4・1/2)

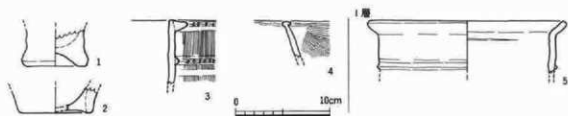


Fig.64 2SK0332出土遺物実測図 (1/4)

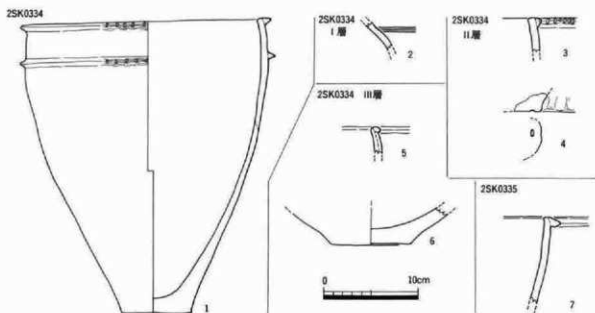


Fig.65 2SK0334・2SK0335出土遺物実測図 (1/4)

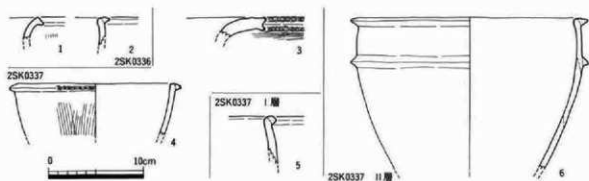


Fig.66 2SK0336・2SK0337出土遺物実測図 (1/4)

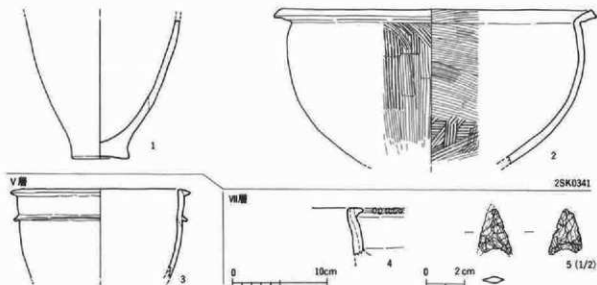


Fig.67 2SK0341出土遺物実測図 (1/4・1/2)

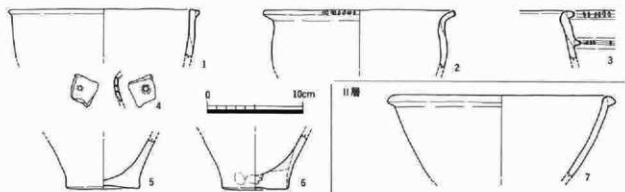


Fig.68 2SK0342出土遺物実測図 (1/4)

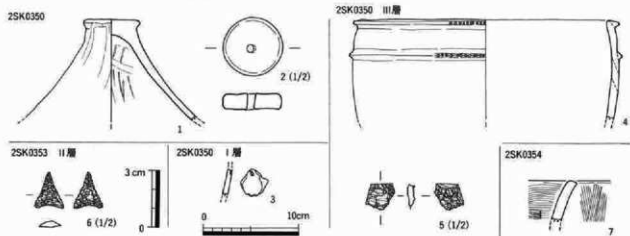


Fig.69 2SK0350・2SK0353・2SK0354出土遺物実測図 (1/4・1/2)

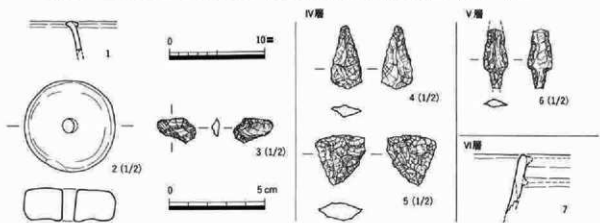


Fig.70 2SK0355出土遺物実測図 (1/4・1/2)

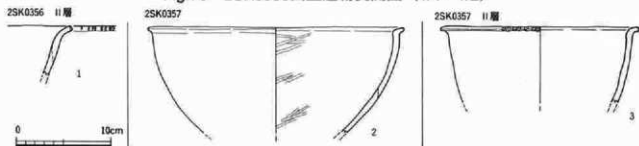


Fig.71 2SK0356・2SK0357出土遺物実測図 (1/4)



Fig.72 2SK0359出土遺物実測図 (1/4)

段臺の成形技法に似る。

2SK0337出土遺物 (Fig.66・Pl.104)

5は擬朝鮮系無文土器である。口縁部に粘土紐の形状をよく留めた凸帯を有し、体部は膨らんで丸みを帯びる。

2SK0350出土遺物 (Fig.69・Pl.105)

3は1層出土の甕体部である。外面に初圧痕が残る。

2SK0355出土遺物 (Fig.70・Pl.105・142)

1は甕の口縁部である。小さな鋸先状の形態をしている。体部は丸みを帯びて膨らんでいるようである。全面をナデ調整によっている。

2SK0357出土遺物 (Fig.77・Pl.106)

1は甕である。比較的大型のもので、口縁部と胴部に1条づつ貼付け凸帯が巡る。また、2条の凸帯の間には上弦形の凸帯を貼付けていて、3ヶ所に残存する。恐らくは等間隔で4ヶ所にあったと考えられる。すべての凸帯に刻目が施されている。東九州の下城式に、口縁部凸帯と胴部凸帯を縦に接続する刻目凸帯を持つものがあるが、本資料のように上弦形の刻目凸帯が貼り付くものは類例を知らない。特殊用途の土器か。

2SK0360出土遺物 (Fig.73・Pl.142)

2は靫型の石匙である。完形品と思われるが明確でない。多久産のササカイトを使用している。

2SK0360出土遺物 (Fig.76106)

5は磨製の扁平片刃石斧である。石材は泥岩で、丁寧に研磨している。7は小型の鉢である。手づくね風のつくりで、ミニチュアの範疇に入るかも知れない。

2SK0391出土遺物 (Fig.79・Pl.106・107)

1は甕であるが、直線的に開く体部を特徴とする。4は如意形口縁の甕であるが、口縁部下端に刻目を施しており板付Ⅱ式に共通する特徴を有する。6は小型の甕であるが、胴部最大径が胴部中央附近となっている。底部は円盤接合がみられ、形態的には古い要素が残る。外底面に初圧痕が1ヶ所認められる。7も小型の甕であるが、胴部最大径が6に比してやや上位にある。8は中型の甕で、体部外面には重弧文が施されている。

2SK0396出土遺物 (Fig.80・Pl.107)

1・2は口縁部に小さな刻目凸帯を貼付けた甕である。1は体部上部外面に粘土を貼り足して肥厚させていて、断面構造は段臺に似る。5は大型の甕である。口縁部の外面に粘土を貼付けて肥厚させていて、形態的には古い要素が見られる。

2SK0399出土遺物 (Fig.81・Pl.107)

4は甕の底部である。外底面に初圧痕が1ヶ所認められる。

2SK0402出土遺物 (Fig.82・Pl.107・108・142)

3・5は甕であるが、体部内面に工具痕が明確に認められる。

2SK0405出土遺物 (Fig.83・Pl.108・142)

4は甕である。頸部が大きく内傾し、口縁部は大きく外反する。6は甕である。口縁部と胴部に凸帯が1条づつ巡るが、口縁部凸帯の接合技法に特徴がある。外面の最上位に貼付けた後、口縁部端の上面に被せるように粘土を引き延ばして接合させている。8も甕であるが、体部の上位内面に粘土を貼り足している。この遺構から出土した甕・甕の内、粘土の接合状況が確認できるものは全て内傾接合であった。

2SK0418出土遺物 (Fig.85・Pl.109・143)

1は1層出土の須恵器甕である。頸部から上位は全て打ち欠かされている。4・5はいずれもⅡ層出土の土師器の小型丸底甕であるが、口縁部が打ち欠かされている。さらに5は、未貫通ながら体部も穿孔しよとした跡が認められる。なお、4は手づくね風の外観を呈する。

2SK0423出土遺物 (Fig.87・88・89・Pl.109・110・143・160)

2は甕であるが、直線的に開く体部を特徴とする。6は粘板甕を加工した柱状片刃石斧の細片ではないかと思われる。この石材は、筑後市近郊では見かけないものである。20・21は、ともにV層出土の甕底

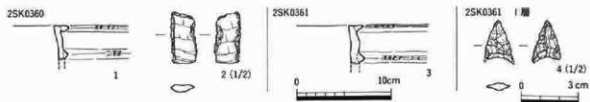


Fig.73 2SK0360・2SK0361出土遺物実測図 (1/4・1/2)

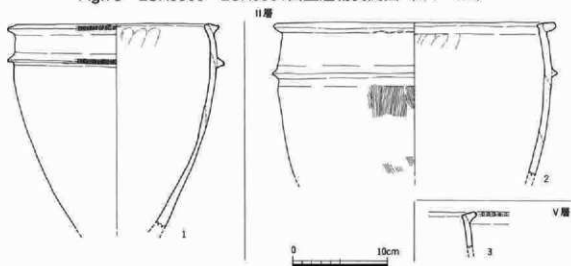


Fig.74 2SK0363出土遺物実測図 (1/4)

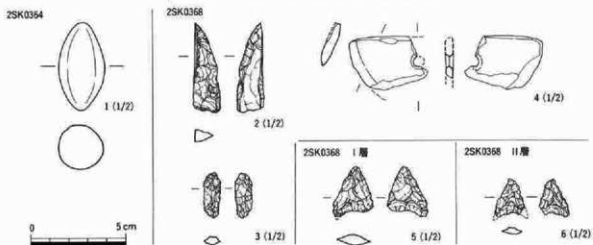


Fig.75 2SK0364・2SK0368出土遺物実測図 (1/4・1/2)

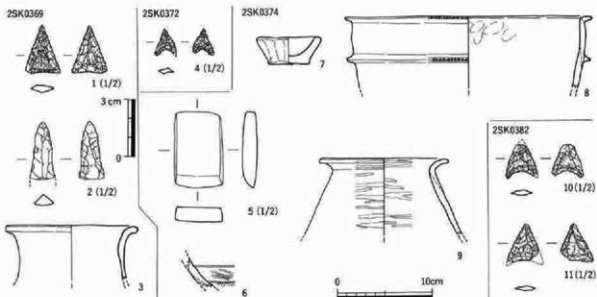


Fig.76 2SK0369・2SK0372・2SK0374・2SK0382出土遺物実測図 (1/4・1/2)

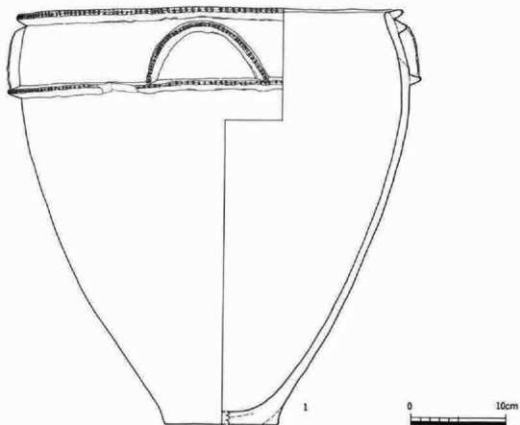


Fig.77 2SK0357出土遺物実測図 (1/4)

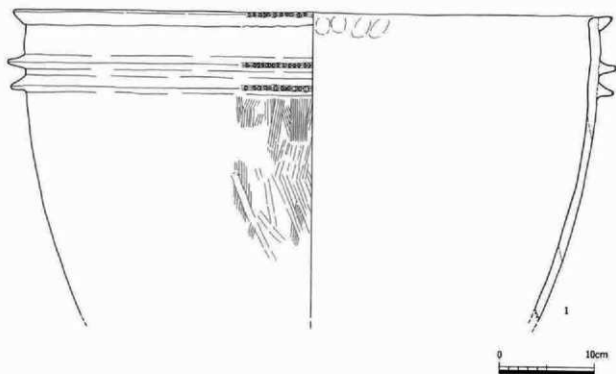


Fig.78 2SK0439出土遺物実測図① (1/4)

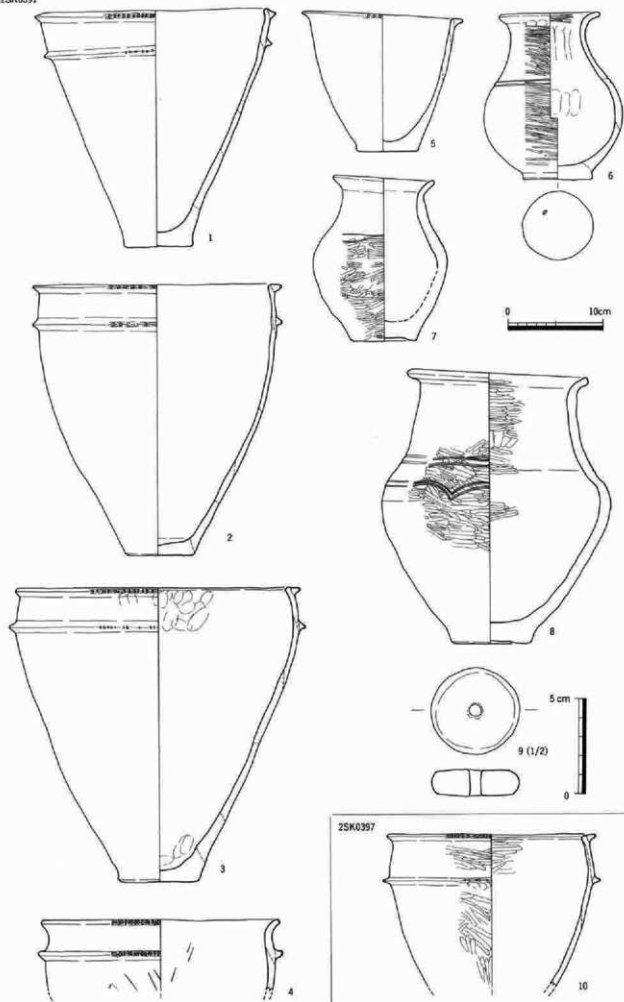


Fig.79 2SK0391・2SK0397出土遺物実測図 (1/4・1/2)

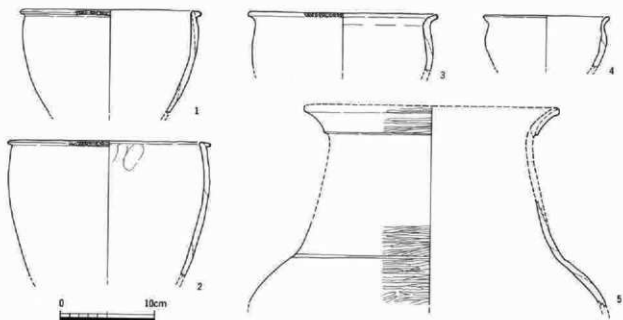


Fig.80 2SK0396出土遺物実測図 (1/4)

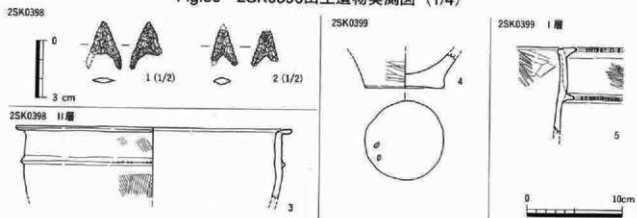


Fig.81 2SK0398・2SK0399出土遺物実測図 (1/4・1/2)

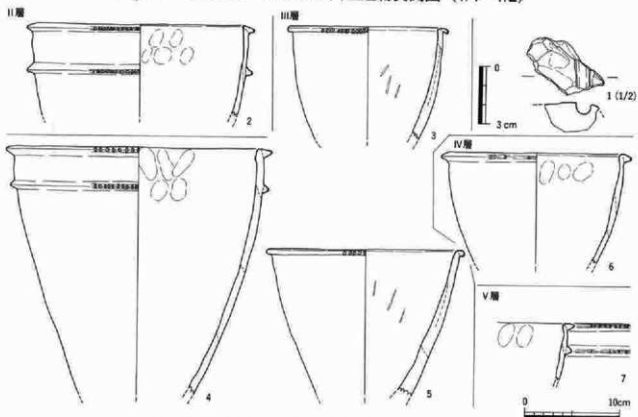


Fig.82 2SK00402出土遺物実測図 (1/4・1/2)

2SK0405

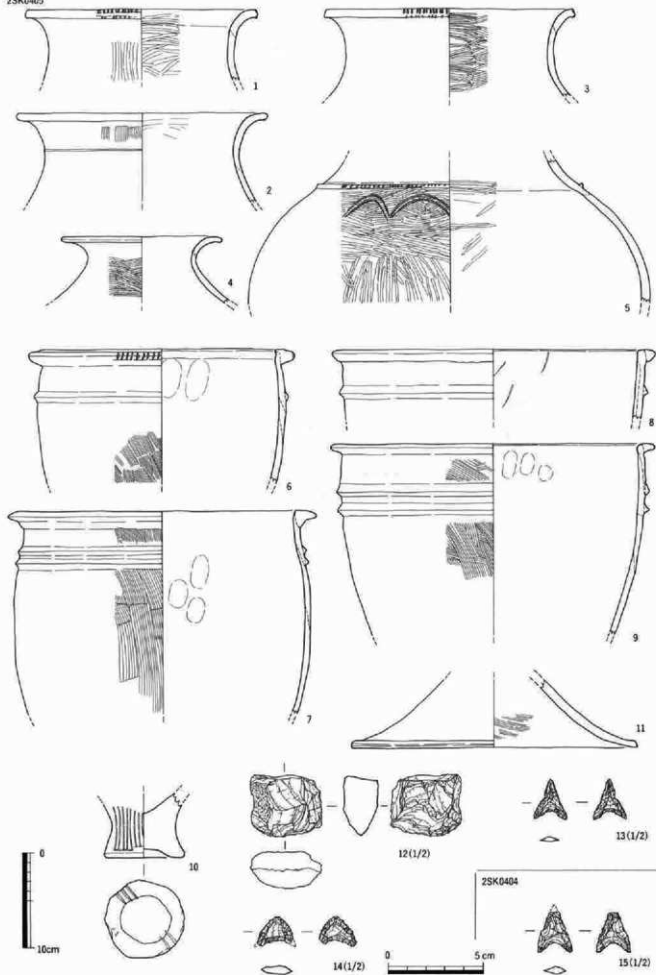
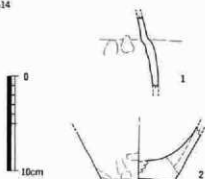


Fig.83 2SK0404・2SK0405出土遺物実測図 (1/4・1/2)

2SK0414



2SK0416

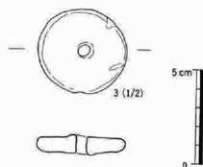


Fig.84 2SK0414・2SK0416出土遺物実測図(1/4・1/2)

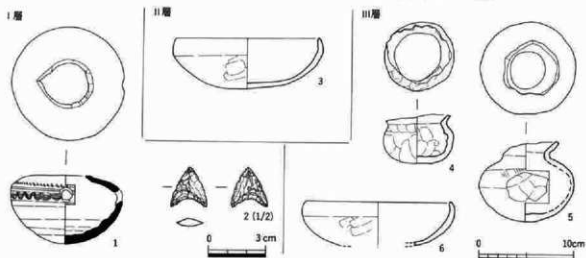
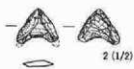


Fig.85 2SK0418出土遺物実測図(1/4・1/2)

2SK0420



2SK0422



Fig.86 2SK0420・2SK0422出土遺物実測図(1/4・1/2)

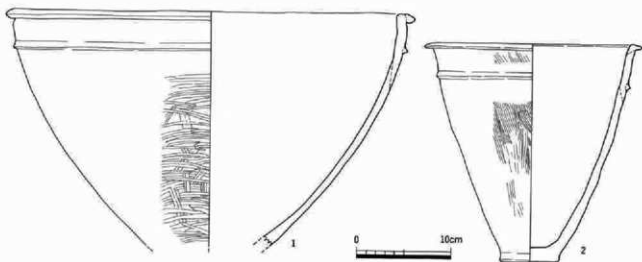


Fig.87 2SK0423出土遺物実測図①(1/4)

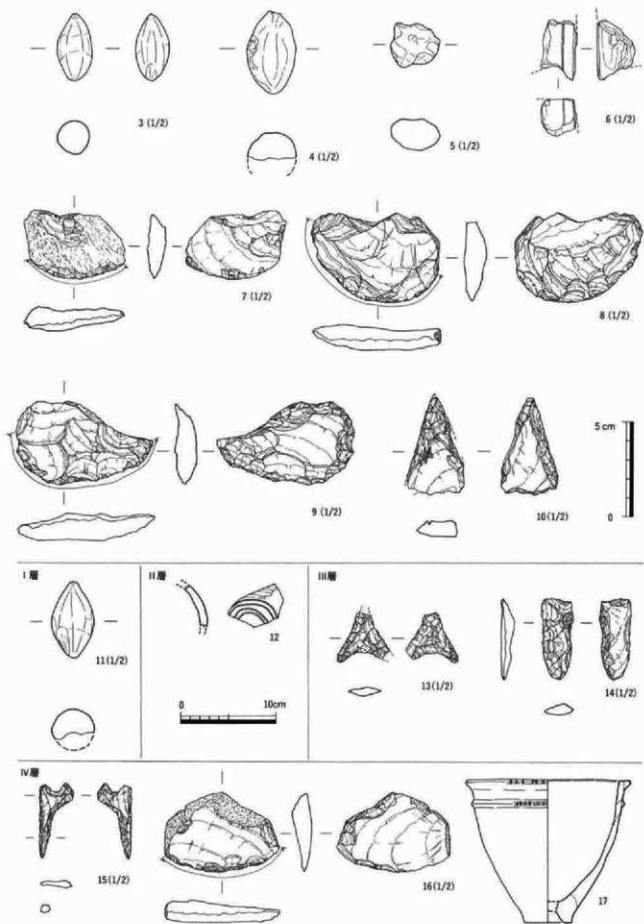


Fig.88 2SK0423出土遺物実測図② (1/2・1/4)

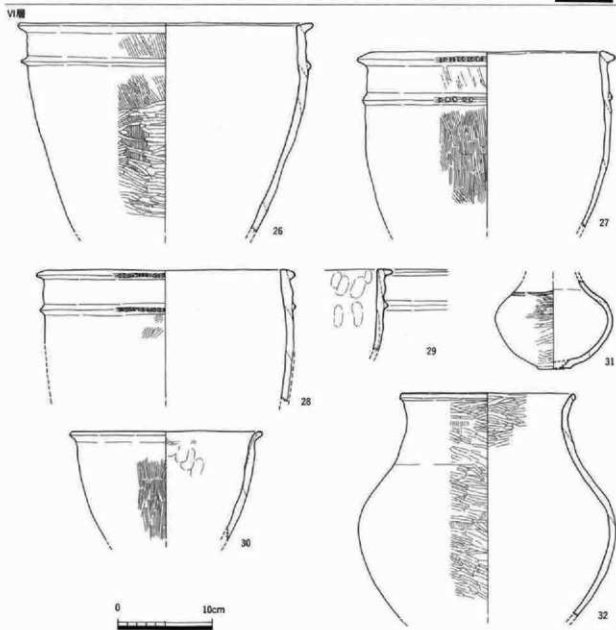
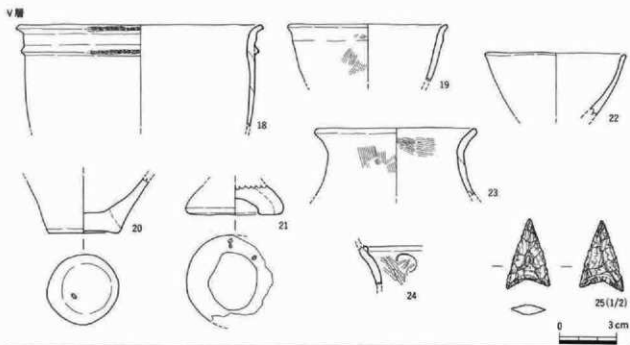


Fig.89 2SK0423出土遺物実測図③ (1/4・1/2)

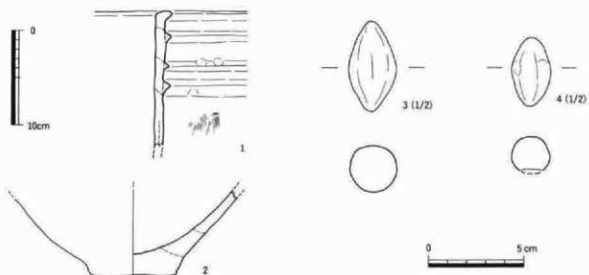


Fig.90 2SK0424出土遺物実測図 (1/4・1/2)

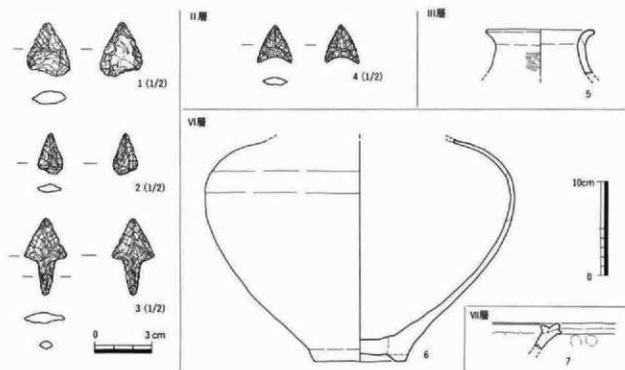


Fig.91 2SK0426出土遺物実測図 (1/4・1/2)

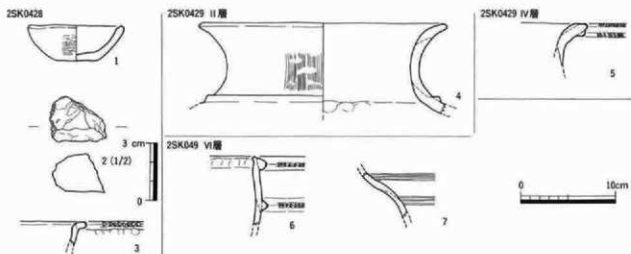


Fig.92 2SK0428・2SK0429出土遺物実測図 (1/4・1/2)

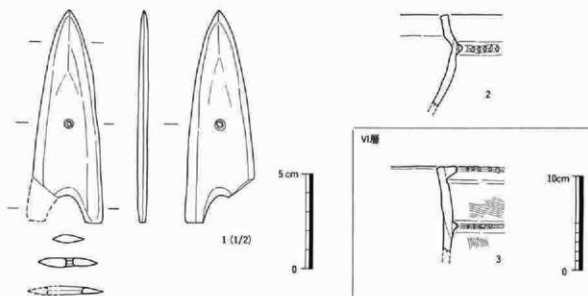


Fig.93 2SK0431出土遺物実測図 (1/2・1/4)

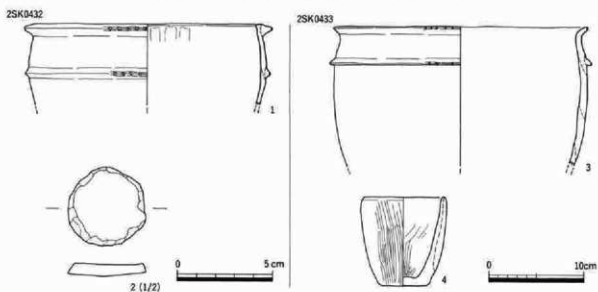


Fig.94 2SK0432・2SK0433出土遺物実測図 (1/4・1/2)

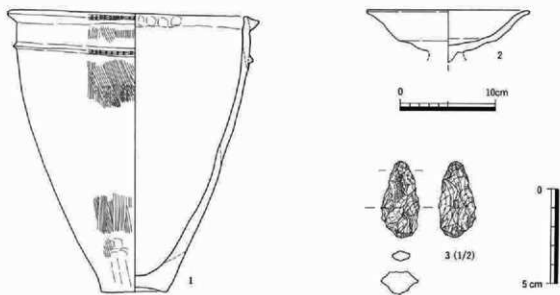


Fig.95 2SK0434出土遺物実測図① (1/4・1/2)

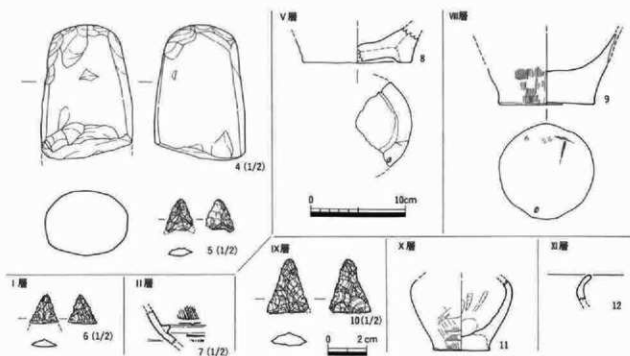


Fig.96 2SK0434出土遺物実測図② (1/2・1/4)

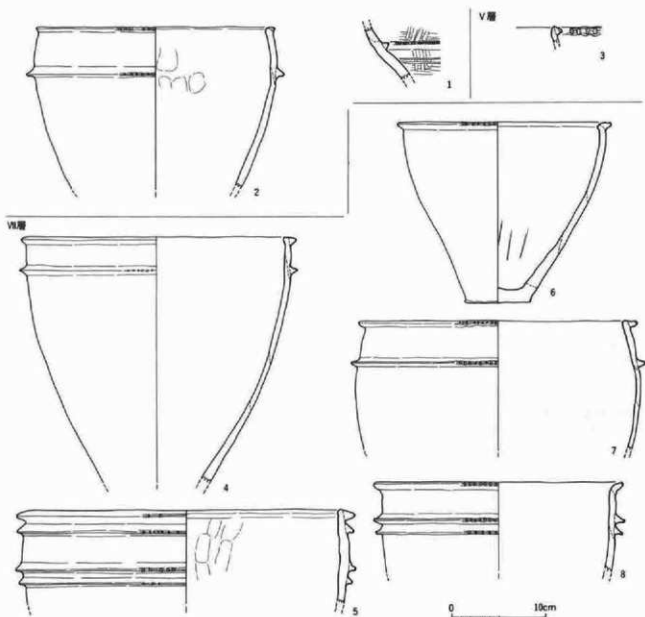


Fig.97 2SK0435出土遺物実測図① (1/4)

部であるが、外底部に初圧痕が認められる。20は1ヶ所、21は明瞭なものの2ヶ所と不明瞭なもの1ヶ所がある。31はVI層出土の小型の壺であるが、胴部最大径が胴部の中程にある類型である。比較的古い形態を残しているといえる。この遺構から出土した壺・甕のうち、粘土の接合状況が確認できるものは全て内傾接合であった。

2SK0431出土遺物 (Fig.93・Pla.111・156)

1は大型の磨製石鏃である。秀逸な製品であるが、片脚を欠損している。2は凸帯文土器の甕である。胴部での屈曲が明瞭であるが、口縁部の刻目凸帯を省略している。

2SK0433出土遺物 (Fig.94・Pla.111)

4は小型の甕である。非常に簡潔な器形をしていて、凸帯や刻目は一切施されない。

2SK0434出土遺物 (Fig.95・96・Pla.111・143)

7は甕である。頸部下に細かい斜格子文を施している。8・9は甕の底部である。それぞれに1ヶ所ずつ初圧痕が認められる。

2SK0435出土遺物 (Fig.97・98・Pla.112)

2は半載時出土の甕である。口縁部と胴部に1条ずつ刻目凸帯を巡らす。口縁部の凸帯が非常に小さいのが特徴的である。3はV層出土の凸帯文土器の甕である。比較的深い刻目が印象的である。5はVI層出土の甕であるが、口縁部と胴部に2条ずつ刻目凸帯を巡るものである。6もVI層出土の甕であるが、内湾する口縁部に刻目凸帯を貼付けた形態が目をはく。内面下位には工具痕も残る。9はVII層からの出土で、ここでは甕としか、鉢とすべきかもしれない。15はX層出土の甕であるが、この遺構から出土した弥生土器のうち、唯一外傾接合によるものである。ただし、器形は内傾接合の甕と大差ない。15以外の弥生土器で粘土の接合状況が確認できたものは、例外なく内傾接合であった。

2SK0436出土遺物 (Fig.99・Pla.112・113・157・162)

1は玄武岩製の磨製石斧である。刃部は鋭利ではなく、丸みを帯びている。比較的柔らかい樹木の伐採用か。2・3は甕であるが、いずれも口縁部外面に粘土を貼り足している。しかし、肥厚させる意識に乏しく、外見上は新しい類型と同様の器形である。

2SK0437出土遺物 (Fig.100・Pla.113・143)

1は小型の甕であろう。内湾する口縁部に刻目を施している。体部外面には下弦形の重弧文と思しき施文がある。現存で2単位認められる。2は甕であろうが、鉢かもしれない。胴部凸帯の処で大きく屈曲し、その上位を粘土貼り足して肥厚させる段差様のものである。口縁部と胴部の凸帯は、ともに刻目を施さないものである。5は小型の甕で、外反させた口縁部端部に刻目を施す。外底面には初圧痕が1ヶ所残る。6は甕である。極めて短い頸部を強く外反させる。頸部からやや下がった体部外面に凸帯を1条貼付ける。8は把手である。ここでは体部側面に取り付けたちで図化した。口縁部に上から取り付くものかもしれない。その場合、総遠風双耳把手付銅復型深鉢の把手部分と考えて良いのではなかろうか。

2SK0438出土遺物 (Fig.101・Pla.113・114・143・144)

2は半載時出土の段甕で、丸みの強い器形が印象的である。胴部の凸帯状の部分から上位は、外側に粘土を貼り足して肥厚させている。胴部の凸帯状の部分は、段甕の特徴たる段の部分強くつまみ出すことで表現されている。胴部に凸帯を貼り足さず、粘土貼り足しの肥厚によって形成される段に直接刻目を施すという手法は、典型的な段甕の構造と一致する。内面には工具ナデの痕跡が比較的明瞭に残っている。5は半載時出土の甕である。頸部から上位と胴部以下は接合しないが、同一個体と判断して図上で復元した。肩部に鋸歯文を施す。また、口縁部は外面側に粘土を貼り足して肥厚させており、比較的古相を示すが、粘土肥厚によって形成されるべき段は不明瞭となり、胴部最大径もやや上位に移っている印象がある。10はIV層出土の甕である。一見凸帯文土器の甕のうち最も新しい類型を思わせる器形をしているが、やや丸みを帯びた器形と内傾接合をもって、弥生土器と判断した。胴部凸帯部分での屈曲は凸帯文土器のそれを彷彿させる。この遺構出土の土器で粘土の接合状況が確認できたものは、例外なく内傾接合であった。

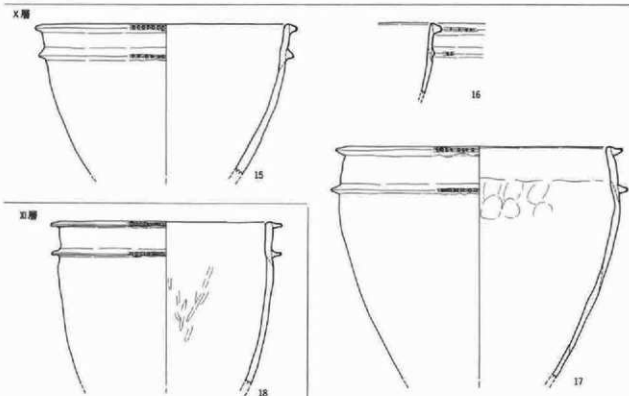
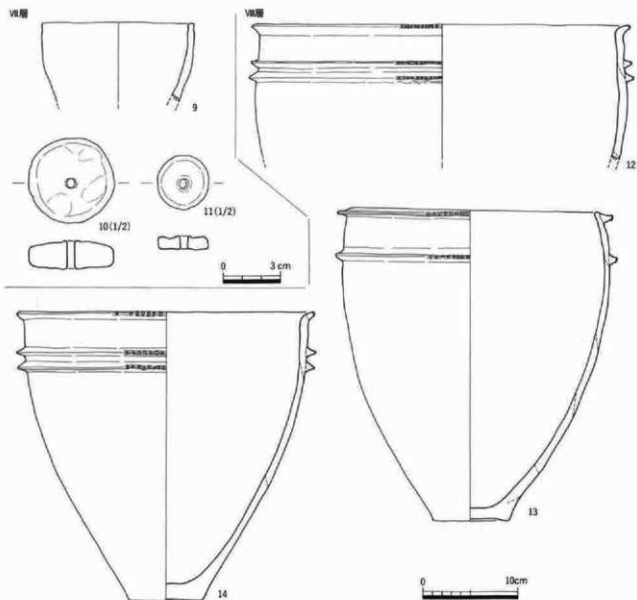


Fig.98 2SK0435出土遺物実測図② (1/4・1/2)

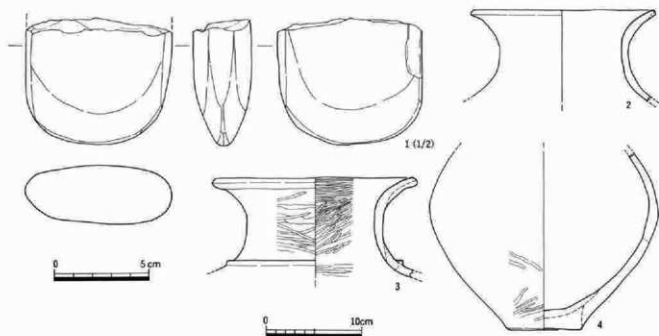


Fig.99 2SK0436出土遺物実測図 (1/2・1/4)

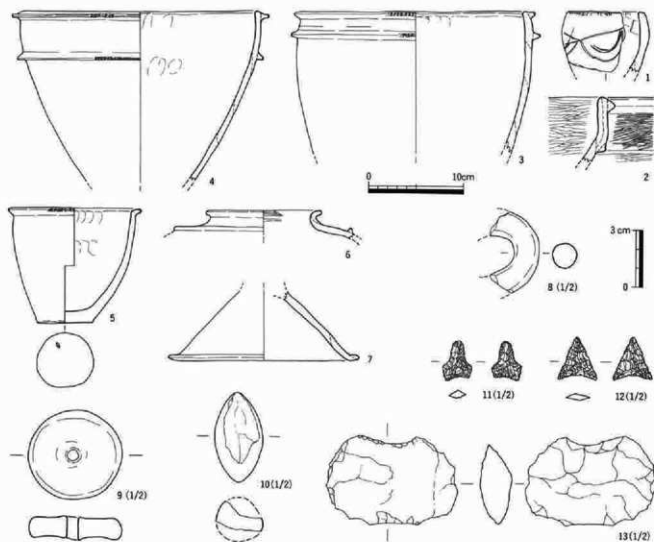


Fig.100 2SK0437出土遺物実測図 (1/4・1/2)

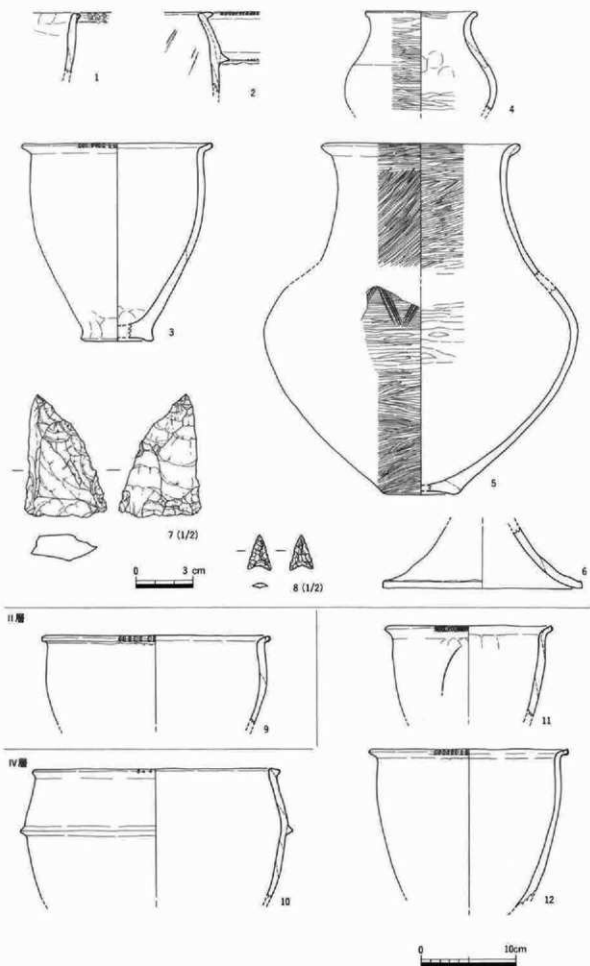


Fig.101 2SK0438出土遺物実測図 (1/4・1/2)

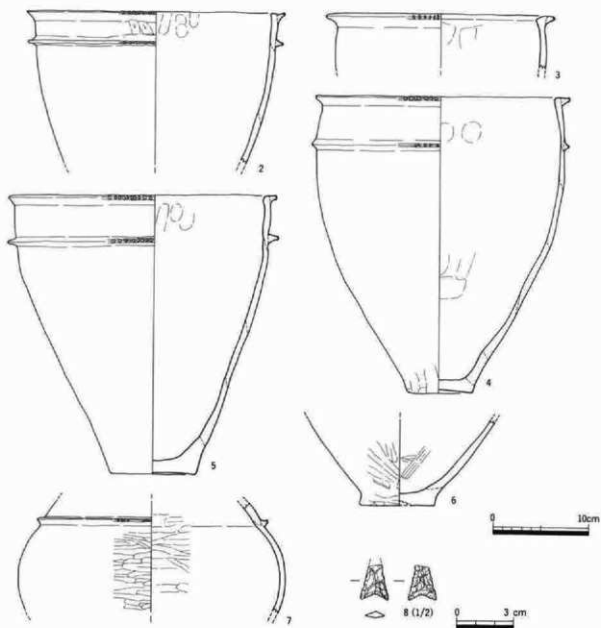


Fig.102 2SK0439出土遺物実測図② (1/4・1/2)

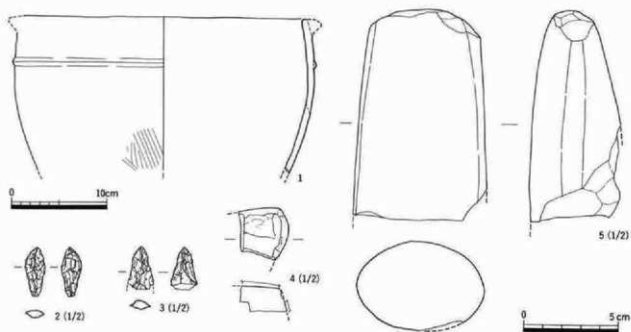


Fig.103 2SK0440出土遺物実測図① (1/4・1/2)

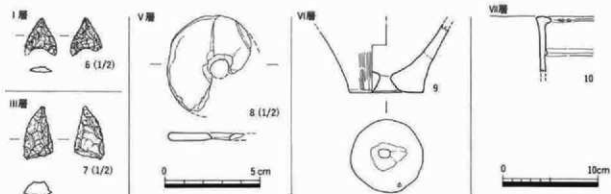


Fig.104 2SK0440出土遺物実測図② (1/2・1/4)

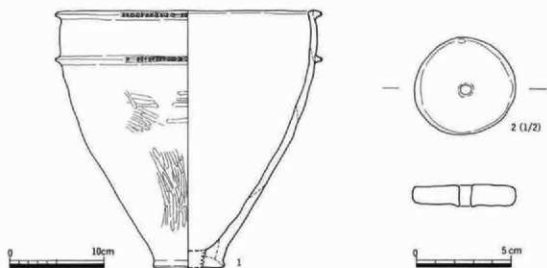


Fig.105 2SK0441出土遺物実測図 (1/4・1/2)

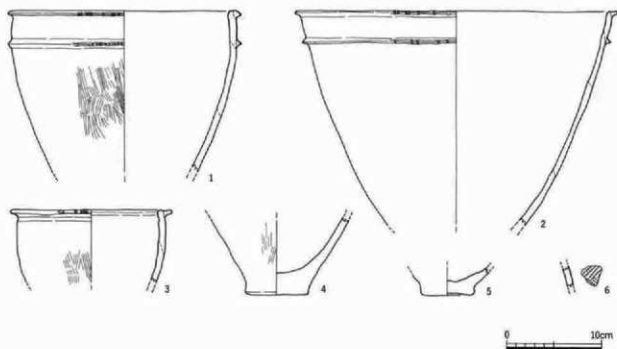


Fig.106 2SK0445出土遺物実測図 (1/4)

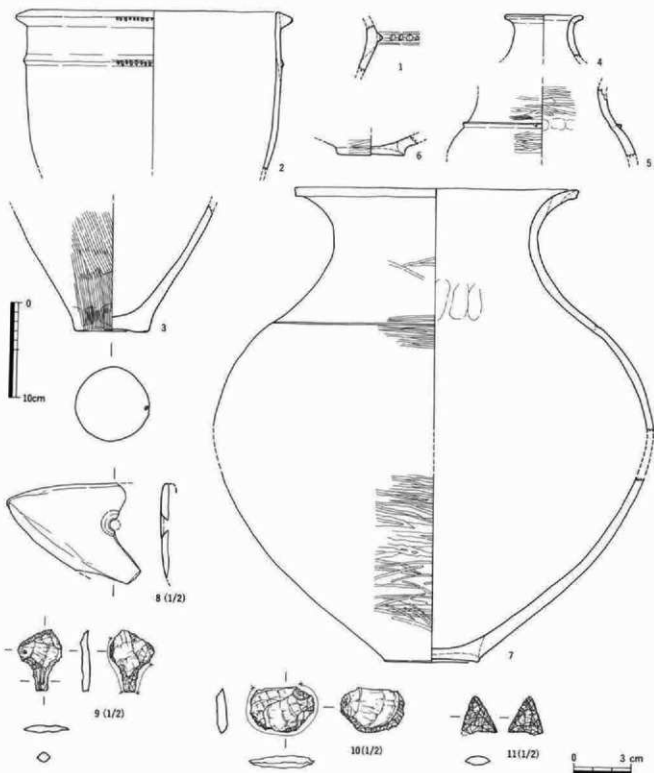


Fig.107 2SK0448出土遺物実測図 (1/4・1/2)

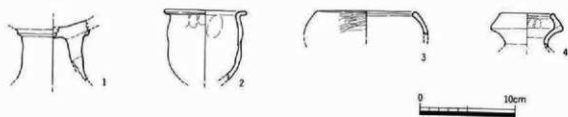


Fig.108 2SK0451出土遺物実測図① (1/4)

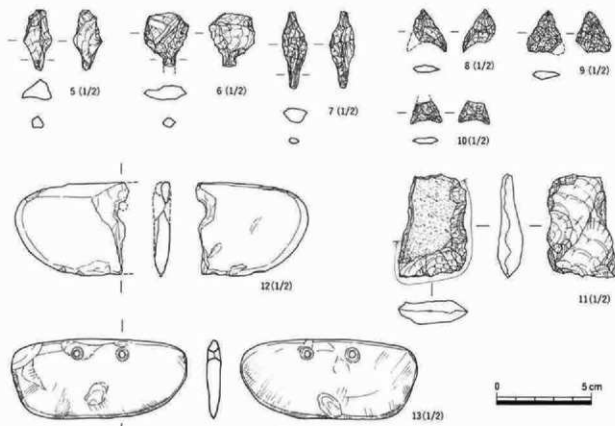


Fig.109 2SK0451出土遺物実測図② (1/2)

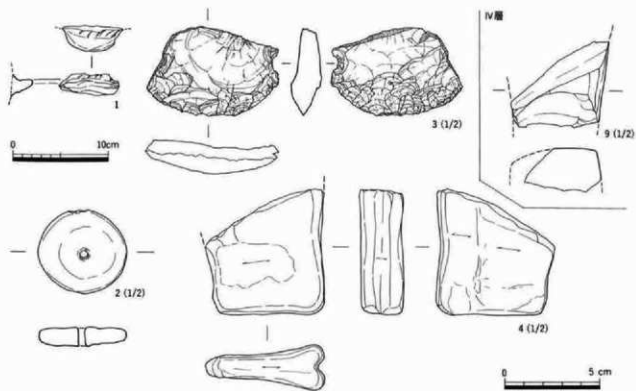


Fig.110 2SK0453出土遺物実測図① (1/2・1/4)

なく内傾接合であった。

2SK0439出土遺物 (Fig.78・102・Pla.106・114・144)

7は壺である。胴部の最大径が胴部中位にあり、やや古相を呈する資料である。

2SK0445出土遺物 (Fig.106・Pla.114)

6は壺の体部小片である。外面に羽状文を施している。施文原体は貝殻かと思われるが、木製の篋状工具かもしれない。

2SK0448出土遺物 (Fig.107・Pla.114・115・144)

1は凸帯文土器の甕胴部である。屈曲部には刻目凸帯を貼付け、粘土の接合は明瞭な外傾接合である。器面の仕上げは丁寧である。3は甕である。外底面に初圧痕を1ヶ所認める。

2SK0451出土遺物 (Fig.108・109・Pla.115・144)

2は小型の甕である。やや壺の器形に近く、変容壺を意識したのかもしれないが詳細は不明である。粘土の接合も外傾接合となっている。12は結晶片岩製の石包丁である。両刃と思われるが未製品かもしれない。13は粘板岩製の石包丁である。刃部は両刃で片面に殺痕が2ヶ所認められる。

2SK0453出土遺物 (Fig.110・111・Pla.115・116・145・159・160)

1はつまみか。擬朝鮮系無文土器にみられる牛角状突起の退化したものかもしれない。9は粘板岩製の柱状片刃石斧である。他遺構出土の柱状片刃石斧同様、筑後市近郊で見かけない石材である。5と6はⅡ層出土の甕である。口縁部から胴部上位まで外側に粘土を貼り足している。しかし、2例とも肥厚は充分でなく、形態的には段壺と認められない。5は粘土の接合が外傾接合である。12はⅢ層出土の甕であるが、外底面に初圧痕が1ヶ所見られる。13はⅢ層出土の甕である。頸部と胴部の屈曲が殆ど失われている。一方、口縁部は外面に粘土を貼り足して肥厚させるなど古い要素が見られる。15はⅣ層出土の甕であるが、一見したところ段壺のように感じられた。しかし、粘土の貼り足しは見られないので、判断に迷うところである。16はⅣ層出土の甕底部である。外底面に初圧痕が1ヶ所残る。16はⅣ層出土の甕底部である。外底面に初圧痕を1ヶ所認める。17はⅣ層出土の甕である。口縁部外面に粘土を貼り足して肥厚させており、且つ頸部と胴部の接合部分の内外面には比較的明瞭な段が認められる。18もⅣ層出土の甕であるが、肩の張りが強い器形が目をはく。底部は円盤接合で外面調整は丁寧なナデである。17・18ともに比較的古相を示す。5以外で粘土の接合が確認できたものは、すべて内傾接合である。

2SK0457出土遺物 (Fig.112・Pla.116)

1は甕である。外面は工具ナデによっており、所謂擦過といわれる調整を施しているようである。外底面には初圧痕が1ヶ所残る。

2SK0461出土遺物 (Fig.112・Pla.145)

3はサヌカイト製の釣針としたが、石刃かもしれない。釣針の場合、組み合わせ式の結合型になるか。

2SK0480出土遺物 (Fig.112・Pla.116)

6は甕である。口縁部は小さな鋸状となり、胴部の丸みも強く感じられる。粘土の接合は内傾接合である。胴部にも刻目凸帯を貼り付けている。粘土の接合は内傾接合である。

2SK0485出土遺物 (Fig.113・Pla.116)

1は甕である。一覧表では胴部凸帯が2条あるとしたが、口縁部凸帯と胴部凸帯の間にもう1条の凸帯があるとしたほうが適切かもしれない。粘土の接合は内傾接合である。

2SK0507出土遺物 (Fig.117・Pla.117・160)

4は柱状片刃石斧である。柄の部分が残存している。石材は粘板岩であるが、筑後市近郊では見かけない石材である。

2SK0510出土遺物 (Fig.118・Pla.145)

1は玄武岩製の甕である。磨製石斧等の破砕品からの再加工品ではなからうか。未製品かもしれない。

2SK0524出土遺物 (Fig.119・120・Pla.117・145)

13・14はⅣ-12層出土の甕底部である。ともに外底面に初圧痕が1ヶ所認められる。

2SK0525出土遺物 (Fig.121・Pla.117)

10はⅣ層出土の甕である。口縁部は外面に粘土を貼り足し肥厚させている。一方、頸部と胴部の粘土

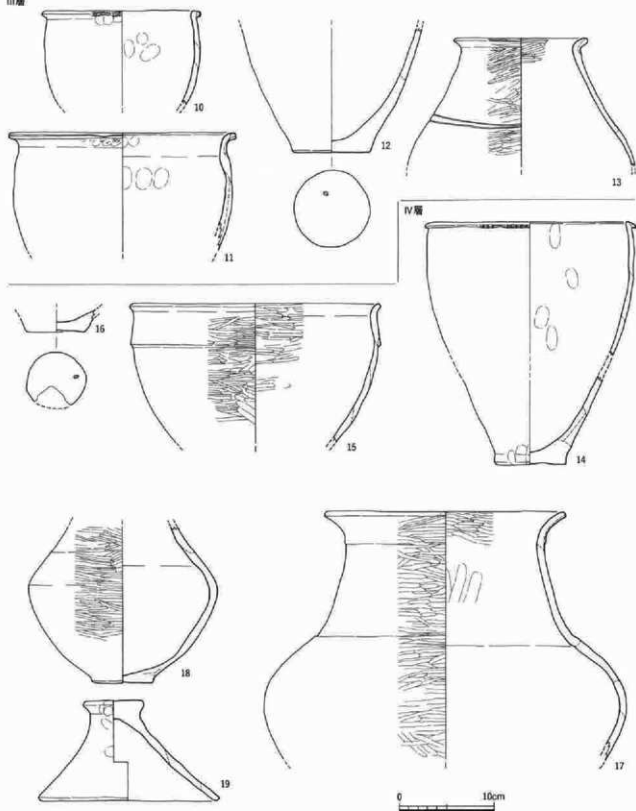


Fig.111 2SK0453出土遺物実測図② (1/4)

接合による段は外面側は明瞭であるものの、内面側はやや不明瞭である。古相と新相が併存する。

2SK0540出土遺物 (Fig.123・Pl.118・146)

8は壺である。この遺構出土の遺物の中では唯一時期の異なるものであるが、2SK0502に切られており、大半がその下層にあたるため、混入した可能性が高い。13は泥岩製の石包丁である。刃部は典型的な両刃偏刃で、片面に殺痕が認められる。土器はすべて内傾接合である。

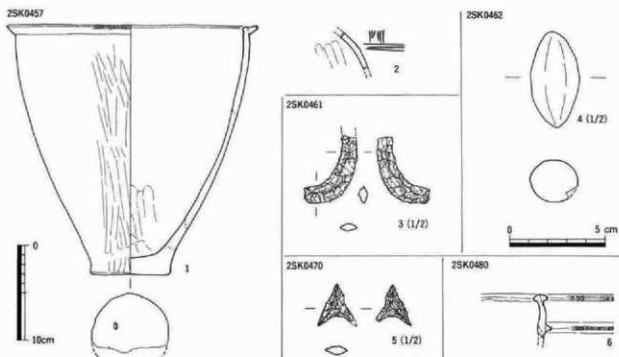


Fig.112 2SK0457・2SK0461・2SK0462・2SK0470・2SK0480
出土遺物実測図 (1/4・1/2)

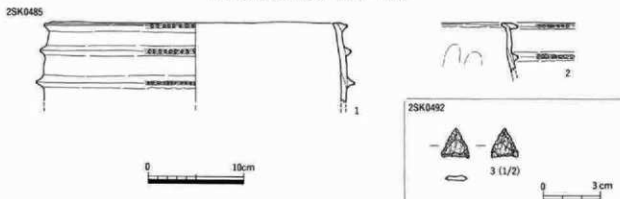


Fig.113 2SK0485・2SK0492出土遺物実測図 (1/4・1/2)

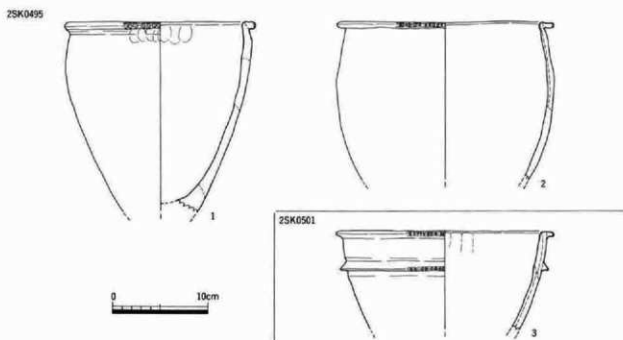


Fig.114 2SK0495・2SK0501出土遺物実測図 (1/4)

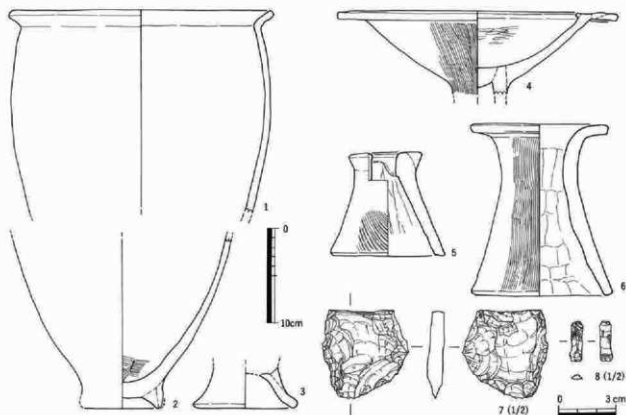


Fig.115 2SK0502出土遺物実測図 (1/4・1/2)

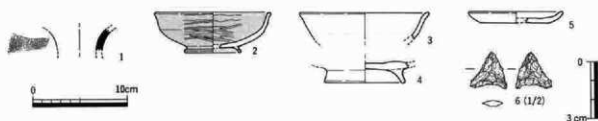


Fig.116 2SK0506出土遺物実測図 (1/4・1/2)

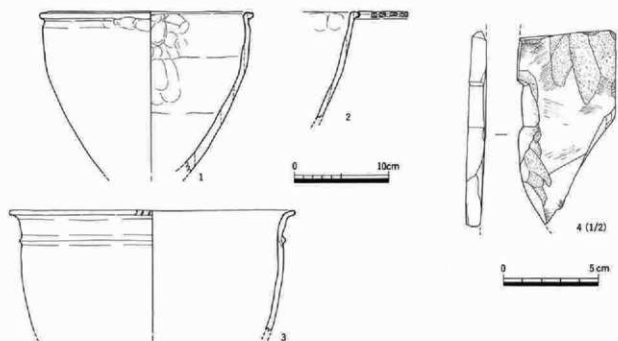


Fig.117 2SK0507出土遺物実測図 (1/4・1/2)

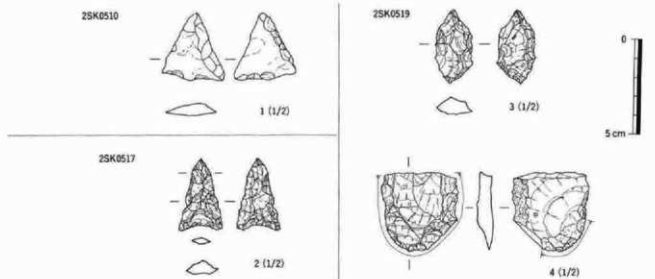


Fig.118 2SK0510・2SK0517・2SK0519出土遺物実測図(1/2)

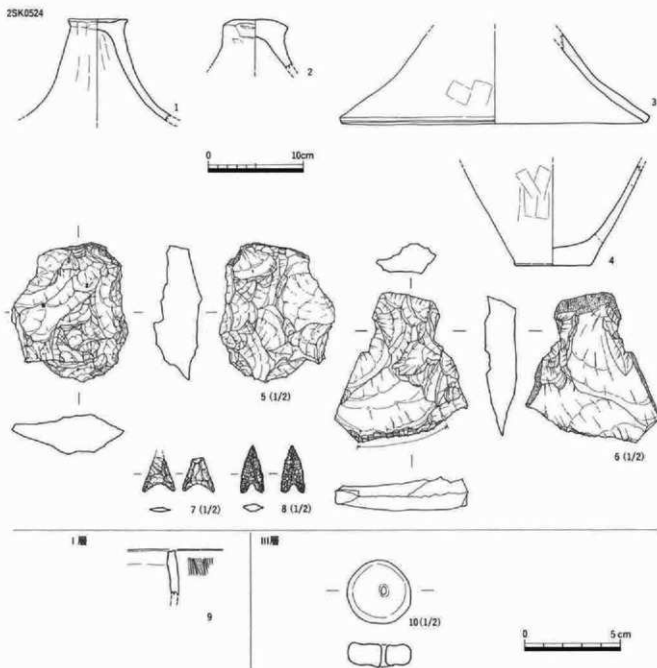


Fig.119 2SK0524出土遺物実測図①(1/4・1/2)

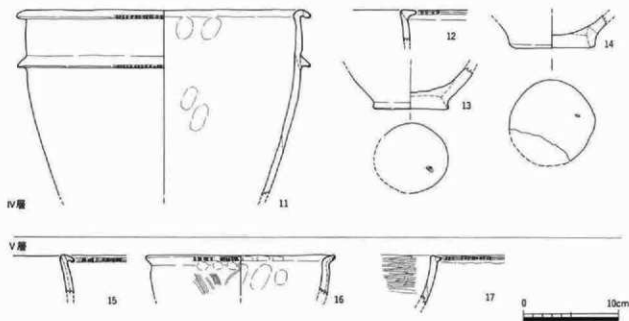


Fig.120 2SK0524出土遺物実測図② (1/4)

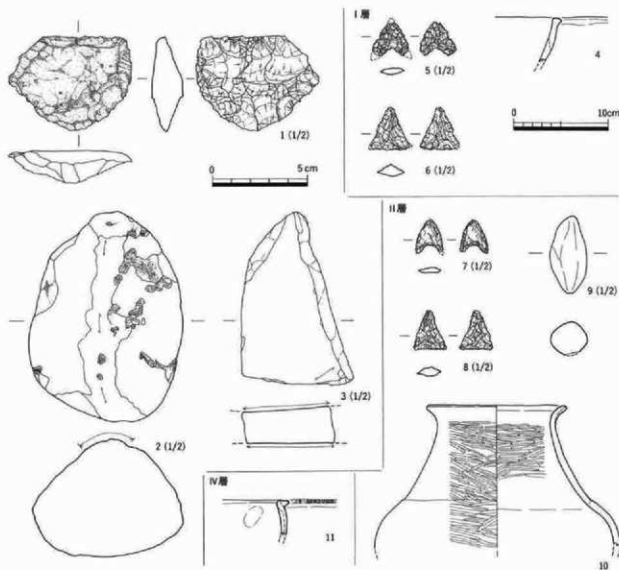


Fig.121 2SK0525出土遺物実測図 (1/2・1/4)

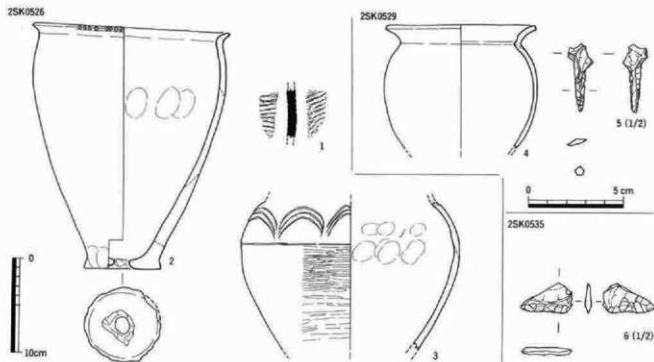


Fig.122 2SK0526・2SK0529・2SK0535出土遺物実測図 (1/4)

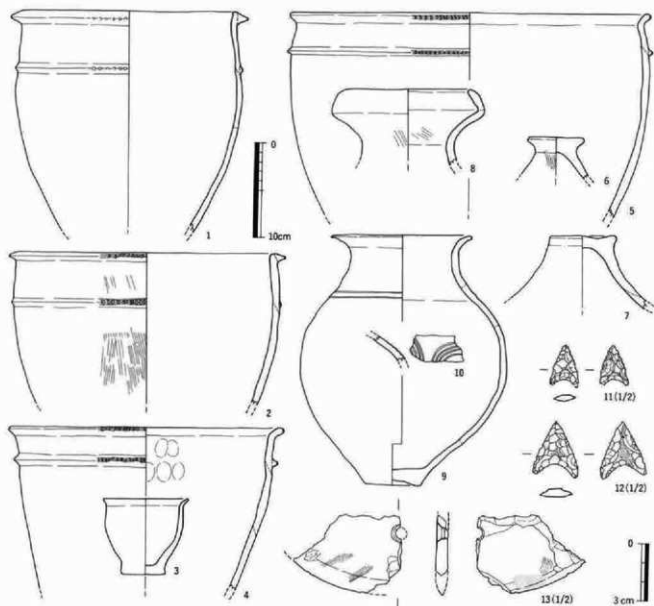


Fig.123 2SK0540出土遺物実測図 (1/4)

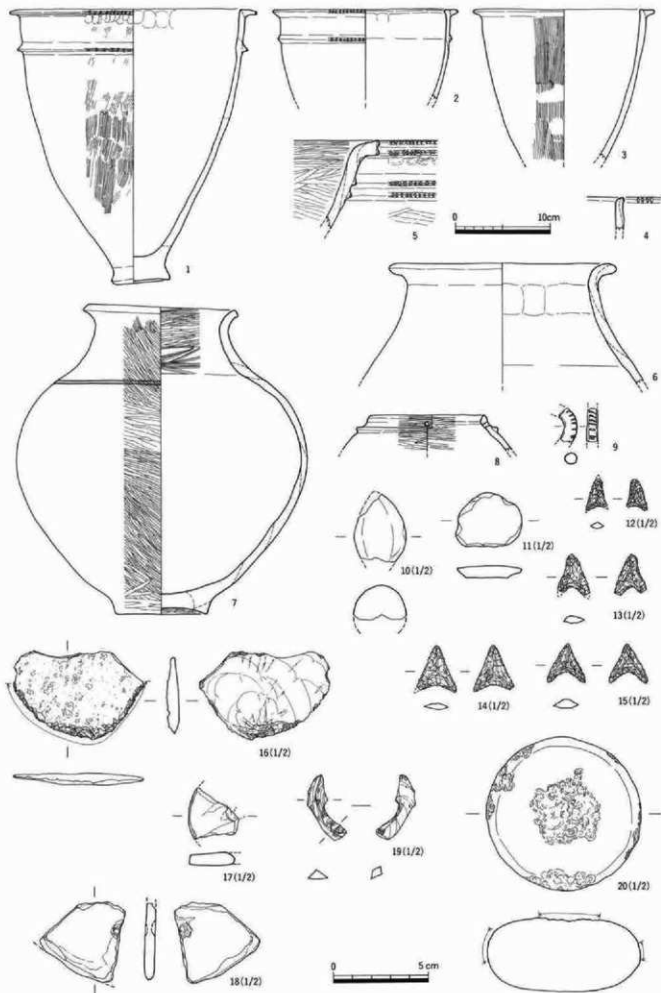


Fig.124 2SK0541出土遺物実測図 (1/4・1/2)

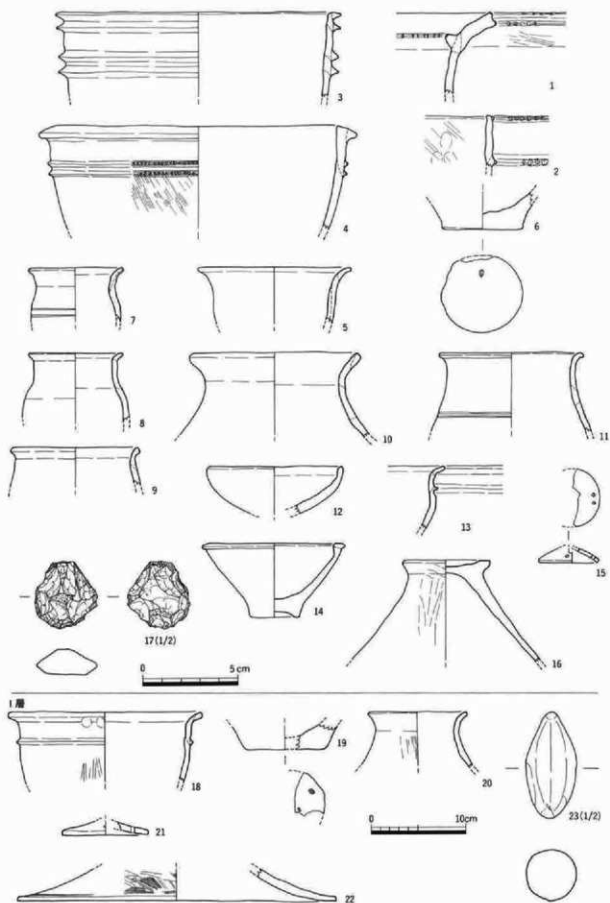


Fig.125 2SK0552出土遺物実測図 (1/4・1/2)

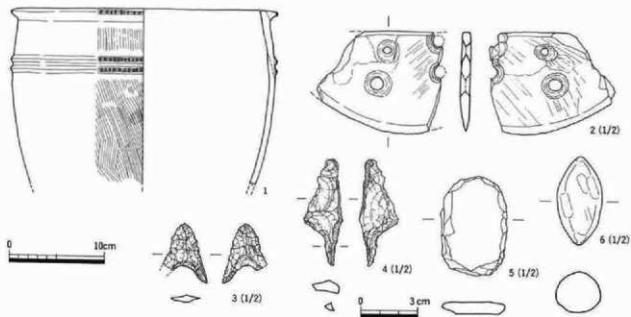


Fig.126 2SK0542出土遺物実測図 (1/2・1/4)

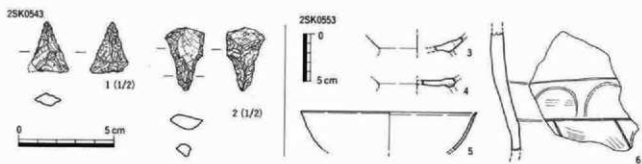


Fig.127 2SK0543・2SK0553出土遺物実測図 (1/2・1/4)

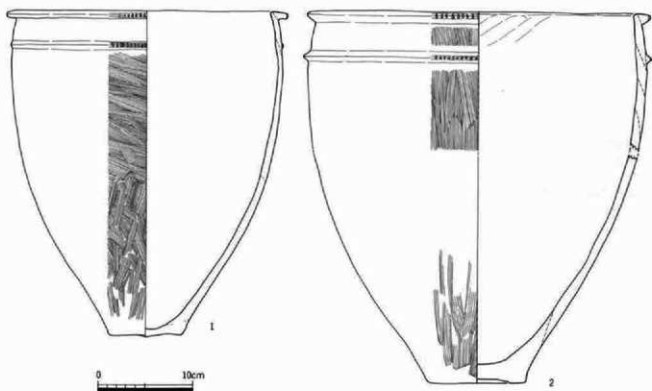


Fig.128 2SK0558出土遺物実測図① (1/4)

2SK0541出土遺物 (Fig.124・Pla.118・119・146・161)

6は壺であるが、口縁部の外面に粘土を貼り足して肥厚させている。8は壺であるが、ごく短い直立する口縁部をもつ。内外面ともに丁寧な磨きを施し、頸部に1ヶ所焼成前穿孔が見られる。9は把手であるが、外面側に刻目がある。2SK0437の8と同様に絞逸風双耳把手付銅復原深鉢の把手となる可能性がある。19は黒曜石製の釣針か。釣針とした場合、結合式となるかもしれない。

2SK0542出土遺物 (Fig.126・Pla.120・146)

2は粘板岩製の石包丁である。刃部は両刃。

2SK0552出土遺物 (Fig.125・Pla.119・120・146)

3・4は多条凸帯をもつ甕である。3は口縁部と胴部に2条ずつ刻目凸帯がある。4は口縁部は1条であるが、胴部に2条ある。6は甕底部である。外底面に初圧痕1ヶ所がある。14は鉢である。中世の白磁碗(Ⅳ類・註2)に良く似た器形であるが、弥生土器である。しっかりとしたつくりである。擬朝鮮系無文土器の範疇に入るものであろうか。15は小型の蓋である。口縁部近くに焼成前穿孔が1ヶ所ある。蓋か。19はⅠ層出土の甕底部である。外底面に初圧痕が2ヶ所ある。21もⅣ層出土で、小型の蓋である。これも壺蓋であろう。この遺構出土の甕・壺で粘土の接合状況の観察ができたものは、すべて内傾接合であった。

2SK0558出土遺物 (Fig.128・129・130・Pla.120・121・147・160)

6は半裁時出土の甕である。この土器のみ時期が異なるが調査時の混入か。8は石包丁で、石材は片岩である。刃部は両刃偏刃である。9は柱状片刃石斧である。石材は粘板岩であるが、筑後市近郊ではみかけないものである。20はⅠ層出土の石包丁である。石材は片岩で、刃部は両刃偏刃である。29はⅡ層出土の甕であるが、外反する口縁部の端部全面に対して刻目が施されている。胴部には刻目凸帯が1条貼付き、口縁部内面は丁寧な磨きが施されている。

2SK0562出土遺物 (Fig.131・Pla.121)

1は甕である。如意形の口縁端部全面に対して刻目を施す。胴部凸帯も見られず、板付Ⅰ式土器に酷似する。2は凸帯文土器の甕である。恐らくは胴部で屈曲する器形の口縁部であろう。3は鉢であるが、外面は丁寧に磨きを施しているようであるが、磨減が激しく判然としない。

2SK0580出土遺物 (Fig.131・Pla.121・147)

8は甕の口縁部である。外面に昆虫の蛹と思しき圧痕がある。小型の芋虫等、幼虫の圧痕のようでもある。いずれにせよ、昆虫とすれば比較的小型のものと思われるが、種類は全く不明である。9は鉢である。口縁部に焼成前穿孔が1ヶ所認められる。

2SK0586出土遺物 (Fig.132・Pla.121・122・147)

3は甕の底部である。外底面に初圧痕が2ヶ所ある。

2SK0587出土遺物 (Fig.132・Pla.147・160)

6は扁平片刃石斧としたが、柱状片刃石斧の可能性もある。石材は粘板岩である。

2SK0597出土遺物 (Fig.133・134・Pla.122)

10・11・12を除き、凸帯文土器で占められる。1・2は浅鉢である。胴部で屈曲して、やや内傾する口縁部を持つ。御領式以来の縄文晩期に通用の器形を持ち、口縁部の沈線文は完全に失われた段階のものである。1は内外面ともに丁寧に磨きを施す。2は磨減が進み判然としないものの、1と同様であろう。精製品である。7は全体の器形が知れる甕である。胴部で屈曲する典型的な凸帯文土器の甕である。内面には条痕が残るが、条痕の原体は不明である。11は弥生土器の壺である。胴部最大径が胴部中位にあるなど、古相を呈する。凸帯文土器はすべて外傾接合、弥生土器のうち、粘土の接合状況が判明した11は内傾接合であった。

2SK0676出土遺物 (Fig.139・140・Pla.124・148・161)

3・4は如意系口縁を持つ甕である。いずれも口縁端部の下端に刻目を施す。5は甕底部である。外底面に初圧痕1ヶ所と爪痕が1ヶ所残る。9は壺であるが、甕に近い器形をしている。胴部の径が最大となるとともに沈線が2条ある。口縁部は外反する小さなものである。甕が変化した変容壺か。11は壺で

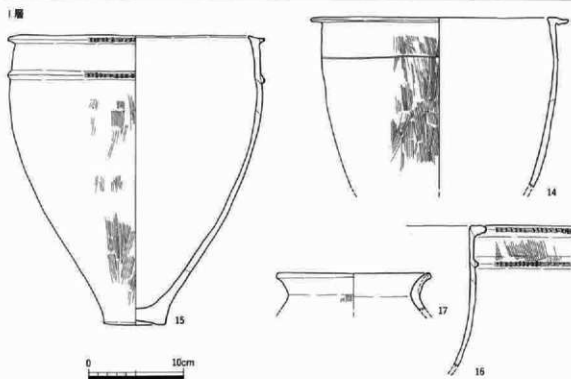
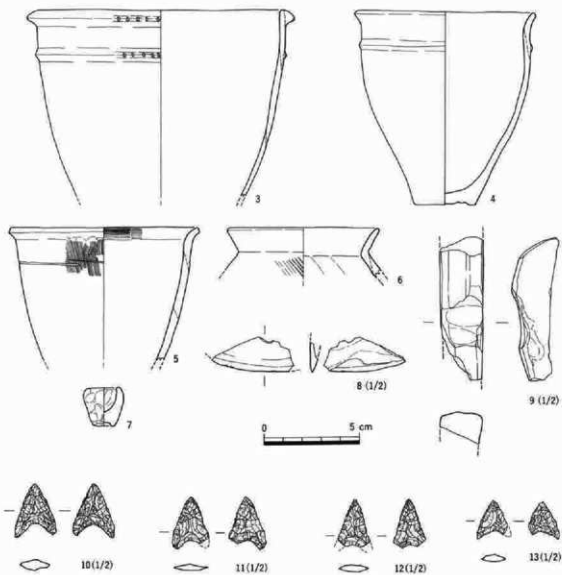


Fig.129 2SK0558出土遺物実測図② (1/4・1/2)

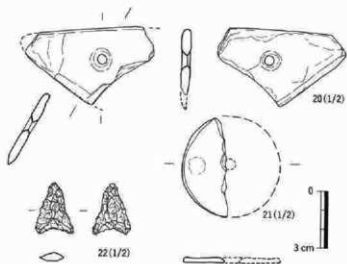
I 期



18



19

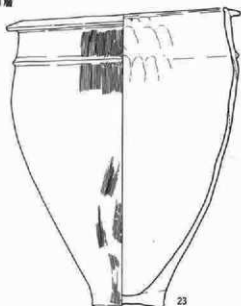


20 (1/2)

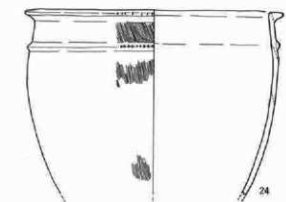
21 (1/2)

22 (1/2)

II 期



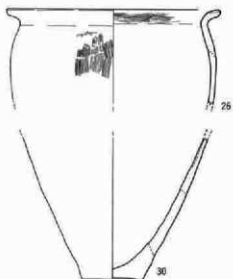
23



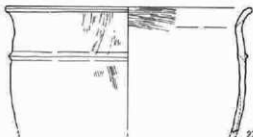
24



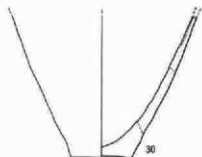
25



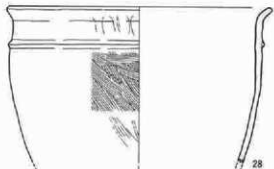
26



27



30



28



31



32



29

Fig.130 2SK0558出土遺物実測図③ (1/4 · 1/2)

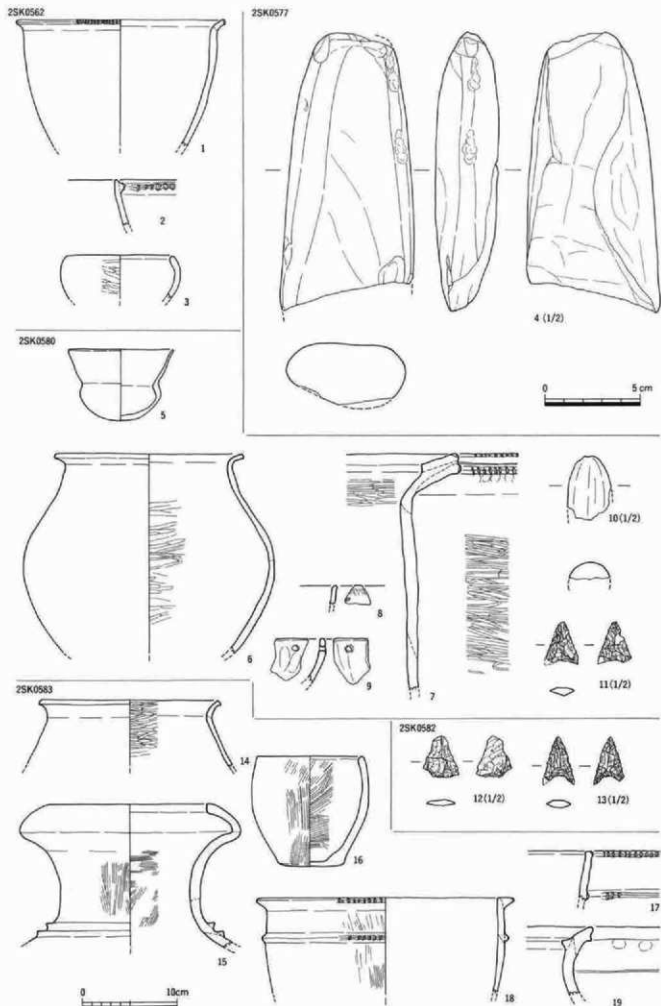


Fig.131 2SK0562・2SK0577・2SK0580・2SK0582・2SK0583出土遺物実測図 (1/4・1/2)

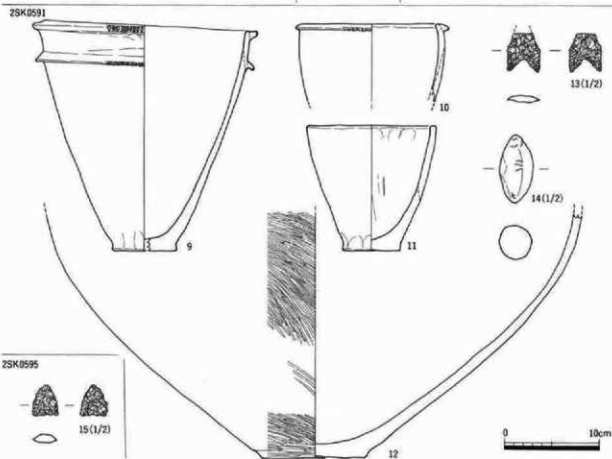
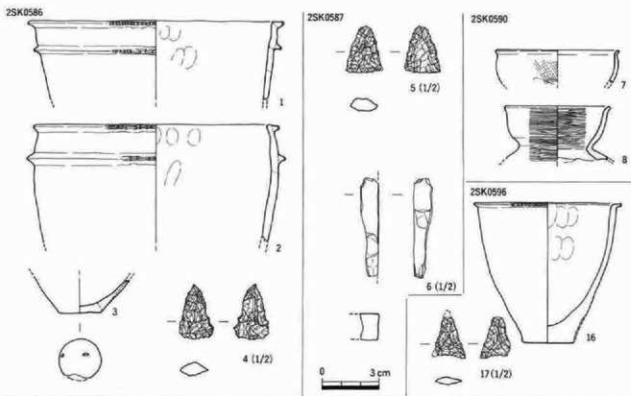


Fig.132 2SK0586・2SK0587・2SK0590・2SK0591・2SK0595・2SK0596
出土遺物実測図 (1/4・1/2)

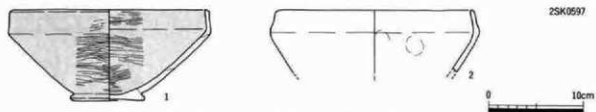


Fig.133 2SK0597出土遺物実測図① (1/4・1/2)

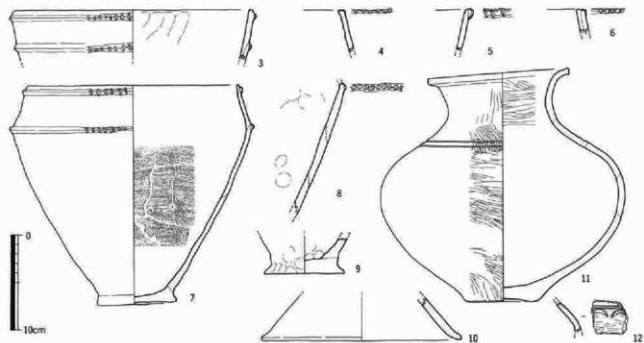


Fig.134 2SK0597出土遺物実測図② (1/4・1/2)

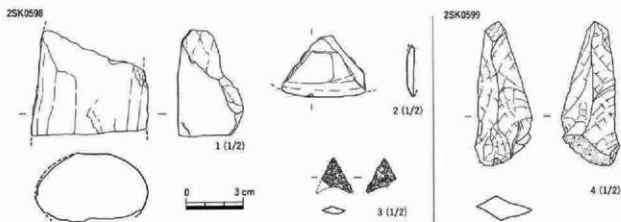


Fig.135 2SK0598・2SK0599出土遺物実測図 (1/2)

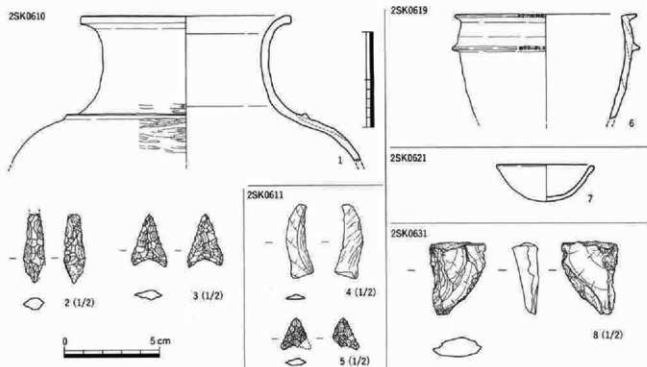


Fig.136 2SK0610・2SK0611・2SK0619・2SK0621・2SK0631
出土遺物実測図 (1/4・1/2)



Fig.137 2SK0635出土遺物実測図 (1/4)

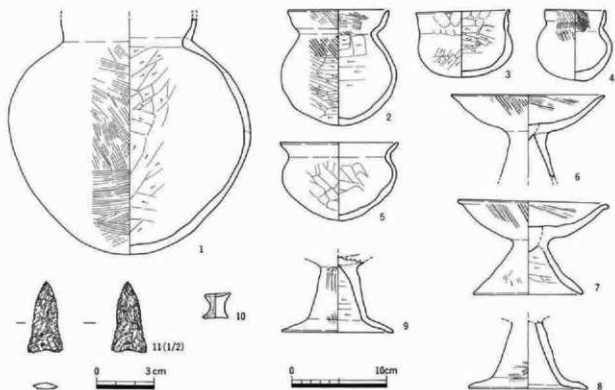


Fig.138 2SK0675出土遺物実測図 (1/2)

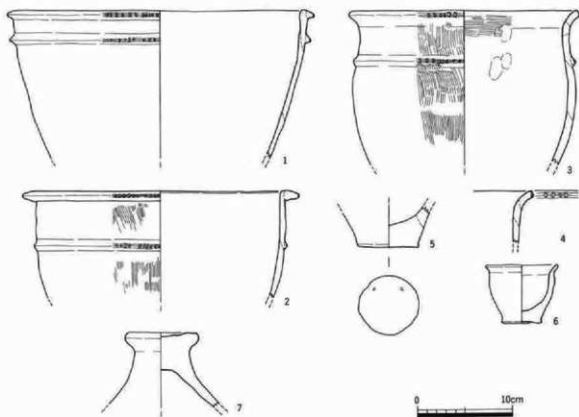


Fig.139 2SK0676出土遺物実測図① (1/4)

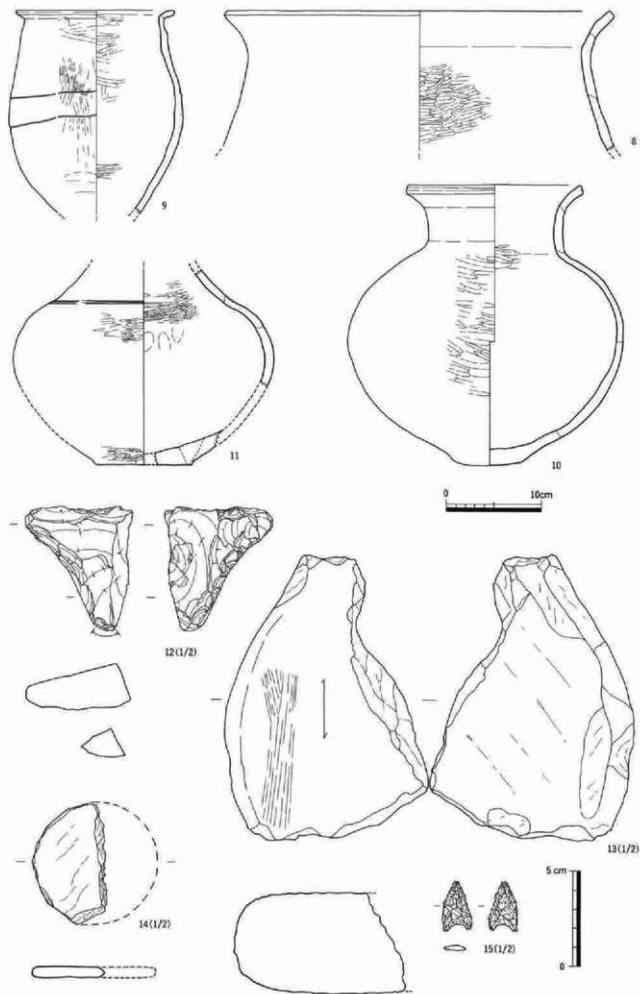


Fig.140 2SK0676出土遺物実測図② (1/4・1/2)

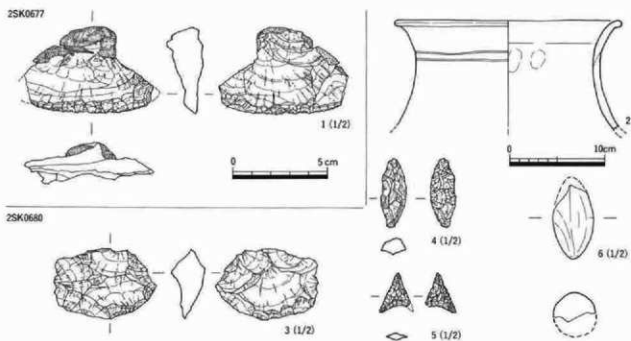


Fig.141 2SK0677・2SK0680出土遺物実測図 (1/2・1/4)

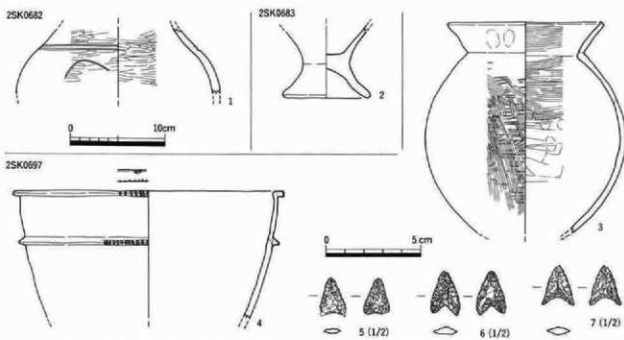


Fig.142 2SK0682・2SK0683・2SK0697出土遺物実測図 (1/4・1/2)

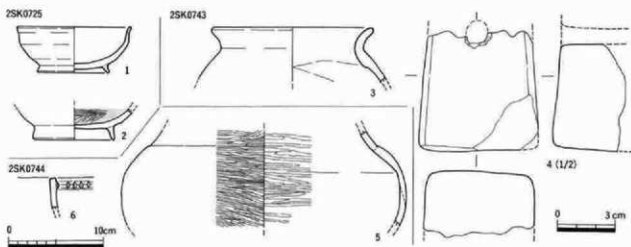


Fig.143 2SK0725・2SK0743・2SK0744出土遺物実測図 (1/2)

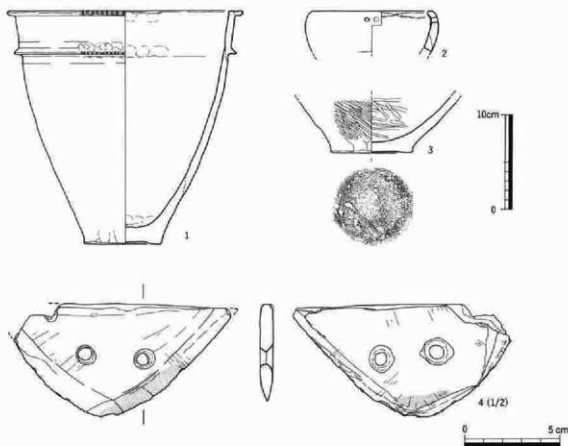


Fig.144 2SK0745出土遺物実測図 (1/4・1/2)

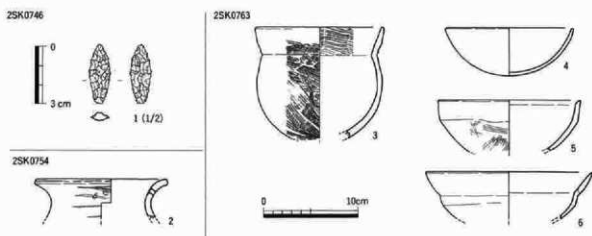


Fig.145 2SK0746・2SK0754・2SK0763出土遺物実測図 (1/2・1/4)

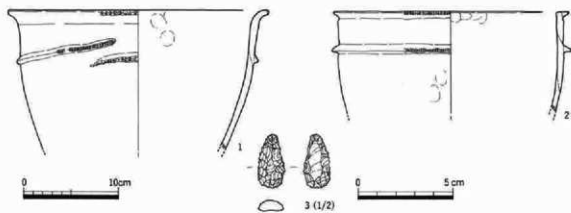


Fig.146 2SK0765出土遺物実測図 (1/2)

ある。胴部の最大径が胴部中位にあるもので、頸部と胴部の接合部分の段が僅かに残る。器形はやや古相か。12は大型のドリルである。壺底部に穿孔する際などに使用されるもので、先端には使用痕が認められる。

2SK0680出土遺物 (Fig.141・Pla.124・148)

2は壺である。口縁部直下に沈線が2条巡る。粘土の接合は外傾接合である。

2SK0745出土遺物 (Fig.144・Pla.125・148)

3は壺の底部である。底部に紐状の圧痕が残る。油粘土でボジモテリングを作成して観察したところ、6本以上の紐圧痕が認められた。紐はすべて左撚りである。4は石包丁で、八女地方産の緑泥片岩である。三角形の形をした類型である。刃部は明瞭な両刃片刃で両面に殺擦痕が認められる。特に片面は広い範囲に殺擦痕が認められる。

2SK0754出土遺物 (Fig.145)

2は壺である。口縁部直下に焼成前穿孔が1対ある。

2SK0765出土遺物 (Fig.146・Pla.125・148)

1は壺である。外反する口縁部の端部下端に刻目を施す。胴部に刻目凸帯が1条巡るが、接合点が上下にずれていて、完結しない。

2SK0800出土遺物 (Fig.148・149・Pla.126・148)

2は彩文土器の壺である。口縁部内面と頸部外面に文様を朱書きする。顔料はベンガラか。3は黒色磨研土器の壺である。直立する頸部に小さな外反口縁がつく。頸部には三角凸帯が巡っていて、器面全体を丁寧に磨く。凸帯土器の範疇と思われる。9・10は凸帯土器の壺である。いずれも内傾接合を採用し、器形は弥生土器的である。10は胴部凸帯から上位に粘土を貼り足して肥厚させており、殺擦の範疇である。11は壺であるが、胴部に2条の刻目凸帯が巡る。この遺構から出土した土器のうち粘土の接合が観察できたものは、弥生土器・凸帯土器ともに内傾接合であった。

2SK0830出土遺物 (Fig.150・Pla.126・148)

7は凸帯土器の壺である。口縁部端と胴部に小さな凸帯を貼付けて刻目を施している。粘土の接合は外傾接合である。

2SK0843出土遺物 (Fig.151・Pla.126・159)

3は壺の底部である。外底面に初圧痕が認められる。明瞭なもの2ヶ所、不明瞭なもの1ヶ所である。

2SK0850出土遺物 (Fig.152・153・Pla.127・148・158・162)

4は磨製石斧である。石材は安山岩か。刃部の片側は歪になっており、欠損後に再度研ぎ出したと思われる。

2SK0853出土遺物 (Fig.154・Pla.127)

2は壺底部であろう。外底面に初痕が1ヶ所認められるが、芒の痕跡と思われるものも観察できる。

2SK0858出土遺物 (Fig.154・Pla.127)

3は壺である。体部に重弧文があるが、間隔がひらいて間延びした印象を受ける。胴部に比して細い頸部がほぼ直立し、口縁部は外反する小さなものである。4も壺である。ごく短い口縁部が直立する。頸部には三角凸帯が貼付き、直上位に焼成前穿孔が1ヶ所認められる。

2SK0907出土遺物 (Fig.158・Pla.128・149)

1は黒曜石のアメリカ型石鎌である。両面とも研摩して平坦にしている。2は彩文土器の壺である。頸部の内外面に施文している。顔料はベンガラか。

2SK0920出土遺物 (Fig.161・Pla.149)

2は黒曜石の細石刃である。両端は欠損している。

2SK0955出土遺物 (Fig.162・Pla.128・129)

5・6は凸帯土器の壺である。いずれも口縁部には直接刻目を施し、胴部には刻目凸帯を1条貼付ける。粘土の接合は外傾接合である。7は壺底部である。外底面に植物圧痕がある。

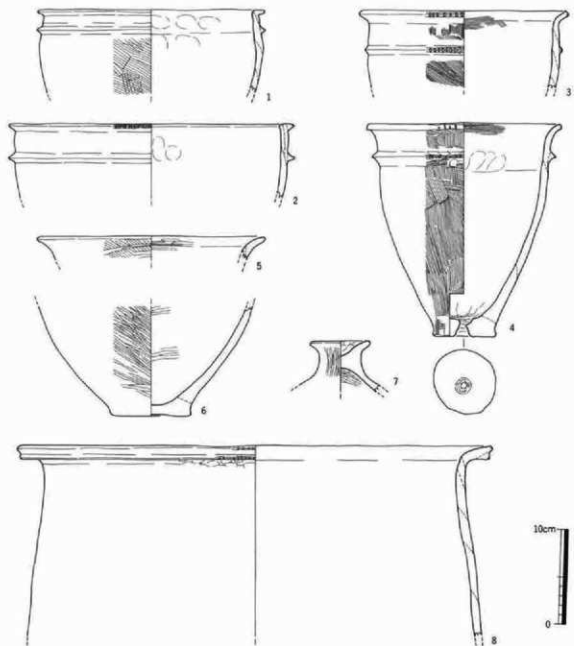


Fig.147 2SK0766出土遺物実測図 (1/4)

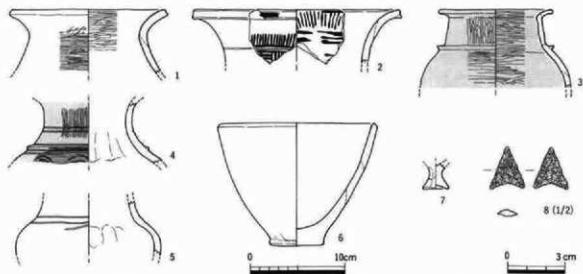


Fig.148 2SK0800出土遺物実測図① (1/4・1/2)

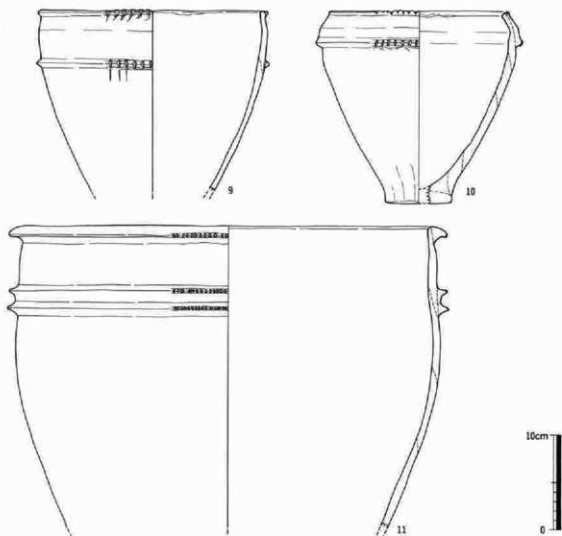


Fig.149 2SK0800出土遺物実測図② (1/4)

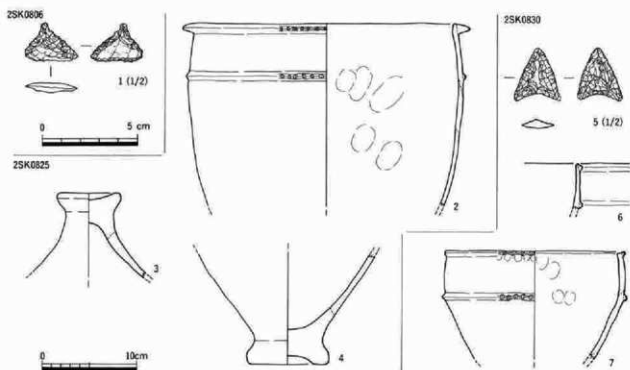


Fig.150 2SK0806・2SK0825・2SK0830出土遺物実測図 (1/2・1/4)

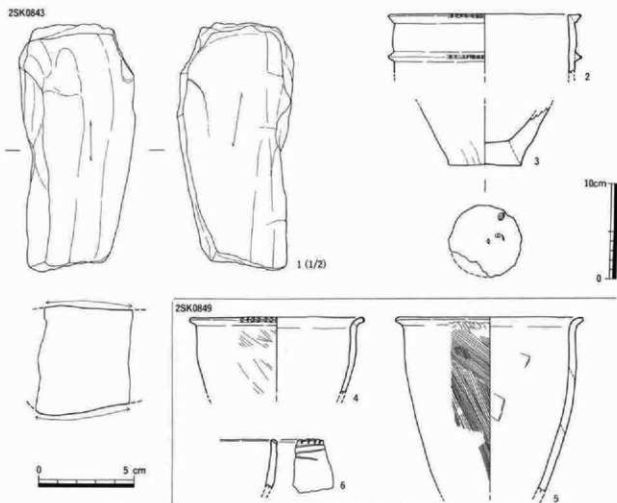


Fig.151 2SK0843・2SK0849出土遺物実測図 (1/2・1/4)

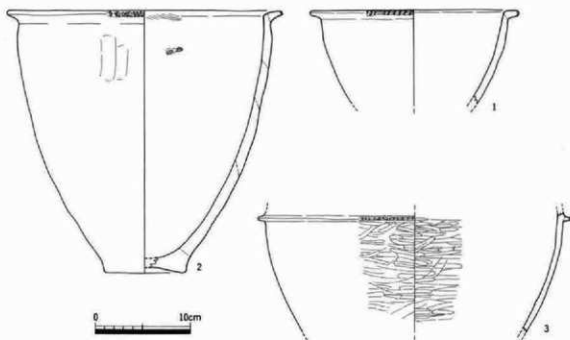


Fig.152 2SK0850出土遺物実測図① (1/4)

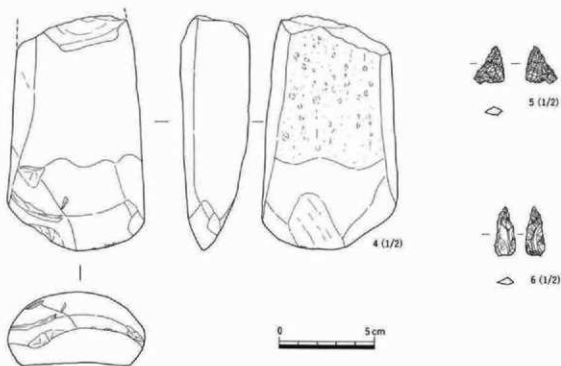


Fig.153 2SK0850出土遺物実測図② (1/2)

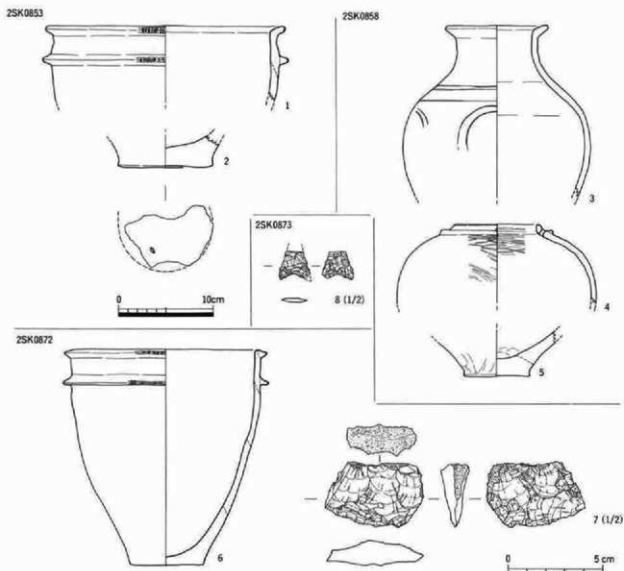


Fig.154 2SK0853・2SK0858・2SK0872・2SK0873出土遺物実測図 (1/4・1/2)

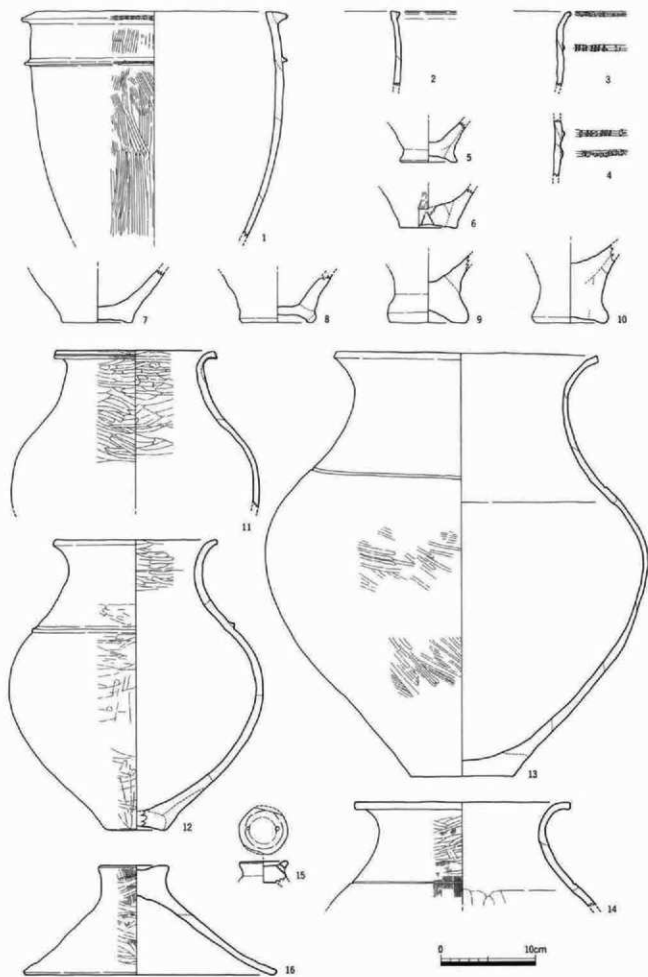


Fig.155 2SK0878出土遺物実測図① (1/4)

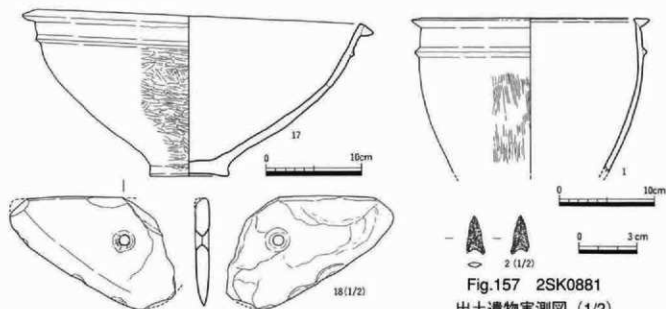


Fig.157 2SK0881

出土遺物実測図 (1/2)

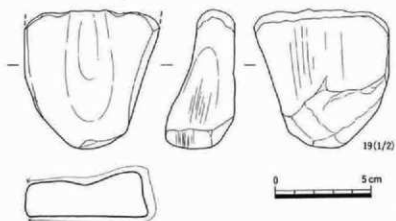


Fig.156 2SK0878出土遺物実測図② (1/4・1/2)

Fig.158 2SK0907・2SK0909・

2SK0911出土遺物実測図 (1/4・1/2)

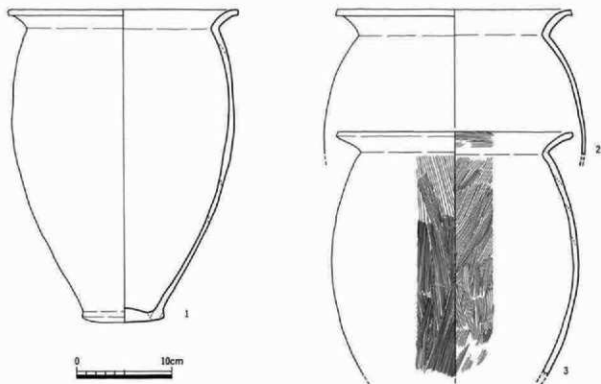


Fig.159 2SK0912出土遺物実測図① (1/4)

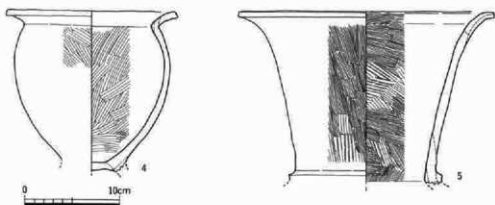


Fig.160 2SK0912出土遺物実測図② (1/4)

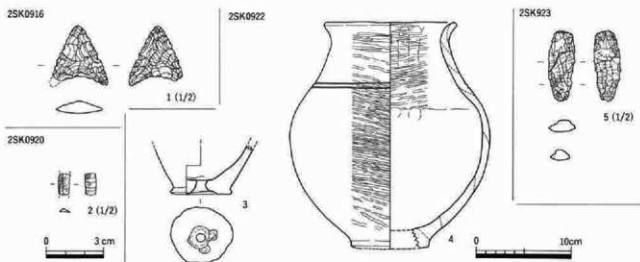


Fig.161 2SK0916・2SK0920・2SK0922・2SK0923出土遺物実測図 (1/2・1/4)

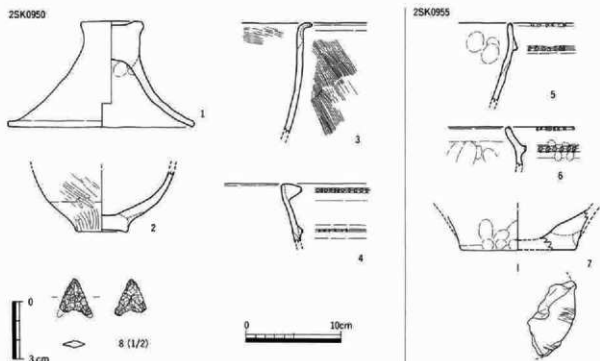


Fig.162 2SK0950・2SK0955出土遺物実測図 (1/4・1/2)

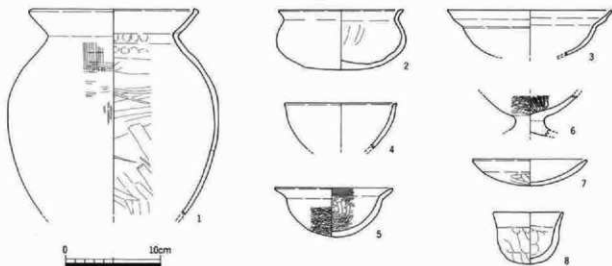


Fig.163 2SK0956出土遺物実測図 (1/4)

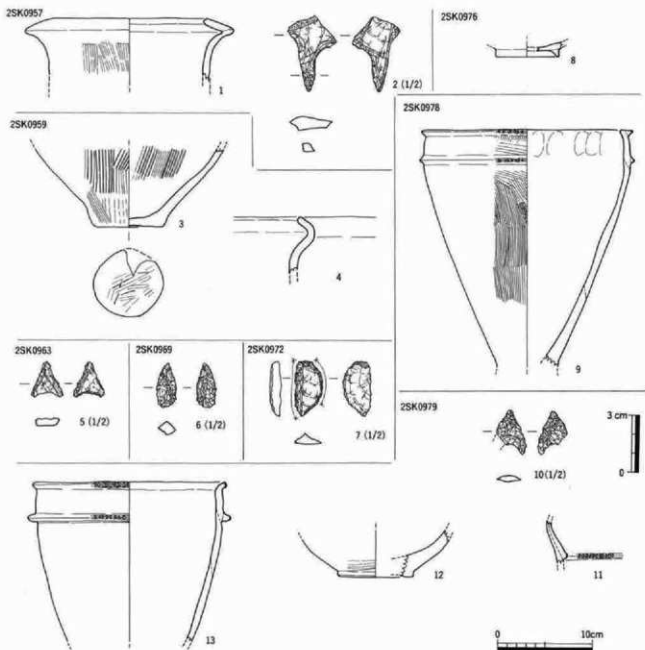


Fig.164 2SK0957・2SK0959・2SK0963・2SK0969・2SK0972
 ・2SK0976・2SK0978・2SK0979出土遺物実測図 (1/4・1/2)

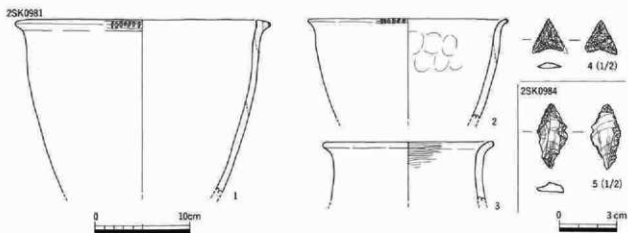


Fig.165 2SK0981・2SK0984出土遺物実測図 (1/4・1/2)

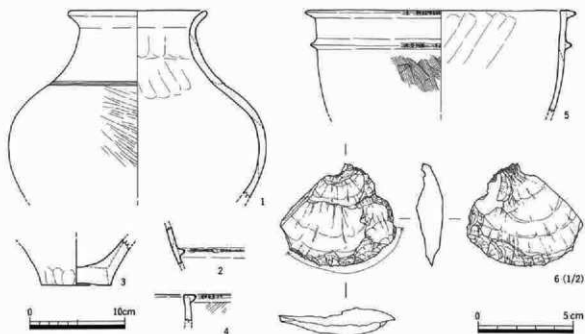


Fig.166 2SK0989出土遺物実測図 (1/4・1/2)

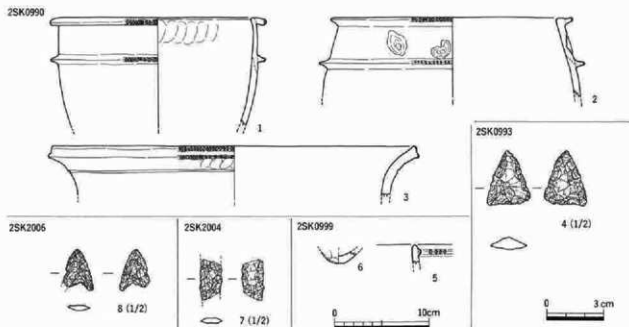


Fig.167 2SK0990・2SK0993・2SK0999・2SK2004・2SK2006出土遺物実測図 (1/4・1/2)

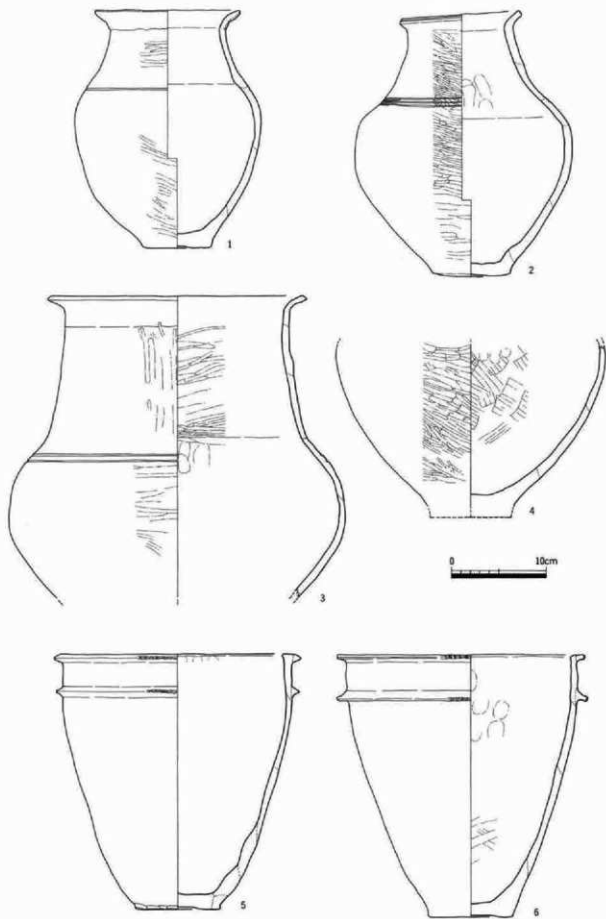


Fig.168 2SK2008出土遺物実測図① (1/4)

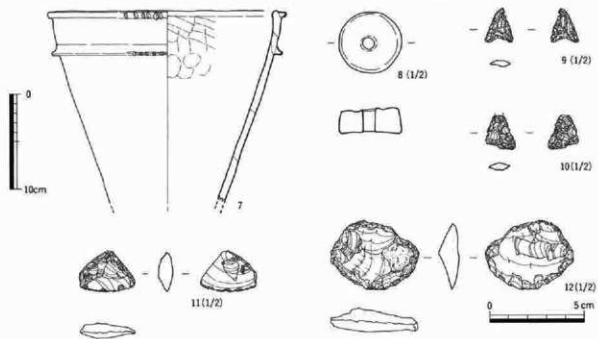


Fig.169 2SK2008出土遺物実測図② (1/4・1/2)

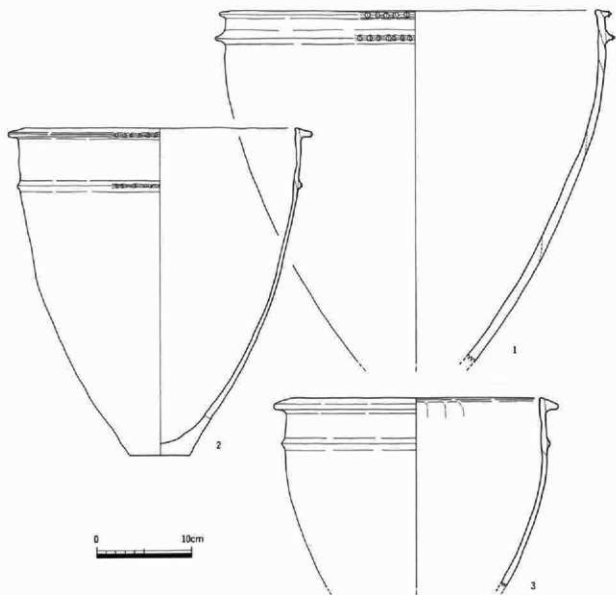


Fig.170 2SK2009出土遺物実測図① (1/4)

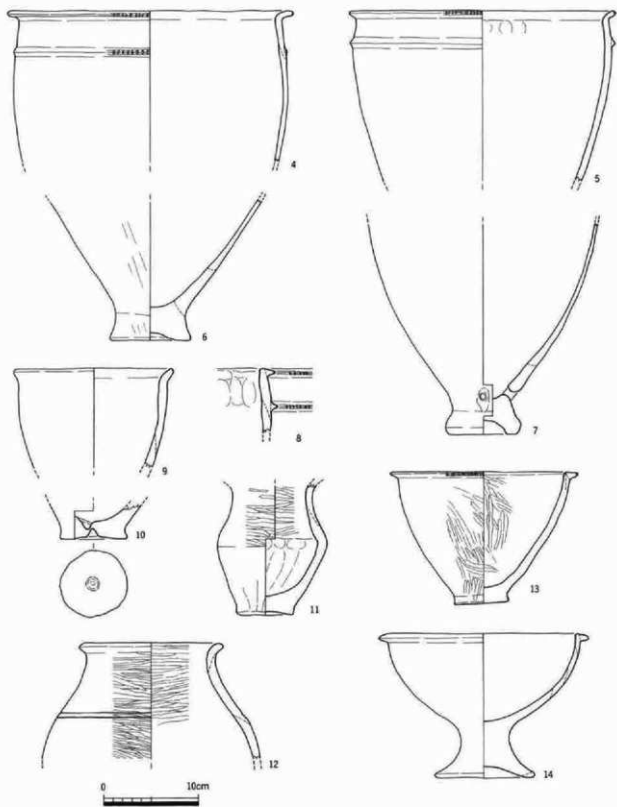


Fig.171 2SK2009出土遺物実測図② (1/4)



Fig.172 2SK2011出土遺物実測図 (1/2)

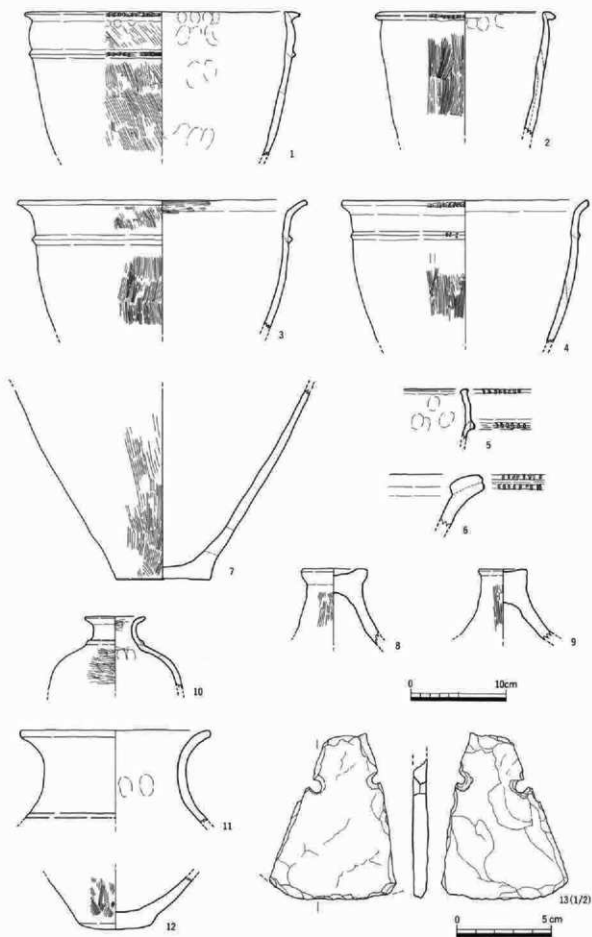


Fig.173 2SK2013出土遺物実測図① (1/4・1/2)

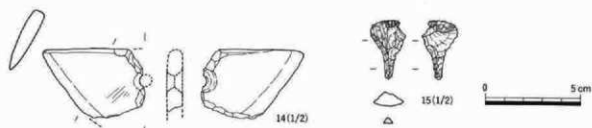


Fig.174 2SK2013出土遺物実測図② (1/2)



Fig.175 2SK2016出土遺物実測図 (1/4)

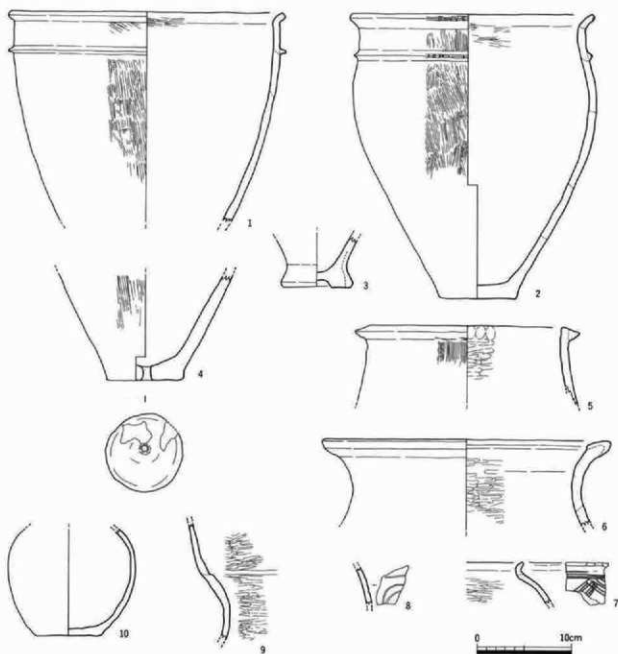


Fig.176 2SK2017出土遺物実測図 (1/4)

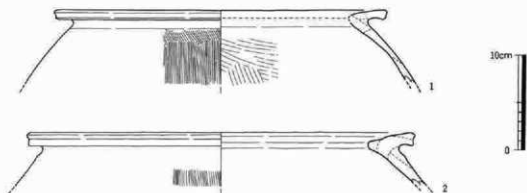


Fig.177 2SK2018出土遺物実測図 (1/4)

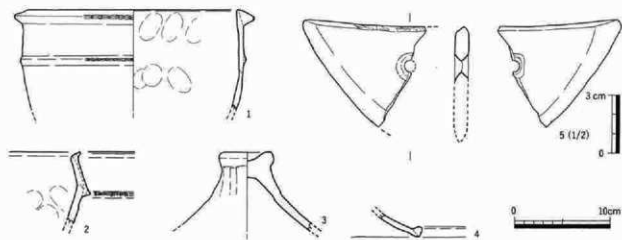


Fig.178 2SK2021出土遺物実測図 (1/4・1/2)

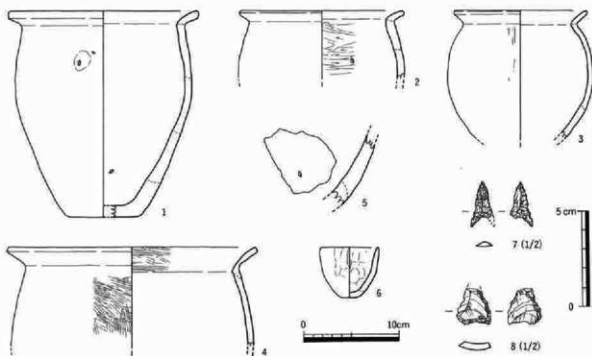


Fig.179 2SK2025出土遺物実測図 (1/4・1/2)

2SK0979出土遺物 (Fig.164・Pla.129・149)

11は甕である。胴部凸帯状の部分から上位に粘土を貼り足して肥厚させる段甕である。凸帯を省略した段の部分に直接刻目を施している。段甕の一般的な構造と全く同一である。口縁部は欠損しているものの外反する類型と思われ、瀬戸内地方にみられる段甕の器形に近い。

2SK0990出土遺物 (Fig.167・Pla.130)

2は甕である。口縁部と胴部に1条ずつ刻目凸帯を巡らせる。2条の凸帯の間に、未貫通の焼成後穿孔が見られる。穿孔は外面側から行われている。

2SK2009出土遺物 (Fig.170・171・Pla.130・131)

7は甕の下半部である。底部は厚いが底面は若干上げ底状となっている。底部近くの体部に1ヶ所の焼成後穿孔が認められる。

2SK2013出土遺物 (Fig.173・174・Pla.131・149)

5は凸帯文土器の甕である。口縁部には直接刻目を施し、胴部には刻目凸帯を貼付けている。粘土の接合は外傾接合である。10は壺であるが、体部に比して細い頸部が特徴的である。頸部と胴部の接合部分に三角凸帯を1条貼付ける。外面は丁寧な磨きが施されている。弥生土器としたが、凸帯文土器とすべきかも知れない。12は壺の底部である。体部の最下位外面に初圧痕が1ヶ所残る。

2SK2017出土遺物 (Fig.176・Pla.131・132)

10は壺の下半部である。丸い胴部と広い底面が特徴的である。

2SK2021出土遺物 (Fig.178・Pla.132・150)

2は凸帯文土器の甕である。口縁部と胴部にそれぞれ1条の貼付け凸帯を貼付ける。胴部凸帯から上位は粘土を貼り足して肥厚させており、段甕の範疇に入る。5は石包丁。石材は片岩で、刃部は両刃である。

2SK2025出土遺物 (Fig.179・Pla.132・150)

5は甕の体部である。内面に初圧痕が1ヶ所認められる。

2SK2027出土遺物 (Fig.180・Pla.133)

5は甕の体部である。胴部凸帯から上位に粘土を貼り足して肥厚させている。段甕の範疇に入る。6は壺の底部である。外底面に初圧痕が2ヶ所認められる。

2SK2045出土遺物 (Fig.184・Pla.133)

5は甕型土器に把手が付いたものであるが、森貞次郎氏が緩遠風双耳把手付銅鍍型深鉢と思われる。把手の一方は水平に擦り付け、他方は縦に擦り付ける。器面は丁寧にナデ調整を施している。

2SK2049出土遺物 (Fig.184・Pla.156)

7は磨製石剣である。丁寧な研磨が施されている。

2SK2056出土遺物 (Fig.185・Pla.134)

1は壺である。頸部と胴部の接合部外面に三角凸帯が貼付く。凸帯には2～3ヶ所刻目が施される。内面には接合時の段が僅かに名残りを留めている。

2SK2166出土遺物 (Fig.194)

2は甕棺である。口縁部の外面に粘土を貼り足して肥厚している。内面の口縁部直下に三角凸帯を貼付ける。胴部下位にも三角凸帯を1条貼付ける。器形は壺の面影を残し、古相を示す。

2SK2168出土遺物 (Fig.195・Pla.134・150)

3は小型の蓋である。壺蓋であろう。口縁部に2ヶ所の焼成前穿孔が認められる。

2SK2180出土遺物 (Fig.198・Pla.135)

3は壺の底部。底部近くの体部に2ヶ所の焼成後穿孔が見られるが、うち1ヶ所は未貫通である。また、底部には内外面から各1ヶ所で焼成後穿孔を試みるが、いずれも未貫通である。

2SK2193出土遺物 (Fig.199)

3は壺で、内面に初圧痕が1ヶ所認められる。

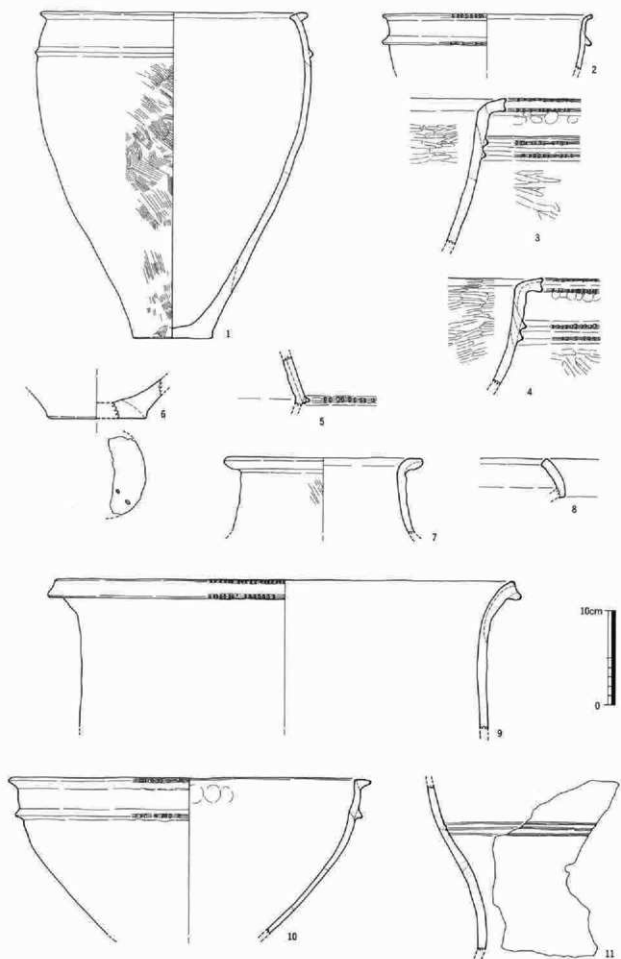


Fig.180 2SK2027出土遺物実測図 (1/4)

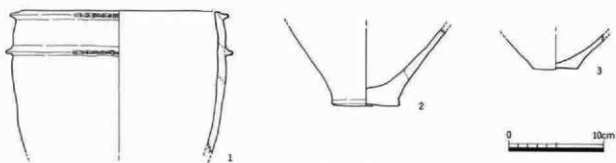


Fig.181 2SK2028出土遺物実測図 (1/4)

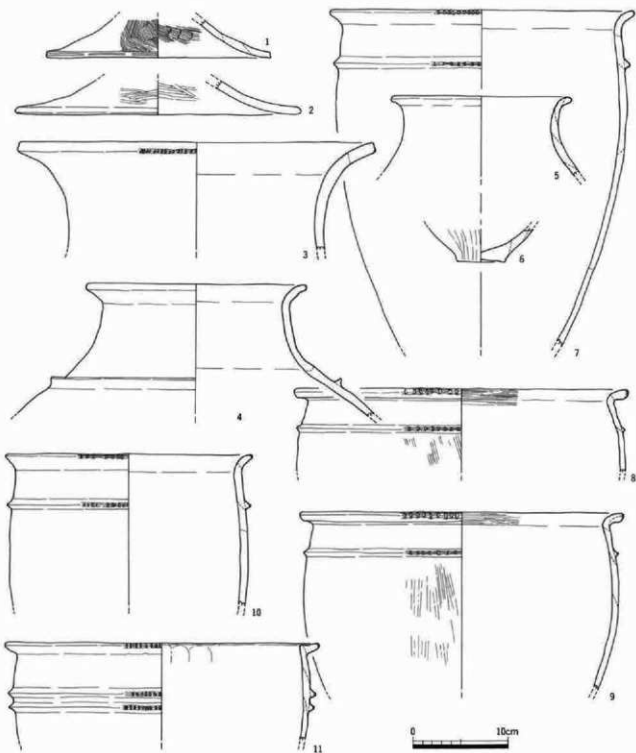


Fig.182 2SK2029出土遺物実測図① (1/4)



Fig.183 2SK2029出土遺物実測図② (1/6)

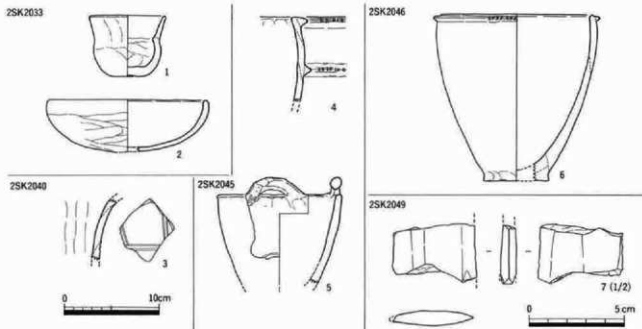


Fig.184 2SK2033・2SK2040・2SK2045・2SK2046・2SK2049出土遺物実測図 (1/4・1/2)

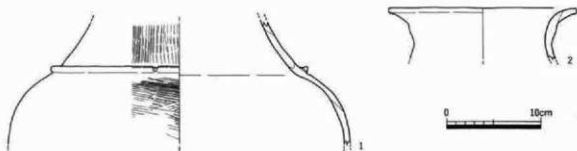


Fig.185 2SK2056出土遺物実測図① (1/4)

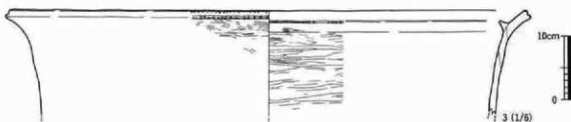


Fig.186 2SK2056出土遺物実測図② (1/6)

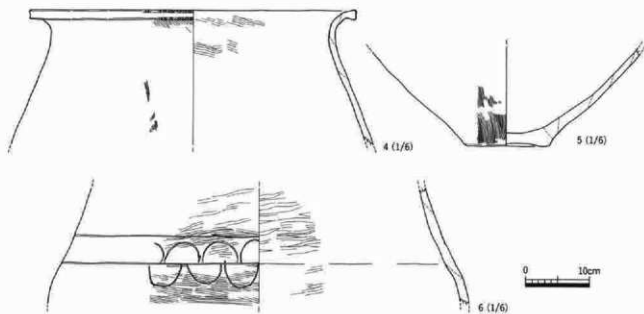


Fig.187 2SK2056出土遺物実測図③ (1/6)

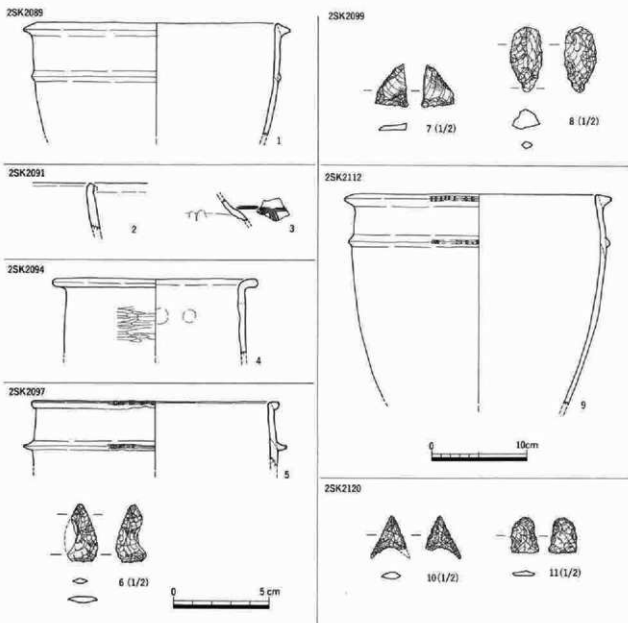


Fig.188 2SK2089・2SK2091・2SK2094・2SK2097・2SK2099
 ・2SK2112・2SK2120出土遺物実測図 (1/4・1/2)

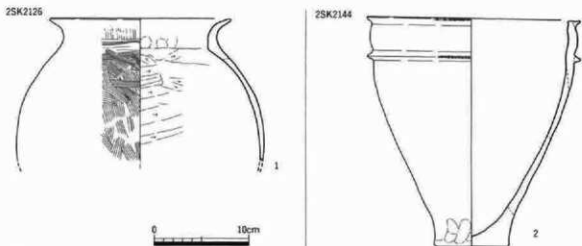


Fig.189 2SK2126・2SK2114出土遺物実測図 (1/4)

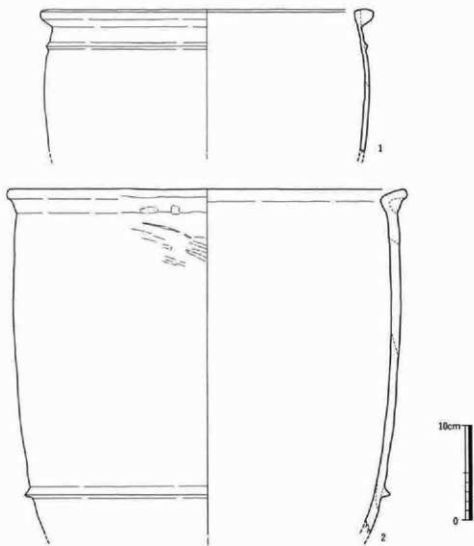


Fig.190 2SK2138出土遺物実測図 (1/4)



Fig.191 2SK2151・2154出土遺物実測図 (1/2)

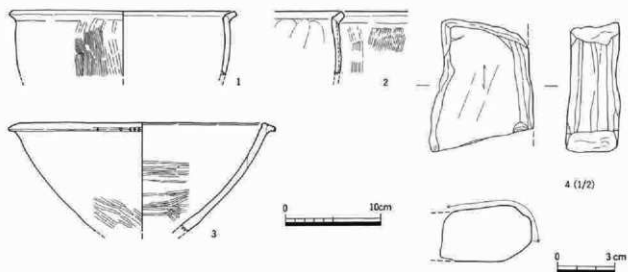


Fig.192 2SK2160出土遺物実測図 (1/4・1/2)

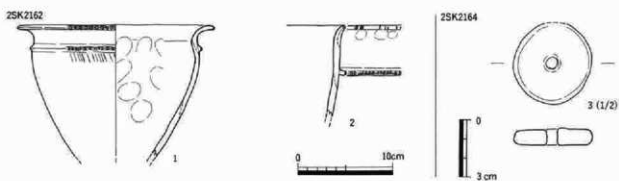


Fig.193 2SK2162・2SK2164出土遺物実測図 (1/4・1/2)

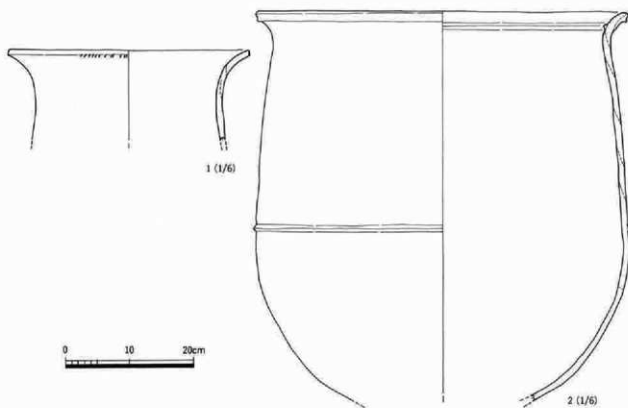
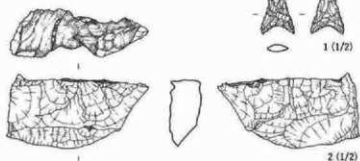


Fig.194 2SK2166出土遺物実測図 (1/6)

2SK2167



2SK2168

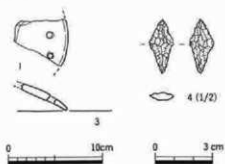


Fig.195 2SK2167・2SK2168出土遺物実測図 (1/4・1/2)

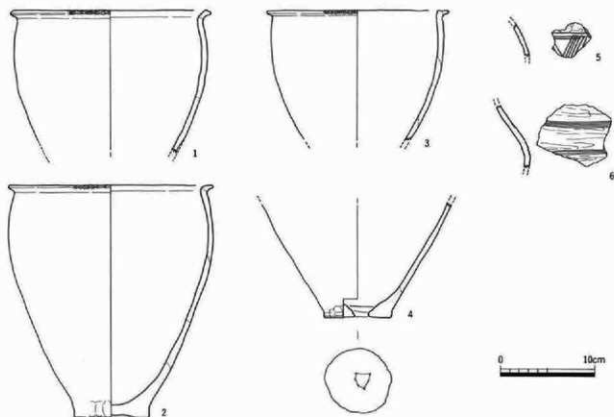
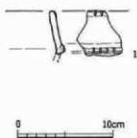


Fig.196 2SK2172出土遺物実測図 (1/4)

2SK2173



2SK2174

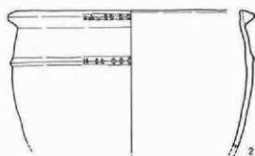


Fig.197 2SK2173・2SK2174出土遺物実測図 (1/4)

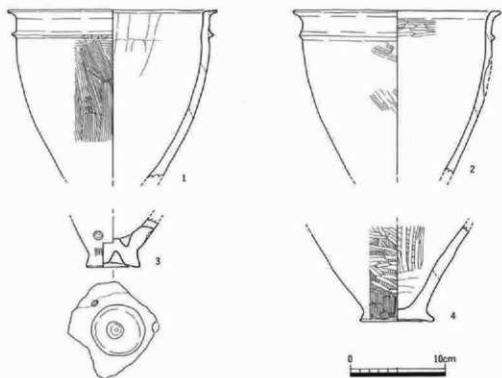


Fig.198 2SK2180出土遺物実測図 (1/4)

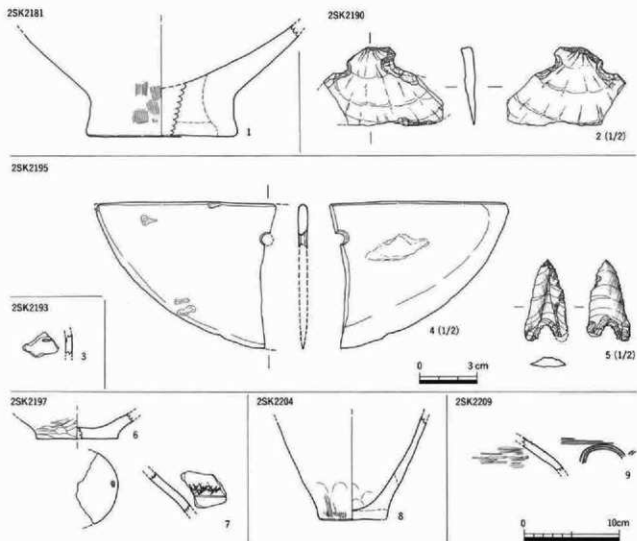


Fig.199 2SK2181・2SK2190・2SK2193・2SK2195・2SK2197
 ・2SK2204・2SK2209出土遺物実測図 (1/4・1/2)

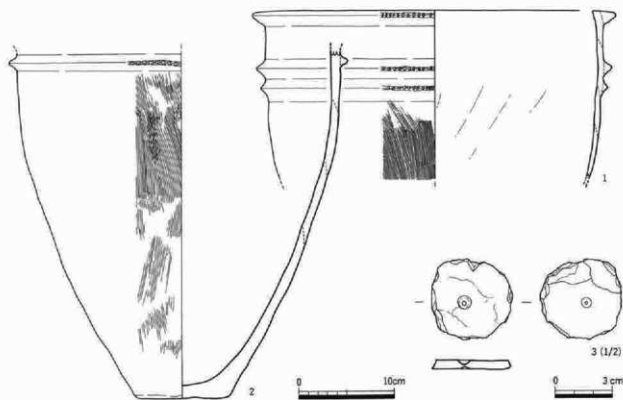


Fig.200 2SK2205出土遺物実測図 (1/4・1/2)

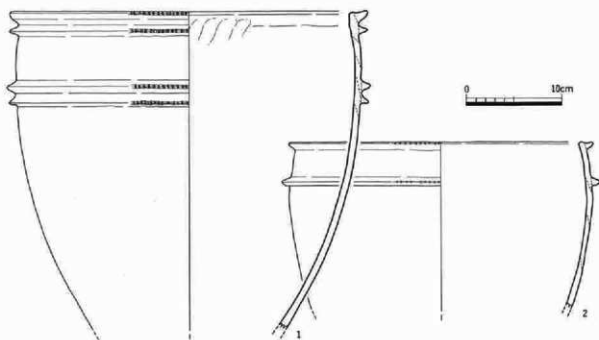


Fig.201 2SK2210出土遺物実測図 (1/4)



Fig.202 2SK2212出土遺物実測図 (1/4)

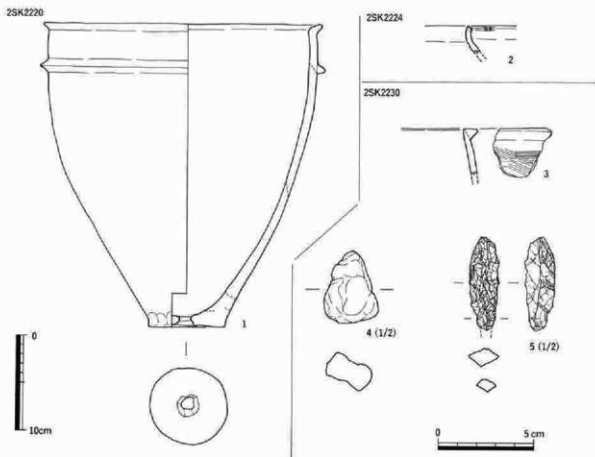


Fig.203 2SK2220・2SK2224・2SK2230出土遺物実測図 (1/4・1/2)

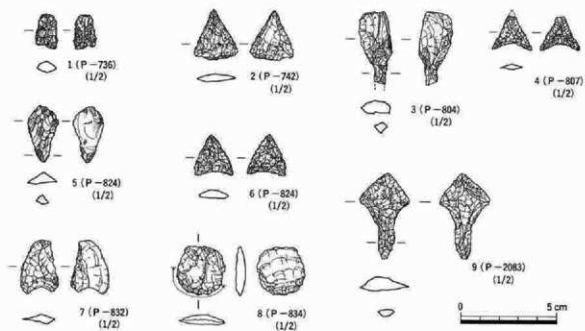


Fig.204 2SI2300出土遺物実測図 (1/2)



Fig.205 2SI2310出土遺物実測図 (1/2)

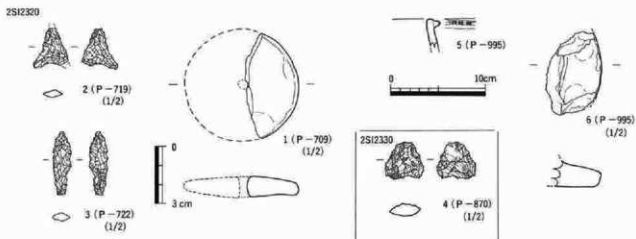


Fig.206 2SI2320・2SK2330出土遺物実測図 (1/2・1/4)

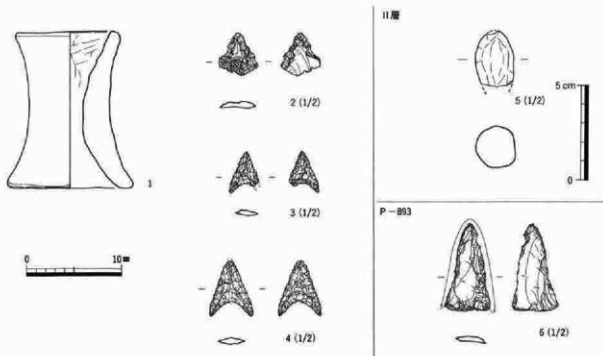


Fig.207 2SI0606出土遺物実測図 (1/4・1/2)

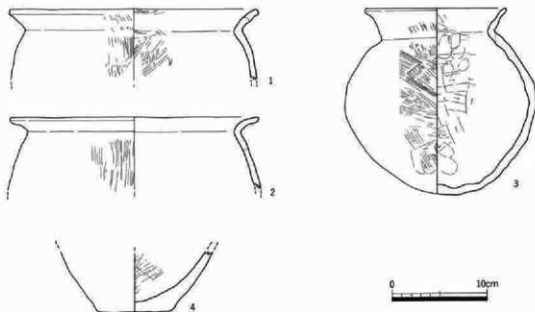


Fig.208 2SI0608出土遺物実測図① (1/2)

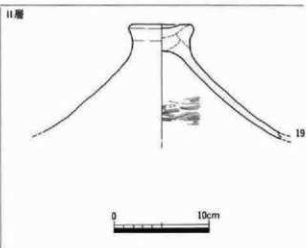
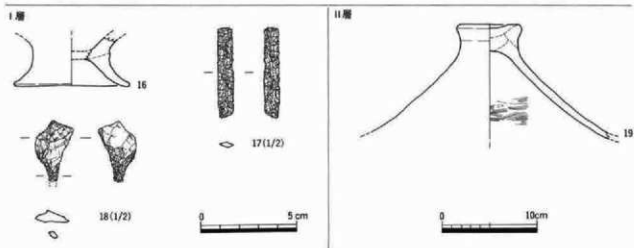
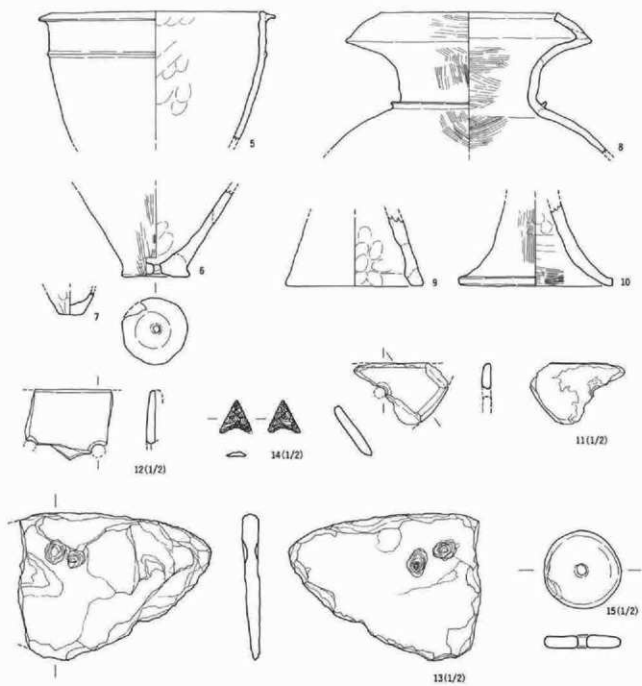


Fig.209 2SI0608出土遺物実測図② (1/4・1/2)

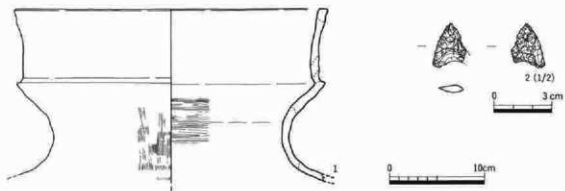


Fig.210 2SI0609出土遺物実測図 (1/4・1/2)

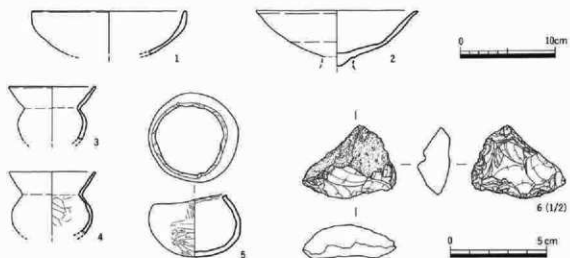


Fig.211 2SI0688出土遺物実測図 (1/4・1/2)



Fig.212 2SI0750出土遺物実測図 (1/4)

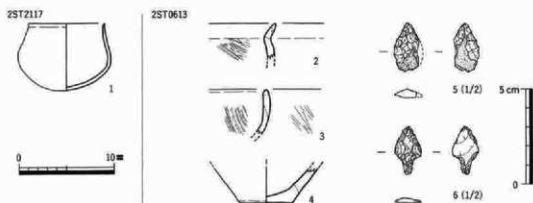


Fig.213 2ST2117・2ST0613出土遺物実測図 (1/4・1/2)

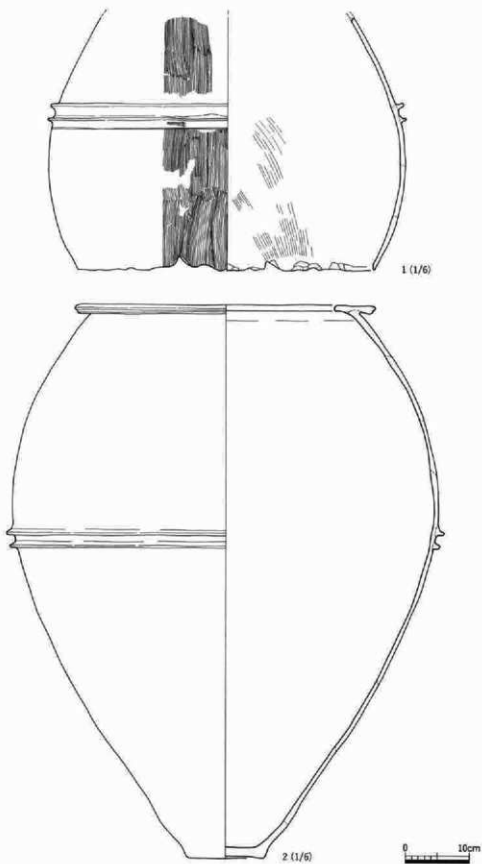


Fig.214 2ST0879出土遺物実測図① (1/6)

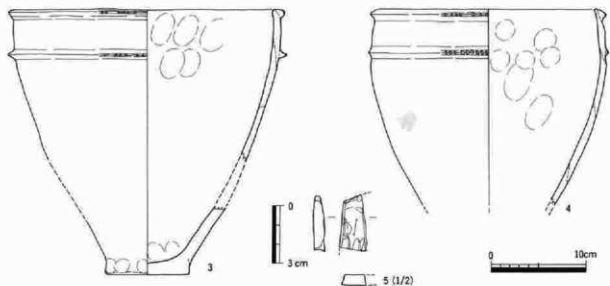


Fig.215 2ST0879出土遺物実測図② (1/4・1/2)



Fig.216 2ST0880出土遺物実測図① (1/2)

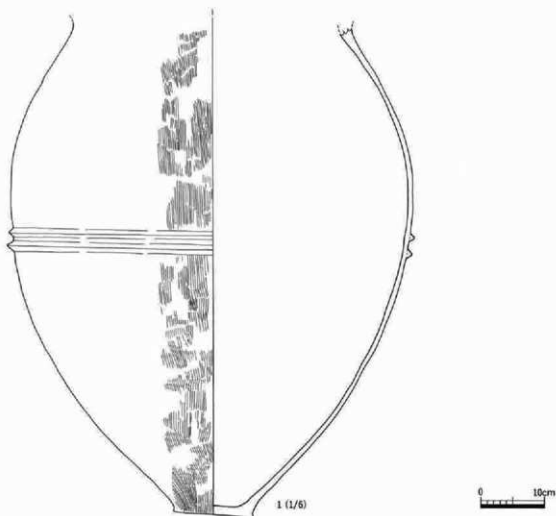


Fig.217 2ST2000出土遺物実測図 (1/6)

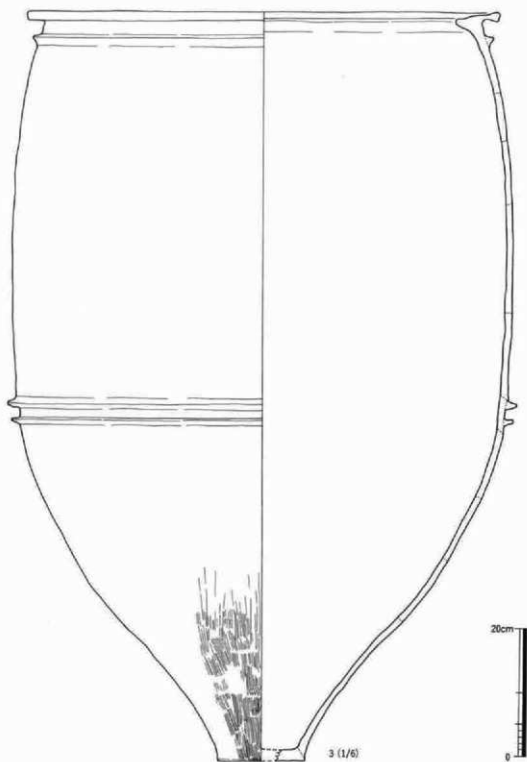


Fig.218 2ST0880出土遺物実測図② (1/6)

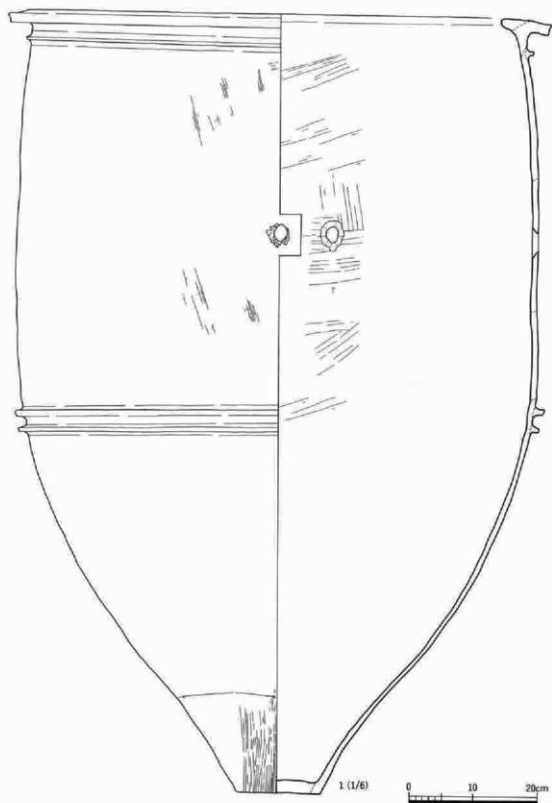


Fig.219 2ST2503出土遺物実測図① (1/6)

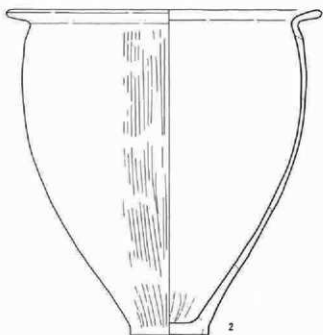


Fig.220 2ST2503出土遺物実測図② (1/4)

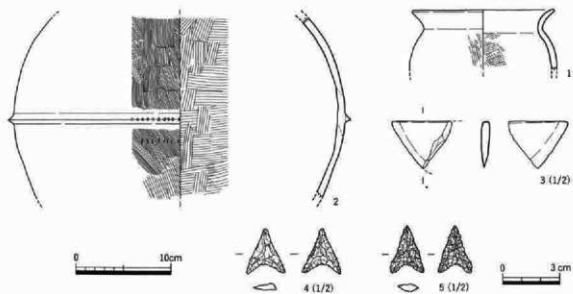


Fig.221 2SX0371出土遺物実測図 (1/4・1/2)

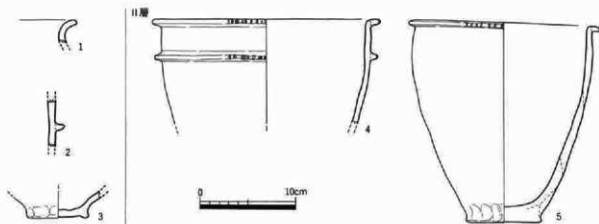


Fig.222 2SD0323出土遺物実測図 (1/4)

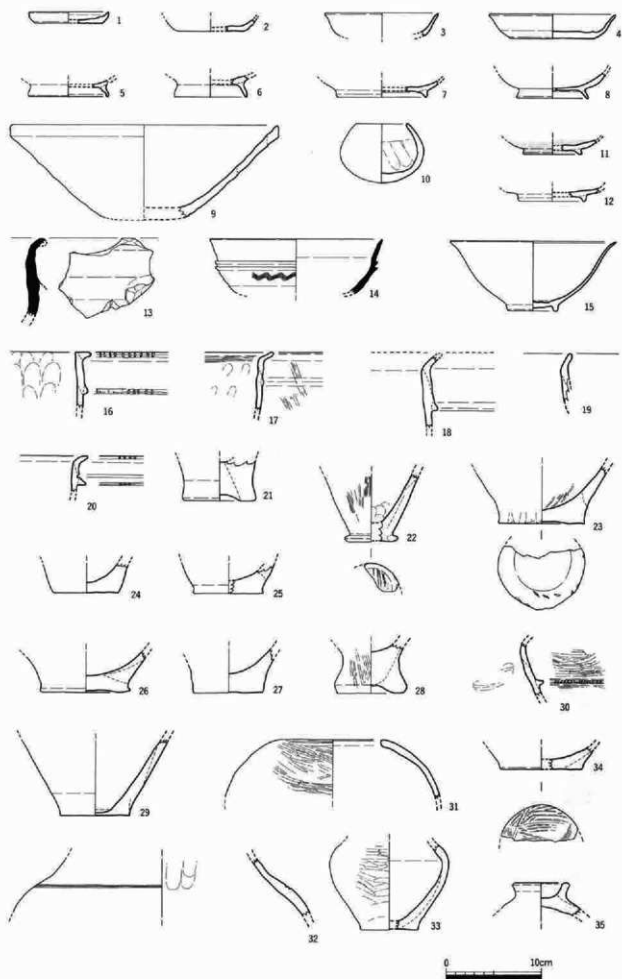


Fig.223 2SD0362出土遺物実測図① (1/4)

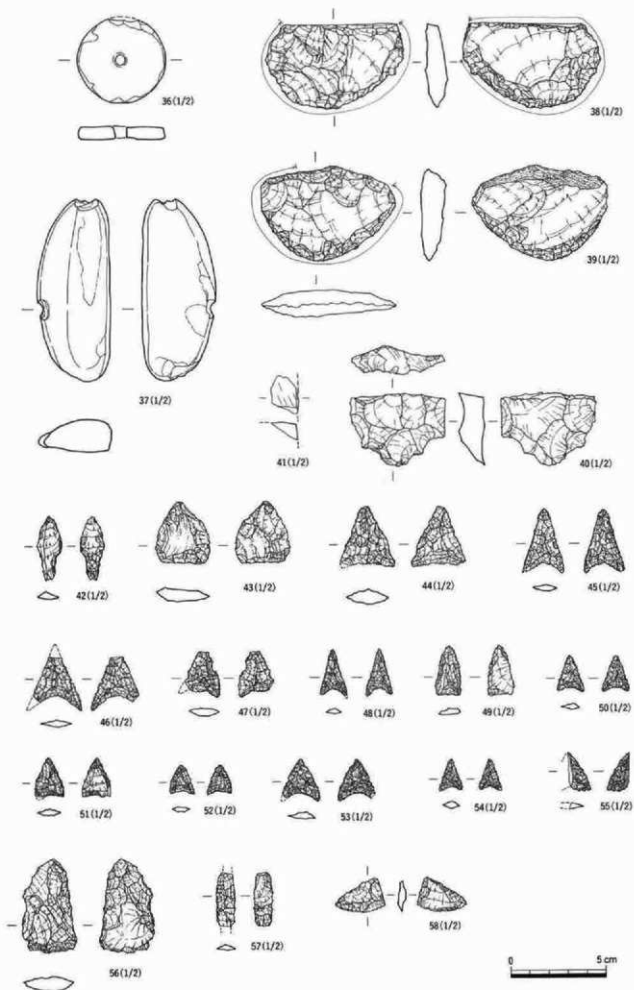


Fig.224 2SD0362出土遺物実測図② (1/2)

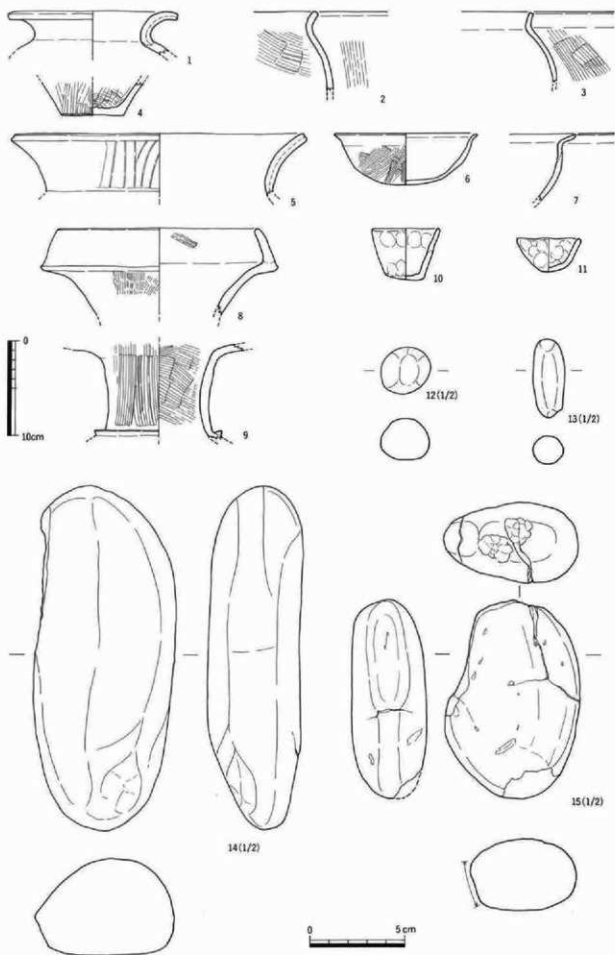


Fig.225 2SD0528出土遺物実測図① (1/4・1/2)

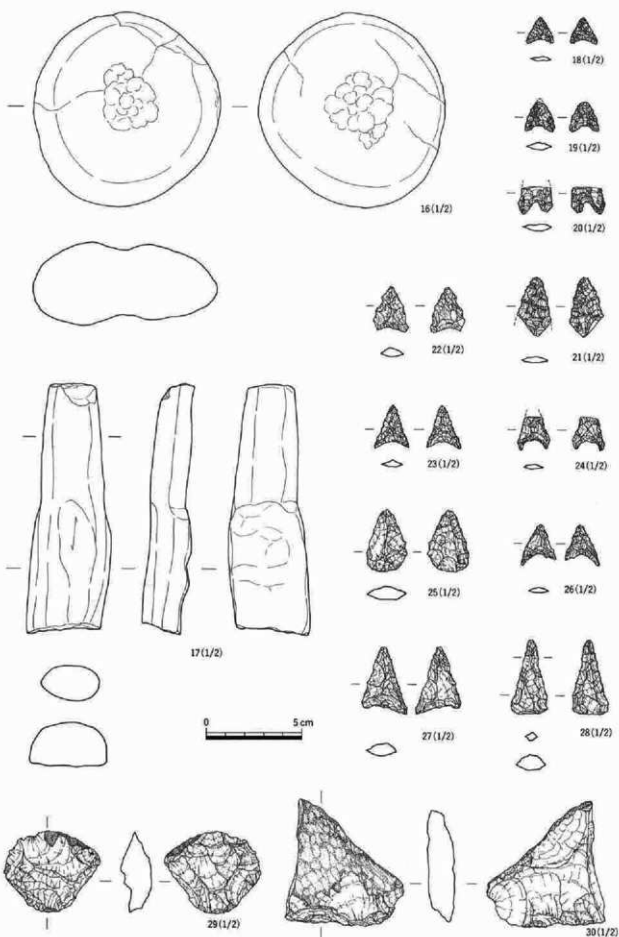


Fig.226 2SD0528出土遺物実測図② (1/2)

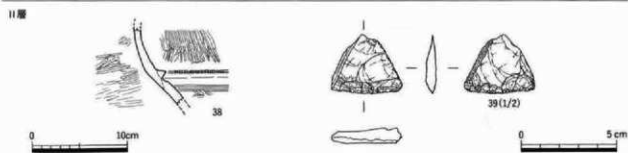
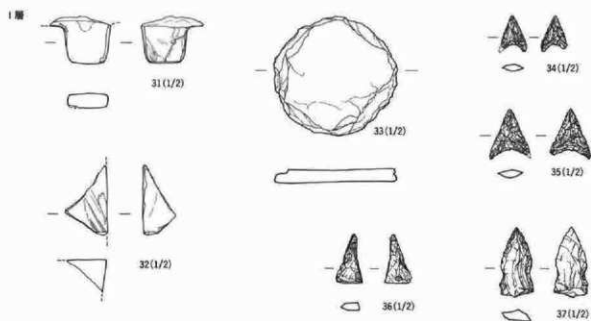


Fig.227 2SD0528出土遺物実測図③ (1/2・1/4)

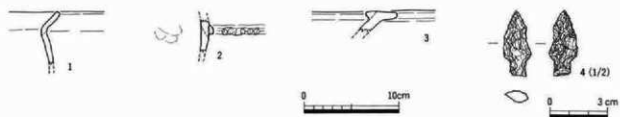


Fig.228 2SD0663出土遺物実測図 (1/4・1/2)

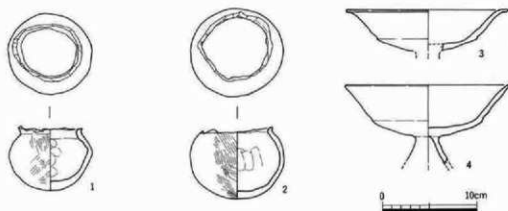


Fig.229 2SD0695出土遺物実測図 (1/4)

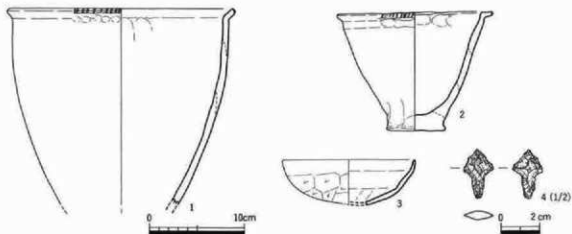


Fig.230 2SD0702出土遺物実測図 (1/4・1/2)

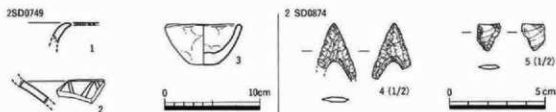


Fig.231 2SD0749・2SD0874出土遺物実測図 (1/4・1/2)



Fig.232 2SE0668出土遺物実測図 (1/4)

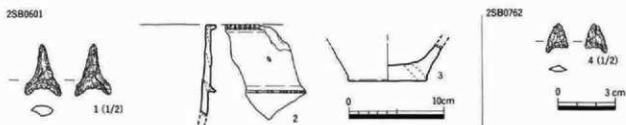


Fig.233 2SB0601・2SB0762出土遺物実測図 (1/2・1/4)

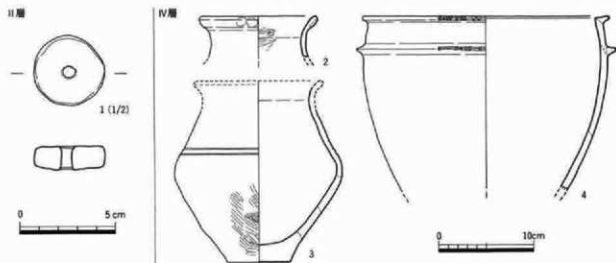


Fig.234 2SK0582出土遺物実測図 (1/2・1/4)

2SK2195出土遺物 (Fig.199・Pla.150)

4は石包丁で、石材は片岩である。大型の半円形のもので、刃部は明瞭な両刃偏刃である。

2SK2197出土遺物 (Fig.199・Pla.135)

6は壺底部である。外底面に初圧痕が1ヶ所認められ、芒かと思われる圧痕もみえる。

2SK2212出土遺物 (Fig.202・Pla.136)

2は須恵器の坏である。蓋の受けが付く類型で、外底面に篋記号がある。

2SI0608出土遺物 (Fig.208・209・Pla.136・137・151)

11は粘板岩製の石包丁である。やや端に偏った部分での観察であるが、刃部は比較的明瞭な両刃偏刃である。

2SI0688出土遺物 (Fig.211・Pla.137・151)

5は土師器の小型丸底壺である。体部は完存するが、口縁部はすべて打ち欠いている。

2ST0879出土遺物 (Fig.214・215・Pla.138・152)

1は上甕である。口縁部は下甕との口を合わせるためか、打かかれている。胴部のやや下位に2条の凸帯を貼付ける。2は下甕。口縁部は大きく窄まり鋸先状としている。上面は平坦である。KⅢa(註3)か。5は扁平片刃石斧である。石材は粘板岩である。

2ST2000出土遺物 (Fig.217・Pla.138)

1は甕棺である。丸みを帯びた器形が特徴の楕形体で、胴部に凸帯を2条貼付ける。

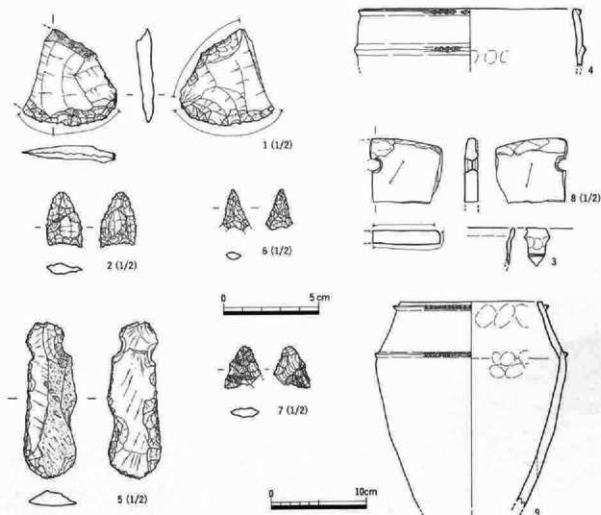


Fig.235 小穴・不明遺構出土遺物実測図 (1/2・1/4)

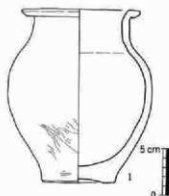


Fig.236 その他の
出土遺物実測図(1/4)

貼り足している。

2SD0528出土遺物 (Fig.225・226・227・Pl.139・154・156・159・160・161)

17は特殊な形状だが、砥石か。石材は砂岩である。31は磨製石剣の基部である。石材は粘板岩で、丁寧に研磨されている。

2SD0695出土遺物 (Fig.229・Pl.140)

1・2は土師器の小型丸底甕である。体部は完存するが、口縁部はすべて打ち欠かれている。

2SB0601出土遺物 (Fig.233・Pl.140・155)

2は甕である。口縁部と胴部に刻目凸帯を貼付ける。2条の凸帯の間の外面に初圧痕が1ヶ所残る。

2SP2219 出土遺物 (Fig.235・Pl.155)

8は粘板岩製の石包丁である。破片を砥石に転用している。携帯用砥石として使用したものか。

2SP2220出土遺物 (Fig.235・Pl.140)

9は凸帯文土器の甕である。体部はやや丸みを帯びるが、粘土の接合は外傾接合である。

その他の出土遺物 (Fig.236・Pl.140)

1は完形の小型甕である。短く直立する頸部に水平まで屈曲させた小さな口縁がつく。器面はナデおよび磨きで丁寧に調整されている。

註1 久留米市教育委員会 富永直樹氏の御教示による。

註2 分類の出典は次のとおり。 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4 1978』所収

註3 分類の出典は次のとおり。 橋口達也「甕棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—X X X I— 福岡県教育委員会 1979』所収



降雪に見舞われた調査区

No.	品名	数量	単位	場所	種類	用途	材質	形状	寸法	重量	備考	出土状況	保存状況	調査者	調査年	備考
1	土器	100	個
2	土器	50	個
3	土器	200	個
4	土器	100	個
5	土器	300	個
6	土器	150	個
7	土器	80	個
8	土器	120	個
9	土器	60	個
10	土器	40	個
11	土器	200	個
12	土器	100	個
13	土器	50	個
14	土器	300	個
15	土器	150	個
16	土器	80	個
17	土器	120	個
18	土器	60	個
19	土器	40	個
20	土器	200	個
21	土器	100	個
22	土器	50	個
23	土器	300	個
24	土器	150	個
25	土器	80	個
26	土器	120	個
27	土器	60	個
28	土器	40	個
29	土器	200	個
30	土器	100	個
31	土器	50	個
32	土器	300	個
33	土器	150	個
34	土器	80	個
35	土器	120	個
36	土器	60	個
37	土器	40	個
38	土器	200	個
39	土器	100	個
40	土器	50	個
41	土器	300	個
42	土器	150	個
43	土器	80	個
44	土器	120	個
45	土器	60	個
46	土器	40	個
47	土器	200	個
48	土器	100	個
49	土器	50	個
50	土器	300	個

Tab.6 出土土器一覽②

No.	品名	規格	単位	数量	用途	仕様	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途	100円換算率	数量換算	用途			
111

Tab.13 出土土器一覽⑩

Fig. No.	遺物番号	部位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	保存	備 考	R. No.	
47	14	25K-0300	II	粘板岩	紡錘車	7.6		0.5	14.2	1/2	穿孔径0.5cm	16	
48	5	25K-0301		土製	紡錘車	6.0		1.2	11.3	1/4		5	
49	15	25K-0302	I	土製	投擲	4.7	2.5	2.5	20.9		ほぼ定形	15	
49	19	25K-0302	III	サヌカイト	多久	織	2.2	2.0	5.0	1.3	両側欠損	19	
49	20	25K-0302	III	サヌカイト	多久	ステレ イブルー	5.0	2.3	1.1	9.9	定形	剥片の再加工	20
51	12	25K-0306		サヌカイト	多久	ステレ イブルー	6.2	5.3	1.2	47.6	定形		26
51	13	25K-0306		黒曜石	贈岳	織	2.7	1.7	0.9	3.2	定形		25
52	11	25K-0307		土製	投擲			3.2	14.5	1/3	敷土は輝石	12	
52	12	25K-0307		粘板岩	扁平片 写石器	3.3	1.6	0.5	5.7		定形	30	
52	13	25K-0307		サヌカイト	多久	織	3.3	2.6	0.7	2.9	定形	28	
52	14	25K-0307		サヌカイト	多久	ステレ イブルー	3.7	2.1	1.0	8.3	定形	29	
52	15	25K-0307		サヌカイト	多久	ステレ イブルー	7.3	4.1	1.9	36.3	定形	31	
52	16	25K-0307		サヌカイト	多久	ステレ イブルー	9.3	5.4	2.0	77.7	定形	32	
52	20	25K-0307	I	黒曜石	贈岳	剥片織	1.7	1.2	0.3	0.5	先端 欠損	33	
52	25	25K-0307	II	サヌカイト	多久	ステレ イブルー	6.0	4.1	1.4	26.4	定形	34	
54	15	25K-0309	III	サヌカイト	多久	ステレ イブルー	5.1	3.2	0.7	8.2	定形	26	
55	32	25K-0309	V	砂岩	砥石	4.7	4.1	2.5	54.1		定形?	35	
57	16	25K-0314			不明	6.3	6.9	2.4	120.8		?	20	
57	17	25K-0314		サヌカイト	多久	織	2.9	1.5	0.4	0.6	両側欠損	21	
59	13	25K-0315		黒曜石	贈岳	織	1.6	1.3	0.3	0.6	両側欠損	13	
62	8	25K-0320		サヌカイト	多久	両面磨	2.4	1.4	0.5	17.0		?	5
63	13	25K-0321		土製	紡錘車	4.0	4.0	1.1	6.9	1/3		13	
63	14	25K-0321		サヌカイト	多久	ドリル	4.9	2.2	0.6	3.9	先端欠損	16	
63	15	25K-0321		サヌカイト	多久	織	2.1	2.0	0.4	1.0	定形	15	
67	5	25K-0341	III	サヌカイト	多久	織	2.3	1.7	0.4	12.0	先端欠損 両側欠損	2	
69	2	25K-0350		土製	紡錘車	3.1	3.1	0.9	9.1		定形 孔径4mm	2	
69	5	25K-0350	III	黒曜石	贈岳	ステレ イブルー	1.3	1.0	0.4	0.9	大部分全 欠損	2	
69	6	25K-0352	II	黒曜石	贈岳	織	1.9	1.6	0.3	0.5	ほぼ定形	1	
70	2	25K-0355		土製	紡錘車	4.8	4.8	1.6	49.0		定形 孔径6mm	2	
70	3	25K-0355		黒曜石	贈岳	不明	2.0	1.3	0.4	0.9	定形	3	
70	4	25K-0355	IV	サヌカイト	多久	織	3.3	1.6	0.6	2.6	定形	1	
70	5	25K-0355	IV	サヌカイト	多久	不明	2.6	2.0	0.9	5.6	定形?	2	
70	8	25K-0355	IV	サヌカイト	多久	有葉織	3.2	1.3	0.4	1.6	両側欠損	1	
72	2	25K-0380		サヌカイト	多久	靱帯 石器	2.7	1.4	0.4	1.7	定形?	2	
72	4	25K-0381		サヌカイト	多久	織	2.3	1.5	0.4	0.9	両側欠損	2	

Tab.23 出土遺物（土器以外）一覧①

Fig. No.	遺構番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	保存	備考	R-№
75	1	25K 0364	土製		投擲	4.5	2.5	2.4	19.6	完形		1
75	2	25K 0365	ヤヌカ イト	多気	尖頭 器?	4.8	1.5	0.6	4.2	完形		1
75	3	25K 0366	ヤヌカ イト	多気	ドリル	2.3	0.9	0.4	1.1	完形		2
75	4	25K 0366	燧石 片削		石包丁	4.2	2.6	0.4	7.8	1/4		3
75	5	25K 0366	I ヤヌカ イト	多気	鏃	2.6	2.1	0.6	2.1	片断欠損		1
75	6	25K 0366	II ヤヌカ イト	多気	鏃	2.0	1.5	0.4	0.8	片断欠損		1
76	1	25K 0369	ヤヌカ イト	多気	鏃	2.5	1.8	0.4	1.5	ほぼ完形		1
76	2	25K 0369	II 鹿沼		尖頭 器?	2.0	1.3	0.6	2.9	基部欠損	鉄付着	1
76	4	25K 0372	黒曜石	腰岳	鏃	1.4	1.2	0.3	0.3	片断欠損		1
76	5	25K 0374	鹿沼		扁平磨 製石片	4.0	2.6	0.8	16.1	完形		1
76	10	25K 0382	I ヤヌカ イト	多気	鏃	1.8	1.7	0.3	0.7	先端欠損		2
76	11	25K 0382	I ヤヌカ イト	多気	鏃	2.0	1.7	0.3	0.7	両断欠損		1
79	9	25K 0391	土製		紡錘車	4.5	4.5	1.4	34.0	完形	孔径0.5cm	9
81	1	25K 0398	黒曜石	腰岳	鏃	2.5	1.7	0.3	0.6	片断欠損		1
81	2	25K 0398	黒曜石	椎葉川	鏃	1.8	1.4	0.4	0.6	先端欠損 片断欠損		2
82	1	25K 0402	砂岩		砥石?	2.9	4.1	1.6	14.6	小片		1
83	12	25K 0405	ヤヌカ イト	多気	スクレ イパー	3.7	3.3	1.8	30.1	完形?		13
83	13	25K 0405	ヤヌカ イト	多気	鏃	2.2	1.7	0.3	0.5	ほぼ完形		12
83	14	25K 0405	ヤヌカ イト	多気	鏃	1.5	1.9	0.5	1.3	完形		14
83	15	25K 0404	ヤヌカ イト	多気	鏃	2.1	1.9	0.4	1.0	先端欠損		1
84	5	25K 0416	土製		紡錘車	4.7	4.7	1.0	22.1	完形	孔径0.5cm	1
85	2	25K 0418	I ヤヌカ イト	多気	鏃	2.1	1.9	0.4	1.1	ほぼ完形		2
86	2	25K 0420	ヤヌカ イト	多気	鏃	1.8	2.2	0.3	1.1	完形		2
86	3	25K 0420	黒曜石	腰岳	鏃	2.9	1.5	0.3	0.6	完形		3
86	4	25K 0422	ヤヌカ イト	多気	鏃	1.7	0.8	0.3	0.4	両断欠損	未製品?	1
88	3	25K 0423	土製		投擲	3.5	1.8	1.8	8.7	完形	胎土に白色粒子・黒色粒子・金雲母を含む	2
88	4	25K 0423	土製		投擲	12.0	2.5		12.0	1/2	胎土に白色粒子・黒色粒子・金雲母を含む	3
88	5	25K 0423	土製		粘土塊	2.4	2.6	1.6	8.2	完形	胎土に白色粒子・雲母を含む	4
88	6	25K 0423	粗版岩	?	柱状片 刃石片	3.2	1.8	2.0	14.8	小片	砥石に磨利用	8
88	7	25K 0423	ヤヌカ イト	多気	スクレ イパー	5.4	3.6	1.2	19.9	完形		6
88	8	25K 0423	ヤヌカ イト	多気	スクレ イパー	6.8	4.7	1.3	42.9	完形		7
88	9	25K 0423	ヤヌカ イト	多気	スクレ イパー	7.2	4.4	1.4	38.8	完形		10
88	10	25K 0423	ヤヌカ イト	多気	鏃	3.2	3.0	0.8	16.6	完形?		9
88	11	25K 0423	I 土製		投擲	4.0	2.2		11.7	3/4	胎土に白色粒子・雲母を含む	1
88	13	25K 0423	II ヤヌカ イト	多気	鏃	2.6	2.8	0.4	1.9	先端欠損 片断欠損		1

Tab.24 出土遺物（土器以外）一覽②

Fig. No.	遺物番号	層位	素材	形状	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	R-No.	
88	14	258-0423	Ⅲ	サヌカイト	多角	縦型石匙	4.3	1.7	0.6	4.0	完形?	2	
88	15	258-0423	Ⅳ	サヌカイト	多角	ドリル	3.9	1.8	0.4	1.9	完形	3	
88	16	258-0423	Ⅳ	サヌカイト	多角	スケレ イバー	6.0	4.2	1.1	27.4	完形	2	
89	25	258-0423	V	サヌカイト	多角	鏝	3.2	2.3	0.5	2.9	完形	8	
90	3	258-0423		土製	投擲	4.7	2.5	2.5	22.1	完形	黒色砂子・金質母を含む	3	
90	4	258-0423		土製	投擲	2.6	2.0		11.9	一箇欠損	黒色砂子・白色砂子・金質母を含む	4	
91	1	258-0426		サヌカイト	多角	鏝	2.8	2.2	0.7	3.6	完形		1
91	2	258-0426		サヌカイト	多角	鏝	2.2	1.3	0.4	0.8	完形		2
91	3	258-0426		サヌカイト	多角	有茎鏝	4.0	2.2	0.6	2.8	完形		3
91	4	258-0426	Ⅱ	サヌカイト	多角	鏝	2.0	2.8	0.4	0.9	完形		1
92	2	258-0428	Ⅲ	磁器		不明	3.0	2.3	2.0	16.6	?		1
93	1	258-0431		片岩	磨製石鏝	11.2	3.8	0.5	21.0	片断欠損		3	
94	2	258-0432	Ⅳ	土器片	瓶子	4.0	4.1	0.6	12.9	完形		2	
95	3	258-0434		サヌカイト	多角	尖頭錐 木製品	4.0	2.0	1.2	9.0	完形		3
96	4	258-0434		砂岩	磨製石斧	7.0	4.8	2.4	184.4	基部のみ		5	
96	5	258-0434		黒曜石	磨削	鏝	1.7	1.5	0.4	0.5	完形		4
96	6	258-0434	I	黒曜石	磨削	鏝	1.6	1.5	0.4	0.5	先端部のみ		1
96	10	258-0434	Ⅱ	黒曜石	何物?	鏝	2.8	2.2	0.7	2.2	完形		1
98	10	258-0435	Ⅷ	土製	紡錘車	4.4	4.4	1.5	29.5	完形	粘土に金質母を含む	7	
98	11	258-0435	Ⅷ	土製	紡錘車	2.6	2.6	0.6	7.0	完形	粘土に金質母を含む	8	
99	1	258-0436		玄武岩	磨製石斧	7.2	7.7	3.1	28.5	刀部のみ		4	
100	8	258-0439		土製	把手	4.3	2.6	1.3	11.7	把手のみ	粘土に角閃石を含む	10	
100	9	258-0437		土製	紡錘車	3.9	3.9	1.1	32.3	完形		8	
100	10	258-0437		土製	投擲	4.7	2.5		12.3	1/2		9	
100	11	258-0437		黒曜石	磨削	鏝	2.1	1.5	0.5	1.1	完形	再加工品か?	13
100	12	258-0437		黒曜石	磨削	鏝	2.2	2.1	0.3	1.0	完形		12
100	13	258-0437		石蓋	コア	6.9	4.6	1.7	61.1	?		11	
101	7	258-0438		サヌカイト	多角	スケレ イバー	6.5	4.3	1.4	36.2	完形		8
101	8	258-0438		サヌカイト	多角	鏝	1.8	1.2	0.3	0.4	完形		7
102	8	258-0439		サヌカイト	多角	鏝	1.8	1.5	0.4	0.7	先端欠損		8
103	2	258-0440		サヌカイト	多角	鏝	2.6	1.1	0.4	1.1	完形		2
103	3	258-0440		サヌカイト	多角	鏝	1.2	1.3	0.4	1.3	基部欠損		3
103	4	258-0440		粘板岩	砥石	2.6	2.7	1.3	14.0	断片		4	
103	5	258-0440	Ⅷ	玄武岩	磨製石斧	11.1	7.0	4.2	608.0	刃部欠損		2	
104	6	258-0440	I	サヌカイト	多角 以外	鏝	2.0	1.6	0.3	0.7	片断欠損		1

Tab.25 出土遺物（土器以外）一覽③

Fig. No.	遺物番号	部位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	保存	備考	R-No.	
104	7	25X 0440	土製	多気	壺	2.7	1.5	0.8	3.0	?		1	
104	8	25X 0440	V	片岩	輪脚蓋	5.0	4.4	0.4	10.6	1/2	切り込み(取付痕?) 1ヶ所有	1	
105	2	25X 0441		土製	輪脚蓋	5.2	5.2	1.0	34.7	完好	孔径0.5cm	2	
107	8	25X 0448		片岩	石包丁	7.1	5.3	0.4	15.9	1/2		12	
107	9	25X 0448		ヤスカイト	多気	ドボル	3.2	2.3	0.4	2.9	先端欠損		10
107	10	25X 0448		ヤスカイト	多気	スケレイバー	3.3	2.4	0.6	4.7	完好		8
107	11	25X 0448		ヤスカイト	多気	鏃	2.0	1.9	0.5	1.2	片脚欠損		11
108	5	25X 0451		ヤスカイト	多気 以外	ドボル	3.2	1.5	1.1	4.5	完好		9
108	6	25X 0451		ヤスカイト	多気	ドボル	2.8	2.3	0.7	4.8	先端欠損		10
108	7	25X 0451		ヤスカイト	多気	ドボル	4.1	1.3	0.8	2.8	完好		8
108	8	25X 0451		ヤスカイト	多気	鏃	2.3	1.7	0.3	0.7	片脚欠損		7
108	9	25X 0451		黒曜石	磨石	鏃	2.2	1.9	0.4	1.1	片脚欠損		5
108	10	25X 0451		ヤスカイト	多気	鏃	1.2	1.7	0.3	0.5	先端欠損		6
108	11	25X 0451		ヤスカイト	多気	スケレイバー	5.4	2.5	1.3	23.8	完好		11
108	12	25X 0451		黒島 片岩	石包丁	6.0	4.9	0.7	37.3	1/2	未製品か?	12	
108	13	25X 0451		輪脚蓋	石包丁	8.3	4.1	0.8	42.0	完好	両刃 数線痕有	12	
110	2	25X 0453		土製	輪脚蓋	4.6	4.6	1.0	22.9	ほぼ完好	孔径0.4cm	2	
110	3	25X 0453		ヤスカイト	多気 以外	スケレイバー	6.9	4.7	1.5	50.6	完好		3
110	4	25X 0453		砂岩	砥石	6.0	6.0	2.4	112.7	?		4	
110	9	25X 0453	IV	輪脚蓋	?	柱状片 刃石等	4.4	4.7	2.2	49.6	一部残存		7
112	3	25X 0461		ヤスカイト	多気	鏃	4.3	1.1	0.5	2.3	?		1
112	4	25X 0462		土製	投擲	5.2	2.6	2.6	20.6	完好		1	
112	5	25X 0479		ヤスカイト	多気	鏃	2.2	1.9	0.4	0.7	片脚欠損		1
113	3	25X 0492		ヤスカイト	多気	鏃	1.6	1.5	0.2	0.5	完好		1
115	7	25X 0502		ヤスカイト	多気	スケレイバー	4.5	4.6	0.8	22.0	完好		8
115	8	25X 0502		黒曜石	磨石	砥石	2.0	0.6	0.2	0.3	完好		7
116	6	25X 0506		ヤスカイト	多気	鏃	1.9	1.9	0.3	1.0	完好		6
117	4	25X 0507		輪脚蓋	?	柱状片 刃石等	10.2	5.2	0.9	66.3	?		4
118	1	25X 0510		玄武岩	今山	石鏃	3.6	3.2	0.6	7.2	完好	磨製石首の再加工か?	1
118	2	25X 0517		ヤスカイト	多気	鏃	3.8	2.3	0.7	4.8	完好		1
118	3	25X 0519		ヤスカイト	多気	鏃	3.9	2.0	0.9	6.7	完好		2
118	4	25X 0519		ヤスカイト	多気	スケレイバー	4.2	4.1	0.8	20.9	定形?		1
119	5	25X 0524		ヤスカイト	多気	スケレイバー	7.3	6.1	2.3	92.1	完好		6
119	6	25X 0524		ヤスカイト	多気	スケレイバー	7.9	7.0	1.5	81.3	完好		5
119	7	25X 0524		ヤスカイト	多気	鏃	1.9	1.6	0.2	0.5	先端欠損		7

Tab.26 出土遺物(土器以外)一覧④

Fig. No.	遺物番号	部位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	形状	備考	R-No.
119	9	25K-0024	テヌカ イト	多久	竊	2.5	1.2	0.4	0.8	完形		8
119	10	25K-0024	XI 土製		紡錘車	3.3	2.3	1.0	15.4	完形	孔径0.4cm	1
121	1	25K-0025	テヌカ イト	多久	スケレ イパー	6.5	4.4	1.6	49.5	完形		1
121	2	25K-0025	安山岩	明き石		11.0	8.0	6.2	163.0	完形?		3
121	3	25K-0025	砂岩		砥石	9.1	5.9	2.0	141.8	小片		2
121	5	25K-0025	I 煎礫石	鎌岳	竊	1.7	1.9	0.3	0.9	先端欠損 両脚欠損		2
121	6	25K-0025	I テヌカ イト	多久	竊	2.3	2.0	0.6	1.9	両脚欠損		3
121	7	25K-0025	II テヌカ イト	多久	竊	1.9	1.4	0.3	0.6	片脚欠損		4
121	8	25K-0025	II テヌカ イト	多久	竊	2.0	1.7	0.7	1.2	完形		3
121	9	25K-0025	II 土製		投擲	4.1	2.0	2.0	10.4	ほぼ完形	胎土は解貝	2
122	5	25K-0029	テヌカ イト	多久	ドリル	3.7	1.3	0.4	1.2	完形		2
122	6	25K-0030	テヌカ イト	多久	スケレ イパー	2.7	1.6	0.4	1.8	完形		1
123	11	25K-0040	テヌカ イト	多久	竊	2.1	1.5	0.3	0.7	片脚欠損		13
123	12	25K-0040	テヌカ イト	多久	竊	2.0	2.4	0.4	1.7	完形		12
123	13	25K-0040	泥岩		石包丁	5.7	4.1	0.7	22.0	1/3	両刀鎌刃 磨蝕痕有	11
124	10	25K-0451	土製		投擲	2.6	2.8	1.7	12.7	1/3		1
124	11	25K-0451	土製		菓子	2.5	2.9	0.6	6.7	完形?		2
124	12	25K-0541	テヌカ イト	多久 以外	竊	1.7	1.1	0.4	0.4	先端欠損 両脚欠損		17
124	13	25K-0541	テヌカ イト	多久	竊	2.2	1.7	0.4	0.9	両脚欠損		18
124	14	25K-0541	テヌカ イト	多久	竊	2.4	2.1	0.3	0.9	片脚欠損		13
124	15	25K-0541	テヌカ イト	多久	竊	1.5	2.0	0.5	1.0	完形		19
124	16	25K-0541	テヌカ イト	多久	スケレ イパー	6.9	4.6	0.6	19.2	完形		12
124	17	25K-0541	泥岩		紡錘車	2.7	2.6	0.7	5.9	1/6		14
124	18	25K-0541	片岩		石包丁	4.5	4.3	0.6	12.3	1/3	未製品	16
124	19	25K-0541	煎礫石	鎌岳	針針	3.5	1.1	0.5	1.4	完形?		15
124	20	25K-0541	安山岩	明き石		8.1	8.1	3.9	360.0	完形		20
125	17	25K-0552	テヌカ イト	多久	スケレ イパー	3.3	2.5	1.3	15.9	完形		17
125	23	25K-0552	土製		投擲	5.6	2.6	2.6	31.6	完形		5
126	2	25K-0542	粘板岩		石包丁	6.6	5.4	0.5	32.6	1/2	両刀	6
126	3	25K-0542	テヌカ イト	多久	竊	3.2	2.4	0.4	1.6	片脚欠損		4
126	4	25K-0542	テヌカ イト	多久	ドリル	5.6	2.0	0.7	6.2	完形?		3
126	5	25K-0542	片岩		不明	5.3	3.5	0.6	22.5	完形?		5
126	6	25K-0542	土製		投擲	4.6	2.4	2.4	19.6	ほぼ完形	胎土に褐色粒子を含む	1
127	1	25K-0543	テヌカ イト	多久	竊	2.6	2.0	0.6	2.3	片脚欠損		1
127	2	25K-0543	テヌカ イト	多久	ドリル	3.4	2.0	0.8	4.0	完形		2

Tab.27 出土遺物（土器以外）一覧⑤

Fig. No.	遺物番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	保存	備考	R-No.	
129	8	25X 0558		片岩		石包丁	4.3	1.8	0.4	2.7	刃部のみ	両刀鎌刀	12
129	9	25X 0558		粘板岩	ウ	柱状片 刃石斧	7.5	2.3	1.8	44.7	ウ		10
129	10	25X 0558		サヌカ イト	多爪	鎌	2.8	3.2	0.5	1.7	完形		13
129	11	25X 0558		サヌカ イト	多爪	鎌	2.8	1.9	0.3	1.2	片断欠損		11
129	12	25X 0558		サヌカ イト	多爪	鎌	2.6	1.7	0.3	1.1	片断欠損		8
129	13	25X 0558		サヌカ イト	多爪	鎌	2.0	1.6	0.3	0.9	片断欠損		9
130	20	25X 0558	1	片岩		石包丁	6.8	4.0	0.5	18.1	1/3	両刀鎌刀	8
130	21	25X 0558	1	片岩		粘板岩	6.3	2.4	0.3	7.7	1/2	復元遺物 5cm	9
130	22	25X 0558	1	サヌカ イト	多爪	鎌	2.7	2.0	0.5	1.7	完形		7
131	4	25X 0577		玄武岩		磨製 石斧	14.6	7.1	3.3	550.8	基部と刃 部欠損		1
131	10	25X 0580		土製		投擲	3.4	2.3	0.9	6.4	1/4		5
131	11	25X 0580		サヌカ イト	多爪	鎌	2.2	1.7	0.4	1.1	片断欠損		7
131	12	25X 0582	1	サヌカ イト	多爪	鎌?	2.2	1.8	0.3	1.1	ウ	未製品?	2
131	13	25X 0582	1	サヌカ イト	多爪	鎌	2.5	1.7	0.4	1.1	片断欠損		1
132	4	25X 0586		サヌカ イト	多爪	鎌	2.8	1.8	0.7	2.2	完形		4
132	5	25X 0587		サヌカ イト	多爪	鎌	2.5	1.9	0.6	2.8	片断欠損		2
132	6	25X 0587		粘板岩		扁平片 刃石斧	5.3	0.9	1.4	12.0	基部と刃 部欠損		1
132	13	25X 0591		土製		投擲	3.6	1.8	1.8	8.9	完形		5
132	14	25X 0591		黒曜石	磨治	鎌	2.0	1.7	0.3	1.2	先端欠損		6
132	15	25X 0596		サヌカ イト	多爪	鎌	2.2	1.6	0.3	0.8	先端欠損 片断欠損		2
132	17	25X 0595		サヌカ イト	多爪	鎌	1.6	1.4	0.4	0.9	完形		1
135	1	25X 0598		玄武岩		石斧?	8.8	8.1	2.0	142.9	基部片		3
135	2	25X 0598		片岩		石包丁	4.4	3.2	0.4	6.5	刃のみ		1
135	3	25X 0598		黒曜石	磨治	鎌	1.8	1.6	0.3	0.5	片断欠損		2
135	4	25X 0599		サヌカ イト	多爪	剃片	7.6	3.0	1.3	23.5	完形		1
136	2	25X 0610		サヌカ イト	多爪	ドリル	3.6	1.1	0.6	2.2	完形		2
136	3	25X 0610		サヌカ イト	多爪	鎌	2.7	1.8	0.5	1.4	完形		3
136	4	25X 0611		黒曜石	磨治	剃針?	3.9	1.2	0.2	1.1	完形?		2
136	5	25X 0611		黒曜石	磨治	鎌	1.7	1.3	0.4	0.5	片断欠損		1
136	8	25X 0621		サヌカ イト	多爪 以外	スクレ ンイバー	3.8	2.9	1.3	12.0	完形		1
138	11	25X 0675		サヌカ イト	多爪	鎌	3.7	1.8	0.3	2.0	完形		11
140	12	25X 0676		緑岩		ドリル	6.5	5.7	2.2	65.4	完形		16
140	13	25X 0676		安山岩		礫石	15.0	10.8	5.4	1033.0	ウ		15
140	14	25X 0676		片岩		粘板岩	6.3	3.9	0.5	23.6	1/2	未製品	14
140	15	25X 0676		サヌカ イト	多爪	鎌	2.6	1.6	0.2	1.2	完形		13

Tab.28 出土遺物（土器以外）一覧⑥

Fig. No.	遺物番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	形状	備考	Fig. No.
141	1	25X 0677	ウスカイト	多気	スクレイパー	6.9	4.5	1.3	39.6	両端欠損		1
141	3	25X 0680	ウスカイト	多気	スクレイパー	5.5	3.7	1.7	30.8	完形		3
141	4	25X 0680	ウスカイト	多気	鏃	3.6	1.4	0.6	3.3	完形		4
141	5	25X 0680	ウスカイト	多気	鏃	2.1	1.6	0.4	0.7	片側欠損		5
141	6	25X 0680	土製		投擲	3.9	2.2	1.5	11.7	1/2		2
142	5	25X 0697	ウスカイト	多気	鏃	2.0	1.3	0.3	0.7	片側欠損		3
142	6	25X 0697	黒曜石	藤原	鏃	2.5	1.5	0.4	1.0	完形		5
142	7	25X 0697	ウスカイト	多気	鏃	2.0	1.6	0.4	1.1	完形		4
143	4	25X 0743	土製		不明	6.4	6.2	3.2	161.2	?	焼成前穿孔有 細小?	2
144	4	25X 0745	緑泥片岩	八女	石包丁	11.4	6.0	0.7	74.5	両端欠損	両方端刃 鋭利残有	4
145	1	25X 0746	ウスカイト	多気	鏃	3.1	1.1	0.4	1.5	完形		1
145	3	25X 0765	ウスカイト	多気	尖頭器	2.9	1.4	0.5	2.4	完形		3
145	8	25X 0800	黒曜石	藤原	鏃	2.2	1.8	0.3	0.9	完形		11
150	1	25X 0806	ウスカイト	多気	スクレイパー	2.3	2.0	0.6	1.8	完形		1
150	5	25X 0830	ウスカイト	多気	鏃	2.9	2.4	0.5	2.1	片側欠損		3
151	1	25X 0843	砂岩		礫石	13.1	5.9	5.8	650.0	部分		3
153	4	25X 0850	安山岩		磨製石斧	12.4	7.2	3.6	580.0	基部欠損		4
153	5	25X 0850	黒曜石	藤原	鏃	2.0	1.6	0.4	1.2	完形?		6
153	6	25X 0850	黒曜石	藤原	ナイフ	2.6	1.0	0.4	1.3	完形?		5
154	7	25X 0872	ウスカイト	多気	スクレイパー	5.2	3.4	1.3	26.2	完形?		2
154	8	25X 0873	ウスカイト	多気以外	鏃	1.3	1.6	0.2	0.4	先端欠損 片側欠損		1
156	18	25X 0878	片岩		石包丁	8.7	5.9	0.7	41.9	1/2		19
156	19	25X 0878	砂岩		礫石	7.6	7.1	2.3	158.0	?		20
157	2	25X 0881	ウスカイト	多気	鏃	2.0	0.9	0.3	0.4	片側欠損		2
158	1	25X 0907	ウスカイト	多気以外	鏃	2.1	2.0	0.3	0.9	先端欠損	アメリカ型石鏃	1
158	3	25X 0911	ウスカイト	多気	鏃	3.0	2.2	0.3	1.7	片側欠損		1
161	1	25X 0916	ウスカイト	多気	鏃	3.3	3.0	0.6	3.3	片側欠損		1
161	2	25X 0920	黒曜石	藤原	磨石刀	1.1	0.6	0.2	0.1	両端欠損		1
161	5	25X 0923	ウスカイト	多気	ドリル	3.6	1.3	0.7	3.6	完形?		1
162	8	25X 0950	ウスカイト	多気以外	鏃	2.0	1.7	0.4	0.7	両端欠損		5
164	2	25X 0957	ウスカイト	多気	ドリル	3.9	2.6	0.7	4.3	完形?		2
164	5	25X 0963	ウスカイト	多気	鏃	1.8	1.6	0.4	1.0	完形?		1
164	6	25X 0969	ウスカイト	多気	尖頭器	2.3	1.0	0.7	1.4	完形?		1
164	7	25X 0972	ウスカイト	多気	スクレイパー	2.9	1.4	0.6	2.5	完形		1
164	10	25X 0979	ウスカイト	多気以外	鏃	2.3	1.5	0.4	0.7	片側欠損		4

Tab.29 出土遺物（土器以外）一覧①

Fig.	No.	遺物番号	部位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	状態	備考	R-%
145	4	208-0981	アスカ カイト	多久	畿	鏝	1.8	1.7	0.3	0.5	完形		4
145	5	208-0984	黒曜石	榎葉川	削片鏝	3.4	1.6	0.5	3.5	完形?		1	
146	6	208-0989	アスカ カイト	多久	スクレ イバー	6.1	3.4	1.4	37.5	完形		6	
147	4	208-0993	アスカ カイト	多久	畿	鏝	3.9	2.3	0.7	3.3	完形		1
147	7	208-2004	アスカ カイト	多久	石刀	2.1	1.1	0.3	0.9	片断欠損		1	
147	8	208-2006	アスカ カイト	多久	畿	鏝	2.2	1.6	0.3	0.9	片断欠損		1
149	8	208-2008	土製		粘刺棒	3.3	3.4	1.4	16.9	完形		8	
149	9	208-2008	アスカ カイト	多久 以外	畿	鏝	1.8	1.4	0.3	0.6	完形		9
149	10	208-2008	黒曜石	藤原	畿	鏝	1.7	1.6	0.4	0.9	片断欠損		11
149	11	208-2008	黒曜石	藤原	スクレ イバー	3.0	2.1	0.8	4.2	完形		12	
149	12	208-2008	アスカ カイト	多久	スクレ イバー	4.2	3.6	1.1	16.2	完形		16	
172	1	208-2009	黒曜石	藤原	ドリ ルヤ	2.0	1.1	0.3	1.0	完形?		1	
172	2	208-2009	アスカ カイト	多久	石刀	2.4	0.9	0.3	0.9	片断欠損		2	
173	13	208-2013	粘板岩		石包丁	6.7	8.7	66.7	66.7	1/4		15	
174	14	208-2013	片岩		石包丁	3.3	3.7	0.8	22.3	1/4	両刃	14	
174	15	208-2013	アスカ カイト	多久	ドリル	3.2	1.8	0.8	3.2	完形?		13	
178	5	208-2021	片岩		石包丁	6.6	8.6	6.7	30.4	1/2	両刃鎌刀?	5	
179	7	208-2025	アスカ カイト	多久 以外	畿	鏝	2.4	1.2	0.2	0.4	片断欠損		7
179	8	208-2025	黒曜石	阿蘇守	畿	鏝	1.9	1.8	0.4	1.3	片断欠損		8
184	7	208-2049	片岩		磨製 石剣	3.1	4.4	0.8	16.6	柄のみ		1	
188	6	208-2097	アスカ カイト	多久	畿	鏝	3.0	1.5	0.3	1.5	3/5		2
188	7	208-2099	黒曜石	藤原	スクレ イバー	2.3	1.7	0.2	1.3	?		2	
188	8	208-2099	アスカ カイト	多久	ドリル	3.4	1.7	1.1	3.4	完形	先端に使用痕有	1	
188	10	208-2120	アスカ カイト	多久	畿	鏝	2.2	1.9	0.3	0.9	片断欠損		2
188	11	208-2120	アスカ カイト	多久	畿	鏝	1.9	1.5	0.2	1.1	完形?		1
191	1	208-2151	黒曜石	藤原	ドリ ルヤ	3.1	1.7	0.5	1.8	完形?		1	
191	2	208-2154	アスカ カイト	多久	スクレ イバー	6.4	4.0	1.6	48.2	完形		1	
192	4	208-2160	砂岩		磨石	7.5	3.5	3.0	182.6	?		4	
192	3	208-2164	土製		粘刺棒	4.1	4.1	0.8	16.0	一部欠損		1	
196	1	208-2167	アスカ カイト	多久	畿	鏝	2.7	1.7	0.4	1.1	完形		1
196	2	208-2167	アスカ カイト	多久 以外	石核	7.3	3.2	1.6	62.4	完形?		2	
196	4	208-2168	アスカ カイト	多久	畿	鏝	2.8	1.3	0.4	1.1	完形		2
199	2	208-2190	アスカ カイト	多久	スクレ イバー	6.3	4.1	0.5	13.4	片断欠損		2	
199	4	208-2195	片岩		石包丁	9.4	7.7	0.5	41.8	1/2割	両刃鎌刀	2	
199	5	208-2195	黒曜石	藤原	畿	4.3	2.3	0.5	3.4	片断欠損		1	

Tab.30 出土遺物（土器以外）一覧⑧

Fig. No.	遺物番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	状態	備考	頁No.	
203	5	25X 2205		粘板岩	粘板岩	4.3	4.3	0.6	16.4	完形	未製品 穿孔は未貫通 石材の中に石質の層がある	3	
204	1	25I 2300	P736	黒曜石	腰皿	鎌字	1.6	1.2	0.6	1.0	完形?	1	
204	2	25I 2300	P742	サヌカイト	多欠	鎌	2.7	2.3	0.3	1.7	完形	1	
204	3	25I 2300	P804	サヌカイト	多欠	ドリル	3.8	1.6	0.7	5.2	先端欠損	1	
204	4	25I 2300	P807	サヌカイト	多欠	鎌	1.8	2.0	0.3	0.6	先端欠損	1	
204	5	25I 2300	P824	黒曜石	腰皿	ドリル	3.0	1.6	0.6	2.0	完形	1	
204	6	25I 2300	P824	サヌカイト	多欠	鎌	2.1	2.0	0.4	1.4	完形	2	
204	7	25I 2300	P832	サヌカイト	多欠	スクレイパー	2.9	2.0	0.4	2.2	完形	1	
204	8	25I 2300	P834	サヌカイト	多欠	スクレイパー	2.5	2.5	0.5	4.2	完形	1	
204	9	25I 2300	P1063	サヌカイト	多欠	ドリル	4.5	2.6	0.7	4.9	完形	尖鋭部小?	1
205	1	25I 2310	P867	サヌカイト	多欠	鎌	2.3	0.9	0.2	0.4	完形	1	
206	1	25I 2320	P700	土製	穿孔 円盤	5.5	2.8	1.1	14.1	1/3	直径径6.0cm 穿孔径6.5cm 粘土には質粒を含む	1	
206	2	25I 2320	P719	サヌカイト	多欠	鎌	2.2	1.9	0.4	1.2	先端欠損 両側欠損	1	
206	3	25I 2320	P722	サヌカイト	多欠	石槍状 石鏃	3.3	1.0	0.4	1.3	完形?	1	
206	4	25I 2320	P870	黒曜石	阿波?	鎌字	1.9	2.0	0.6	2.8	?	1	
207	2	25I 0606		黒曜石	腰皿	刺片鏃	2.3	2.1	0.3	1.1	?	4	
207	3	25I 0606		サヌカイト	多欠	鎌	2.2	1.5	0.2	0.6	片鏃欠損	2	
207	4	25I 0606		サヌカイト	多欠	鎌	2.9	2.3	0.3	1.2	先端欠損	3	
207	5	25I 0606	II	土製	投擲	2.9	2.0	2.2	16.8	2/3		1	
207	6	25I 0606	P890	サヌカイト	多欠	尖鋭部?	4.6	2.4	0.3	3.4	完形	1	
209	11	25I 0608		粘板岩		石包丁	5.0	3.2	0.6	9.4	1/4	両刃磨刃	13
209	12	25I 0608		粘板岩		石包丁	4.4	3.7	0.4	12.8	1/6		15
209	13	25I 0608		片岩		石包丁	10.1	7.7	0.8	98.0	1/2	未製品	14
209	14	25I 0608		黒曜石	腰皿	鎌	1.7	1.6	0.2	0.5	片鏃欠損	12	
209	15	25I 0608		土製	粘板岩	4.0	4.0	0.6	16.5	一部欠損		11	
209	17	25I 0608	I	サヌカイト	多欠	石刀	4.3	0.8	0.2	1.4	完形?	3	
209	18	25I 0608	I	サヌカイト	多欠	ドリル	3.2	1.9	0.5	2.6	先端欠損	2	
210	2	25I 0609		サヌカイト	多欠 以外	鎌	2.4	1.2	0.4	1.2	片鏃欠損	2	
211	6	25I 0608		サヌカイト	多欠	スクレイパー	4.9	3.8	1.7	24.9	完形	6	
213	5	25I 0613	I	サヌカイト	多欠	鎌	2.5	1.4	0.5	1.6	一部欠損	2	
213	6	25I 0613	I	サヌカイト	多欠	鎌	2.5	1.4	0.3	0.9	完形	1	
215	5	25I 0679		粘板岩		扁平片 刃石斧	2.9	1.4	0.6	4.0	?	5	
216	1	25I 0680		サヌカイト	多欠 以外	鎌	2.3	2.1	0.6	2.2	先端欠損	3	
216	2	25I 0680		石膏		鎌	1.9	1.8	0.3	0.7	完形	2	
221	3	25X 0371		結晶 片岩		石包丁	3.2	2.6	0.4	3.7	1/4	両刃磨刃	3

Tab.31 出土遺物（土器以外）一覧⑨

Fig.	No.	遺物番号	層位	素材	産地	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	K-No.
221	4	25X 0071		ウツカ イト	多久	鏝	2.3	2.0	0.4	1.0	完形		4
221	5	25X 0071		黒曜石	勝岳	鏝	2.5	1.8	0.4	1.2	完形		5
224	36	25D 0062		緑島 片岩		柱状片 刀石等	4.6	4.6	0.7	23.8	一部欠損	孔径6.5cm	48
224	37	25D 0062		片岩		石鏝等	9.6	3.9	1.8	94.6	ほぼ完形		49
224	38	25D 0062		ウツカ イト	多久	ステレ イブー	7.3	4.4	1.2	43.8	完形		56
224	39	25D 0062		ウツカ イト	多久	ステレ イブー	7.2	5.0	1.3	47.1	完形		57
224	40	25D 0062		磁石	?	コア	5.0	3.8	1.4	28.4	?		54
224	41	25D 0062		粘板岩	?	柱状片 刀石等	2.0	1.4	0.9	2.0	小片		53
224	42	25D 0062		ウツカ イト	多久	有蓋鏝	3.4	1.3	0.4	1.5	完形		41
224	43	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	3.3	2.8	0.8	6.2	完形		55
224	44	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	3.2	2.9	0.9	5.4	片断欠損		38
224	45	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	3.4	2.2	0.3	1.5	片断欠損		37
224	46	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	2.8	2.5	0.4	1.7	先端欠損 片断欠損		40
224	47	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	2.4	1.8	0.4	1.5	先端欠損 片断欠損		50
224	48	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	2.5	1.4	0.3	0.8	片断欠損		47
224	49	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	2.5	1.3	0.4	1.6	完形?	未製品	51
224	50	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	1.9	1.4	0.4	0.6	完形		46
224	51	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	2.0	1.5	0.3	0.9	片断欠損		39
224	52	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝	1.5	1.3	0.3	0.5	完形		35
224	53	25D 0062		ウツカ イト	多久 以外	鏝	2.2	1.9	0.3	1.1	片断欠損		45
224	54	25D 0062		ウツカ イト	多久 以外	鏝	1.7	1.2	0.4	0.5	完形		43
224	55	25D 0062		黒曜石	勝岳	鏝	2.0	1.1	0.3	0.5	1/2		42
224	56	25D 0062		ウツカ イト	多久	鏝?	5.0	2.8	0.8	18.3	完形?		52
224	57	25D 0062		ウツカ イト	多久	ドリル	2.8	1.0	0.3	1.1	両端欠損		36
224	58	25D 0062		ウツカ イト	多久	ステレ イブー	2.6	1.8	0.4	1.7	完形		44
225	8	25P 2219		粘板岩		石包丁	3.7	3.3	0.7	15.7	部分	砥石に転用	1
225	12	25D 0528		土製		投擲	2.5	2.6	2.2	15.1	完形	粘土に金雲母、石英を含む	2
225	13	25D 0528		土製		投擲	4.1	1.6	1.5	11.4	完形	粘土に金雲母、角閃石を含む	1
225	14	25D 0528		安山岩		明き石	18.2	7.3	5.1	1045.0	一部欠損		30
225	15	25D 0528		安山岩		磨石? 石鏝?	10.5	4.0	3.8	415.6	一部欠損	明き石?	29
226	16	25D 0528		安山岩		磨石?	10.3	9.8	4.4	615.0	完形		28
226	17	25D 0528		砂岩		砥石	13.1	4.2	2.3	173.8	両端欠損		27
226	18	25D 0528		黒曜石	勝岳	鏝	1.4	1.5	0.2	0.2	完形		21
226	19	25D 0528		黒曜石	勝岳	鏝	1.5	1.6	0.4	0.8	完形		23
226	20	25D 0528		黒曜石	勝岳	鏝	1.4	1.8	0.3	0.9	先端欠損		22

Tab.32 出土遺物（土器以外）一覧⑩

File No.	遺物番号	層位	素材	用途	種類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	残存	備考	R-No.	
220	21	25D 0528		黒曜石	鎌形	3.2	1.8	0.4	1.7	先端のみ		24	
220	22	25D 0528		サヌカイト	多角	2.4	1.9	0.5	1.8	両側欠損?		17	
220	23	25D 0528		サヌカイト	多角	2.3	1.8	0.4	0.7	完形		20	
220	24	25D 0528		サヌカイト	多角	1.7	1.7	0.3	0.7	先端欠損		26	
220	25	25D 0528		サヌカイト	多角	3.2	2.1	0.7	3.9	完形		18	
220	26	25D 0528		サヌカイト	多角	2.2	1.8	0.4	0.8	片側欠損		25	
220	27	25D 0528		サヌカイト	多角	3.0	2.3	0.6	3.4	完形		16	
220	28	25D 0528		サヌカイト	多角	3.9	1.8	0.9	5.2	完形		19	
220	29	25D 0528		サヌカイト	多角	ステレ イパー	5.1	4.2	1.6	30.9	完形		14
220	30	25D 0528		サヌカイト	多角	ステレ イパー	6.3	6.5	1.4	81.4	1/2?		15
227	31	25D 0629	I	粘板岩		磨製 石器	2.5	3.3	0.8	7.9	柄取のみ		2
227	32	25D 0629	I	粘板岩	?	柱状片 刀石跡	2.7	2.2	1.7	8.6	?		7
227	33	25D 0629	I	粘板岩?		紡錘車	6.3	6.4	0.6	47.6	完形?	火製品	1
227	34	25D 0629	I	サヌカイト	多角	鎌	1.9	1.4	0.3	0.6	完形		3
227	35	25D 0629	I	サヌカイト	多角	鎌	2.6	2.2	0.4	1.2	片側欠損		4
227	36	25D 0629	I	サヌカイト	多角	割片 石跡?	2.0	1.4	0.4	1.5	完形?		6
227	37	25D 0629	I	サヌカイト	多角	尖頭錐	3.7	1.6	0.6	4.3	完形?		5
227	39	25D 0629	II	サヌカイト	多角	ステレ イパー	3.7	3.2	0.6	7.5	完形		2
228	4	25D 0663		サヌカイト	多角 以外	鎌	3.4	1.4	0.6	2.4	完形		1
230	4	25D 0782		サヌカイト	多角	鎌	2.6	1.5	0.4	1.1	完形		4
231	4	25D 0874		サヌカイト	多角	鎌	3.0	2.0	0.3	1.0	両側欠損		1
231	5	25D 0874		黒曜石	鎌形	割片	1.4	1.2	0.2	0.4	完形?		2
233	1	25D 0601		サヌカイト	多角	鎌	2.7	1.9	0.5	1.3	完形		1
233	4	25P 0782		サヌカイト	多角	鎌	1.5	1.2	0.3	0.4	完形		1
234	1	23X 0582	II	土製		紡錘車	3.8	3.8	1.3	23.1	完形	孔径0.6cm	1
235	1	25P 0508		サヌカイト	多角	ステレ イパー		5.0	0.9	18.2	1/2?		1
235	2	25P 0273		サヌカイト	多角	鎌	2.8	1.8	0.6	2.9	完形		1
235	5	25P 0795		サヌカイト	多角	磨製 石器	8.2	2.6	0.7	21.6	完形		1
235	6	25P 0798		サヌカイト	多角	鎌	2.1	1.4	0.3	0.9	両側欠損		1
235	7	25P 0846		黒曜石	鎌形	鎌	2.2	1.9	0.5	1.5	片側欠損		1
X	1	23X 0596		黒曜石	鎌形	原石				228.0	?		3

Tab.33 出土遺物（土器以外）一覧①

第IV章 考察

今回報告した遺構や遺物に対して若干の考察を加えてみたい。遺構と遺物それぞれでいくつかの項目を取り上げてみたい。

転用れた廃棄土坑と転用前の情報

今回の調査の中で数多くの廃棄土坑を確認したが、調査時の所見では大半が貯蔵穴からの転用であろうと捉えていた。このことは、整理作業から報告書の刊行作業を行っている今現在も変わり無い。確かに、調査時に廃棄土坑として検出した場合、土坑内の埋土も廃棄土坑に転用された後に、廃棄行為によって或いは廃棄行為と同時進行で堆積したものとなる。したがって、調査時に出土した遺物や検出した状況も廃棄土坑として利用した時の状況を示していることが多いと考えなければならない。その中で、今回の調査では、廃棄土坑への転用前の情報を包含していると考えられる遺構を2例検出した。1例は貯蔵穴の構造を知る情報を提供していると考えられるもので、もう1例は貯蔵穴利用時の祀りにかかわる情報を提供していると思われるものである。それぞれの事例について本文中の調査成果を再報したのちに、論考する。

床構造を持つ土坑

まず、1例目に2SK0363を再報する。調査区の中央附近にあり、2SK0800を切っている。長軸2.9m短軸1.8m深さ0.9mとやや大型で、主軸の方位はN-73°-Wである。この遺構は底面形状に特徴がある。東側・中央・西側の3つにわけて底面をさらに0.15mほど掘り下げている。それぞれの平面形状は崩れた方形または長方形で、東側0.8×0.8m、中央0.9×1.0m、西側0.5×1.0mを測る。それぞれの間と東端には掘りくぼめずに残した欄が認められる。これらを利用して木材等で床貼りをしていった可能性が高い。また、中央と西側の間には東西0.4m南北0.2m深さ0.2m程の小穴が認められる。

この底面の掘り込みであるが、周囲に若干の掘り残しともとれるような欄があり、その部分と凹みのない底面中央部の部分を利用して木製の床を設置した施設であると理解したい。中央部のみ掘り残し、

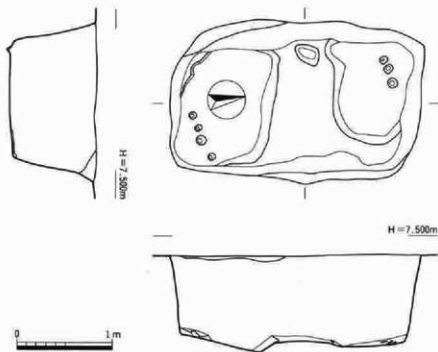


Fig.236 常用日田行遺跡第3次調査3SK10実測図 (1/40)

都合2ヶ所にかけて底面を掘り窪めているが、これには、そこに残された小穴の存在がその理由を示唆しているようである。これは、地下の貯蔵穴に出入りする際に使用した一本梯子を据えた痕跡であると考えて間違いないであろう。この梯子を据える場所として、また貯蔵穴内に降りたときに作業する安定した足場として中央部分は掘り残したと思われる。そうしたことにより、床を地面から浮かせるための凹みは、2ヶ所に分かれて作られることとなり、今回の事例のようになったのである。更に、底面全体を地面から浮かせるためには、相当の強度をもった床の構造を必要とするが、2つに分割することによって構造を簡略化することも可能となった。経験に裏打ちされた必然性によって、この2分割の床貼り構造は生まれたと理解できよう。

ここで、周辺遺跡での類例を紹介して上記所見を検証する。常用日田行遺跡での事例であるが、周辺遺跡といってもすぐ北隣の微高地上に位置するので、大きくは同一の遺跡群に含まれると考えられる。常用日田行遺跡第3次調査の3SK10がそれである。(註1)長軸2.6m短軸1.7m深さ0.9mで、主軸の方位はN-08°-Eである。出土遺物は弥生土器がある。底面に2ヶ所の掘り込みが認められ、北側のものは南北0.8m東西1.1m深さ0.1mで、南側のものは南北1.0m東西1.2m深さ0.1mである。また、底面中央の西側には径0.2m深さ0.1mの小穴が認められる。

南側のものは、底面の幅いっぱい掘り込みを行い、南西隅を掘り残して小さな棚をつくり出し、南東隅には掘り込みの底面には杭の痕跡とみられる小穴が4個確認できる。北側のものは、土坑底部の東側を掘り残すように掘り込まれ、北東隅の底面には小穴が3個確認できる。ここでも、地山掘り残して造り出した棚と杭、さらに掘り残した底面で支えて木製の床を設けたのであろう。ここでも、掘り残した中央部に小穴があることが注意される。これも今回の報告例と同様に、一本梯子を据えた痕跡と考えられるべきであろう。

今回は、筑後市外の事例は南筑後地域の範囲でしか類例調査を行っていない。しかし、当時の食料等を考えてみると、他にも事例はありそうである。それも、地下水位の比較的高い、有明海沿岸地域での分布は想像に難くない。食料等を比較的温度変化の少ない環境で保存する場合、地面から坑を穿って貯蔵穴とする方法は非常に効果の高い方法と言える。しかし、地下水位の高い地域で地下に貯蔵用の設備を設けた場合には、どうしても湿気の問題を避けて通れない。湿気に弱いものをいかに温度変化を抑えて貯蔵するかは、当時の人間にとって重要な問題であったことであろう。当時一般的であった、地下に貯蔵するという方法に加えて、地面からの湿気を抑えるために木床を貼った構造は、画期的なものであったに違いない。

ここで、もうひとつ問題が残る。同様の構造をもった土坑の割合が極めて低い点である。このことについて、今回の調査からは復元モデルの提示ができない。もちろん、米をはじめとする穀類の貯蔵には地下貯蔵穴は向きであろう。堅果類や発酵食品が主体であったと思われる。その中で湿度が一定以下の保存状態を要求する食材が、収蔵品の候補に相応しかろう。そうしたものは、主たる食材ではなく、調味料や副菜・副食といった位置付けではなかったか。当該地での食文化の解明とも係わる問題であるので、ここで結論は導けない。

いずれにせよ、こうした貯蔵穴のありかたは、本遺跡の生活環境を復元する上で興味深い資料を提示していると思われる。私論を含め考察を試みたが、資料不足の感否めない。

底部打ち欠きの甕を棚に据える土坑

廃棄土坑の大半が貯蔵穴からの転用であろうことは遺構報告の文中でも述べたところであるが、その中に特異な事例があるので若干の考察を試み、本遺跡の中での位置付けを行ってみたい。

問題の土坑は2SK0363で、まず報告文を再掲する。主軸の方位はN-15°-Eである。長軸1.7m短軸1.1m深さ0.9mを測るが、南辺には幅0.3m奥行き0.2m底面からの高さ0.2mの棚を地山削りだしでつくる。棚の上面は南から東へ向かって傾斜しており、両端での比高差は0.1mである。この棚には弥生土器(亀ノ甲式)の甕を倒立させて据えている。

この倒立した土器は底面が欠損しているが、人為的に打ち欠かれたと理解している。その根拠は、完

存する甕を倒立した状態で据えていたのだとすれば、底部が欠損する機会は貯蔵穴として使用していた段階での事故、あるいは廃棄土坑へ転用後に廃棄物が接触しての欠損が想定できよう。そのいずれの場合にも、底部のみが奇麗に欠損することは奇跡に近い。したがって、人為的な打ち欠きであることは間違いない。さらに、打ち欠いてから据えたのか、据えてから打ち欠いたのかが問題であろう。当該遺構から底部の出土を見なかったことを考えれば、打ち欠いてから据えたと考えるのが妥当であると思われる。以上を整理すれば、2SK0363では地山を削り出して棚を造り、底にあらかじめ底部を打ち欠いた甕を倒立させて据えたという状況が復元できる。

この廃棄土坑が貯蔵穴からの転用であることは、文中で何度か触れてきたところである。では、どの段階で土器を据えたかと言う点について考えてみたい。土器が据えられている棚の部分を観察してみると、据えられた甕の口縁部径と棚の寸法がほぼ一致することに気がつく。しかも、棚の上面は土坑の内側に傾斜しており、実用的に使用する棚としては少々使い勝手の悪い構造となっている。この2つの要素を総合すると、棚の成形は当初から甕を倒立させて据えることを目的としたことがわかる。しかも、棚が地山削り出しであることを考えれば、一連の作業は、土坑が当初の目的のために設置される時点、換言すれば貯蔵穴として掘削された時点で行われたと解釈すべきであろう。

では、本遺跡の土坑の中で、類似する構造をもつ土坑はあるだろうか。少なくとも、今回報告する土坑の中には類事例は見当たらないようである。引き続き常用長田遺跡第1次調査・常用日田行遺跡の報告も予定されているので、注意してみたい。周辺地域の類例も、一定調査はしてみたが、管見の限りでは報告例がない。土坑の一般的なありようとは異なるようである。

土器の一部を打ち欠く行為については別に論じたことがあるが、土器の打ち欠きには一定の意味付けができる場合がある。もちろん、実用的な理由から打ち欠くこともあり、甕の底部を打ち欠く例としては煙突への転用などがある。しかし、古代まで時代が下る事例であるし、なにより、設置された環境が大きく異なるため今回は参考になり得ない。やはり、ここでも非実用的な理由の方が相応しかろう。

そうなること、何らかの祭祀行為を伴ったと考えるべきであるが、現時点でその祭祀の内容を復元することは困難である。しかし、類似する事例が極めて少ない点を勘案すれば、この土坑に特別な性格を与えることも、強ち無理があるとも思えない。集落内での、貯蔵の様式を複数設定するならば、その特殊な一例が今回のような事例に該当するのではなからうか。そこに貯蔵されるものは、例えば集団の維持について特別な存在であるもの等が想定されよう。このことは、縄文時代にも日本をはじめ北太平洋沿岸で象徴的取獲物を得るための活動が行われた(註2)ことを考えれば、弥生時代の前半期に在って然るべき生活様式であろう。それらを納める貯蔵穴は特別視され、何らかの祭祀行為が行われたであろう。

2SK0363での土器の倒立は、想像を逞しくするならば地鎮的な意味合いではなからうか。少なくとも、この土坑が他の土坑と差別化され、特別な位置付けであったと解釈したい。

竪穴式住居

今回の調査で確認した竪穴式住居のうち、平面形態が円形のものについて若干の考察を加えたい。本報告では5棟を円形の竪穴式住居として報告した。調査区の全体図を見ると、他にも可能性を捨てきれないものが他にも存在するが、ここでは報告した5棟について考えてみたい。

いずれも後世の削平によって竪穴の掘方を失っているが、もともと掘方が浅かった可能性も捨てきれない。弥生時代の集落(特に中期後半以降)では、現在の標高8乃至10m附近を境界にして、竪穴式住居を主体にする集落と、掘立柱建物を主体にする集落に分かれると指摘する意見がある。(註3)筆者もこの考えを指示するところであるが、この標高は一定の目安であって、河川や地下水位との比高差が本来的な指標となることを注意すべきである。(註4)

当遺跡は標高が8m弱の微高地に立地し、この意見に従えば住居の主体は掘立柱建物となるべきところである。こうした立地条件の中で竪穴を深く穿てば、湧水を誘発するまではいかずとも、相当の湿気が住居内にあることとなり、健康上好ましくない環境を生み出すこととなる。従って住居の竪穴は、やや浅めに穿たれた可能性が高く、今回の調査で竪穴式住居の掘方が全く検出されなかったとしても矛

盾はないと思われる。

さて、続いて平面形態に目を転じてみたい。全ての円形住居は中央に崩れた楕円形の土坑が伴っている。その長軸に外接して柱穴と思しき小穴が認められる。この事象のみを取り上げればソングンニ（松菊里）型住居に近いが、全体的には中央土坑の平面形態や柱穴の規則性に疑問も多く、検討を要する。もちろん、朝鮮系無文土器が弥生土器に徐々に融合していくように、この時期の円形住居はソングンニ型住居を祖形としているのであるから、明確な分離が不可能なもの至極当然の帰結であろう。

また今回報告する竪穴式住居は、大型の2SI2300と、それ以外の中小型のものに分かれるが構造は極めて良く似ている。しかし、大型の住居は単に居住人数が多いといった性格のものではなく、集落の中で中心的な存在に当たると考えた方が良くもしい。

墓制の諸問題

今回の調査では、甕棺墓・木棺墓を確認した。いずれも弥生時代の所産と理解したいが、木棺墓は出土遺物が極めて少なく、時期の比定が極めて困難な状況である。ただし、弥生時代前半期の墓制が木棺墓から甕棺墓へと比重を移していく状況は良く知られているので、甕棺墓に先行して木棺墓を位置付けるのが妥当かも知れない。ただ、そう考えた場合には、これまで所在が不明であった筑後市域の弥生時代前期の墓制について一石を投じることとなるため、取り扱いには慎重にならざるを得ない。

1) 木棺墓

今回の調査では2基の木棺墓を確認した。いずれも底面の周囲四辺に細い溝を巡らせるもので、溝のありようは竪穴式住居に見られる壁小溝を彷彿させる。先に述べたように甕棺墓に先行するものとして理解した場合の問題点を、まずは取り上げてみたい。

近隣で弥生時代前期の木棺墓を調査した事例は、小都市の北牟田遺跡・ハサコの宮遺跡のものがある。(註5) ここで事例をみると、基本的には小口板の痕跡が明瞭に認められるものと、小口板の痕跡が明瞭でないものに分かれる。しかし、いずれの構造をとるにせよ、側板は圧痕を確認できる程度である。

それと比べて、本遺跡の事例は若干様相が異なっている。2基の木棺墓はいずれも小口板の明瞭な痕跡は見いだせないものの、小口板および側板の圧痕とするには明瞭な小溝が一周している。どちらかというところ、板材の圧痕というよりは板材を立てるための設備と見たほうが適切ではないと思われる。しかも、先の北牟田遺跡やハサコの宮遺跡では、小口板が側板の内側に入るものが一般的であるのに対して、完全な箱形となる。底板の無い、組み合わせ式の木棺墓としては構造上無理があるようにも思われる。はたして、弥生時代の墓制であるかどうか判断に迷う所以である。

何よりも、当地域では弥生時代前半期の墓制の調査事例が少ないという事実は、如何ともしがたい。資料集積の後に、別に論考する機会を得たい。

2) 甕棺墓

甕棺墓は4基を確認したが、他に比較的器形の判明する資料に限っても、土坑から甕棺の棺体が出土したものが3遺構以上ある。主体となるのは口縁部が楕円状となるもので須久式の範疇と理解してよい。特に2ST0880と2ST2503は器高が1mを超える。大型の甕棺専用器で秀逸である。2ST2503は水抜き用と思しき穿孔が認められる。

もうひとつ注目すべきは、2SK2116出土の194-2である。胴部の上半部に壺の面影を残している。橋口編年(註6)でのKⅠcにあたるかと考えている。さらに、橋口氏は南筑後地域の甕棺を検討した結果当地域にはKⅠ期の甕棺は存在しないと、一段階ずつ形式をずらした形で「南筑後KⅠ式」から「南筑後KⅣ式」を設定した。(註7)しかし近年の発掘調査では、山川町山ノ上遺跡で刻目凸帯文土器の棺体を使用した甕棺墓も発見され(註8)、当地域の甕棺墓の展開を再考すべき時期に差し掛かっているかも知れない。山ノ上遺跡の甕棺は凸帯文期の所産ではなく弥生時代のものが主体であると考えられるが(註9)、これらが日常容器からの転用か否かを含めての検討が必要であろう。

以上のような、筑後市および周辺地域での状況を鑑みると、194-2は無理にKⅡaとせずKⅠcに分

類しても問題はなさそうである。南筑後地域での編年を無理に当てはめるならば、「南筑後K0c」とでもすべきかも知れないが、南筑後という地域に限定せずにKIcとしてよからう。仮にこの棺をKIcに分類するとして話を進めるが、そうなると前期後半から前期末には当遺跡で妻棺墓が成立していることになる。もちろん、廃棄土坑の出土遺物をみれば凸帯文土器以降の土器が連続と出土しており、集落がその間存続しているわけであるから、集落周辺を含めて何処かに墓域の設定をみることは自然である。しかし、前述した木棺墓の存在と合わせて墓制の変遷を考えると、まだまだ不明な点が多い。集落間での時期のずれや集落内での重複期間もあろうが、墓制の変遷について復元モデルの提示が必要であろう。しかし現段階では資料不足の感が強く、ここまで述べてきた内容も、私論・試論の域を脱し得ていない。

3) 石蓋状遺構

調査成果の項で墓に分類して報告した、石蓋状遺構について再論する。石蓋状遺構は、筑後市域で2例目の報告となる。1例目は蔵敷森ノ木遺跡第2次調査の2ST03である。(註10) 6枚の緑泥片岩で石蓋を構成するが、石蓋を除去するとすぐに暗茶色の地山があらわれて、下部施設は一切認められない。主事軸の方位はN-21°-Wで、他の石棺墓・土壙墓がN-20°-E前後であることと比較すると、帰属の異なるの集団と捉えられそうである。

今回報告した石蓋状遺構(2ST0613)の内容について再掲する。2ST0613は、調査区の北より中央附近にあり、2SD0663に切られている。掘方は長軸2.5m短軸1.2m深さ0.3mを測り、主軸の方位はN-44°-Eである。石蓋検出時には石蓋土壙墓ではないかと考え調査を進めたが、石蓋の下部には墓域と認め得るほどの施設は確認できなかった。わずかに幅0.3m長さ2.1m深さ0.1mの掘り込みを確認したのみである。その平面形状は、2つの土坑を溝で接続した如きであるが、両端の土坑様の部分でも深さは0.2mでしかない。

以上2つの調査成果を総合すると、検出時における状況は石蓋土壙墓のそれと全く同じであるが、石蓋の下部の構造は、墓域と認め得る施設は存在しない。ただし、両者の間には若干の相違が認められる。蔵敷森ノ木遺跡第2次調査の事例では、石蓋状遺構の下はすぐに地山となり全く施設が無いのであるが、常用長田遺跡第2次調査の事例では、極めて小さく浅い土坑が認められる点である。しかしながら、常用長田遺跡の事例も、墓域として認知するには無理がある。したがって、実用的に機能する墓域を持たない点で、両者の間には共通性を認めることができよう。

さて、ここで問題となるのは石蓋状遺構が如何なる機能を付与された構造物であるかということになる。筆者は蔵敷森ノ木遺跡第2次調査の報告の中で、埋葬対象が失われたため、上部構造の石蓋のみを設置した可能性を指摘したことがある。(註11) そういった意味において、今回報告する事例はさらに示唆的である。石蓋の下には、墓域を模したと思われる小さな掘り込みが認められる。先にも再掲したとおり、遺体を埋葬するには不向きなものである。直接埋葬を前提とするならば、規模の面だけからみると若齢小児の埋葬は可能かと思われるが、2つの土坑を溝で接続したような形状では埋葬に不向きである。しかしながら、配石の下に細長い平面形状を呈する掘り込みを設置する行為は、墓域を想起させるものである。

ここでは、現実には遺体を埋葬しない墓が成立し得るかという問題について若干の私見を示し、考察を加えてみたい。まず、埋葬の形態について整理する。遺体を埋葬する方法には数種類が考えられるが、鳥葬・風葬・散骨葬などは埋葬の痕跡を考古学的に検証できないため、ここでは除外する。そうすると、土葬・火葬・選骨葬(土葬骨を火葬するものも含む)が考証の対象となる。土葬と火葬は1次埋葬(直接埋葬)が基本であり、選骨葬は2次埋葬(再葬)となる。埋葬の基本形態が1次埋葬であることは疑いようのないところであるが、縄文時代晩期には選骨葬(つまり2次埋葬)を認めることができる。縄文晩期における埋葬方法は、火葬であった可能性が高いという意見もある。(註12) これは、埋葬が単純に遺体を処理する目的のみならず、そこに葬送儀礼を加えることで集団を維持するという目的が付加されたと理解するのが妥当であろう。これにより、埋葬行為は生活様式の一要素として位置付けが明確になり、集団や地域単位において葬送儀礼の形式化が進行するものと思われる。

こうした生活様式(=文化)が定着した段階で、墓の施設にも変化が現れることは想像に難くない。

遺体処理の必要性よりも葬送の行為の必要性が優位に立つならば、遺体の存在・不在にかかわらず墓という施設が必要となる。そうした墓の中で、地上に標識を伴う類型のものは地下の構造が実用に供されない施設と位置付けられる。実用性に乏しい部分から省略され、生産過程が簡略化される現象は、土器の器形変化などに普遍的に見られる現象であるから、墓にも同様の傾向が認められることは自然なことであろう。

今回報告する石蓋状遺構を、上記のような視点で再検証してみよう。その下部構造は、1次埋葬を行うには小さすぎる。2次埋葬を視野に入れると、墓として機能していた可能性も否定できないものがある。時期的に先行する長崎県原山支石墓群等、周辺地域の事例に選骨葬を示唆するものがある。ただし、原山支石墓での事例を見ると、選骨葬で埋葬される場合には火葬骨を石棺や裏棺に納めており、その墓群には土壙墓や石蓋土壙墓は混在しないのが通例である。酸性土壌では土器棺や石棺以外では人骨が遺存しにくく、選骨葬が行われたかどうかの検証が困難であることは十分に配慮しなければならないが、選骨葬を行っている墓群では土壙墓等が混在しにくいということも重要である。2ST0613の下部設備は両端が深くっており、主たる埋葬位置を考える上で混乱を生じてしまう。もちろん、2人分の骨を選骨して両端の土壙状の部分に埋葬したと考えることもできよう。しかし、上部標識を伴う1つの墓に複数の遺体をおさめる形態は、古墳時代の遺構に見られるものである。ここでは、被葬者は遺体の一部でも埋葬されることはなかったと理解している。

これらのことから導かれる石蓋状遺構の機能モデルであるが、先に述べた埋葬行為の形式化を注意したい。この場合、被葬者の死に際して葬送儀礼を行うのであるが、そこでは遺体処理といった本来の意味以上に、送る側（死者が生前所属した集団）のために葬送儀礼が行われるようになる。現代仏教の法事が、被葬者の死後、徐々に祭礼の間隔が長くなる点などは非常に象徴的である。そこでは遺体の有無により、儀礼を省略することは忌み嫌われる傾向にある。何故ならば、葬送の儀礼は死者を送る儀礼である以上に、集団を維持するための祭礼行為としての性格が強まるからである。

ここでは、遺体がない状態で葬送儀礼を行ったと解釈したい。特に蔵数森ノ木遺跡第2次調査の例が典型的であるが、今回報告する事例も同様の解釈を与えたい。石蓋の下に僅かに掘り込みをしたことは、形式化はしたものの墓壇の存在に対して注意する感覚が残っていたことの現れとみることができる。そうした意味で、今回の報告例は蔵数森ノ木第2次調査の事例より、古い形態であると言える。(註13)しかしながら、今回の調査でも石蓋状遺構の時期を特定するに到らなかった。資料の蓄積の後に、再検討する必要がある。

弥生時代前期の土器

今回の調査の中で数多くの弥生土器が出土したが、中でも弥生時代前期から中期初葉のものが大半を占める。この時期、筑後地方には玄界灘沿岸地域に分布する板付式土器とは異なる土器が存在していることは、つとに知られている。この土器には「亀ノ甲タイプ」或は「亀ノ甲式土器」という呼称が用いられているが、現在まで明確な様式が設定できていないための混乱があるといつてよい。

今回の出土遺物では、この「亀ノ甲タイプ」或は「亀ノ甲式土器」と呼ばれる土器が大半を占める。なお、出土資料の増加に伴って近い将来様式として認知できると考えているので、本書では「亀ノ甲式土器」の呼称を用いている。この亀ノ甲式土器は、縄文土器から発展した刻目凸帯文土器直系の弥生土器と考えられていて、筆者もこの部分は異論のないところである。また、凸帯文期以来の稲作先進地である玄界灘沿岸地域との関係では、当地は文化の2次伝播の地といった説明をなされることが多い。しかしながら、後述する稲の品種の問題も絡めて亀ノ甲式土器の評価を再検討する必要がある。今回は調査報告であるので編年案の提示などは行わないが、当遺跡から出土した土器の内容について概観したい。

まず、もっとも古い土器の一群の一つとして2SK0597の出土遺物をあげることができる。134-110・134-11・134-12の3点を除いて凸帯文土器で占められる。134-11も凸帯文土器の壺器形の面影を残し、胴部最大径も胴の中位にある。ただ、134-12は体部外面に沈線にて重弧文を施文し、弥生時代の所産であることが確実である。

次の段階のものとして、2SK0309の一群や2SK0438の一群をあげたい。ここでは、如意系あるいは「く」の字形に外反する口縁部をもつ壺が比較的多く出土した。この器形をもつものは口縁端部の面全体に対して刻目を施しており、畠界灘沿岸地方の板付Ⅰ式土器と同様の技法である。また、55-30は弥生土器の壺としたが、器形的には凸帯文土器の面影を強く残しており、古相であるⅠ従来板付。式土器は筑後地方には分布せず、当地方にみられる同様の器形の土器は一段階下の板付Ⅱa式平行とすべきとの意見が根強いが、再度検証すべきかも知れない。壺は体部に鋸歯文を施すものが混在していて、口縁部は明確に外面肥厚を行うものが多い。壺の頸部と胴部の接合箇所は粘土接合に由来する段が、比較的明瞭に残る。このことは亀ノ甲式土器の発生時期との関連もあり、研究の進展が待たれる。また、供伴する亀ノ甲式土器の壺は、口縁部に小さな凸帯を貼付けて刻目を施すもので、同様式中で最古相となる。ここで段差が出土している点も注目される。

次の段階が、亀ノ甲式土器の出土量が最も多い。更に細分する必要があるかも知れないが、報告書文中であるので、論考は別項に譲る。壺口縁部の凸帯は断面が三角形のものが多くなり、胴部凸帯は胴部最大径の部位よりもやや上位にあることが多い。壺は口縁部外面を肥厚させており胴部の段も残るが、やや不明瞭になる。2SK0391・2SK04042・SK0676・2SK0878等の出土土器がこの範疇であろう。

その後、最終的には遠賀川以西地域の城ノ越式土器へ融合していく過程を辿るが、その過程で胴部の凸帯が胴部の最大径がある部位に貼り付くことが多くなり、刻目が省略されることが徐々に多くなる。この段階のものは、2SK2089出土の壺などがこれに当たる。口縁部の刻目が省略されることもあり、最終的に胴部凸帯は沈線に置き換えられていくようである。この段階には、当遺跡では出土量が急激に減少する傾向にある。

以上、出土した土器の傾向から、その変遷を概観したが、分類編年作業は別稿に譲りたい。

多条凸帯壺

今回、この一群の土器を概観するしたときに興味深い事例に気がついた。このタイプの土器は口縁部と胴部に刻目凸帯を貼付けるのを通例とするが、各々1条ずつというのが一般的な在り方であるのは周知の事実である。当然、多条凸帯のものは目を引くことになるが、多条凸帯を持つ壺の出土について興味深い傾向が看取される。このことについて、今回の報告の中から取り上げてみたい。今回の報告で、多条凸帯は17の遺構から出土している。そのうち5遺構からは複数個体の出土をみている。遺構総数のうち、多条凸帯壺の出土した遺構の割合は極めて低いかかわらず、出土した遺構の1/4近くから複数個体の出土をみていることは注目すべきであろう。また、供伴遺物にも特徴がある。約1/3で小壺の供伴が認められ、約3/4で壺の供伴が認められることがわかる。もちろん、壺は壺と並んで当該期の主要な器種であるから特異な状況とは言えないかも知れないが、2SK0800では彩文土器と黒色磨研土器を伴っている点も見逃せない。

多条凸帯は、壺棺への転用が想定される大壺にもみられるが、その関係についても注意すべきであろう。壺棺に小壺が埋納されることは良く知られている。したがって、小壺の持つ性格については、どうしても実用性よりも祭祀的な側面が強調されるようである。事実、実用に供するには容量が小さすぎるくらいがあるし、複数個がまとめて出土する事例からも祭祀的な目的で製作された可能性は高いと言わざるを得ない。

多条凸帯壺も、壺棺や壺棺への転用が想定される大壺にも見られることから、祭祀的な効果を狙ったの装飾とみることができそうである。小壺との組み合わせは特に象徴的なものではなからうか。現段階では何を目的とした祭祀を念頭に置いたのかの復元モデルの提示はできない。

変容壺

140-9は実測図を見ると随分と壺に近い印象を受けるが、写真を見たり原物を観察すると壺としての印象が強い。口縁部は小さく外反するものの胴部には壺のように沈線が施されたりして、云々なれば壺と壺の中間形態ともいえるべき器形である。(註14) 地域的には遠く離れているが、伊勢湾地方

に弥生前期に成立する変容壺と同様のものか。もちろん、当該地方から情報等が伝達されたというよりは自然発生的に生まれた器形と見なすべきである。この器形の遺物についての類例調査は全く行っておらず、精査すれば、同様の器形は一定数見いだせる可能性が高い。弥生土器の導入時における器種組成のありかたを考える上で興味深い。

段甕

これまで調査報告の中では図示されたりしながらも、九州島内では一つの類型として論じられることは見られなかった。今回出土した土器の中では、67-4・81-5・101-2・149-10・164-11・178-2・180-5が段甕である。いずれも胴部の刻目或は凸帯から上位の外面部に粘土を貼り足して肥厚させ、胴部下位との間に段を形成している。段甕は東部瀬戸内地方等に広く分布するようであるが、当地域のものは若干様相が異なり、段の部分にも凸帯を貼付けることが一般的である。亀ノ甲式土器の全ての時期に伴うものかどうかは不明であるが、城ノ越式土器の段階では見かけないようである。周辺では八女市の一竿遺跡で出土していたが、実測図では粘土接合が段甕の構造とは異なっていた。担当者の御高配により実見および実測する機会を得た（Fig.237）が、筆者が観察した限り段甕と見て間違いなさそうである。また、大川市の下林西田遺跡でも出土事例が認められる。（註15）ただ、これまでは単に器壁が厚い土器の破片として取り扱われている例も多いと思われ、今後注意すべきであろう。

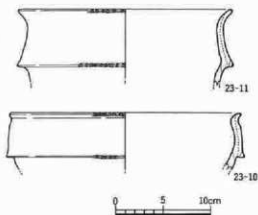


Fig.237 八女市一竿遺跡出土段甕

縦造風双耳把手付銅鍍形深鉢

2SK2045からの出土品のうち、特に目を引くのが184-5の把手の付いた甕様の土器である。森貞次郎氏が「縦造風双耳把手付銅鍍形深鉢」と命名した土器にあたる。（註16）新宮町の三代貝塚からの出土品に対して命名されたものである。また、西田大輔氏は夜臼・三代地区遺跡群の報告書の中で集成を行っている。（註17）近隣では小郡市の北松尾口遺跡が知られているが、近年、八女市の立野大坪遺跡でも出土している。（註18）当地域では、これに当遺跡が加わった訳であるが、出土例が少なく論考を加える時期に達していない。ただ今回報告の中で把手として報告した遺物も、縦造風双耳把手付銅鍍形深鉢の把手となる可能性もある。外面側に刻目を施す例などは弥生土器の影響をも視野に入れる必要があり、時期の比定に一定の情報を提示することになるかもしれない。

初圧痕

今回の土器群には外底面を中心に、稲と思しき初圧痕を41個確認した。初の縦横比を計測した結果がTab.34である。この結果をみると、和佐野喜久男氏が分類した中国華南地方の初の数値に近いものがある。（註19）この数値は、八女市吉田出土の古代米の傾向とも一致しており、朝鮮半島や玄界灘沿岸の米の数値とは異なっている点が興味深い。ただ、土器に残された初圧痕からの計測であるため、焼成による変形の影響は避けられない。しかしながら、弥生時代において当地方で栽培されていた稲の品種を考えることは、当地方の弥生文化の特色を解明することにも寄与するものと考えられる。筑後市域においても、古島榎崎遺跡で多量の炭化米（弥生時代後半期か？）が出土しており、資料の蓄積によって興味深い結果が得られることであろう。このことは当地域の弥生時代の幕開けと、弥生文化の主要要素の伝播経路に対して重要な意味を持っている。最終的には、当地域の初期弥生文化（或は弥生文明というべきか）の再評価に繋がることを期待している。

単位: mm

擬朝鮮系無文土器

今回の調査の中で、擬朝鮮系無文土器ではないかと考えられる土器が出土している。51-29・54-12・55-16・55-17・55-20・66-4・66-5・117-1・173-2・176-10・188-5がそれである。いずれも、典型的な朝鮮系無文土器・擬朝鮮系無文土器といえるものではない。朝鮮系無文土器・擬朝鮮系無文土器は、通常ひとつの遺跡あるいは周辺を含めた遺跡群で、当該地域に導入されて以降、在地の弥生土器に徐々に同化してゆく過程が観察される。代表的な実例としては佐賀県の土生遺跡や宇土市内の遺跡群が、よく知られている。出土した土器が朝鮮系無文土器あるいは擬朝鮮系無文土器かどうかを判断するにあたっては、その属性の中で朝鮮系無文土器・擬朝鮮系無文土器の範疇に入るかどうかの判断を行うべきであり、遺物単体での判断はできない(註20)が、今回の調査の成果の中では、変化の過程と属性にまで論及することができない。

筑後市域での朝鮮系無文土器・擬朝鮮系無文土器の出土は今回報告の事例が初めてであるが、周辺地域ではいくつかの事例が知られている。大川市の下林西田遺跡や大牟田市の田隈柿添遺跡などであるが、その中では下林西田遺跡の出土例は比較的数量的にまとまっていて牛角状突起など8点が報告されていて、さらに2点以上について朝鮮系無文土器ではないかと可能性が指摘されている。

さて、今回出土した擬朝鮮系無文土器ではないかと考えられる土器(以下、単に「擬朝鮮系無文土器」と表記する)は、弥生土器との区別が非常に難しいものも含まれているが、比較的典型的なものとして55-20がある。この資料は周辺の出土例には類例を見出し得ないが、宮崎県の持田中尾遺跡出土土器(註21)に近似例が認められる。九州西部での出土例よりも、東九州での出土例に近似性が認められるのが興味深い。

先述した55-20(2SK0309IV層)は、最初に擬朝鮮系無文土器ではないかと注目した土器で、小型の甕である。口縁部に粘土紐を貼り付けて凸帯としているが、粘土紐の形状をよくとどめている。胴部も丸みを帯びており、宮崎県持田遺跡出土資料に印象が似る。なぜ、有明海沿岸ではなく、東九州の資料に似ているのかは全く不明である。

他の資料については、弥生土器との折衷様式とも理解すべき形状のものが多数含まれている。土生遺跡等での事例のように朝鮮系無文土器が擬朝鮮系無文土器に変化し、弥生土器に融合する過程を辿ることが一般的であるが、当遺跡では、朝鮮系無文土器は確認できない。擬朝鮮系無文土器がもたらされてから、弥生土器に融合する過程が追えるのみである。この土器については、筆者の力量不足のため論考する環境にない。資料を提示して学界諸氏の叱責を乞いたい。

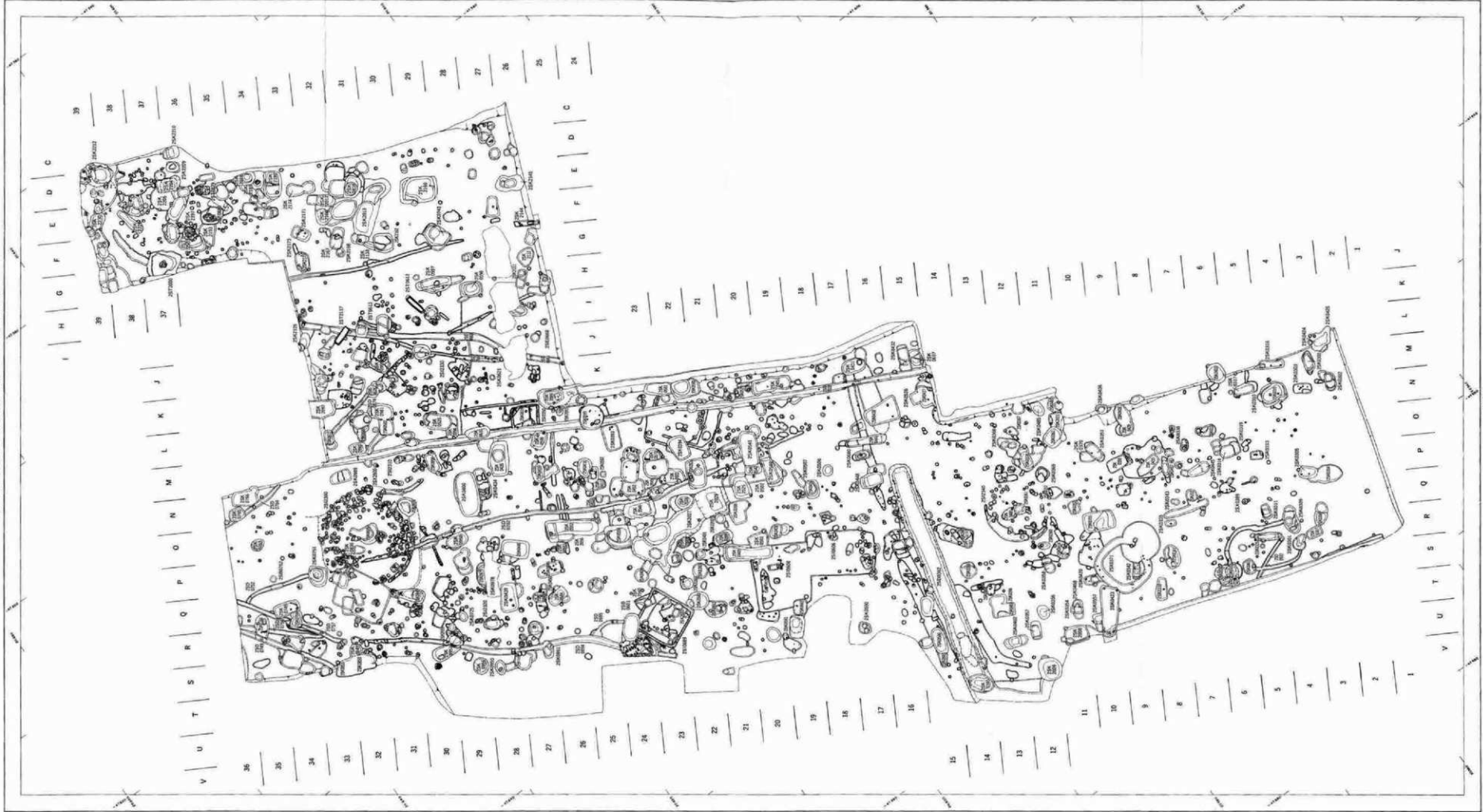
出土遺構	土器番号	長さ	幅	備考
2SK0300	47-2	5	3	
2SK0300	47-2	4	3	
2SK0306	51-24	5	3	
2SK0306	51-24	6	4	
2SK0337	66-6	3	2	
2SK0350	69-3	5	4	
2SK0391	79-6	6	3	
2SK0399	81-4	7	3	
2SK0399	81-4	6	3	
2SK0423	89-20	6	3	
2SK0423	89-21	5	4	
2SK0423	89-21	5	3	
2SK0434	96-8	6	3	
2SK0434	96-9	6	4	
2SK0437	100-5	6	3	
2SK0448	107-3	4	3	
2SK0453	111-12	6	4	
2SK0453	111-16	5	3	
2SK0457	112-1	7	4	
2SK0524	102-13	5	2	
2SK0524	120-14	7	3	
2SK0552	125-6	7	4	
2SK0552	125-19	7	4	
2SK0586	132-3	7	2	
2SK0586	132-3	5	2	
2SK0676	139-5	4	2	
2SK0843	151-3	8	6	
2SK0843	151-3	6	3	
2SK0850	152-2	6	3	
2SK0850	152-2	7	3	
2SK0853	154-2	7	4	芒の痕跡あり
2SK2013	173-12	6	3	
2SK2025	179-1	6	3	
2SK2025	179-1	6	2	
2SK2025	179-5	6	3	
2SK2027	180-6	6	3	
2SK2027	180-6	5	3	
2SK2193	199-3	9	3	
2SK2197	199-6	6	3	芒の痕跡あり
平均値		5.9	3.2	縦横比平均値1.862

Tab.34 初圧痕計測表

なお、擬朝鮮系無文土器の項を書くにあたっては、片岡宏二氏（小都市教育委員会）の論考や、御教示を参照させていただいた部分が多い。しかしながら、担当者各自に判断や論考を加えた部分もあり、氏の業績を充分にみえることができなかった。この点については、本報告が氏の業績を阻害しないことを切に希望するものである。

- 註1 筑後市教育委員会 ちくご遺跡だよりVol.11「常用地区の遺跡群」1999
- 註2 渡辺仁 『縄文式階層化社会』六一書房 2000
- 註3 佐々木隆彦 「おわりに」大川市文化財調査報告書代2集『酒見貝塚』大川市教育委員会 1994 所収
- 註4 永見秀徳 「弥生時代前期土器出土の意義」筑後市文化財調査報告書第42集『津島九反坪遺跡』筑後市教育委員会 2002 所収
- 註5 福岡県教育委員会 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXXI—中巻』1979
- 註6 橋口達也 『美穂の編年の研究』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXXI—中巻』福岡県教育委員会 1979 所収
- 註7 橋口達也 『南筑後における美穂の編年』 瀬高町文化財調査報告書第3集『権現塚北遺跡』瀬高町教育委員会 1985 所収
- 註8 山川町教育委員会の東竜雄氏の御高配により整理作業中に資料を見直す機会を得たが、美穂の副葬小室に板付式の特徴を有するものが含まれていた。
- 註9 「蔵敷森ノ木遺跡第2次調査の成果」筑後市文化財調査報告書第20集『筑後市内遺跡群』筑後市教育委員会 1999 所収
- 註10 永見秀徳 「考察」筑後市文化財調査報告書第20集『筑後市内遺跡群』筑後市教育委員会 1999 所収
- 註11 橋口達也 『美穂墓の成立』『季刊考古学』第67号 1999 所収
- 註12 後の時代まで古相のものが残ることは通例であって、このことをもって、遺構の新旧が決定しないのは当然である。こと、祭祀や葬送儀礼についてはその傾向が顕著であるので、注意が必要であろう。
- 註13 形式論から言えば、整備された形式から形質化するという変化の過程を辿ることが通例であり、儀礼においてはその傾向がより顕著である。
- 註14 佐藤由紀夫 『縄文弥生移行期の土器と石器』雄山閣 1999
- 註15 福岡県教育委員会 『福岡県文化財調査報告書代132集 下林西田遺跡』1998
- 註16 森貞次郎 『東アジアの考古世界—九州』森貞次郎先生著書刊行会 1999
- 註17 西田大輔 「考察」新宮町文化財調査報告書第10集『夜日・三代地区遺跡群』第5分冊 新宮町教育委員会 1995 所収
- 註18 立野大坪遺跡現地説明会で提示された、八女市教育委員会の大塚恵治氏の御教示による。
- 註19 和佐野喜久生 「東アジアの古代稲と稲作起源」和佐野喜久生編『東アジアの稲作起源と古代稲作文化』1995 所収
- 註20 小都市教育委員会 片岡宏二氏の御教示による。
- 註21 小都市教育委員会 片岡宏二氏の御教示による。

常用長田遺跡第2次調査



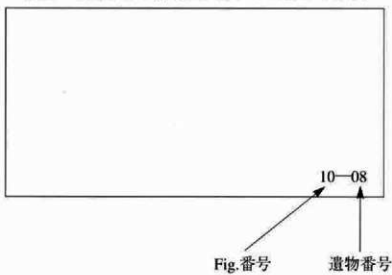
1/500

Fig.238 遺跡全体配置図 (1/500)

PLATE

凡 例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。

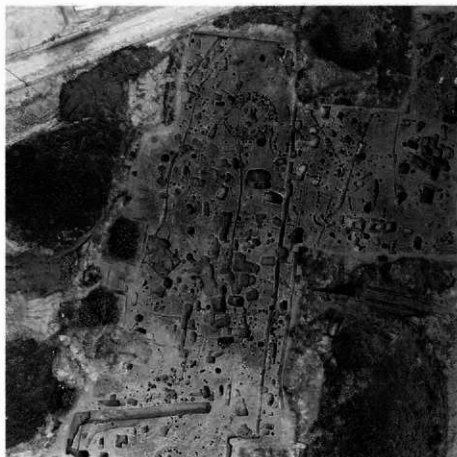




調査区全景
(上が北)
空中写真



調査区北東部
(上が北)
空中写真



調査区北西部
(上が北)
空中写真



調査区南半部
(上が北)
空中写真



2SK0300完掘状況 (東から)



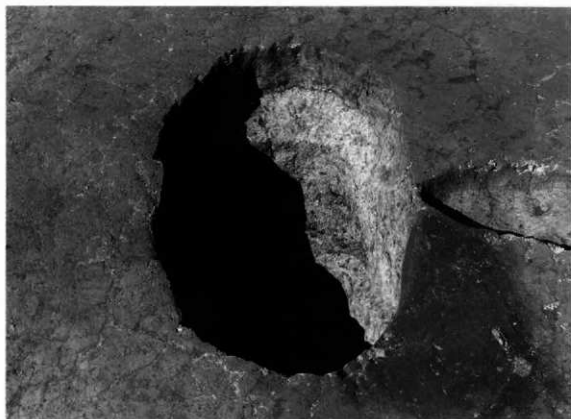
2SK0300完掘状況 (南から)



2SK0301土層断面（東から）



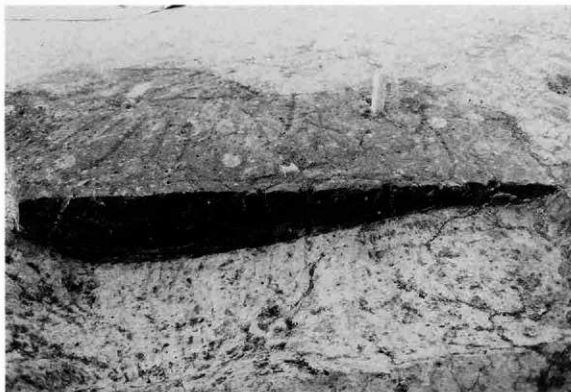
2SK0302土層断面（南から）



2SK0302完掘状況（東から）



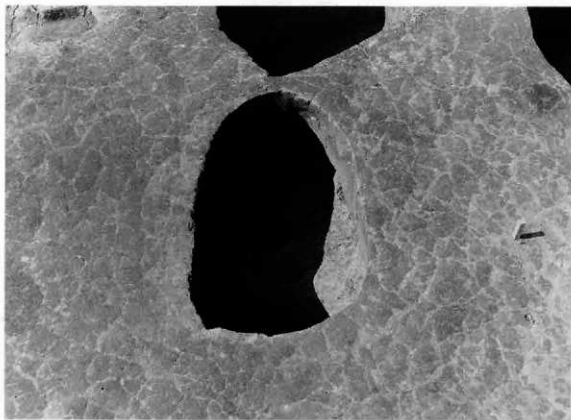
2SK0302完掘状況（南から）



2SK0305土層断面 (南東から)



2SK0306完掘状況 (南から)



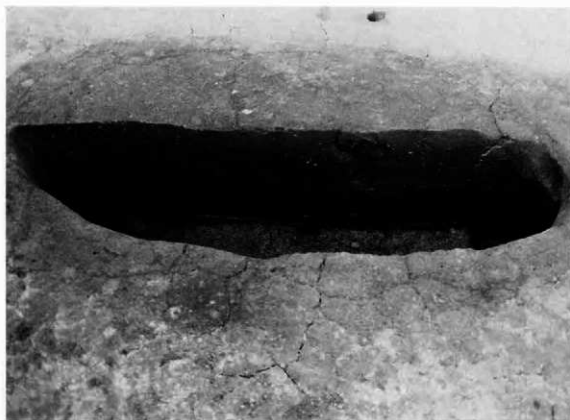
2SK0306完掘状況（東から）



2SK0306完掘状況（南から）



2SK0307土層断面（東から）



2SK0309完掘状況（南から）



2SK0307完掘状況（西から）



2SK0307完掘状況（北から）



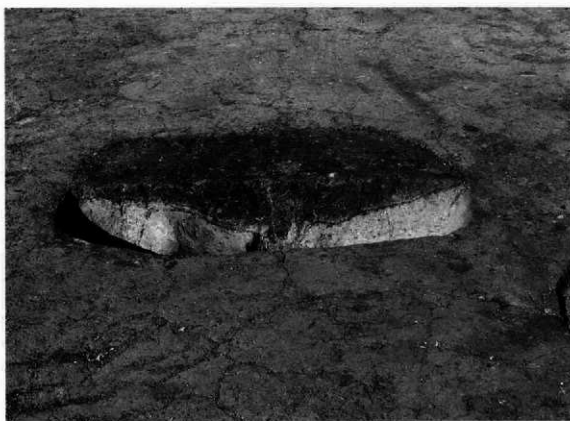
2SK0309完掘状況（東から）



2SK0309完掘状況（北から）



2SK0311土層断面（北から）



2SK0313完掘状況（東から）



2SK0313完掘状況（南から）



2SK0313完掘状況（東から）



2SK0314完掘状況（北から）



2SK0314完掘状況（西から）

Pl. 14



2SK0316完掘状況（北から）



2SK0316完掘状況（東から）



2SK0317土層断面（東から）



2SK0335土層断面（東から）

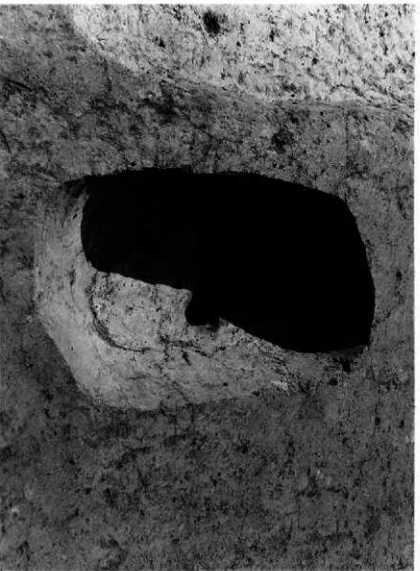
Pla.16



2SK0317完掘状況 (北から)



2SK0317完掘状況 (東から)



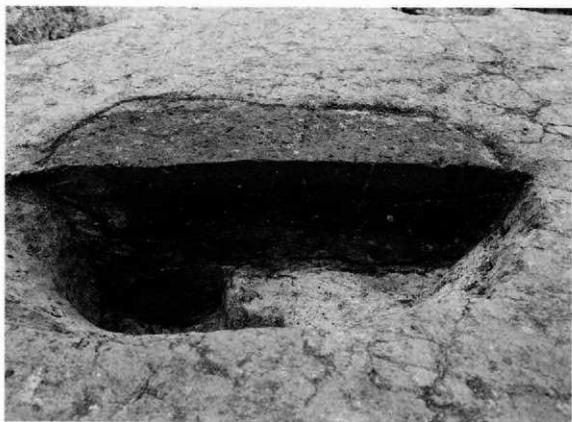
2SK0335完掘状況 (北から)



2SK0335完掘状況 (西から)



2SK0334土層断面（東から）



2SK0336土層断面（南から）



2SK0336完掘状況（南東から）



2SK0336完掘状況（南西から）



2SK0337土層断面（北から）



2SK0341土層断面（北から）



2SK0351完掘状況（東から）



2SK0352完掘状況（北から）



2SK0352土層断面（東から）



2SK0353土層断面（北から）



2SK0353完掘状況（東から）



2SK0353完掘状況（北から）



2SK0355完掘状況（北から）



2SK0355完掘状況（東から）



2SK0356完掘状況（東から）



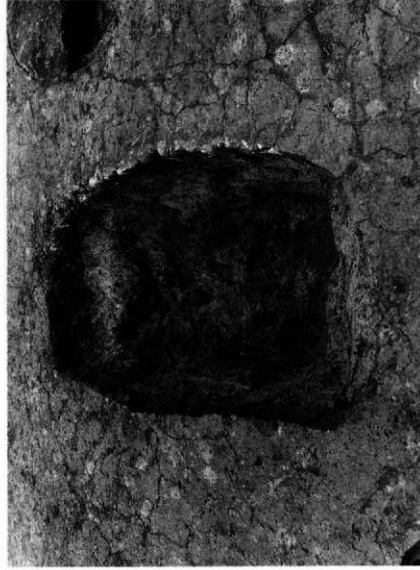
2SK0356完掘状況（南から）



2SK0354土層断面（北西から）



2SK0357土層断面（北から）



2SK0357完掘状況 (東から)



2SK0357完掘状況 (南から)



2SK0358完掘状況（西から）



2SK0358完掘状況（南から）



2SK0359土層断面（東から）



2SK0360土層断面（東から）



2SK0359完掘状況（東から）



2SK0359完掘状況（南から）



2SK0361土層断面（東から）



2SK0363土層断面（西から）



2SK0361完掘状況（南から）



2SK0361完掘状況（東から）



2SK0363土器出土状況（北西から）



2SK0363土器出土状況（北東から）



2SK0367土層断面（北西から）



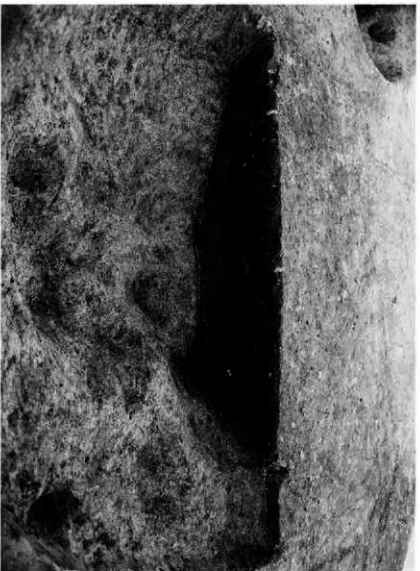
2SK0368土層断面（北西から）



2SK0369土層断面（北東から）



2SK0370土層断面（東から）



2SK0382土層断面(南から)



2SK0383土層断面(東から)



2SK0382完掘状況（南から）



2SK0382完掘状況（東から）



2SK0383完掘状況（北から）



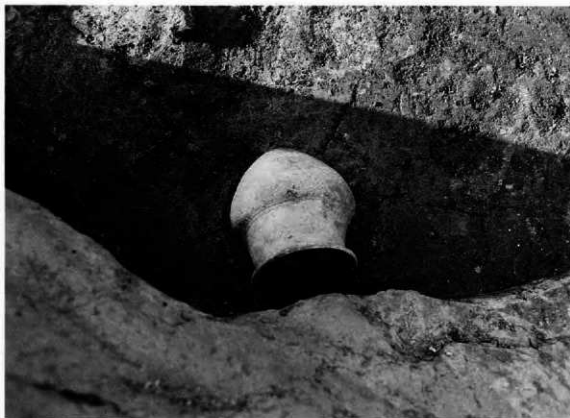
2SK0383完掘状況（東から）



2SK0391土器出土状況（西から）①



2SK0391土器出土状況（西から）②



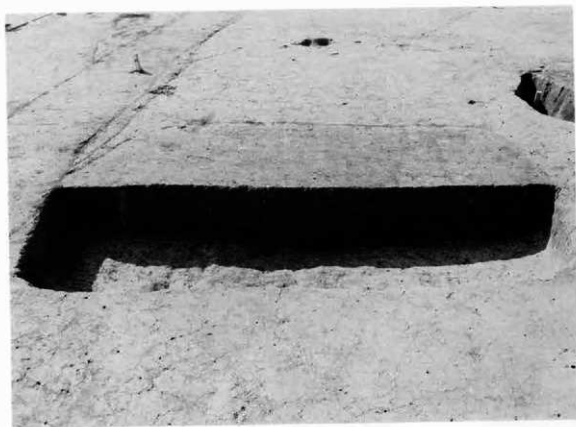
2SK0391土器出土状況（東から）



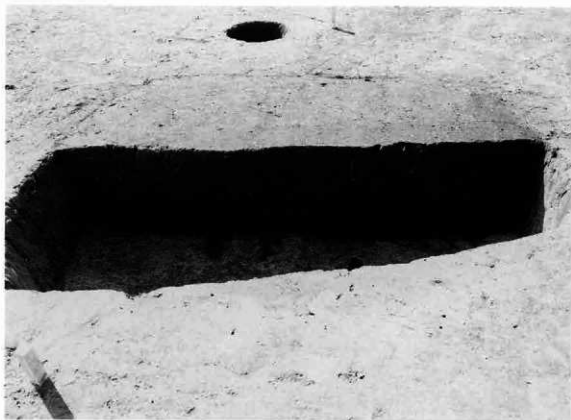
2SK0391土層断面（西から）



2SK0392土層断面（東から）



2SK0393土層断面（北から）



2SK0394土層断面（北から）



2SK0396土層断面（北東から）



2SK0394完掘状況（東から）



2SK0394完掘状況（北から）



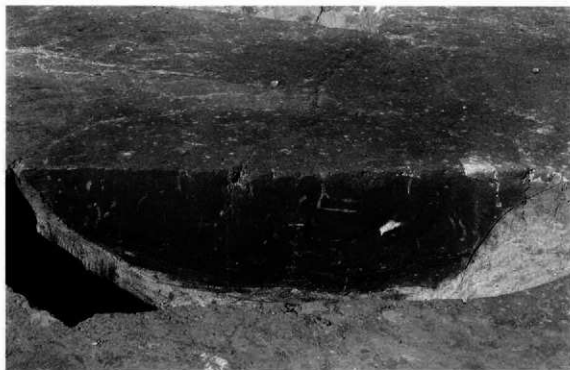
2SK0396完掘状況 (北から)



2SK0396完掘状況 (東から)



2SK0398土層断面（北から）



2SK0399土層断面（東から）



2SK0398完掘状況（西から）



2SK0398完掘状況（北から）



2SK0399完掘状況（北から）



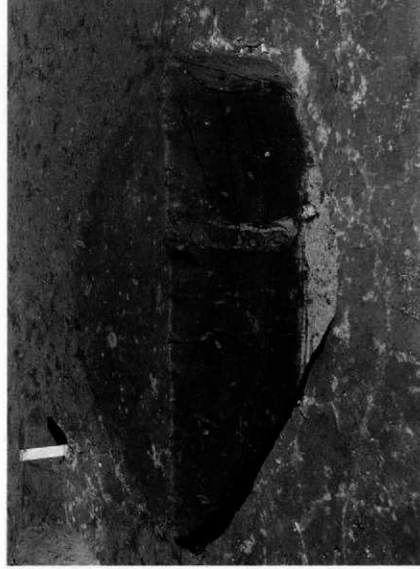
2SK0399完掘状況（東から）



2SK0400完掘状況（北東から）



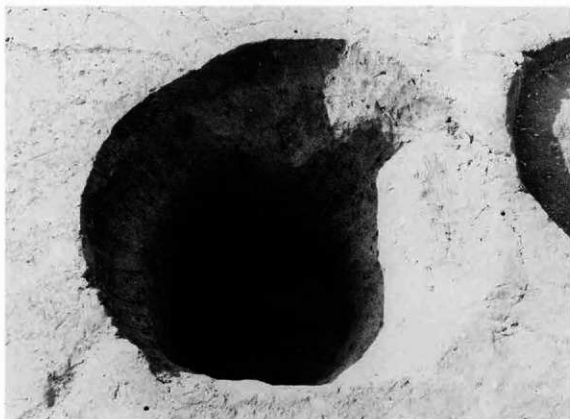
2SK0400完掘状況（北西から）



2SK0400土層断面（東から）



2SK0402完掘状況（東から）



2SK0401完掘状況（東から）



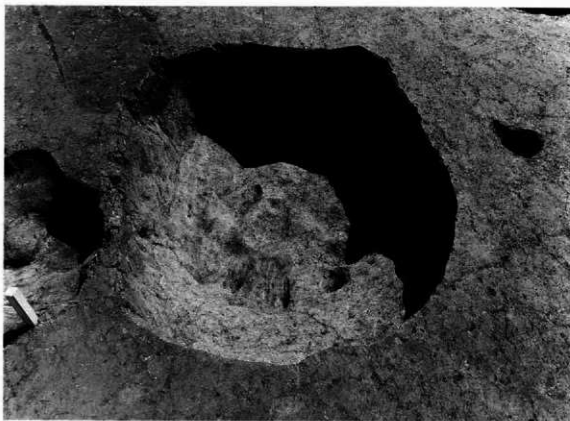
2SK0401完掘状況（北から）



2SK0416土層断面(北から)



2SK0417土層断面(東から)



2SK0416完掘状況（西から）



2SK0416完掘状況（北から）



2SK0418土層断面（北から）



2SK0420土層断面（西から）



2SK0419完掘状況（西から）



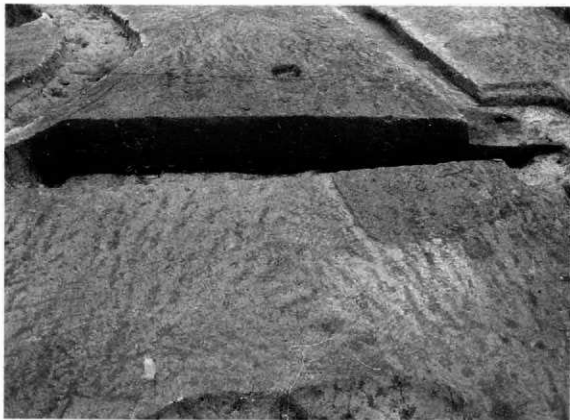
2SK0419完掘状況（南から）



2SK0424・2SK0425完掘状況（北から）



2SK0424・2SK0425完掘状況（西から）



2SK0423土層断面（北から）



2SK0426土層断面（北から）



2SK0423完掘状況（東から）



2SK0423完掘状況（南から）



2SK0426Ⅲ層土器出土状況（東から）



2SK0426Ⅲ層土器出土状況（北から）



2SK0428土層断面（南西から）



2SK0429土層断面（東から）



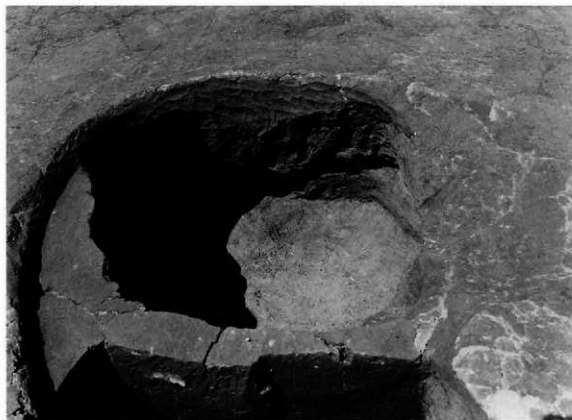
2SK0428完掘状況 (北西から)



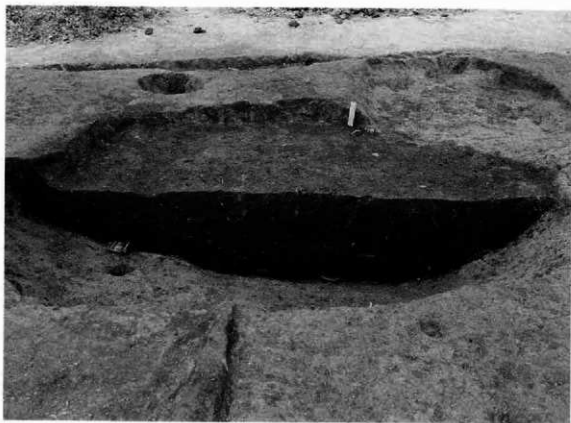
2SK0428完掘状況 (南西から)



2SK0429完掘状況（北から）



2SK0429完掘状況（東から）



2SK0431土層断面（西から）



2SK0432土層断面（北から）



2SK0431完掘状況 (北から)



2SK0431完掘状況 (西から)



2SK0432完掘状況（東から）



2SK0432完掘状況（北から）



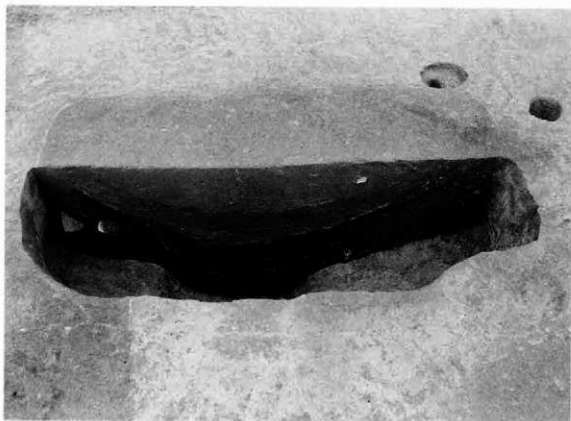
2SK0434土層断面（北から）



2SK0434完掘状況（東から）



2SK0433完掘状況（東から）



2SK0435土層断面（北から）



2SK0435完掘状況（西から）



2SK0435完掘状況（北から）



2SK0436完掘状況（北東から）



2SK0436完掘状況（南東から）



2SK0436土器出土状況（南から）



2SK0436土器出土状況（東から）

Pl.70



2SK0437完掘状況（東から）



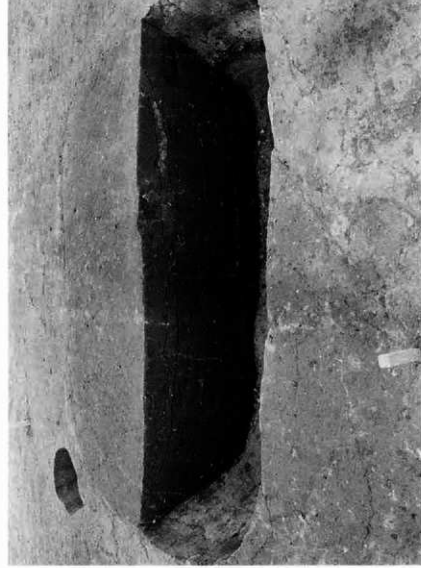
2SK0437完掘状況（南から）



2SK0438土層断面（西から）



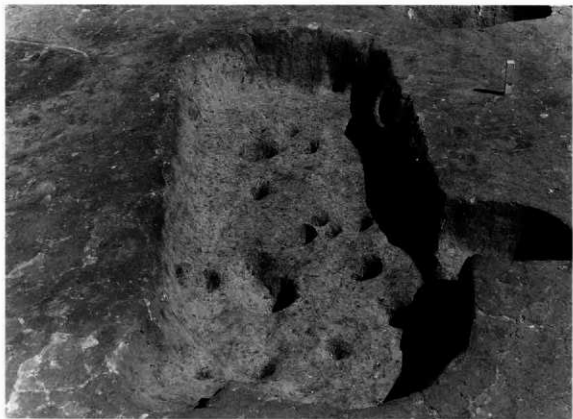
2SK0439土層断面（北から）



2SK0440土層断面 (西から)



2SK0445完掘状況 (南から)



2SK0446完掘状況（南から）



2SK0446完掘状況（西から）



2SK0449・2SK0450完掘状況（西から）



2SK0449・2SK0450完掘状況（南から）



2SK0451完掘状況 (北から)



2SK0451完掘状況 (西から)



2SK0501完掘状況（北から）



2SK0501完掘状況（西から）



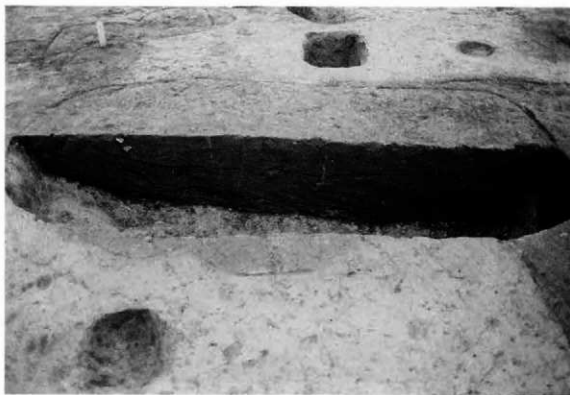
2SK0452土層断面（北西から）



2SK00502完掘状況（東から）



2SK0524土層断面（北から）



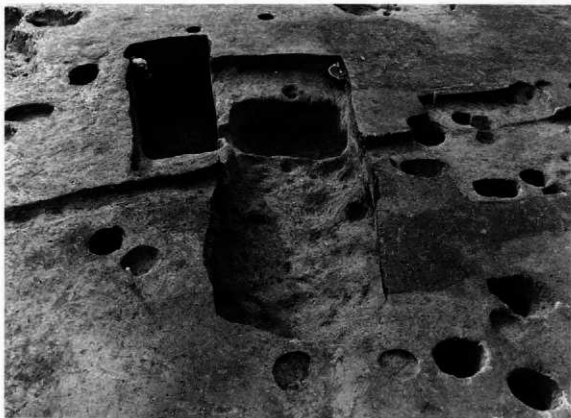
2SK0525土層断面（西から）



2SK0524完掘状況（西から）



2SK0524完掘状況（北から）



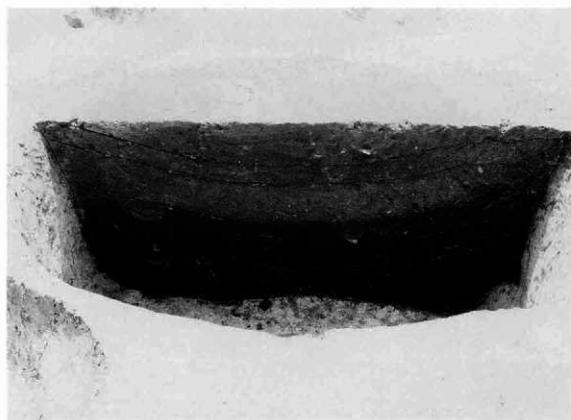
2SK0541完掘状況（東から）



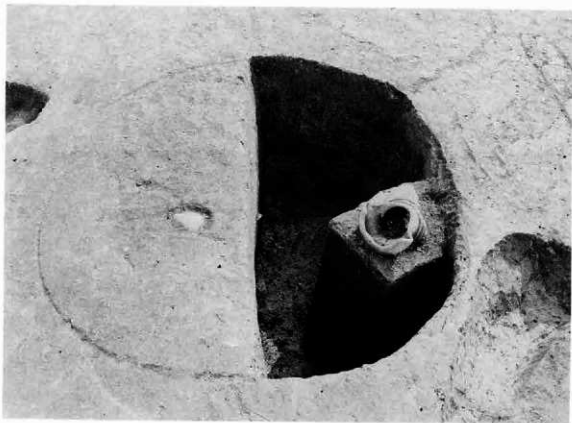
2SK0541完掘状況（南から）



2SK0558土層断面（東から）



2SK0583土層断面（西から）



2SK0583土器出土状況（北から）



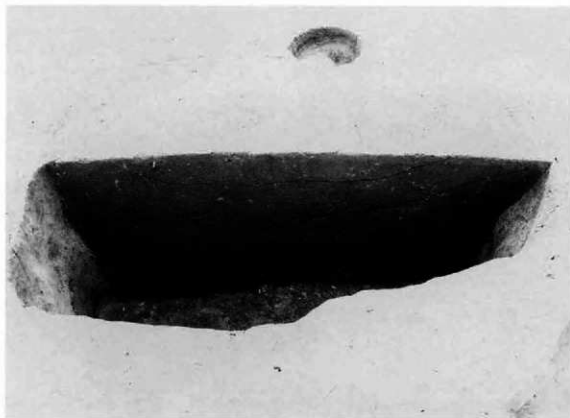
2SK0583土器出土状況（東から）



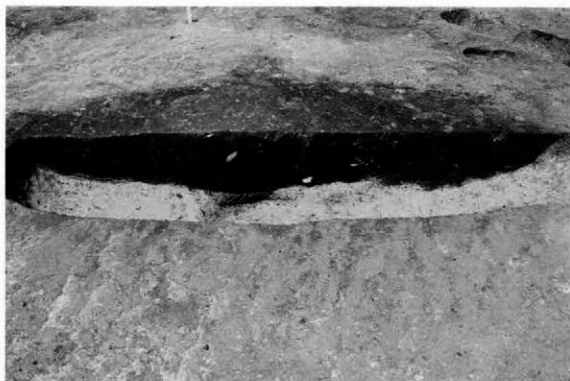
2SK0583土器出土状況（拡大・東から）



2SK0583土器出土状況（拡大・西から）



2SK0584土層断面（東から）



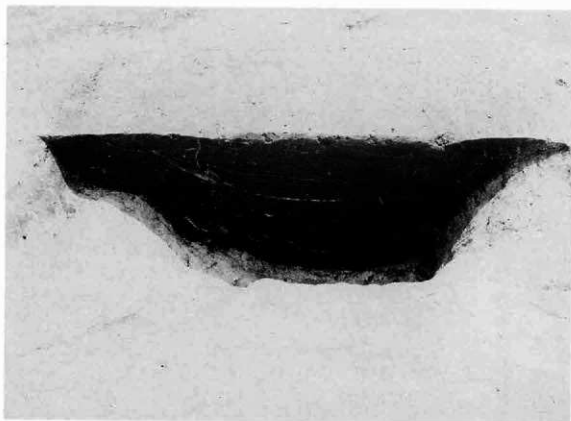
2SK0597土層断面（東から）



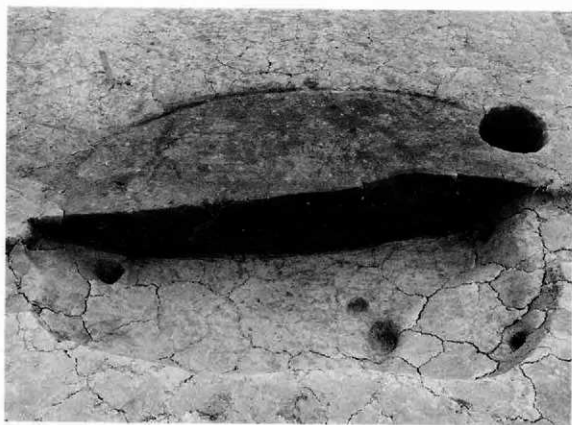
2SK0596完掘状況（東から）



2SK0596完掘状況（北から）



2SK0598土層断面 (西から)



2SK2172完掘状況 (北から)



2SK0878土器出土状況（東から）



2SK0878遺物出土状況（拡大・東から）



2SK2018土器出土状況（北から）



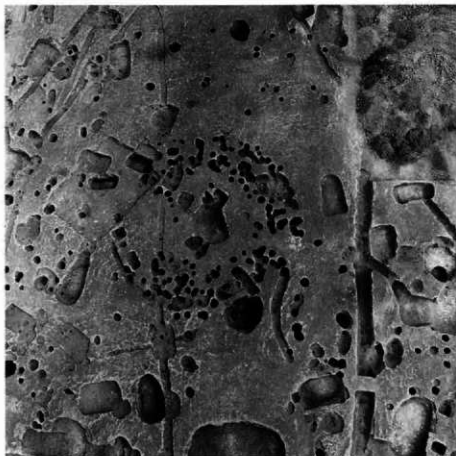
2SK2018土器出土状況（拡大・東から）



2SI0606土層断面（南から）



2SI0608土層断面（南から）



2SI2300・2SI2310
・2SI0750
(空中写真・上が北)



2SI0606・2SI0608
・2SI0609・2SI0688
(空中写真・上が北)



2ST0612完掘状況（東から）



2ST0612完掘状況（北から）



2ST0879雙棺出土状況（東から）



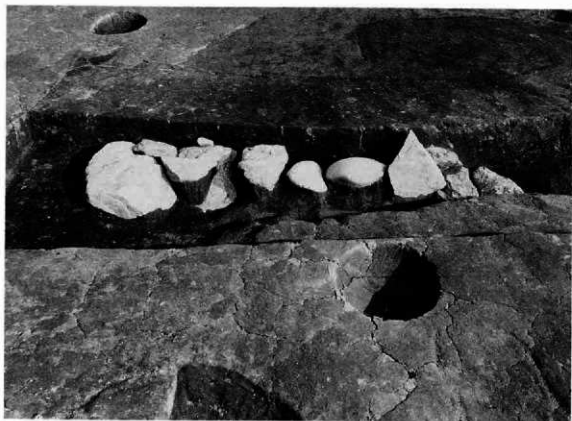
2ST0879雙棺出土状況（北から）



2ST0879掘方完掘状況（西から）



2ST2503妻棺出土状況（西から）



2ST0613土層断面 (西から)



2ST0613石蓋出土状況 (東から)



2SX0371北ベルト土層断面（東から）



2SX0371東ベルト土層断面（南から）



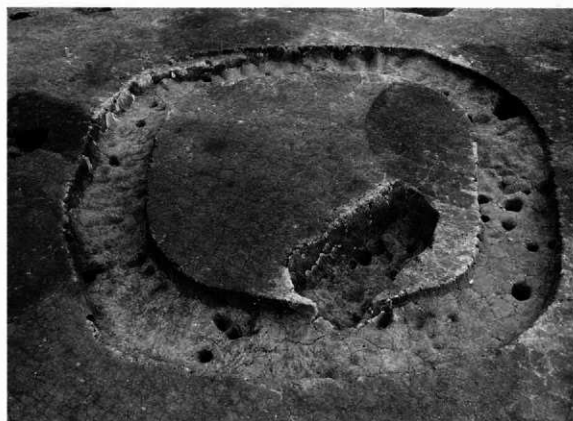
2SX0371南ベルト土層断面（東から）



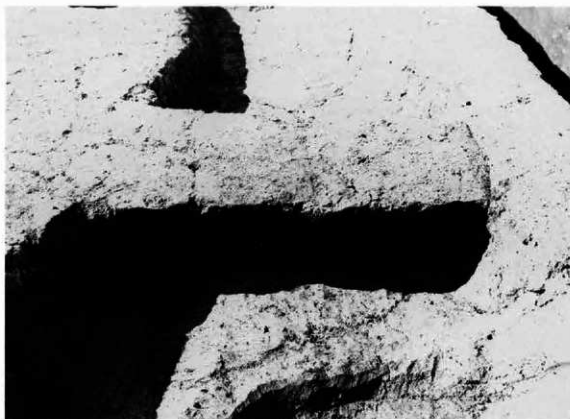
2SX0371西ベルト土層断面（南から）



2SX0371完掘状況（北西から）



2SX0371完掘状況（南西から）



2SX0389東ベルト土層断面（北から）



2SX0389西ベルト土層断面（北から）



2SD0362完掘状況（西から）



2SD0362完掘状況（東から）



2SD0362屈曲部完掘状況（南から）



2SX2500石組炉出土状況（東から）



47-3



47-17



50-7



47-3



47-18



51-2



47-10



49-8



51-8



47-10



49-21



51-24



47-15



49-24



51-24



51-29



54-1



55-25



51-11



54-2



55-29



52-18



54-8



55-31



55-18



53-27



55-20



55-35



53-33



55-24



56-2



56-7



59-5



61-1



57-2



59-6



61-4



58-18



60-1



62-1



58-19



60-2



58-20



60-5



62-4



59-4



63-1



63-12



65-4



66-4



63-4



65-1



66-5



63-13



65-2



66-6



64-5



65-3



67-1



67-2



69-1



70-2



67-3



69-2



72-1



67-4



69-3



72-2



68-3



69-4



68-4



70-1



72-3



76-7



79-2



74-1



77-1



79-3



74-2



78-1



79-4



75-1



79-1



79-5



81-4

79-8



82-3



79-6



79-9



82-4



79-7



79-10



80-2



82-5



82-7



83-7



83-3



83-8 (表)



83-10



83-4



83-8 (裏)



83-11



83-5



83-6



84-3



88-11



88-3



85-1



85-5



88-4



88-5



85-3



86-1



88-12



87-1



88-17



854



87-2



88-20



89-18



89-22



89-28



89-19



89-23



89-31



89-20



89-24



89-32



89-21



89-26



90-2



89-27



90-3



90-4



91-6



94-1



96-7



94-2



96-8



92-4



94-4



93-2



95-2



96-9



92-3



95-2



96-11



97-11



98-9



98-5



97-2



98-10



98-11



98-17



98-12



97-3



98-13



98-18



97-4



99-2



97-6



98-14



99-3



99-4



100-5



101-4



100-1



100-7



101-5



100-2



100-8



100-9



101-5



100-3



101-2



100-4



101-3



101-6



101-11



101-12



102-7



106-3



102-2



105-1



106-6



102-4



105-2



107-1



102-5



106-1



106-2



107-3



107-4



110-1



107-5



110-2



111-12



107-7



110-7



111-13



107-7



110-8



111-15



108-2



111-11



111-16



111-17



112-6



115-1



111-18



113-1



115-4



111-19



114-1



115-5



112-1



114-2



115-6



112-2



114-3



116-1



116-2



120-11



121-9



116-3



117-3



121-10



119-1



120-13



122-2



119-3



119-10



120-14



122-3



122-4



123-7



124-1



123-1



123-8



124-2



123-3



123-9



124-6



123-4



124-7



123-5



123-10



124-7



124-8



125-14



124-9



125-6



125-15



125-7



125-15



124-11



124-10



125-8



125-16



125-1



125-11



125-3



125-18



125-20



128-2



129-7



125-23



128-2



129-14



129-3



126-1



129-4



129-15



128-1



129-5



129-16



130-23



131-1



131-9



131-2



130-24



131-5



131-10



131-15



130-26



131-6



131-16



130-28



131-8



132-1



132-3



132-14



134-5



132-8



134-6



132-9



132-16



134-7



132-10



133-1



133-2



134-11



132-11



134-4



134-12



136-1



136-6



136-7



137-1



137-2



137-3



138-1



138-2



138-3



138-4



138-5



138-6



138-7



138-8



138-9



138-10



139-6



141-2



139-1



139-7



141-6



139-2



142-2



139-3



140-9



142-3



139-5



140-10



142-4



143-1



145-5



143-4



144-3



145-6



146-1



144-3ボジモデリング



146-2



144-1



145-3



147-3



144-2



145-4



147-4



147-8



148-4



149-11



148-2



148-5



150-2



148-2



148-6



150-7



149-9



148-3



149-10



151-3



151-4



154-2



155-1



151-5



154-3



155-11



151-6



154-4



155-13



152-2



154-6



155-14



155-15



159-1



161-4



155-16



159-3



162-1



156-17



162-2



157-1



160-4



162-5



157-2表



160-5



157-2裏



162-6



162-7



164-3



165-1



163-1



164-9



165-2



166-1



163-5



163-8



164-13



166-5



167-1



167-2



167-5



168-1



168-3



168-5



168-6



169-7



169-8



170-1



170-2



170-3



170-5



171-7



171-14



173-10



171-9



173-1



173-11



171-11



173-3



175-1



171-12



173-4



176-1



171-13



173-5



176-2



176-6



179-2



167-7

178-2



179-3



176-8



178-3



179-5



176-10



179-1



178-1



179-2



179-6



180-1



180-10



182-7



180-1



181-1



182-9



181-3



183-12



180-6



182-1



182-3



184-1



180-7



182-4



184-2



192-3

188-9



193-1

189-1



185-2



189-2



193-3



187-6



195-3



188-1



190-1



188-3



192-1



196-1



196-2



196-3



196-5



197-1



197-2



198-1



198-2



199-6



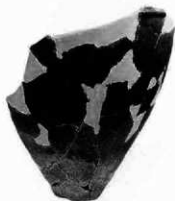
198-3



199-7



199-9



200-2



201-1



201-2



202-1



202-1



203-1



203-4



206-1



207-1



207-5



208-1



208-3



209-5



210-1



212-2



209-7



211-2



209-10



213-1



209-15



211-5



213-2



209-19



212-1



213-3



215-3



219-1



223-1



223-4



215-3



220-2



223-10



215-4



223-13



222-4



223-14



217-1



222-5



223-15



223-22



223-33



225-10



223-34



225-11



225-1



225-13



225-12



223-23



225-5



227-38



223-31



225-6



223-32



225-8



228-1



228-2



230-1



234-3



230-2



234-4



229-1



230-3



235-9



231-2



229-2



233-2



236-1



51-12



51-13



52-12



52-13



52-14



52-15



52-16



52-20



52-26



54-15



57-17



59-13



62-8



63-14



63-15



51-12



51-13



52-12



52-13



52-14



52-15



52-16



52-20



52-26



54-15



57-17



59-13



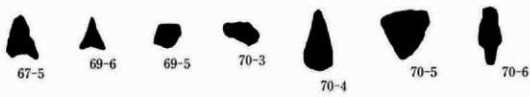
62-8

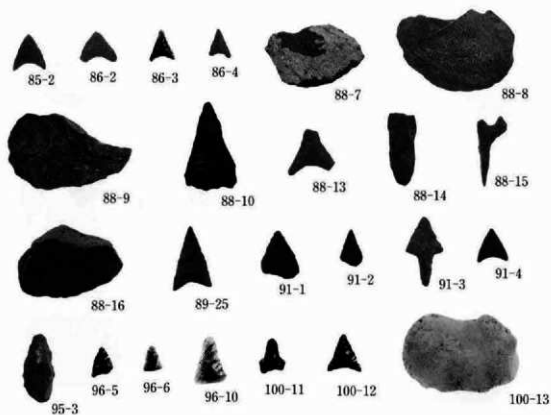
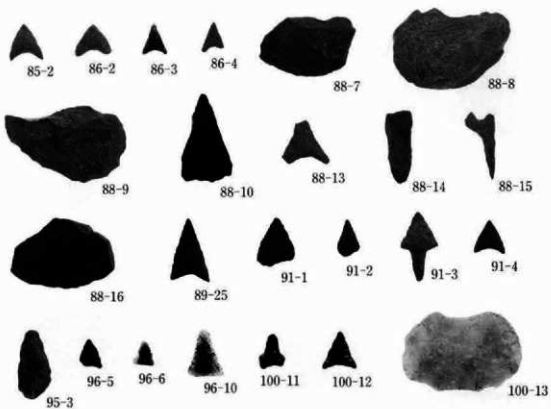


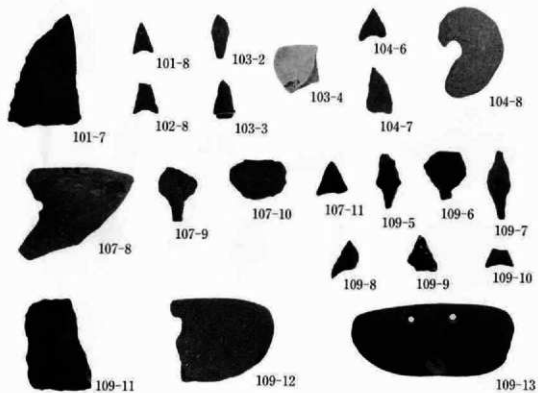
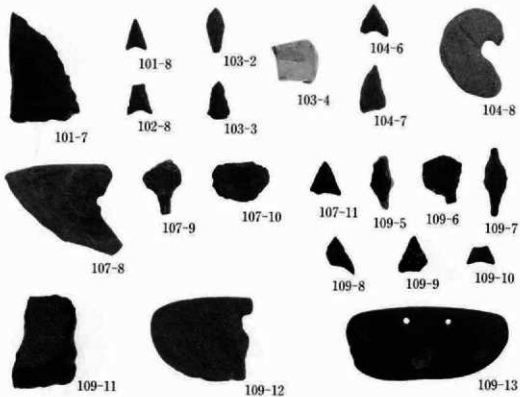
63-14

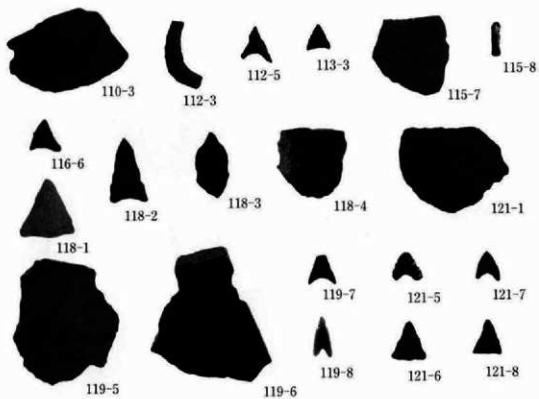
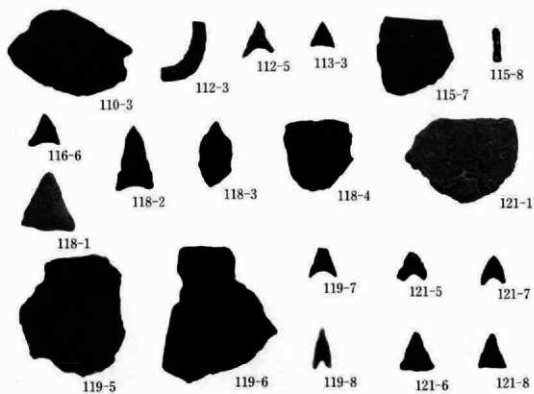


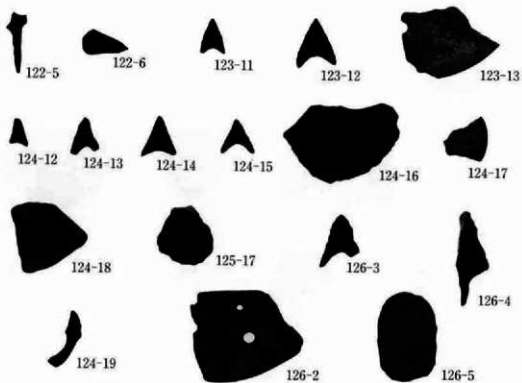
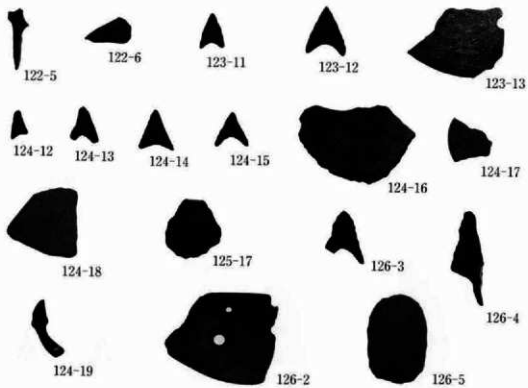
63-15

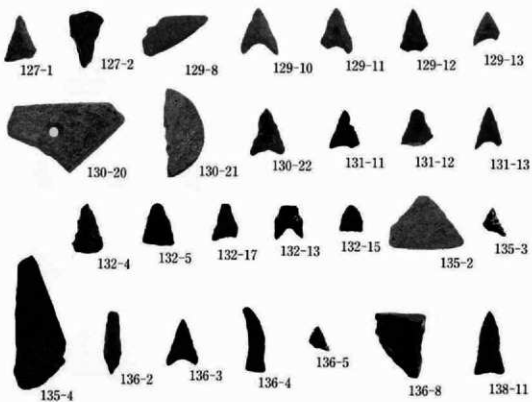
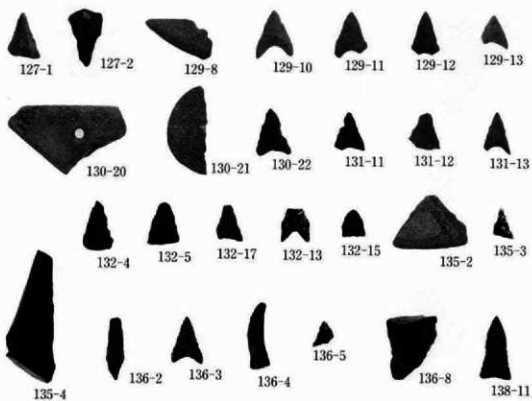


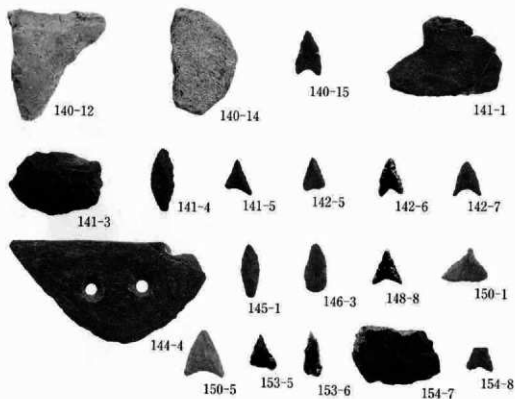
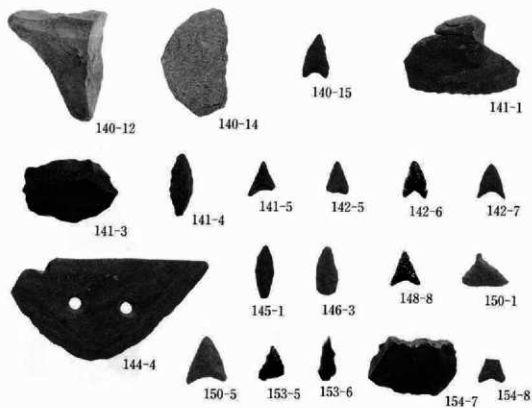


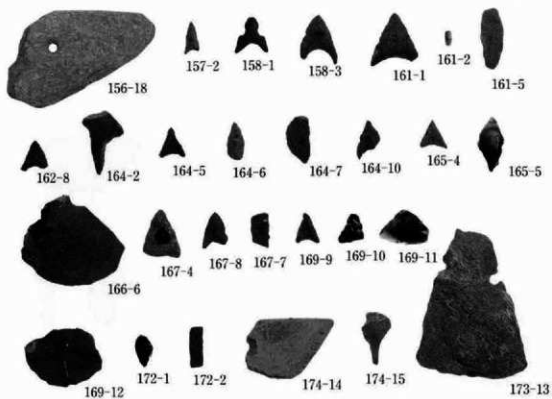
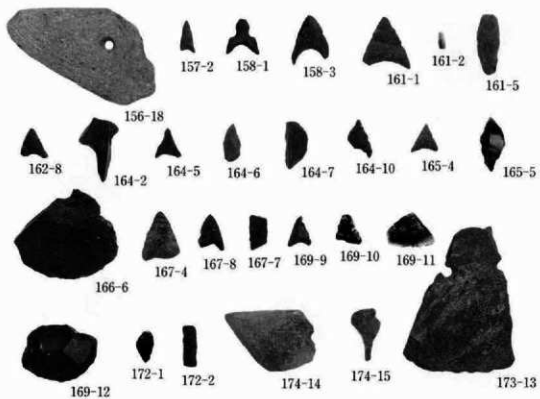


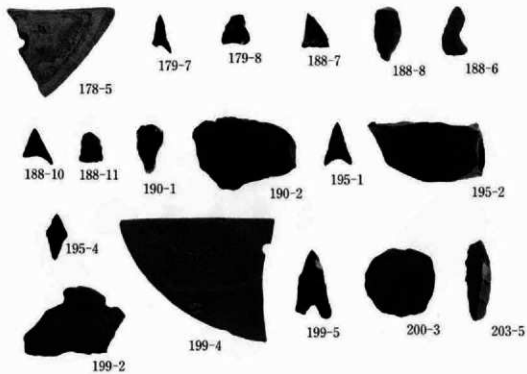
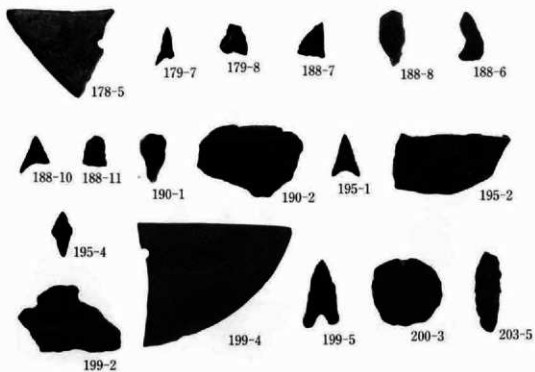


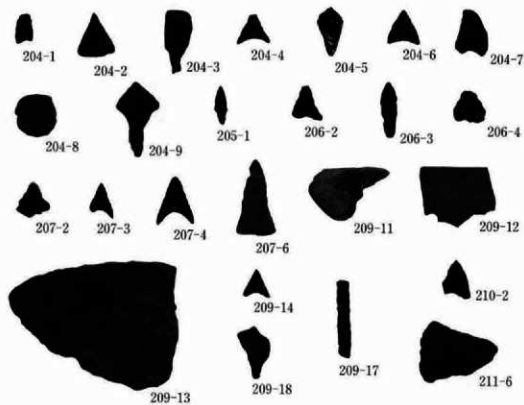
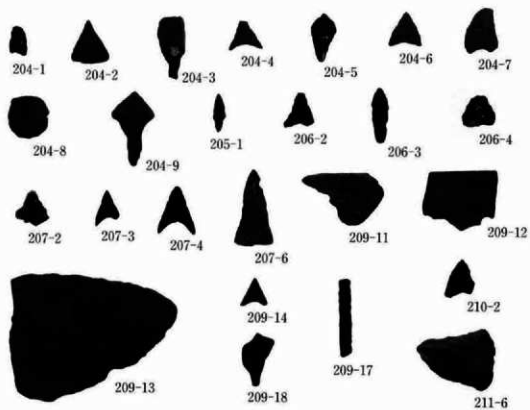














213-5



213-6



215-5



216-1



216-2



221-3



221-4



221-5



213-5



213-6



215-5



216-1



216-2



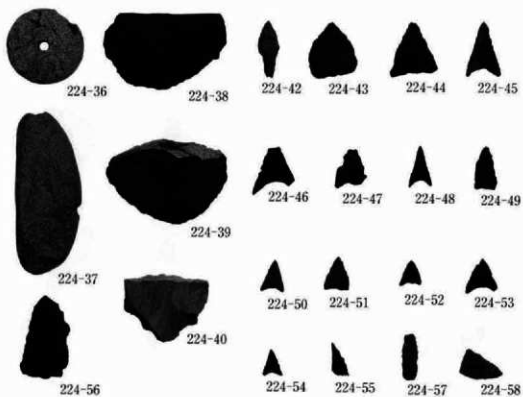
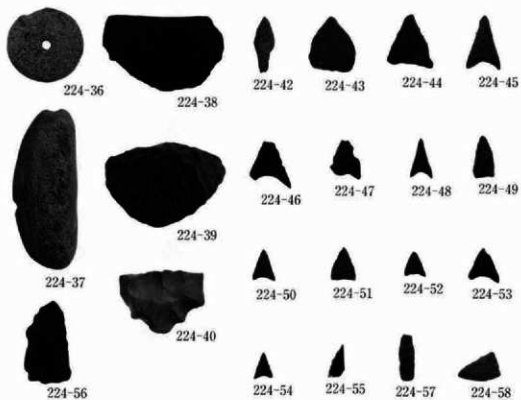
221-3

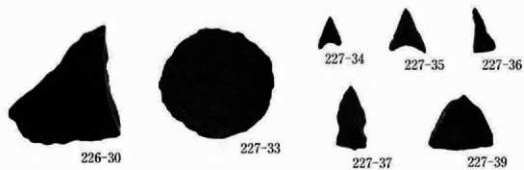
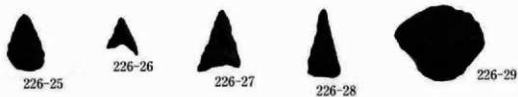


221-4



221-5









93-1



184-7



227-31



93-1



184-7



227-31



96-4



103-5



99-1



135-1



96-4



103-5



99-1



135-1



131-4



153-4



131-4



153-4



110-4



151-1



192-4



121-3



156-19



226-17



110-4



151-1



192-4



121-3



156-19



226-17



88-6



117-4



129-9



110-9



132-6



224-41



227-32



88-6



117-4



129-9



110-9



132-6



224-41



227-32



121-2



225-14



225-15



121-2



225-14



225-15



92-2



ナシ



ナシ



ナシ



ナシ



99-1



153-4

筑後西部第2地区遺跡群(VI)

筑後市文化財調査報告書

第50集

平成15年3月

発行 筑後市大字山ノ井898

筑後市教育委員会

印刷 大同印刷株式会社

佐賀市天神一丁目1番32号